

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文獻誌 ■

12月号



12

December '68

奇譚クラブ

昭和四十三年十二月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Matsukawa Shoin

Osaka, Japan



12月号 ¥ 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

前篇 続篇 合編

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙術の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の警宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登場、堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を誇ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽(二度の機がらせ)
 - 第三章 美人探偵(落花紛々)
 - 第四章 洗腸図(強制屈伏)
 - 第五章 救援者(羞恥地獄)
 - 第六章 救援の失敗(逆転)
 - 第七章 好餌(京子の屈伏)
 - 第八章 悪魔の哄笑(毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室(悪鬼の警宴)
 - 第十章 脱走(屈辱と羞恥)
 - 第十一章 蛇の執念(裸踊り)
- 後篇
- 第十二章 姉妹危し(屈辱の狼)
 - 第十三章 調教師(遂に京子も)
 - 第十四章 美津子受難(二人の)
 - 第十五章 結末(美津子の屈伏)
 - 第十六章 落花無残の修羅場
 - 第十七章 淫らな美女の調教
 - 第十八章 すすまじいシヨ
 - 第十九章 汚水にまみれた宝
 - 第二十章 華々しき美女の屈
 - 第二十一章 対峙する美女と
 - 第二十二章 あくどい陥穽
 - 第二十三章 羞恥図絵の展開

写真集 山原清子 妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉くり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄まじいポーズ満載)

限定版 美しき縛しめ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

写真集 山原清子 妖艶緊縛

革具に拘束される女 七十二葉

モデル 山原清子 妖艶緊縛

真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

限定版 美しき縛しめ 第九集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

写真集 山原清子 妖艶緊縛

女斗と緊縛競艶写真特集

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動、女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

写真集 山原清子 妖艶緊縛

女斗と緊縛競艶写真特集

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動、女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

写真集 山原清子 妖艶緊縛

女斗と緊縛競艶写真特集

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動、女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

写真集 山原清子 妖艶緊縛

女斗と緊縛競艶写真特集

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動、女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

【最新版】 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13cm) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒通りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦慮 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はく字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出脐を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 蘭身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首屈股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 隠れる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌に喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴縛縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

奇譚クラブ

△第三十三号・通刊第二四七号▽

(昭和四十三年) 十二月号 目次

△本 文▽

本誌自粛の徹底	編集部	(6)
懸賞入選作品「魚の精」	播野 浩三	(10)
ある日のレポ「願望」	予世場良三	(20)
これみていまんど 珍書探訪記	斎藤 夜居	(26)
里子の物語「養父」	芳野 眉美	(36)
告白秋に思う	天野 利平	(45)
切腹研究夜話 愛と死の映像	中康 弘通	(46)
連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(八)	白鳥 大蔵	(50)
新女性乗馬考	佐野 寿	(60)
漫談千一夜物語 薔薇と蜜蜂	田代 俊夫	(66)
ミニ・フィクション 「襲われた一夜」	水沢 登	(76)
読者のウッパン 私にも一言	新宿 町人	(81)
連載小説「大噴火」(三)	千葉 青鬼	(86)
牧氏に捧ぐ 帯紐よ永遠なれ	古留 節人	(94)



奇クサロン.....編集部構成.....(23)

「徳川女刑罰史」を見る	町田 一郎
サロン業我記(第五十四回)	辻村 隆
私の夫婦ブレイ「愛妻ゆり子」	山口 登
変態は常道	風流極道軒
「へんたい」雑感	牧 十郎
イメージ画「切れるか?」	野江 三郎
「ハブニング遊び」	スギタダシ
女斗美スポーツに寄せて	一ノ瀬英雄
「いじわる」	池津勇太郎
イメージ画「美しき花ありて」	室井亜砂路
SMエッセイ	加藤真佐夫
イメージ画「面白いお遊びね」	山田 毅
「花と蛇」に寄せて	佐藤 五郎
編集部だより	編集部
奇クに望む	岩田浩二郎
Sコレクション「ガラスの魔液」	豪 城二
刺青女性のフォトに思う	小谷 和勝
空想ニュース「奇ク読者賞」	かずとやま
短歌「悦虐の刑」	高村 初子
レポ 最近の体験	沢田 広
TV拝見「真昼の女王」	保藤 久人
イメージ画「失意」	妖 マリ
ひとり思うこと	齊東 野人

贋作平家物語(三)「奈良炎上」	黒淵 嬰一	(102)
濡れにぞ濡れし「レストラン・クラブ」	芳野 眉美	(111)
懸賞入選告白 夜尿願望者の現状	岩手 信夫	(111)
映画化決定作品 私本「伊藤晴雨物語」	団 鬼六	(114)
S・C・R・回答欄「異物刺戟論」について	弓削 達人	(115)
マニアのノート 美食家の手記	かずとやま	(119)
告白 浣腸の想い出	藤村由紀子	(119)
女相撲物語 花の女斗美たち	奮斗士好太	(121)
女装マニアの一刻「花嫁」	井風呂秋於	(124)
あぶ・らぶす・こんと	水沢 登	(121)
SMカメラ・ハント		
「徳川女刑罰史」⑧ 銘々伝	辻村 隆	(124)
「理恵女献身」について	沢田 しの	(111)
創作 検診日の朝	花影 叢	(121)
読者通信	編集部選	(122)
(目次カット「新型ロケット」)	室井亜砂路	
(扉カット「夢 路」)	磁戒 秋人	

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組	一組一枚(送料共)
四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

- 1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
- 2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
- 3 八の字の開股縛(左近麻里子)
- 4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
- 5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
- 6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
- 7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
- 8 白肌輝く股間責(山原 清子)
- 9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
- 10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
- 11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

- 12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
- 13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
- 14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
- 15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
- 16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
- 17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
- 18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
- 19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
- 20 後手縛りを見せる(川越美佐子)
- 21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
- 22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
- 23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
- 24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
- 25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
- 26 湯責めにあう女(山原 清子)
- 27 変型高手小手縛(川越美佐子)
- 28 洋子をいじめて(木村 洋子)
- 29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
- 30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
- 31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
- 32 涙責めの熟演(ローズ秋山)
- 33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
- 34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
- 35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
- 36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
- 37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

- 38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
- 39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
- 40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
- 41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
- 42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
- 43 全裸の股間縛り(山原 清子)
- 44 黒綿ゴム衣縛り(木村 洋子)
- 45 パンティを剥く(大塚 啓子)
- 46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
- 47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
- 48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
- 49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
- 50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
- 51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
- 52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
- 53 剥がされた布片(金原奈加子)
- 54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
- 55 髪吊りの裸女責(ローズ秋山)
- 56 高手小手の裸女(左近麻里子)
- 57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
- 58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
- 59 悶える全身縛り(一宮百合子)
- 60 伸びやかな素足(一宮百合子)
- 61 卓上の人身御供(左近麻里子)
- 62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
- 63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
- 64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
- 65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
- 66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
- 67 全裸をものがく女(ローズ秋山)
- 68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

- 69 乳房強調猿轡(左近麻里子)
- 70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
- 71 縄のブラジャー(左近麻里子)
- 72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
- 73 逆エビで責める(ローズ秋山)
- 74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
- 75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
- 76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
- 77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
- 78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
- 79 あどけなき表情(金原奈加子)
- 80 厳しい細目の肌(金原奈加子)
- 81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
- 82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
- 83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
- 84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
- 85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
- 86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
- 87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
- 88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
- 89 股裂きで責める(ローズ秋山)
- 90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
- 91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
- 92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
- 93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
- 94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
- 95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
- 96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
- 97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
- 98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
- 99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
- 100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

昭和43年12月号

(1968年・12月号〈第22巻第13号・通刊第247号〉)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

懸賞入選作品



(一)

英夫は、仲間の工員連中から変り者と呼ばれていた。若いのに将棋や魚釣りが趣味で、同僚達とは決して遊ばないからである。

よく晴れた、秋の日の昼さがり、英夫はいつものように独りで川釣りを楽しんでた。彼の釣りは、自分だけでこっそりと楽しむものなので、道具も技術もおそまつだった。しかし、彼は根っからの釣り好きらしく、釣り上げた獲物がどんなに小さくても、捨てたりはしない。その日はいつになくたくさんの獲物がかり、彼は時のたつのも忘れて夢中に

魚

の

精

播野浩三

なった。

そうやっている、町へ出て小使いをはたいて遊び呆けている連中が哀れに思われる。

「釣れますか？」

いきなり声をかけられたので、英夫はギクツとした。

「あら、おどかしてごめんなさい」

英夫が振り向くと、釣竿をかついだ、スラックス姿の女がほほえみかけていた。

年令は三十ぐらいだろうか。英夫の眼には匂うばかりの美人に映った。

「釣れまして？」

もう一度そう言ったかと思うと、女はなれ

なれしくピクをのぞきこんだ。

「まあ、こんなにたくさん！」

女は大げさにおどろいて見せた。

そんな時、普通の男なら愛想よく返事をするとところだが、まだ女に興味のない英夫は、ひとりきりのところを邪魔されて仏頂面になっていた。相手が男であろうと、女であろうと、とにかく一刻も早く立ち去ってほしかった。だから、何故こんな美しい女がこんな淋しい場所へ独りで来ているのだろうか、などと言うようなことは一切考えなかった。

しかし、そんな英夫の態度にも臆せず、女は話しかけた。

「そのお魚を少しゆずっていただけませんか」

「えっ……？」

「せっかく来たのに、ちっとも釣れなくて。

このまま帰ったらみんなに笑われますから」

それを聞くと、英夫のきげんも少しは良くなった。武士は相身互いだと思つた。

「ええ、少しぐらいなら……」

「まあ、ほんと？ どうもありがとう」

自分のビクを取りに行きかけた女は、また引き返して来て、言った。

「向うで一休みなさいますせん？ ぜひお見せしたいものもありますし……」

そう言うと、英夫の返事も待たずに、女は行ってしまった。

英夫のいる所から少し上流へ行った所に、鉄橋がかかっていた。それはある会社が製品を港へ運ぶために敷いた鉄道だったが、貨車はめったに通らず、線路は赤く錆びていた。

その鉄橋の下まで行くと、女は初めて振り返り、おいでおいでと手招きした。女の後姿を目で追っていた英夫は、何んのためらいもなく立ち上ると、ビクを片手に、まるで吸い寄せられるように歩いて行った。

女に言われて、英夫は腰を下した。

「たくさん釣れたのねえ」

女はビクをのぞきこんでいたが、その中の一匹を無雑作につまみ上げると、あっと言う間もなくそれを口へ放りこんだ。

あつけにとられている英夫の顔を見ながらにんまり笑った女は、ごくりとのを鳴らしてそれを呑み込んでしまった。

「ウフフ……おなかの中で魚があばれてるわ……ウフフフ」

女は心地良さそうに笑うのだった。

ポカンとしている彼を横目に、女はまた魚を口へ放りこんだ。今度は、尾ビレだけが口の外に残り、白い歯が上下から魚を押えていた。

紅を塗りたくった唇の間へ、生の魚がうろこを光らせながらとび込んで行く様は、なんとも無気味な、それでいて何んとかエロティックな光景であった。のぞいていた尾ビレがピンピンとはねていたが、やがて紅い唇がそれをも包みこんだ。

口をつぐみ、目を閉じてじっとしていた女は、まだ生きてるのよと言うように、口を開いて見せた。魚はまだ動いていた。

「どう？ おもしろいでしょ」

女は得意そうに言ったが、英夫は背筋がぞくぞくし始めていた。

「おれ、もう帰らなくちゃ」

「ウフフ、あたしが化け猫か何んかだと思つて、恐くなったんでしよう。男のくせに、いくじなしね。今帰ったらなんにもならないわよ。これからがおもしろいんだから」

「ま、ま、まだ何かやるのかい」

「ばかね。ふるえてるわ」

女は水筒に口をつけ、うまそうに飲んだ。

彼にはその中身が、何か怖いもののようにも思えた。

「あんたも飲む？」

「冗談言うな」

不気味さを押し隠すように、無理に怒って立ち上りかけた英夫を制しながら、女は意味ありげに笑って見せ、辺りを注意深くながめまわした。

土手の向うは、一面の畑だったが、人影はひとつもなかった。一緒になって見廻した彼は、すこし心細い気がした。

「いいものを見せてあげるわね」

そう言って笑いながら、女はストラックスを脱ぎ始めた。英夫は胸がドキドキしたが、だまって女のすることを見ていた。

しかし、女がパンティを脱ぎかけると、さ

すがにだまっては、いられなかった。

「お、おれ、もういいよ」

英夫はどもりながら言ったが、女はまるで何も聞こえなかったような振りをして、さっさと脱いでしまった。

おもむろにそれらを折りたたむと、女はそこへ坐った。しかも、わざと見せつけるような坐り方だった。

そうまでされては、女に関心のない英夫も好奇心を起こさずには、いられなかった。

しかし（多少その気もあるのかも知れないが）女は単なる露出狂ではなさそうだった。

「へんなことしないで、じっと見てるのよ」
女は子供にいうような調子だった。見知らぬ男の前で、そんな恰好をしてみせておいて「へんなことしないで」とは……。

その場の異様なふんいきに圧倒されてか、それとも英夫がよほどのいくじなだったのか、いずれにしても、彼は女にいどみかかろうなどとは、これっぽっちも思わなかった。先程見せられた生魚の丸呑みの不気味さは、完全に彼に怖気を与えていた。

大声を挙げて逃げ出したいような不気味さと、本能的な好奇心とでドギマギしている英夫の眼前に、更に異様な女の動作が開始され

た。それは、女に関心のない彼でなくても、きつと驚いたに違いない。

「こ、この化物女め。あんな呑み方までしゃあがる」

どぎもを抜かれた想いで見ていた英夫は、先程と同じく、魚の姿が隠れ、尾ビレだけしか見えなくなると改めてびっくりした。

女は顔をまともに英夫に向け、彼の驚く様子を見ているようであった。

鮎の尾ビレが、ピンピン跳ねるということは鮎が苦しんであばれている証拠であろう。

ほんの二十秒ばかりも経ったろうか。女は「よく見るのよ」と言ったかと思うと、エイッ小さく叫んだ。と、今まで動いていた鮎の尾が、急に動かなくなった。

英夫は、信じられない想いで、臓物をつき出させて捨てられた鮎を見詰めた。

「どう？ おもしろいでしょ」

女は英夫の顔を見て笑ったが、英夫はとても笑えなかった。しかし、最初に感じた不気味さに比べると、今度のはちょっとおもしろいと彼は思った。ほんの少しではあるが、興味を感じたと言えるだろう。

英夫のそんな心理を見抜いたように、女は言った。

「今度はあんたがやってよ！」

命令するように語尾を上げて言ったかと思うと、女は腕を枕にゴロリとあお向けに寝転んでしまった。

「さあ」

「だってよう……」

「あれほどゆっくりやってみせたのに、あんたよく見てなかったのねっ」

女は、まるで子供を叱るように言った。

英夫はおどおどと言われるままに、鮎を女の手に移した。奇妙な光景が再現されたが、最初ほどの驚きはなかった。

鮎がピタッと動かなくなると、青空を見詰めたまま女が、英夫に云った。

「分ったでしょう？」

「うん」

「さあ、やって」

英夫は何んだかおもしろくなって来た。すぐそばの水たまりへつけてあったピクを女のそばへ持って来ると、なるべく小さいのをつかんだ。

「ありがとう」

身なりを整えてから、女は微笑しながら礼を云った。美しいと思った最初の女に戻って

いた。もう不気味さは感じなくなった。英夫は女の頭のとっぺんから足の先まで、つぶさに観察した。気味悪さに変って不思議さが湧いた。こんなキレイな女がと、全く理解できなかった。

「はい、これ」

見ると、女の手には千円札が三枚。

「こ、こ、こんなに……」

「お魚代とお礼よ」

「ほんとにいいのかい。こんなにたくさん」

「その代り、誰にも言っちゃ駄目よ、きょうのこと」

「うん、分った」

「ねえ、あしたも来てくれない？」

「工場へ行かなきゃならないもん」

「なにさ、一日や二日ぐらい休んだって。あんたがもうくらいの日給なら、あたしが出してあげるわよ。ね、あしたも来てよ」

「……」

「もし、来てくれたら五千円あげるわ。その代り、あしたは鮎だけじゃなく、ドジョウだのナマズだの、いろんなお魚を持って来てほしいの。できれば鰻も……ね。あしたのお昼ちょうどに、あそこの小屋で待っているから、きつと来てね。絶対に誰にも言わないで

独りで来るのよ」

女の指差す方を見ると、さらに上流の草むらの中に、小屋らしき物の屋根が見えがくれている。していた。

英夫の頭の中に、今は蔽われた女の白い肌がよぎった。何か眠っていたものが呼び醒された感じがあった。

英夫の返事を聞くと、女は無邪気に喜んで「ほんとなのね、ほんとに来てくれるのね」と、何度も念を押した。

「先に帰ってよ」

と女に言われ、英夫は空になったビクを振りながら、土手へ上って行った。しばらく行ってから振り向いて見ると、女はじっとこっちを見ていた。そして「あしたの十二時ようっ」と、念を押すように言った。

家へ帰ってから英夫は、夢でも見ていたのではなからうか、それとも狐にでもだまされたのではあるまいかと思った。しかし、ポケットから出て来た物は、確かに三枚の千円札だった。

落着きが戻ってくるにつれ、彼はあの女に以前、どこかで会ったことがあると思いついた。寝床へ入ってから考え続けたが、どこ

で見た女なのか思い出せぬままに、いつしか眠ってしまったが、巨大な白いものに襲われる夢に幾度か眼醒めた。

(二)

翌朝、英夫はいつものように、何食わぬ顔をして家を出て、仕掛けをしておいた所へ行ってみると、大小二匹の鰻がかかっていた。

途中の小川やどぶ川で、鮎やドジョウを探り、みんな一緒にバケツへ入れると、きのう女と出会った場所へと急いだ。

土手の下は見渡す限り、さつまいも畑で、農夫があちらこちらで仕事をしていたが、鉄橋の下には、きのうの名残りの魚の死骸が、一面に散らばっていた。

そこは大きな中州になっていて、鉄橋のある所から少し上流へ行くと、土手はなくなっていた。畑もだんだんと姿を消して、草と石ころばかりになり、小屋のある辺りは、中州の先端に近いので、ごうごうという水音が聞こえる。

小屋は水際近くに建っていた。

手をかけると戸はわけもなく開いた。その半分は干草の山で、残りの土間はスキヤクワなどの農器具類が占領していた。干し草は人

間の背と同じくらいの高さに積んであった。その上へ寝転んで、板の隙間から辺りをうかがっている、ほどなく、女の姿が視界に入った。

きのうと全く同じ服装だ。英夫が見ているとも知らず、女は辺りを用心深そうにながめまわしながら、やって来て、小屋の前まで来ると、もう一度辺りを見まわしてから戸を開けた。

「あら！ こんなに早く来てくれたの」

英夫の顔を見ると、さもうれしそうに整った顔をほころばせた。約束は昼だが、まだ十時を過ぎたばかりだった。

「やっぱり、どっかで二、三度見た顔だ」

女の顔を見た瞬間、英夫はそう思ったが、どこで会ったのかは思い出せなかった。

女は戸を閉めると、クワの柄を^{しんぱり}棒代りにして、しっかりと押えつけた。

簡単な作りの小屋なので、戸を閉めても、

明りは、ふんだんに入ってくる。

「ほんとによく来てくれたわ」

はなやいだ声で言いながら、女は、早速に衣服を脱ぎ始めた。

「人が来たかどうかするんだい」

「なあに、心配することはないわよ」

「だって、外からのぞかれるぜ」

「そんなに見たいって人がいるのなら、見せてあげるわよ」

英夫は思わず苦笑した。やっぱり、女は露出症の^け気があるようだ。もっとも英夫は「露出症」などという言葉は知らなかったが。

「お魚は？」

「ここだよ」

バケツの中では鮎、ドジョウ、小さなハエ（ハヤとも言う）それに二匹の鰻が、うようと、うごめいていた。

「まあ、すごい！」

女は瞳をかがやかせて言ったが、何気なく顔を上げた英夫は「あっ」と叫んだ。彼がバケツの中の魚に気を取られている間に、女は着ている物を全部脱ぎ捨てていたのである。

まぶしそうに自分を見ている英夫の顔を見ながら、女は「ウッフ」と、いたずらっぽく笑った。

「はい、お魚代」

女の手には一万円札が握られていた。

「えっ、こんなに……」

「その代り、きょうは何んでもあたしの言う通りにするのよ。分ったわね」

英夫は衣服を脱ぐように云われた。一万円の手前、女の言葉に従った。しかし、ただそれだけのことで、女はおたがいの肌がふれ合うことを禁じた。しぶしぶ脱いだはずの英夫は、残念に思った。

女がグラマーなのに比べ、英夫のからだは余りにも貧弱だった。

干し草の上へあがると、女はこちらに足を向けて、あお向けに寝転んだ。きのうと違うところは、女のからだは英夫の目の高さにあることだった。

あの奇妙な魚の惨殺劇が再び開始され始めた。生きたまま、彼女の気合一つで、ハラワタを押し出された魚が、次々と投げ捨てられた。鮎などが一通り終ると、次はあばれ廻るドジョウだった。しかし、ドジョウは細いので、鮎のようにつぶすことはできなかった。ただその間、干し草の上に頭だけをのぞかせている英夫は何回も蹴とばされそうになった。

女は鰻を最後に残すようにと英夫にいったが、いよいよその番が来たとき、あて外れに終わった。

英夫がどう努力してみても、他の魚のような具合にはいかなかった。苛立った女の手にも負えず、ついに取り落して干し草の中へも

ぐって行ってしまった。

息をはずませる白い裸身を見てみると、さすがの英夫もそのままではすまない気持ちになって来た。

「俺だってロボットじゃないんだ」

英夫は女に手をかけて、懸命に頼んだが、女はその手をピシヤリと叩いた。

「あんたには、ちゃんとお金を渡してあるはずよ」

「あんな金、いらないや」

「あたしはねえ。男なんか大嫌いな。ただこうやって、体を見せつけて、相手があたしをほしがって苦しむところを見るのが好きなだけ。わかる？ ウフフフ……」

「くそっ」

「そんなにほしかったら、力づくで取ってごらんよ」

「よし！」

英夫は気負い立っていどみかかって行ったが、頑強に組まれた脚は、どんなに力を入れても、くすぐっても、ビクとしなかった。

文字通り二人とも一糸まとわずの攻防なのだが、女は冷然として英夫の攻撃を受け流すだけだった。激しい闘いが三十分も続いただ

ろうか。英夫はようやくあきらめて、汗にまみれた女をつき放した。

「ちくしょうっ！」

あえぎながら英夫は憎々しげに干し草をむしっては投げつけた。

「ごめんなさい……ほんとに。あたしは変った女なの。あたしのからだは普通じゃないのよ。自分でも悲しいけれど仕方ないの。だからかんにしてよ。ね、後でもう一枚、お金をあげるわ。ね、それでがまんして」

お金をあげると言われても、英夫はにこりともしないで、女をにらみつけていた。

(三)

やがて、英夫は何かを思い出したように、パチンと手を打ち、勢いこんで云いだした。

「あんたの顔、どっかで見たことがあると思ってたが、あんたは××町の○○電器商会のおかみさんじゃないか」

「えっ」

女の顔がサッと青ざめた。

英夫は片道六キロの道程を、自転車で通っていたが、その道筋にある有名な電気器具商会の店先で、掃除している彼女の姿を二、三度見掛たことがあったのを思い出したのだ。

しかし彼女の方は、何百人という人にまじって通う英夫の顔など、覚えてはいなかった。

店員達から陰口をたたかれながらも、彼女釣りを止めなかった。その釣りを彼女が夫に教えられて始めたのは、今から三年ほど前のことだった。

五つになったばかりの子供を交通事故で失った千賀子は、ノイローゼ気味になり、毎日部屋にこもったまま、一步も外へ出ようとはしなくなった。見るに見かねた夫が、いやがる彼女を無理矢理連れて行ったのが、川釣りの名所だった。

一度釣りの味を覚えた彼女は、そんなことで気が晴れるのならと、自ら進んで釣りに行くようになったのである。一年もすると、彼女はベテランも、舌を巻くほどに上達していた。家事は女中に任せっきりで、釣りに夢中になっている彼女を見ても、夫は何も云わずに自由にさせていた。

海へも時々出かけて行ったが、千賀子は川の方が性に合っていると思った。誰もいない所で、ひとり静かに川面を見てみると、心の中のウサがきれいに消えて行くのだった。

ある日のこと、いつものように独りで川釣

りを楽しんでいた千賀子は、ふと激しい情欲を感じた。夫から以前、釣りをしている最中に欲情を感じたという話を聞いたことがあるが、それは女でも同じなのだろうか。彼女には、非常に珍しいことだった。今まで例のないことだけに彼女はうろたえた。

ぼんやりとウキを見てみると、軽い手応えがあった。あげて見ると、小さな鮎だった。鮎は手の中でピチピチとはねた。何百回となくやって来たことなのに、その時に限ってそれが妙に新鮮なものに思われた。

そのピチピチしたものが、奇妙に心をとらえて離さないものであった。

辺りを注意深く見まわしてから、鮎を手にした千賀子は、あしの茂みの中へ入って行った。それが彼女に妙なことを覚えさすきっかけとなった。

「釣りをするのもいいが、こう臭くてはやり切れん。魚の匂いがしみこんでいる」

夫はそう言って、だんだんと遠ざかって行ったが、千賀子はこれ幸いと喜こんだ。が、ある時、その現場を人に見られてしまった。

彼女は仕方なく自分の恥を話した。幸いにも相手は不能の老人だったので、千賀子にみだらなふるまいをしようとはしなかったが、

口止料だと言って、彼女が今までやっていたことを、自分にもやらせてくれと頼んだ。仕方なく千賀子は老人の望みを叶えてやることにした。

老人の好奇の視線を受けたとき、ただそれだけで彼女は又、今まで感じたことのない何かを感じた。人に自分のからだを見せるといっただけが、こんなにも自分自身に作用するとは思ひもよらなかった。彼女はまるで新法則を発見した科学者のように喜こんだ。

しかし、その老人は

「やっぱり、わしは魚を相手にしている方が性に合うわい」

と言って、ニヤニヤしながら立ち去って行った。その背に向って、千賀子は「誰にも言わないでねえっ、おねがいよおっ！」と叫んだ。後を向いた老人は「心配するな」と言うように、大きくうなずいて見せたのだが、三日ほどしてから同じ場所へ行ってみると、あきらかに千賀子目あてと思われる男が三人、草むらの中にうずくまっていた。

それ以来、彼女は転々と場所を変え、ずいぶん遠くまで出かけるようになった。

そして、独りで釣りをしている男を見ると何やかやと話しかけ、相手が気の弱そうな男

だと見て取ると、言葉巧みに手伝わせて悦に入るようになってきた。

金に不自由はしないので、かなり多額の金を、口止料及び謝礼金として出した。

だが、十人のうち八人までは、それだけでは満足せずいどみかかって来た。他に誰もいない川っぶちで、若くて美しい女のあられもない相手をさせられたからには、それ以上のことを求めるのは、当然であった。

千賀子はそのことも計算ずくである。その時に渾身の力をこめて、攻撃から身を守ることに、この上ない喜びを感じるのであった。そしてそれは、あくまで精神的な満足であって、肉体的には、いくら男ともみ合っても、なんの反応も起こらなかった。

そんな危険なことを繰返しながら、彼女は未だかつて、男の攻撃に負けたことはなかった。だから、女が強姦されたというような記事を読むと、千賀子はせせら笑う。世の中には本当の意味の強姦などあり得ないと信じているから、被害者に対して罵言を浴びせてやりたいような気になるのだった。

テレビの番組で鮎のおどり喰いを見た時、千賀子は「これだ！」と心に叫んでいた。

初めのうちはさすがに気味悪く、ワサビじ

よう油など用いたが、なれるに従ってそのままの方がおいしく喰べられるようになった。喰べる……といっても、彼女の場合は食欲を満足させるためでは、もちろんなかった。

生きたままの魚を喰べることを覚えてからは、彼女に挑みかかって来る男の数も、減った。最初にそんな場面を見せて度肝を抜いておくと、たいていの男はへんなことをしようとはしない。

しかし、中にはそんなことに気圧されずに挑みかかって来る男もいる。だが、そういう男こそ、千賀子にとってもっとも楽しみの多い男とも云えた。どんなに力を入れても、絶対に負けないという自信が、彼女にはあったし、必死になった上でも余し、いらいらした様子で恨めし気に敗退する男の姿を眺める時、彼女は心の中で会心の笑みを浮かべているのだった。

甘い気持の格闘を通り越して、男に兇暴さを感じると、千賀子は言う。

「言うこと諾くから、用意する間待ってよ」

喜んで男が手を離れた瞬間、千賀子の手には大型ナイフがキラリと光る。

「あんたを殺しても、あたしは正当防衛で罪にはならないからね」

「チクショウ！」

歯ぎしりしながら後ずさりして行く男に、忘れ物だよと言いながら、千賀子は男の釣り道具を投げつける。

沈みかけた太陽に向って、千賀子はいかにも満足げな笑みをもらすのだった。

(四)

自分の正体を知っている男に出逢ったのは初めてのことだ。なんとかしなければならぬ。

「ばれてしまっちゃ、仕方ないわね。………で、一体あたしにどうしろって言うの」

千賀子は開き直るように言った。

「きまつてるじゃないか」

「それだけは絶対に駄目よ」

伸びて来た英夫の手を、グイとつかみながら千賀子は言った。

「ねえ、今日はおとなしく帰ってよ。第一、汚れてるじゃない」

「おれ、きたなくてもいい」

「ばかね。あした………そう、あした、もう一度ここへ来てちょうだい。そしたら、あんなのほしがってるものを上げるから」

「そんなうまいこと言って、おれをだますん

じゃないのかい」

「疑い深いのねえ、あんたって。心配しなくても大丈夫よ。ねっ」

千賀子はそう言うなり、生ぐさい唇で英夫のほったにキスをした。

こういうことには慣れてる。相手をまるめ込むぐらい、千賀子には朝飯前だった。現に、英夫もほったにキスをされただけで早やポーツとなってしまうた。

服を着ると、二人はまた干し草の上にすわって、千賀子がつ作って来た弁当を分けて食べた。そうしていると、まるで恋人同志か、仲の良い姉弟のようだった。

千賀子は川魚を使った寿司をたくさんこしらえて持って来ていたが、英夫はとても食べる気にはなれなかった。気を利かしてサンドイッチを作って来てくれたので、彼はそればかり食べた。

別れ際に千賀子は、誰にも言っちゃ駄目よと言って、五千円札をくれた。わずか二日の間に英夫は、一月もかからなければもうからないほどの金を、手に入れたことになる。

あくる日も無断で工場を休んだ英夫は、約束の時間の二時間も前から、例の小屋へやっ

て来て、外の様子をうかがっていた。

千賀子にうまくまるめこまれたものの、やはり英夫は彼女を疑っていた。

「もしあの女が誰かを連れて来るようだったら、早目に逃げた方が安全だ。この中州を横切って、向う側から逃げよう。そうすれば、途中に人がいて、助けを求めることもできるだろう」

そんなことばかり一生懸命に考えながら、英夫は板の隙間から辺りをうかがっていた。きのうは約束よりも早く来たのに、きょうは十二時になっても、千賀子は現れない。

「もし来なかったら……」

いやがらせの方法を、あれこれ考える。英夫がいらいらし出した頃、はるか前方の草むらに人影が見えた。近づくにつれて、それが千賀子（もっとも、英夫は女の名前を知らなかったが）であることが分る。目をこらして見たが、誰もついて来るような気配はなかった。少し安心する。

小屋の五十メートルほど手前まで来ると、千賀子は「おやつ？」というような仕草で立ち止まり、川の中程をじっと見詰め出した。「チエッ、ここまで来て、気が変わりやがったかな」

舌打ちしながら出て来た英夫に、千賀子はおいでおいでと手招きした。

「なんだい？」

「あそこを見てごらんよ。ほらほら、あの真中辺り。何か知らないけど、へんな物が浮いたり沈んだりしてるでしょう。もしかしたら人間の死骸かも……」

「えっ、ど、ど、どこに？」

「ほら、あそこだよ」

千賀子の指さす方向を見ても、英夫には何も見えず、秋の陽を受けて流れがきらきらと光っているだけだった。

「もっと前へ出てごらんよ」

千賀子に言われて、英夫は五、六歩前へ出たが、たいした変化はない。

「何も見えないぜ」

「ほら、あれだよ。早く見ないと流れて行ってしまふじゃないか」

この辺りは河口に近いので、水の流れは割合にゆっくりしている。

「もう少し前へ出てごらんよ」

千賀子は、せかせるように言った。

何気なく前へ出ようとしたとたん、英夫はハッとした。

この辺りはもう、中州の端の方なので、堤

防はなく、英夫が立っている場所から二、三メートル先は小さな崖になっていて、その下は水深もかなりある。大小さまざまな魚が泳いでいるのが、青い水を通して見える。

英夫は千賀子の意図を察すると、ぞっとしたが、わざと平静を装って立っていた。

「どう？ 見えた？」

さりげなくたずねながら、千賀子は英夫の背中を突こうとした。その瞬間、英夫は待ちかまえていたように身をかわすと、千賀子の腕をグイとつかんだ。

千賀子はしまったと思った。それでもまだ相手突き落そうとして、懸命にしがいた。こっちの意図を知られたからには、力ずくでも目的を果さなければならぬと思い、必死になった。

英夫の方とて考えは同じだった。第一、今ならこの女を殺しても正当防衛で、罪にはならないのだと思った。

男と女は、たがいに相手を崖から突き落そうと、渾身の力を込めて闘っていた。

いくらやせても、やはり肉体労働をしている英夫の方が強かったが、千賀子も文字通り命をかけた闘いなので、なかなか勝負はつきそうになかった。

昨夜一晩中、もしやと恐れていた英夫の心掛かりは、痛めつけるどころか死の影を伴って襲いかかって来たのだ。

彼は千鶴子の企みを悟るまでに既に夢中で組み合っていたのだが、容易に突き放せないばかりか、千賀子の凄じいばかりの攻撃の手の執拗さに、ひよっとすると……という敗北の危険を感じると、とたんに全身に寒けに似た恐怖が突き抜けた。

ねばりつき、包みこまれるような柔らかな肌、吸血軟体怪物の化身に思え、思わず知らず無茶苦茶に暴れるのだが、その軟体怪物は噛みついてきて離れないのだ。

なぐり合い、引っかかり合い、かみ合い、隙を見ては相手の首を締めようという、全く救いのない死闘となった。

英夫の顔からは汗がしたたり、青筋が浮き出て、すさまじい形相になっていたが、千賀子の方には、苦しさの中にも恍惚感が漂っていた。

首のところへ伸びて来た二本の腕を、ようやくどけさせた英夫は、何を思ったか、千賀子にピタリとくっついてしまった。力の尽きかけた彼にとって、それがもっとも安全な方法だった。もし、英夫を川へ放り込もうとす

れば、千賀子自身も一緒に川へはまることになる。

「離せ！」「離すもんか！」

二人は、まるで犬のけんかのように、かみ合うばかりだった。

そんな恰好で、あっちへごろり、こっちへごろりと転げまわっていた二人は、いつしか崖っぷちまで転がって来ていた。

千賀子の「ヒヤッ」という悲鳴に、英夫はどうにかして川原の方へ転がろうとした。

「離してくれっ！」

「だれが離すもんか。死ぬなら、あんたも一緒だよ」

千賀子の言葉が終らぬうちに、二人の重みで崖際の砂利がずるずると落ち始めた。

二人は、夢中で辺りの草や石ころをつかんだが、無駄だった。

「あーっ！」という叫び声とともに、二人は取っ組み合ったまま水の中へ……。

英夫が気が付いて見ると、そこは病院のベッドの上だった。

相手の女は、落ちた時に崖から突き出た岩で頭を打って、ほとんど即死だったと聞かされて、彼は身ぶるいした。

もしあの時自分が下になっていたら……と考えると、ぞっとせずにはいられなかった。

英夫は何もしゃべりたくなかったが、暴行殺人の疑いがかけられているとおどかされては、話さないわけには行かなかった。

最初は、彼の言葉をてんで信用しなかった刑事達も、鉄橋の下と農具小屋から集められた川魚に、千賀子と同一の反応が現れては考え方を変えないわけには行かなかった。

千賀子の夫の話しからも、英夫の言っていることが、まんざらでたらめではないことが分り、一応「自宅静養」ということになった。しかし、それは体の良い「軟禁」にほかならなかった。

一カ月程して、英夫に対する疑いも完全に晴れ、また工場へ通うようになった。

しかし、彼はあんなに好きだった釣りの道具を一つ残らず焼き払い、「釣り」という言葉さえ口にしようとはしなくなった。

英夫にはあの女が、魚を多く殺した自分をこらしめるために、人間の姿をして現れた、「魚の精」のように思えてならなかった。

ある日のレポ……



願望

予世場良三

先週の日曜日、来客があった。懐ろの事情で動けなく、狭い部屋を二部屋借りて、私達一家のつい半年まえまで居たアパートの住人だが、私の客ではなく家内の客だ。今度嫁入りするとかで、大阪を離れるあいさつに来たわけだが、たしか私達の居た頃にはご主人が居た筈だ。いつ、どうして別れたかは話題にはのらなかった。何回目の嫁入りか知らないがまだ若いし、朗らかなグラマーで水商売の人だから割り込んで話を聞いても面白い。ことにこの日のことはレポに価する。昼め

しをゲラゲラ笑いながら共に済まして帰ったが、後になって奇妙なことに私は気づいた。彼女の話題中、レポに価する分だけを、メイセキなる頭脳レコーダーから引き出すと大要、次のようになる。

「貰い物のおハギをおすそわけに持ってきたんだけど、あんなにびっくりしたことはなかったわ。ドアの鍵は開け放しよ。だから私、おトイレへでもと思って、おハギ置いとくつもりで上ったのよ。とにかく六畳一間でしよ。マル見えよ。驚いたわ、ホント。二人と

もまんまるハダカでヨシエさんがこう抱いてんの。いえ、抱くなんてもんじやない。体全体で押し伏せてるんよ。私、びっくりしておハギのお皿をおっことしたわ。下のミサ子さんがウンウン言っ顔を出したのだけど、それがどこからだと思う。ヨシエさんのお腹の辺りよ。ミサ子さんも驚いたんでしょね、何か叫んだの。それでやっとながらいたらしくってヨシエさんがパツとはね起きたんだけど、そこでまた私がびっくりよ。馬乗りみたいにされているミサ子さんが、なんとククラレてるじゃない。こう両手を後にしてオッパイのところにもギュッと紐がかかってたわ。その上に両足も折り曲げてたからきつと後でククッてあったと思うわ。私、ヨシエさんに睨まれて急に怖くなってとび出してしまったの」

「……………」

「まさかあの人達にあんな趣味があるとは思わなかったから、ホントにびっくりやら怖いやら……。レズビアンって激しいものね。後でナイショにしてって、ハンドバッグを呉れたけど、ドアぐらい錠してからにしたらしいのにねえ」

「……………」

「けど、貴女達が出てから、あのアパートで変なことが流行りだしたわ。流行るっていうとおかしいけど、妙なことが起るのよ。二十六号の世輪さんも変よ。ホラ、知ってるでしょ。あの、洗濯場で行水してて、管理人ともめたことがあったバーへ行ってるコよ。こないだね、夜中にお客を連れて来たらしくってね。そうよ、よく連れ込むらしいわ。達者なものよ。それが、この間の晩のは変態さんらしくってね。夜中にキャアキャアドタドタやるんで皆がとび出したのよ。そしたら、あの子ハダカでククラレタまま、廊下へとび出してきたんよ。どう思う？ 自分が連れこんだ客がククッたから助けてナンテねえ。それにそのククリ方が念入りなのよ。あれはきっとククラレタンじゃなくてククラせたものよ」

「……………」

「ホントに変な人が増えたわ。ホラ、新聞に出てたでしょう。十六号のヤエさんが殺されたこと。公園で、彼氏と逢ってるとき、果物ナイフで刺されたそうだけどね、新聞には出てなかったけど、手首と腕に縄のあとがあったそうよ」

私と家内は顔を見合わせた。まさか私のSM好みを知っている話題ではないと思う。

この人があのアパートに来て二カ月も経たぬうちに私達は出たのだが、例え古くからの人にも、私の本心を知られていない自信は十分にある。にもかかわらず、あまりにも私にうってつけの話だ。思いがけないことを聞いたという顔つきで、びっくりしてみせながら、私の内心では、あそこを引き払ったことを悔む気持ちがそくそくと湧き上ってくる。彼女が帰ってから、余計にその想いが強くなって、一人、思い出しては幻想をたくましくしていた。対象が知人だけに実感が深い。

「似たヒトも居るのネ」

キッチンで洗い物をしながら、妻が声をかけて来た。もちろん私に対するカラカイ？である。

妻は、もちろん私の縛りの憧憬を知っている。私は幾度となくこの妻にマゾの素晴らしき境地をのぞかせてやろうという「愛妻心」を発揮して涙ぐましい？ 努力を繰り返しては導入に努めたものであった。新婚当初の固さのとれ始めた頃から、機を狙っては放つ矢の執拗さに負けたのか、真似事の腰紐を受けてくれたことも二、三度はあった。だが、それっきりだ。他の事の殆んどはノロケたくも

なるほどだが、どういうものか、こと縛りに関しては仲々の堅塁ぶりを発揮しだした。それも始めのうちはやんわりと逃げられたものだったが、だんだんと露骨に嫌悪を表明し出し、激しく拒否するようになるに及んで、遂に、吾が努力の水泡を、認めざるを得なくなり、女、必ずしもマゾならざることを悟らしめられ、絶望に暗澹たる気持を味わってから何年になるだろうか。悔みながらも出直しの勇氣なく、現在では、他の星のことでもいうような顔つきで、安全圏に坐り込まれてしまっている。縄に対する諦めを持たされたのは、私の方である。ついでに白状すると、一度、腹立ちまぎれに、半暴力のもとで、肌と紐のかもしれない美に酔おうとしたことがあったが、さして抵抗なく縛られはしたが、ありありとした侮蔑の眼と、何の反応もないフテクサレ的被縛体の前に、形だけは見事な夢想の実現ではあったが、少しも酔えなかったのだ。まことに味気ない想いながら、以後、妻を対象の縄は考えないことにした。いや、させられた。だが妙なもので、一種の悟り？をひらくと、誌上に載る一番安易で一番安全にして一番理想的な、夫婦プレイのレポート記事にも、あまり羨望は感じなくなってきた。や

ってるなという程度である。そのクセ街頭の美女には、すぐ連想して見惚れるのだが……

思わぬ脱線。もとに戻ろう。

「ヨシエさんとミサちゃんが、そんなだとはねえ……」

妻が手を拭きながら、食卓の前にペタンと坐り込むなり、疑わしそうな口ぶりをする。

「縛りとなるとすぐ何か文句をつけやがる。

気持の分らねえのは、オマエだけだ。不感症オンナめ」とは私の腹の中だけ。

「レズならやりかねないぜ」

「そのレズっていうのがねえ」

頭をかしげる妻は、ククリ云々は問題にしてないらしい。

「何にしてもピッタリのおハナシで面白かったでしょう。……あッ、あなたまさか、あの人に……」

「ん？」

「変なハナシ、したことがあるんじゃないでしょうね」

「オイオイ妙なこというな。俺こそ、オマエが何か話したんじゃないかと……」

「冗談じゃないわ」

「だとすると、ホントのハナシだろうよ。近

頃、多いんだから」

でも、といいかけて妻は、プイと立ち上った。久しくしなかったが縛りのハナシをされそうな気配を感じとったのかも知れない。

「まだ卒業できてねえナ。こっちが諦めてんだから、逃げることはなからう」

といってやりたかったが、わずらわしいのでやめた。妻の背はトイレに消えた。

「でも変だとは思わない？ ヤエさんが殺された時には私達が居たし、あの人はまだ越してきてなかったわよ。そうよ、事件から一カ月もしてから来たんよ。私、お葬式の手伝いもしたし、後でお母さんからいろいろ聞かされたけど、縄の跡の話なんて、聞いたことないわ」

水洗の音と同時にとび出して来て、ポカンとする私に、妻は早口にまくし立てた。トイレで考えていたらしい。あそこは私もよく利用する。

この疑問は尤もだと思う。私達が住んでいた四年ばかりの間で、色々な小事件はあったが、同じ屋根の下に住み、顔見知り以上であった知人が殺されるという大事件はもちろん始めてのこと。適令の娘さんが、恋人と近く公園で話しているうちに、どういうことに

なったのか、彼の持っていた果物ナイフで刺されたのだ。被害者の親とは心易いから、この事件のことは私もある程度は突込んで知っている。創口は何力所だったとか、どこがどうなっていたとか、新聞ではこうだが実際はこうだとか、秘密めいたことまで聞いた覚えはあるが、なるほど「縄の跡」云々は、初耳である。

「それにね、ヨシエさん達が本当にレズだとしてもよ、鍵もかけないでそんなことする筈はないと思うわ。あの人はそんな心易いつき合いしなかったけど、あの人はお便所に行くにも、いちいち鍵をかけてたわ。隣りがケンボタの部屋だもの」

ケンボタとは、当時繁栄した部屋荒し容疑者の通称だ。その名の由来は知らないが、とにかく空巣が横行し、たとえば部屋に人が居ても、ゴトツという音で出てみると、扉が少し開いていて、おどり場に置いてあった物が消えるという事件が続き、種々の状況から怪しまれていた無職者のことであった。

それはともかく、そういわれてみれば確かにおかしい。衝動的なキスぐらいならいざ知らず、全裸で縛りを伴う本格的？ プレイをするのに、錠もおろさずに敢行する女が居る

だろうか？ 女なら尚更、気がつくだろう。

「世輪さんのことは、隣り部屋のオバチャンがぶつぶつ言ってたから、男の人を連れてくるのはホントらしいけど、皆の前へとび出して来たっていうのは眉唾物だと思わない？ 裸でククラレタまんま、いくら足は自由だって女が皆の前にそんな恰好で出れるかしら。強盗に殺されかけた訳じゃあるまいし」

私は折角、実感を持って描くことの出来た最高の構図が、ボウーとかすんで行くのを感じた。

こさかしらに謎解きを楽しんでいるかの如き妻の顔を、じっとみつめた。憎らしく見えた。

だが反論して、彼女の話題を真実化しようとするには無理があるのだ。残念ながら、こ・さ・か・し・ら・の妻の言葉の方が筋は通っている。

「そういうことだナ」

と頷かざるを得ない。

「チトオーバーすぎる話だナ」

「つくり話よ、みんな……」

妻は断乎として結論を出した。ほのかに希望をつないでいた私の描く幻想が、ガタッと消えた。

「おかしい人ね。あんなことをわざわざ喋り

に來たのかしら。名誉きそんで訴えられても仕方ないぐらいよ。あんなヒトとは思わなかったわ。どういうつもりかしら。……アラッヒョッとする、ウチのことも、変な作り話をこしらえて言いふらしてるかも知れないわね。オオいやだ。どうしよう」

ここかららしい推理面が、忽ちオロオロし始めた。面白い。ザマアみやがれ……と少し気持よかったが、あの調子ならやり兼ねない。もし妻の心配が当たっていたら、私としても迷惑である。あそこのお家に行ったらね、なんと、ご主人が奥さんをハダカにしてククリ上げてるじゃないの、びっくりしたわホントに……なんてやられたら、これはなんともつまらん話だ。ホントならまあ、……いや、ホントでも吹聴されてはかなわない。まして私の場合、心から望みながら果せないで苦々しい想いになった哀れな意気地なしだ。割に合わないことこの上なしということになる。

「まさか。……よし、作り話としても、総甜めって訳じゃない。彼女の舌に縛られた女は、皆キレイな女ばかりだから、彼女、妬いてるんだぜ、きつと」

私は、自分の気掛りをも振り払うつもりでいった。

妻は、チラッと私を見て、何か考えていたが、小さく頷いた。

「そうね、だれかれなしというわけじゃなさそうね」

しかし、後がいけない。

「自分よりキレイなヒトだけククルのは、わからないではないわ。でも……だとすると、ああ、余計に心配になったわ」

私はゴロンと転がって、ベッタリ座布団にのっかってる大きな尻を横なぐりにしてやった。尻はチョット持ち上っただけだったが、手応えは、やはり柔らかかった。

尻の下の方がサツと動いて報復攻撃をかける気配をみせたが、すぐ矛先は納められた。惜しいことをした。再報復でどこかを攻めるチャンスが消えた。チェコを見習ったわけではなからうが、抵抗しないと被害は少ないものと心得ているとみえる。

仕方なく、タバコの煙に、彼女の舌に縛られた女の姿を見出そうと、消えた幻を想い浮かべていた。

少くとも、彼女よりはキレイだと思っていられるらしいことの確認できた妻は、残りものの果物にかぶりついていた。その動く口元を何気なく見ているうちに、私はフトあることに

気付いてガバツと身を起こした。

「イヤッ。気をつけてよ」

指のタバコから、灰がとんで、妻の眼の前に落ちた。

「おまえのいうとうりだとしたらネ……」

私は、いきごんで話したが、

「いつもこれだから。灰だらけじゃない。いっそタバコやめたらどう？」

と、大仰な身振りで、五ミリに足らぬ灰の塊りを睨みつけて私のいきごみを見無視する。私も無視して続けてやる。

「あの女はなぜ、そこへ結論を持って行くんだらうネ」

「そこへ結論？」

妻の顔が、不審気に私に向けられる。無視するのを中止したらしい。

「ハダカにして縛るってことサ」

一瞬、妻の黒眼がクルッと動いたが、無言のまま、私の眼の前にある灰皿をわざわざ取り上げて突きつけて来た。

「妬くのもわかるし、勝手な悪口を作っているふらす奴の居るのも珍しいこっちゃない。

あの女がモ・マ・シ屋の部類としても、ずい分、統一された創作だとは思わんか」

妻の返事はなかった。私の突き込んだ吸殻

を、持ったままの灰皿で丹念に揉み潰している。

「ゴシップ的な悪口をいいふらすにもいろいろあるだろうに、わざわざ、ハダカにして縛りにもってゆくというのはどういうことだ」

妻は依然として、吸殻を潰しながら無言。余程タバコが憎いとみえる。

「近頃は、サドだマゾだと週刊誌あたりでも大分書いてるらしいから、同じゴシップでもただの浮気やヨロメキだけじゃ受けないと思ったからだろうかね」

「そう、きっとそうよ」

案の定、ヒッカカリやがった。私には妻の無言の理由が分っている。だからワザと言いそうなことを並べてやったのだ。

「そのほうが刺激的だからよ」

「刺激的？ ハダカで縛ることがかい？」

「そういちいち、ハダカで縛るっていわなくってもいいでしょう」

「だって彼女がいったんだ」

「クルクルっていったわよ」

「どう違うんだ？ 俺はクルクルと縛るとは同じだと思ふんだがね」

「感じが違うわよ。……縛る縛るって。……いやらしい」

「縛るってえのがいやらしいか」

「いやらしいわよッ」

ガチャンと灰皿が音を立てて置かれた。中の灰が少しとび出して散った。ザマアみる。

「欲求不満なんだなあ、彼女は」

「今度、お嫁入りが決って嬉しいはずだけどねえ」

「何度目なんだい？」

「サア？」

「郷里へ帰るっていったナ」

「あちらで結婚するんでしょ」

「余計におかしいじゃないか」

「なにがよ」

「再出発できる嬉しい時にハダカで縛る、いやクルクル話をわざわざするのがサ」

「……………」

「俺はその事も創作だと思うよ」

「結婚のこと？」

「そう、そんな話はないんだぜきつと。再婚したい、だれか自分を貰ってくれる人が現われて欲しいっていう気持の現われだと思う。

ん、そうだ。間違いはない」

「……そうかしらね」

妻も、私のカンに同意するものを感じとったらしい。

「だとすると、ハダカで、おっとと、いけないんだね。言わないけど、刺激的な創作も彼女自身が望むことの現われだと思わんか？」

「まさか。そんな」

「じゃあ、どう判断する？ さっきの推理は素晴しかったが、あの調子でひとつ分析してみなよ」

「……………」

妻はとまどった調子で、眼をパチクリしていたが、ややあって呟くようにいった。早くから感じとっていた様子だ。

「あなたのいうとおり、あの人、欲求不満なんでしょうね」

「いくつだい？」

「トシ？ さあ、二十七か八。…………もう少しとってるかも」

「それで、何人かの亭主をとっかえてるとすると、よほどの重症者かもしれないな」

「病氣っていった？ あの人」

「いや、べつに」

「だったら、重症者ってどういうこと？」

「欲求不満型願望過多症だと思っただけさ」

「ナーニ？ そのガタガタって」

妻にはわからなかったらしい。もっともらしい顔で問いかけてくる眼つきは、案外に真

剣である。

「この種の病氣は現代医学ではどうにもならんもんでナ。不治の病いさ。この患者の症状と逆の徴候を示す患者も不幸なんだナ」

「もう一度いってよ、さっきの病名。ゆっくりと……………」

ホントに病氣と思ってるらしい。面白い。

「ヨッキュ……………」

「はじめはいいの。あの方よ」

「ガンモウカタショウ」

「聞いたことないわ。どんな字？」

私は字を示してやった。妻はようやく分つたらしいが、意味をとり違えている様子だ。

「おまえも相当な徴候があるんだぜ」

「あたしが？」

「情熱欠除型、陶醉忌避的不感症って……………」

とたんに眼の玉がキラッと光った。危険信号である。今度のはすぐ分つたらしい。胸におぼえがあるからだろうとは思うが、フテク

サレ戦術に突入されては何かと不便だ。チョ

ットばかりテを打って置く必要もある。

「……………のもあるが、これは嫁入りなんて出来ない種類なんだな」

「わたしの徴候って何よ」

「おまえのは、さしずめ、普遍型家庭的母性

愛過多症だろう。つまり一番多い種類だ」

「……………ごまかしたわね」

もちろんとは言わなかったが、危機は脱し得たようで、内心ホッとする。

「つまり彼女はマゾだってことさ」

「……………」

「裸にして縛ってくれる人は居ないかしら、そんな人がいたら素敵だけど……………」という願望が強く作用しての創作だ」

「そんなバカなことが……………」

「あるはずがない、というのがおまえの持論だったが、そんな女の実在を、彼女が証明してるようじゃないか。……………違うかい？」

「……………」

「彼女はね、毎夜、夫の手でハダカにされて縛られる幻想を描いては楽しく……………」

黙って聞いていた妻は、ハッとしたように立ち上り、既に片付けの済んだ箸のキッチンで、激しい水音を立て始めた。

私は再びゴロン転った。ざまあみろ。なんともいえぬいい気分だった。眉をひそめて身振り手振りで喋っていた彼女の美しい顔が、その見たことのない全裸像が、いやに生々しく、縛られて喜悦しながら私の脳裡に浮び上って来たのであった。(カット・宮城昌子画)

これみていまんじ

珍書探訪記

齋藤夜居

齋藤昌三の「近代日本好色文学考」(二)(題名は大げさだが内容は短い読物)は雑誌「古今・桃色草紙」(昭和3・8発藻堂)所載のものだが、秘密文献の刊行者について触れているが、それらは「単に金儲けづくばかりでは出来るわけではないから、ある程度はやはり変態性格者の一部と見ねばなるまい」ということと「然し、なかには汗水たらして稼ぐよりはぼろい利益があるというので、欲得づくでかかっている」者もあり、また「一面には世に得難いものを上梓して、我れひと共に喜びたいという特殊な人物もあつたに相違ない」とも云っているが、そういう人物たちは

社会風教上からは面白くない存在であるが、考えようでは滅び行く文献を活した殊勲は認めるべきであろう——と語っている。次にその実際について記した所を抄写すると、
「鈴木に自分が初めて逢ったのは大正七年頃と思うが、その頃は四十位の小作りの男で、鈴木とは勿論偽名であつたが、作戦上住居ともつかず、事務所ともつかぬ家を二、三カ所に置いて、原稿、会員名簿、発送所とことごとく異った家でやっていた。自分が最初に逢ったのは下谷の入谷で、露路奥の長屋で、表戸は錠を下ろしてあつた。三、四度ノックした結果、やっと出て来た。仕事の性質上世を

忍びくらす悲しさに、太陽の顔もおちおちおがめぬ為か、顔色は青白く、話し声などもとすれば聞き取れぬしのび声だった。この鈴木一夫の手から出版されたものは、多くは徳川期に属した好色文学であつたが、後には種がつきて明治・大正期のものまで出版し、翻訳物まであつた。『旅枕』の如きは五百頁余のものであつた。それ迄には、勿論二度や三度の体刑位は喰っていたらしいが、それでもこりる様子はなく、殆ど各月的に出版していた。一面には体質が脾弱で、ほかの仕事には不向きで、勢いこの方面に熱中したものとも思われた。こんな事情から妻子にも別れて、

『古今桃色草紙』

(創刊昭和3・7全九冊刊行) 発藻堂書院発行。花房四郎および青山倭文二が編集した。発禁は創刊号、一ノ五、二ノ一、二ノ四である。この表紙は二ノ二。内容はあまり面白くなく伏字が多くて当時不評だった。

古今桃色草紙



もと遊廓のヤリテ婆さんを養って、飯を炊かしたり、使い走りなどさせていた。自分も初めは会員の一人として文通して知り合った。ある時は婆さんが、鈴木が不在で米代がなくなり、自分の宅にまで借金に來たので閉口した。この婆さんは一切の秘密を知っていたので、鈴木も一目置いていたようであった。酒ぐせが悪く、鈴木が横浜に仮寓中に、桜木町の横の堀川へ溺れ死んだことを新聞紙上で知った。鈴木秘密出版物はその頃で一円から

二円だったが、当今(昭和三年)では十五、六円内外で取引きされている。思うに彼は牢死したことであろう。とにかく、江戸軟派本でもひねくるだけあって、文字もよく書け、浄瑠璃を得意として、外出の際は金の丸ブチの黒眼鏡をかけた。晩期には警察に追われ、印刷屋にも見はなされ、自ら謄写版で刷らねばならなかったのはいささか哀れを覚えた。

大正七年といえは今から約五十年前のことであるが、ずいぶん陰気な話であるが、この種の人物が記録されたことは実に珍しい。

次は昭和初年の話で、先号の随筆にも書いた伊吹映堂の『蒐集道』第13号には、これ又ちよつと記録に残っていない記録が出ていたので転写させて頂く。

「その当時、東の梅原(北明)と西の堀兄弟といわれる程の軟発行の親玉がいた。有名な堀一派だ。梅原が本の発行が得意なら、堀兄弟が写真というのも面白い。大阪人根性で金儲けなら写真の方が手っ取り早いという所であった。当時全国で出す秘密写真の八割は堀が製作したと伝えられているが、嘘かホントか。しかし今その頃の軟写真を取り出して見ると、流石に現代とちがってモデルも野暮な

中年夫婦の取組みたいのばかりで、迫力がない。エロ道も写真Vをあつめるようになっては、ゲスのゲスと知りながら、この道の奥深さに若さがばくはつしたのかも知れない。既往のにがい体験があったので、店の若い衆の名前で注文して集めていたが、堀一派が挙げられた時は家に刑事が來たが、その雇人は満州に行った後だったので、デカはおかしいという顔をして帰ったが、後で父親からお前が買ったんだらうと一カツされた——親不孝な息子であった」

まったく、好きな道は止められないと云うけれど、映堂サンは現在ではその当時の父の齡を越えているのに、いまだに蒐集道にはげんで居られるのだから、少雨莊・映堂の二例で示したように、発行者も収集者も共に考える程に人間の持つ業(ごう)ともよぶべき宿縁があつて、そのことに執念を燃やしているように思われて仕方がない。(註。当時通販の怪写真屋というのは無責任なイカサマが大半で、堀もずいぶんインチキな品を送っていた。この方面で良心的？だったのは大阪北区沢上江町で栄仙画塾を經營していた鎌田というのがいて、猟奇愛好家を満足させていた) 然らばその種の秘文献の入手方法に就いて

は、と訊ねられると、大正年間も現在も同じような手段が繰り返えされているというのが一言の説明だが、物というものは数多く集めれば、其処には比較すべき思想が生じ、それが学問ともなる。学問とは理非正邪善悪真偽の識別であるから、そうした意味で、以下は特殊資料刊行会に就いて今迄に記載しなかった点を記して置く。

小倉清三郎主宰「相対会」

生活文化資料研究会（広橋梵）、造化研究会（川崎清一）、新生活研究会（川崎清一）、日本生活心理学会（高橋鉄）、第一組合稀覯文献研究会（芋小屋山房）等々については、先きに説明する所があったが、それらの性研究活動の手本でもあり源流ともいふべき、小倉清三郎の「相対会」があった。性文献と性体験報告とのいつわらざる研究発表機関だった。相対会の活動を説明するためには、その前期（戦前）と後期（戦後）に別けて考えることが便利である。この会は、小倉清三郎主宰のもとに大正二年より昭和十九年迄続けられ、戦後になってからは未亡人小倉ミチヨの意志により、「故小倉清三郎研究報告顕彰会・第一組合・相対会」が結成せられ再出発し

戦後複製版「相対」の刊行案内



た。因循きわまりなき、官憲との闘争のうちに、赤貧に耐え抜き刊行された原報告書全冊は活版・謄写版印刷に拠って少数頒布されたので、全文活字化する複製が急がれていたのである。この事業は昭和二十七年八月に始まり、昭和三十年十二月全三十四冊を、これまた激しい官憲との戦いのもとに遂にミチヨの手によって完成させることができた。小倉夫妻の活動こそは、日本に於ける真正正銘の性文献資料の伝達者として、いつまでも永く記念されるべき人たちである。その苦闘の生涯については左記を参照されたい。

○小倉清三郎と相対会 小倉ミチヨ（『人間探究』一ノ五 昭和25・10）。

○相対会の乗（昭和27・8 第一組合 相対会）。

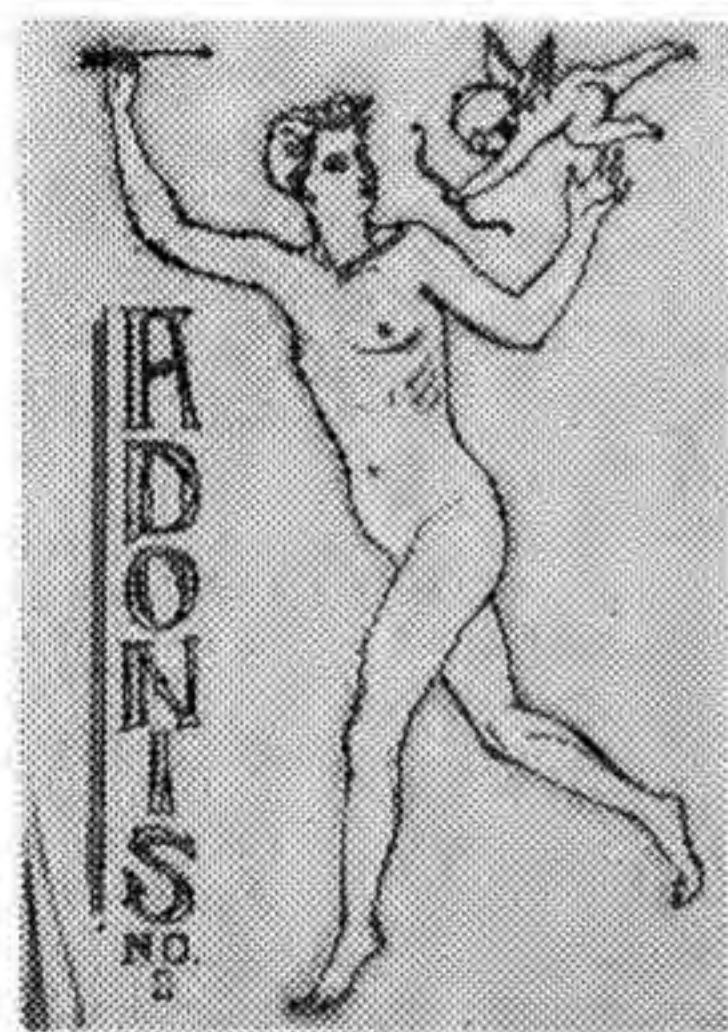
次に、昭和七年度における小倉清三郎自筆の「相対会趣意書」ともいふべきものがあるので全文を左に転載する。

「其の後全く御無沙汰に打ち過ぎまして、まことに失礼を致しました。平に御わびを申し上げます。扱て御力副えにあづかりました「相対会」は其の後も細々ながら存在を継続し、今では将に満二十年に達しやうとして居ります。始めのうちは出版法の関係で幾度か苦い経験を持ちましたが、豊原清作、川手忠義、故沢田薫（五猫庵）の諸弁護士のお骨折りのおかげで、組合制度により、狭いながらも一条の進路を拓き得まして以来、私はつとめて世間との交渉をさせて、小さな会の中に立てこもり、主として健全な人間の正常な性的生活を出来る丈け奥深く研究して行くために力を傾むけて参りました。幸に会員会友諸君のおかげで、活版時代に七百頁余り、謄写版時代になって三千枚近くの報告を出すことが出来ました。これを単に量の上から申しますならば、年数の割に少な過ぎると見られるかも知れませんが、しかし質の上から申しますならば、此の種の資料と知識とを之れ丈けに集め

得た例は古今東西に未だ嘗て聞かない所と存じて居ります。之れ文けの仕事にもせよ、やり得たのは、智能・情感・教養共にすぐれた友人諸君を会員会友として私が持ち得たからに依るのであります。私は其れを思ふと感謝に堪えないのであります。就ては、愈々努力して更に新たな資料を集め、既に集め得た資料を知識化し、得られた知識は之を整理して、随時応用を可能ならしめ、未婚時代を真面目に送らうとして居る人々のために、之から始めらる可き夫婦生活を円満に送りたいと考ふ人々のために、既に倦怠期に達し興味の失せた夫婦生活を若返へらしめたい人々のために、恐ろしい倦怠期の到来を未然に防ぐための用心を心掛けて居る人々のために、或は、配偶者を失った淋しい人々の慰めのために、子を持つ親達の相談相手として、必ず何等かの役に立つようにして諸君のお力副えに酬いたいと存じて居ります。何とぞ今後何かと御加勢下さいますよう、切に御願ひ申上ます。(昭和七年)東京本郷駒込浅嘉町七八 小倉清三郎。」

誠に一言一句胸にせまる切々の文字であつて、殉道者としての言葉である。性商学派や性ジャーナリストにあり勝ちな、てらいや俗

臭や気どりやいかさま根性が全く認められない。小倉ミチヨの夫君回想文のうちにも、貧窮の連続——私は毎日のように、夫小倉清三郎に急場をしのぐために、さしあたりの収入を考えて貰い度いと頼みましたが、狂人と紙一重に等しい人物には、勝つ事が出来ず、岩石に打ちつけた体の如く、私の心はいつもキズだらけでありました。此の嵐の中に、不幸にして生れたのが三男小倉ネリヤでありました。これは僅三十七日目の昭和十年二月十七日に亡くなったのであります。此の子供の死亡六日前のことでありました。東北帝大理学部でY教授から、返事の手紙がまいりました。私達は喜んで



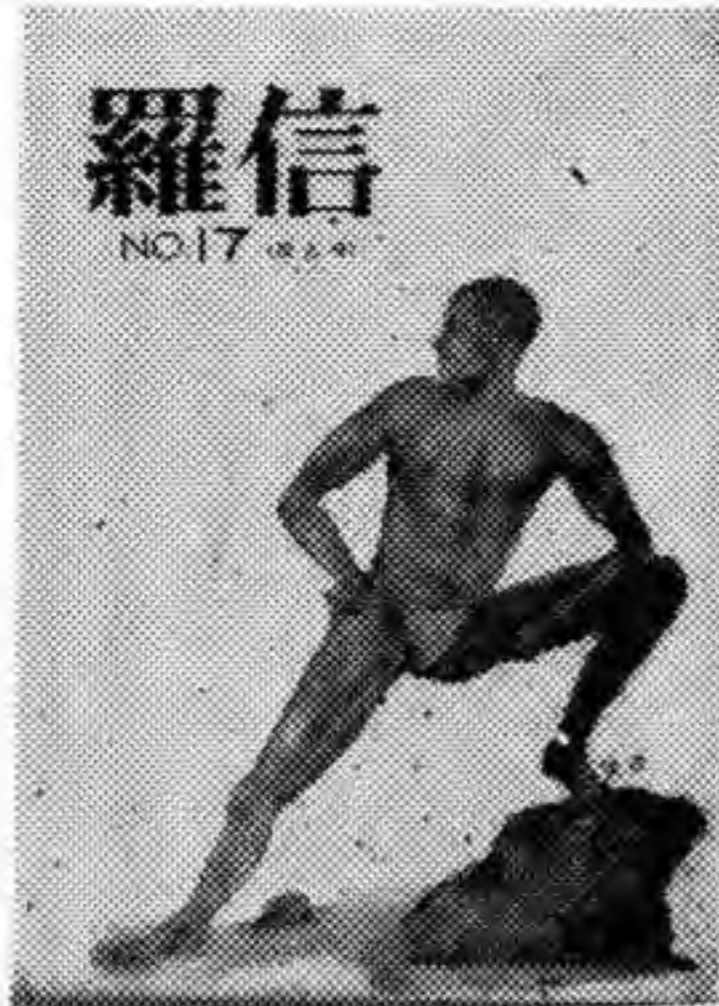
「アドニス」創刊号

封を切って読んでみました。あに計らんやその手紙は私を逆上させました。「あなた方へ送金するような余裕は私方には持つて居りません。若し、送金でもしようものなら、家内にしかられます。小倉君は此の際友人などにすがらず、区役所の小使をしてでも、妻子を養うべきである」私は子供を抱いたまま、畳をけつて、夫清三郎の元へ行き、書き続けている原稿類を驚愕みにして部屋中へ散らかしました。夫は一言も発せず、再び紙を取り出して書き続けて居りました。

と云う部分もあり、まったく聖者の如き性研究家であつた。当時の「相対会の事情」という刷物によれば、現在会員は約六十名であります、とあるから会と生活とを維持させることは、まったく困難そのものであつたのである。尚、相対会報告については原資料以外には紹介がいくらも杜撰で、興味本位に性的好奇心をそそるものが多い。「週刊実話」(昭和40・8・23)の「密室記録文学か?」その実体は「性愛記録を研究する相対会の有名な人たちは、心ないトップ屋とその一派の記事ではあるが、素材の一部分に長尾桃郎(発禁図書研究家)の直接談話が含まれているの

で重要である。つまり、戦後の顕彰会版資料第七冊以降終巻まで、小倉女史の依頼を受け文献愛護および次代への伝承を目的として、本格的な書誌研究家が編集・印刷にタッチされたことで、この資料が立派に復原され得たことは長尾桃郎に負う所が多かった。以下、相対会報告の内容の概要のみ摘記して置く。

論文の部。性的経験概論。週期末の特徴。自慰の意義及効果。利己主義と夫婦生活。不釣合の調整。連想の媒介による春的刺激の増加。古今を貫く人情の機敏。処女と娼



「信羅」は始めパンフレット程度のものであったが、この十七号は雑誌のかたちを整っている。本文は孔版タイプ。内容はアドニスなどより随分ひかえ目な表現が多い。

婦。

資料の部。タルマの場合。汽車中の出来事。女百態。A氏の日記の一節。性に関する記憶。始めて見た世界。十六の年の春あった事。最初の経験。操の印章。貞女の苦境。預ったズロース。春に喘ぐ。八面鋒。彼女

と彼。忘れ難き二十二歳の女。或る青年の性的回顧。或る中学生の手紙。村に於ける意外な経験。温泉雑記。十三年間の性交統計。微妙な腫を有った女。階上の音、隣室の音。民謡土俗に於ける春的要素。女から挑まれた経験。サード風とマゾ風。紅灯の異花。倫敦のハイドパークの夜。奇遇。Kと云う男の日記の一部。それからそれ。わかぐささんの思い出。事務所生活の数頁。AB通信。或る料理屋の女将。鎌倉山。妻と私。男嫌いの女。或る私娼窟。恋の成長。避難宿の出来事。阿部定鄰室観察十日間。メカケの試験。或る男の春の嗜好。曇った日の断想。女流楽人の追憶。末摘花詳解。秘本手記。新婚当時の夫婦の心得。艶史目録。春画の題帳。三味線に現れし春的歌謡。医心方房内篇。

尚、維持会員のうちには戦前をも含めて、坪内逍遙、芥川龍之介、平塚雷鳥、大杉栄、

有島武郎、山本周五郎、角田喜久雄、その他著名な漫画家もいた。検事、大学教授、医者なども多数支持していたという。

岡田甫「近世庶民文化研究所」

この会の発足当時の事情は「末摘花解禁」に由来している。葛城前鬼（松川健文）は初版「新註誹風末摘花」（昭和22・4、ロゴス社通称東都本といわれる）が、猥褻文書販売容疑として、警視庁より摘発をうけ、風紀担当の桜井検事の訊問を受けたが、この時に松川は、今にして末摘花に対して牢固として抜くべからざる内務省因襲観念を是正せしめない限り、古川柳研究家にとって柳祖川叟の遺宝として尊重せられるばかりではなく、世界艶笑文学の一流作品に伍して比肩し得る江戸文芸の逸品を、悪書の汚名から救出する機会が再び得られないであろうことを恐れ、精力と資力の続く限り法廷に於て黒白を争うことを決意したのであった。この経過は同書再版後記（昭和26・5）に詳述されている。即ち昭和二十五年八月二十六日に事件発生以来満三カ年にして、無罪として落着いた。

扱て、初版禁止の末摘花東都本のもう一人の編者でもあった当時、柳田良一こと岡田甫

は、事件審理中は差したる発言もなく過していたが、こと「解禁」と決するやたちまち末摘花研究家として名乗りを上げ、以下岡田甫の自記する所に拠れば、

「ついでに、本会発足当時のことを述べれば、雑誌『人間探究』（註。第四号昭和24・9特集世界無比の性愛エピグラム集末摘花研究）の依頼で、多年その研究解明に従事して来た誹風末摘花の註解を執筆……。ところが拙稿が意外にも好評で、やがて単行本『川柳末摘花註解』（昭和26・5第一出版社）刊行の話まで進められるに至ったわけだが、この会誌発刊当時はそうした機運に恵まれぬ前のことであつた」近世庶民文化一号—三号合冊復刊後記（31・8・15）。

とあって、どういう訳か肝心の末摘花解禁の最大の功労者たる松川建文の業績を除いてゐる。この会員雑誌『近世庶民文化』（昭和25・10と昭和41・6）は創刊以来百号付録まで、個人発行の風俗文献雑誌としては稀有の偉業を残して完結した。この誌は、相対会が性体験を主としたものとすれば、性文献それも主として徳川期の紹介（古川柳・艶本・性風俗）を主としたもので、この会の特色とし

ては、会員間に秘文献を多く流通せしめて、会を維持したことである。此処ではその創刊当時の事情の一般のみ記すにとどめた。

花咲一男「近世風俗研究会」

「荷風さんの断腸亭日記の昭和二十二年一月十八日に、午前扶桑（書房）氏来り猪場秘密出版の事につき其の一味の者杉並区高円寺古本商雉子書房なる由を告ぐ。依って再び市川警察署に至りて陳述す。扶桑氏はそれより阿部春街氏と省線市川停車場にて会合し今夕共に雉子書房を訪ひ委細のこと探偵すべしとして三時過に去れり、云々。とあり更に二日後の二十日は、身心疲労愈甚し。読書執筆全く廃す。と只一行のみありますが、日記というものは事件のあつた日のことは、かえって筆が省かれるものです。これは例の四畳半問題の件が伏線となつてゐることですが、僕はこの件に関する限りは、この日記以上の事実を識っています。雉子書房は大学出の若いインテリだった。当時熱狂的に艶本や好色文献を蒐集していた。戦後のこの頃は何処からともなく、どつと文献類が流出されたもので、つまり背に腹はかえられず、エロより食うことに忙しかつたから、人々は金になるものは何ん

でも売りに出したのです。戦後急速に性が開放されたと云つても、国民は食うものも食わずに色事にはげんだような説には僕は絶対反対だ……。所で、この雉子書房のところに出入りする者が、珍らしい稿本を発見した荷風作の四畳半という珍本だ。然かも直筆で印章まで副えてある、これこそ天下の稀書だと言ふ、早速に複製の話となつて、止せばいいのに予約をつのたりしたんだ。文書で案内したのではなく、この店にくる客に喋つただけだ、これは当然ジャーナリズムの関係者の耳にも入つたが、とにかく作者がうるさい荷風で、然かも正真間違ひなしという折紙付きだから、おもしろいには違ひはないが、相手がこわいのでその成行きを見守つてゐるだけだった。然し、その実際の印行は、松川（健文）さんの手によつて行なわれたのは周知の事実で、雉子書房は話を流した源だが、四畳半を出版してゐないのです。事件になつて、雉子は警察の手入れをうけたが、勿論そんな秘稿の実物は何処を探したつて出て来やしない。その代りに、それ迄に苦心して集めた艶本や艶画や写真の類が山積あつたので、この野郎ふてえ奴だとばかり、みんな根こそぎ持っていかれてしまった。気の毒な話だ。元々

ひどい結核患者だったので、これのショックで起きられなくなった。細君は小股の切れ上った美人だったが、その後のこのお二人のことは知らない。僕も当時艶本熱がさかんだつたので、歌麿や国貞の会本で良いものを大分わけて頂いた……」

これは花咲一男の談話のうち文学誌的にも重要な発言だったので以前に私が筆録して置いたものだ。花咲一男の近世風俗研究会の仕事は、いずれも一件済で、今日では堅実な江戸風俗文献を復刻し、古川柳研究家として地味な学究兼出版社として業を継続している。私の問い合せに応じて、左の如き書信に接したのみである。

近世風俗語集成 一 性器の章 孔版

三 ゐんすいごい 孔版

逢世雁之声 (付、ゑんむすびいつものすぎ) 活版

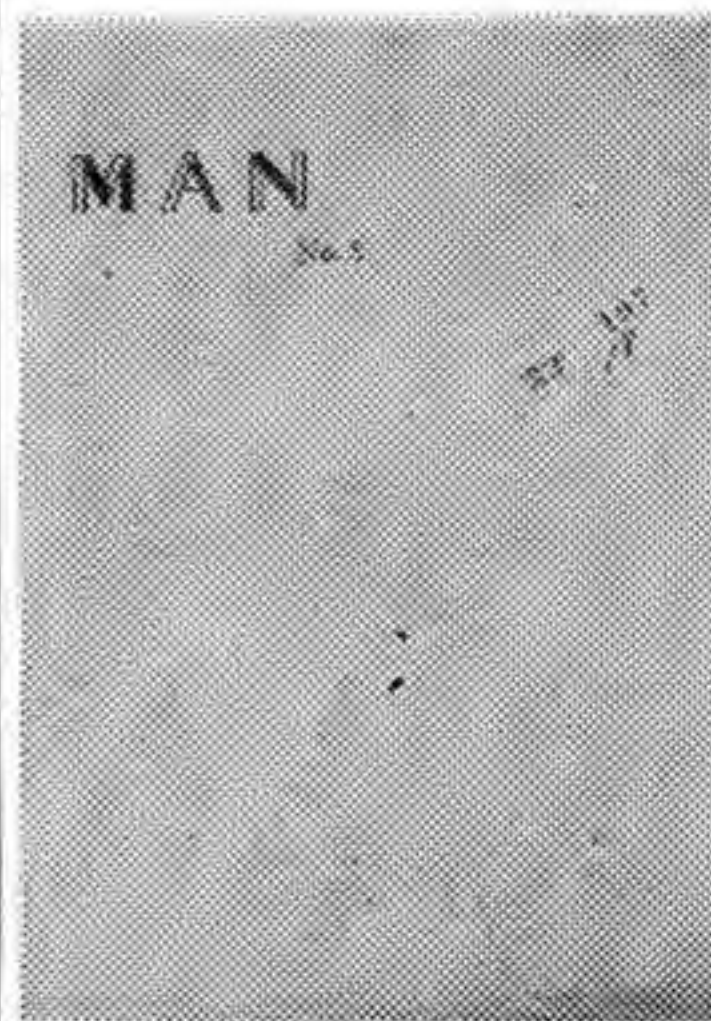
新童児万遍拔差往来 活版

姫小松恋の若草 活版

画集 細田栄昌 ふみのきよがき 十五枚

コロタイプ

風俗語集成の(二)は出さなかった。その他は江戸艶本の活字化で、昭和二十七年と昭和二十八年頃までに刊行。いずれも二百部足



男色会員雑誌「マン」この写真の右上にラベルが貼ってあるのに注目してください。軟書全部を押収証紙である。また、その後、どういふ訳かこの雑誌だけ一冊返えしてくれただ、男色はきつとエロではないのだ、男と思ひ苦笑した。そのまゝ記念品として今でも大切にしている。私の蔵書中の珍品である。

らずでした。今手許に一冊もないので、大体です。頒布は高橋・岡田・あまとりあ・奇書などの会の世話人に頼んだもので、じぶんの直接会員は五十人位だった。もう今は昔の話です。その頃のことを反省すれば、当時の高橋鉄の活動にかぶれていたというのが真相でしょうか。事件後の私は、軟派界からすっかり足を洗ってしまったので、鉄氏などは花咲は敵前で百八十度転回

をしたなどと冷やかしたものです。人にはそれぞれの立場と信念があることだけは知って貰いたいと思います。

林美一『艶本研究シリーズ』

林美一は常々その特殊研究のシリーズに就いて問う人に答えている。

「江戸期の艶本というのは、今迄に余り他の研究家が手をつけていなかった、江戸文芸史資料の宝庫なんです。学問としてこれを究めて行けば行くほど、そこには宝石のような資料が沢山かくされている。そういう貴重なものを発掘するということは、何よりものしい仕事だと思いませんか」と。

林美一は現時点では一番おくれて軟派界に入ってきたが、既往の軟派研究法を一掃して独自の立場を樹立したので、好事家や趣味家やセックス専門の文筆業者などの、江戸艶本に関する限りは余技的発言を完全に封じてしまった。一つの峯を形づくったことはいことだと思う。

彼は昭和二十七年頃、大映京都撮影所に勤めていたが、戦後の自由な研究時代になって、商業雑誌としての性科学や性風俗の雑誌が多く出版されていながら、良心的な江戸軟

派専門の研究誌がないので、何とかして自らその刊行を実現したかった。同年七月ついに上期の賞与を全部投入して『未刊江戸文学』刊行会を組織し、以後昭和三十四年八月までに十七冊を刊行した。刊行書のうちには当局の忌諱にふれるものもあった。――現在では『江戸文学新誌』と改めて再出発している。

『艶本研究シリーズ』は有光書房(註。この出版社は坂本篤経営するところで、雑誌『寶石』(43・10)に「発禁に屈せず艶本に賭ける男」と題して、詳細にルポ記事が出ているが、文中の三一六頁に「花咲一男とは、坂本氏のペンネーム、云々」以下数行は記者の誤りで、花咲一男と坂本篤はまったくの別人である)この書房より『艶本研究・国貞』(このシリーズには製本に並製と特製と二種あるが、国貞特製本附録の参考資料の頒布が禁じられ、目下なお裁判中)を書下したところ好評であったため、引つづいてシリーズ物として続刊が決定したのであった。

江戸時代にあつては枕絵(春画ともわ印ともいう)は享保七年の好色本禁止令が出るまでは公然と販売されたものだった。絵師も恥じることなくその雅名を入れた画冊もある。したがってその後も断続的に第一線の戯作者

や浮世絵師が多数の作品を発表しており、江戸時代の文芸・演劇・浮世絵・風俗などの裏面史を知るためには、さきに記した言葉にもあるように、秘画冊の研究は不可欠のものであるが、現実にはその真を伝えるためには余りにも困難な事情が多い。この意味でこのシリーズは空前の研究ともいうべく、著者によって発見された伝記・書誌上の新事実は枚挙にいとまがない。現在入手し易い書籍なので、いちいちの解説は省く。国貞事件の裁判は、林美一がその研究発表の自由を守るため、真剣にして真摯な、係争を続けていることを伝え、既刊リストを左に記す。

『国貞』(昭和36・1 二六五頁)。「歌麿」(昭和37・6 三一四頁)。「続・歌麿」(昭和38・2 三〇四頁)。「春章」(昭和38・8 二五二頁)。「国芳」(昭和39・6 三一頁)。「春信」(昭和39・10 二九四頁)。「豊国」(昭和39・12 三〇二頁)。「広重と歌麿」(昭和40・7 三一〇頁)。「英泉」(昭和41・1 二七〇頁)。「重政」(昭和41・5 二九三頁)。「お栄と英泉」(昭和42・4 二八四頁)。「北斎」(昭和43・2 三〇一頁)。

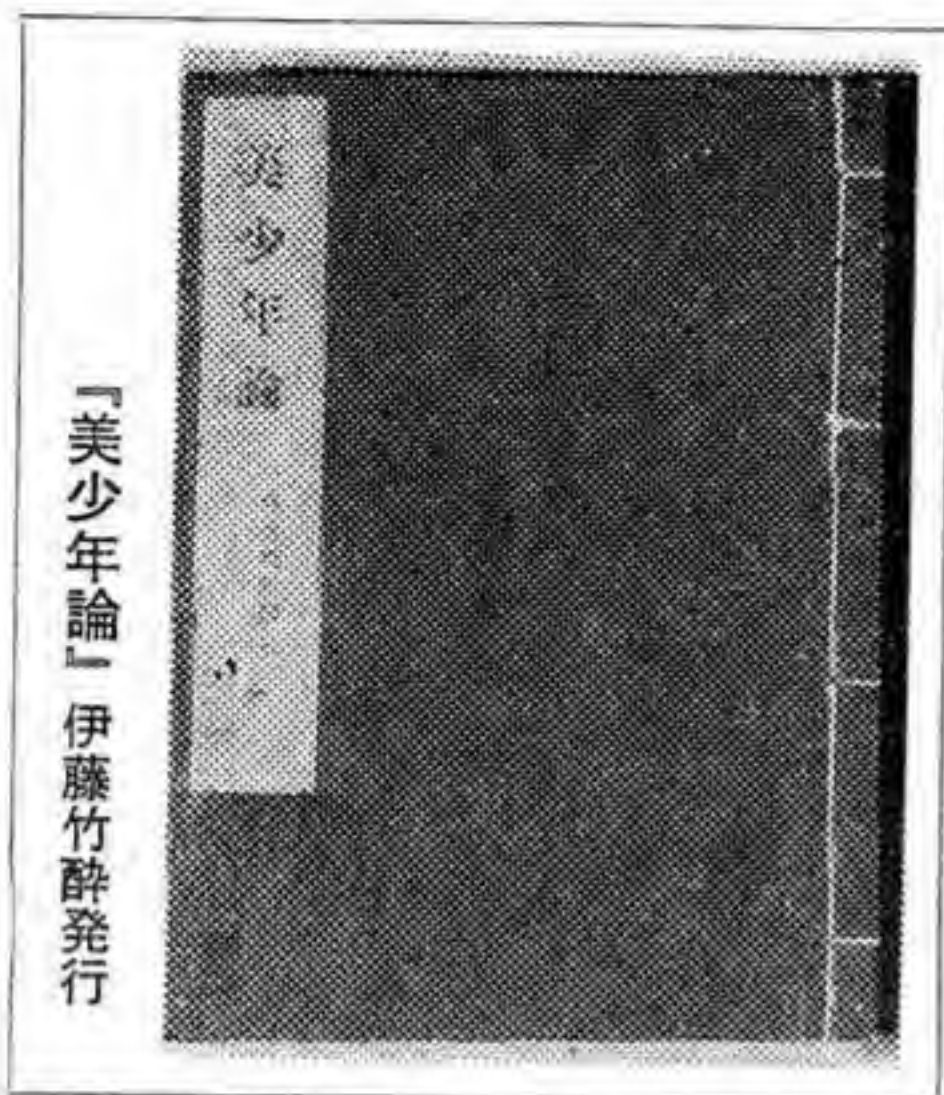
「アドニス会」その他男色関係

アドニス会の会則によれば――「本会は男性間の愛と友情に就いて精神的、肉体的並に社会的研究を進め、兼ねて会員相互の親睦をはかるを目的とする(第三条)」。「本会は右の目的を達成するために、機関誌 ADONIS を発行し、その他、図書の刊行、研究会、講演会等の諸種の事業を行う(第四条)」および「本会の会員は男子に限るものとする(第五条)」とあるから、純粹なる男色親睦機関であった。「アドニス」創刊号は昭和二十七年九月に発行されているから、この時期に会が結成せられたと見てよい。

第一号 アドニス頌岩倉具栄。青春のあこがれ(漱石と豊隆)原比露志。中国男寵文献礼記 伏見冲敬。同性愛は治るか 比企雄三。男色十寸鏡(江戸時代衆道文献)。フォーラム(広場の意、会員通信)。老男根への憧憬 高橋鉄。同性愛者人名辞典。口絵 大内青波。

創刊号の内容はこの目次でも分るように、この頃よく性的読物雑誌などに執筆しておられる斯道大家ばかりで、特に男道に就いての権威者という程の筆陣ではなかった。元来、

この種の特権誌会員は一部に文献派もいたがそのほとんどが熱烈なる愛好音ばかりであるから、私は全誌に眼を通していいのでよく分らないが、恐らくは完全なるソドミアンクラブのための会員誌となり、男色研究誌としては発展しなかったと推察している。六十号以上刊行されたとも云い、消息通の談話によれば、誌としては、以前の面影もないパンフレット程度だが、今でも出しているよ（昭和43）、とも云っているから、男色嗜味者たちの活動力というのは意外に根強いようだ。私見の雑誌は、『アドニス』のほかに『羅信』『マン』などという会員雑誌（孔版）きり見



『美少年論』伊藤竹醉発行

ていないので、詳しい実状を知らない。会員通信欄など読んで感じたことは、男色愛好者たちは、自分がその種の傾向を持つことを、他人に知られることを極度におそれ、非常に排他的な性格を有しながら、無自覚に一方的な自己の好みにのみ片寄り、好き嫌いがはげしいこと、又妻子にも秘める底の男性愛慕の恋情を有している者も多く、何かこの種の性癖の性格者に対しては、並々ならぬ恐ろしさ、哀れを覚えた。

艶笑文献蒐集家には、附随的収集として男色物をも大分持っている方々が多かったが、扱てどの程度まで読んでいたか疑問だ。「とても読めるものではないよ」とか「気味が悪いねえ」。「とにかく、ペニスペニスとそれっきり書いてないような告白読物があつて、おどろいた」等々。どうしても女色より関心が薄いのは事実。それだけ健全？ なのであろう。アドニスその他男色会員雑誌の読者通信欄を読むと、一般市販雑誌などの読者欄とくらべて、達意の文章が多いことは認めざるを得なかった。それだけ智性においてすぐれた人間が多いことを立証している。

他に、気付いた点と書誌的な事柄を左に記す。

「議論する前には、常に言葉の定義をなすべきであろう。言葉が示す様に、私は若い少年に熱中する人をペデラスト（ギリシャ語で少年を熱愛する者という意）と言う。成人に慾望を感じる人のことはソドミットと呼んでいる。（ヴェルレーヌは判事に、『貴方がソドミストだというのは本当か』と聞かれて『判事殿、それはソドミットと申します』と答えている）愛の喜劇で女の役割を引き受け、相手に所有される事を欲する男の事は、私はこれをアンヴェルティ（性欲倒錯者）と呼んでいる」アンドレ・ジイド『日記』。新庄嘉章訳。男色を理解するためには、基本的なこの三つの用語と、その意味を知らなくてはならぬ。国語では、男道、衆道、若衆、蔭間、野郎（歌舞伎）、色子、稚児、男娼、オカマ等々がある。通俗的な説明としては、かびやかずひこ「男娼秘技」に拠ると――「男娼とひとくちにいつても、それは彼らの間の隠語で云って『オタチ』『オネエ』『ドンテン』の三種に別れる。『オタチ』とは女性的位置を好む客に対して、男性的立場をとること、『オネエ』とはその逆で、すなはち男娼が女性になりきる場合、また『ドンテン』とは、男客のみでなく女客も相手にする男娼の謂で

ある。この三つの場合によって、それぞれテクニクが異なるというまでもない。だが、男娼にはウールニング (Uring-liebe) 傾向のものが多く、『オタチ』となることを嫌う。従って、余程の場合でないかぎり、オタチにならない、云々」というのがある。男性が男性に対して抱く精神愛や性的行為については、その実際の研究書のこと、私は余り分らないが、本章の性質上この項目を省くわけには行かなかった。以下は手許にある二、三の書をお知らせする。―順序不同―。

○『男色文献書志』岩田準一編著 (昭和31・

10 非売品限定三五〇部 古典文庫刊)。

これの刊行に当っては江戸川乱歩が多大の助力を惜しまなかったと伝えられる。本朝男色文献に関する一大集成で、伊勢物語より始って、明治・大正・昭和にと及んでいく。男色書誌探究のためには、これ以上の参考書はない。

○『南方熊楠全集』第九卷 (昭和26・12 乾元社)。

書簡集(二)で、岩田準一宛五八通が載録されている。いずれも衆道問答で、この巻と前記書志が、衆道研究の基本図書であろう。

○『好色物語』小池藤五郎 (昭和38・10 桃

源社)。

○『衆道文献集』 (昭和38・9 限定三〇〇部近世風俗研究会)。

衆道貴重文献の複製と活字翻刻。『男色実語教』(元禄十三年)と『風流笑今川』(刊年不詳、珍本)の二書。校訂花咲一男。

○『美少年論―一名同性色情史―』紅夢樓主人和装小型本四十六頁昭和二十七年三月伊藤竹醉刊。本書の原書は『此花』(明治44・9)に予告されたが、著者紅夢樓主人と刊行者宮武外骨との間に行き違いが生じて三部のみ残し他は廃棄した。戦後になって竹酔はそのうちの一部を入手し、複製(本文凸版で縮小)したものである。内容は左の如くである。罪惡としての男色。男色発生の動機。男色の特徵。男色関係の双方。女性的傾向。世界的男色(上、中、下)。とにかく、△男色本△というのは数において少いばかりか、書物として成立する迄にも数奇な運命を辿ってきたものが多い。非公刊書や発禁本、そして限定数の出版などとなっている。本書は昭和二十八年度の雑誌『風俗草紙』(日本特集出版社)の代理部で販売を取扱っていたことが同誌中の広告によって知られる。頒価は百円であった。

○『ホモセクシュアリテ・テクニク』―同性愛技法に就いての一考察― 鹿火屋一彦著。昭和二十八年に日本特集出版社 雑誌『風俗草紙』発行所(非売品)として発行された。小型本五十二頁本文袋綴。用語彙集四頁47語付。口絵写真版一枚。定価二百円。

内容。はしがき。AFTERにおけるテクニク。自慰についてのテクニク。大腿部におけるテクニク。フェラチオのテクニク。交擦についてのテクニク。HOD-ENSACKにおけるテクニク。腹上における摩擦法。ROUTEの全身擦法。乳嘴におけるテクニク。鶏姦における体位について。対き合いによる体位。其の他の愛技。本書は男子同性愛の技法の実際について述べたもの―同性愛においては必ずしも一方が男性的、他の一方が女性的役割をなすとはかぎらぬ場合もあるが、此处では一方を能動一方を受動、として説述した。と緒言に述べられている。

○『日本男色考』田原香風 茜書房 昭和22

・1 A5判 七十四頁。内容は、

男色の起源。外国に於ける男色の起源。男色発生の原因。奈良朝/平安朝/鎌倉/足

利／徳川／明治／各時代の男色。

となっている。古代より各時代における男子同性愛史を概観したもので、発行所の茜書房は敗戦直後のカストリ雑誌の隆盛期に多種多様の仙花紙雑誌の専門メーカーだった。著者に就いては知る所がない。



里子の物語・・・(二部)

次に、創作であるが、『稚児』今東光（昭和22・2鳳書房一五二頁）が、同年に発行された。これも時代の気運ともいうべきであろう。戦前に未定稿として発表されたもので、夥しく削除された作品だったが、敗戦を契機

として完全な姿で世の中に出すことが出来た労作である。谷崎潤一郎の筆蹟をそのまま凸版にうつした華麗な序文付。鳥海青児装幀。当時のことであるから、用紙が余りに粗末なのが惜しい。

（この項おわり）

養

（ようふ）

父

芳野眉美

都会の中心地に近いのに、戦災をまぬがれて焼け残ったのが不思議であった。風向きにも左右されるだろうが、細い道一本でも類焼を食い止めることが出来るものである。掘立小屋が乱立するなかで、その一角だけが戦前から古い家並みを連らねていた。

二年前の終戦の年の一夜、空襲で主人夫婦

と夫と長男を一挙に失なった伸子は、屋敷の焼け跡を当主の弟が管理することになった機会に、里子を連れて焼け残った旅館の女中に住み込んでいた。

戦後しばらくは、伸子が田舎からわずかな食糧を求め、ぞうすいにして里子が駅前（マ）のマーケットで売り、二人がかりでその日の糧を

得ていたが、復員軍人のあらくれ男に交ってすし詰めの買い出し列車にもまれる苦労と疲労から、早く解放されたいと願っていたのも無理はなかった。

窓という窓から乗り降りし、便所の中まで乗客はぎっしりとつまり、網棚の荷物の上にまた人が這いつくばるといったふうで、列車

の中の空間という空間は、持ち込まれた荷物と人間で埋まってしまうのである。一度、列車から降りたら、再び同じ列車に乗ることはとても出来なかった。

停車した折をねらって、伸子は窓に足をかけ、両手で網棚をつかんで上体を支え、器用に、かつ勇敢に、群衆の面前であろうとかまわず用を足したとさえあった。男たちは空瓶で始末出来るが、女はそうはいかないのである。伸子は水分をつつしみ、おしめさえしたことがあったが、蓄積された多量のものを受け止めるのは不可能であった。尿意をがまんして体の調子がおかしくなるようなことにもなれば、と考えたら、列車の窓からでも処理するほうを選んだとしても当然のことである。羞恥に満ちた肢体を白日にさらすわけだが、当時の切羽詰まった状況では、からかう者もなく、かえって窓を開けたり場所をゆすったりして協力的だったのは、ただ生きるために必死であり、そのための買い出しという共通の目的からくる親近感のあらわれかもしれなかった。

伸子を旅館の女中に誘ったのは、買い出しの途中で知り合った田川という男であった。徴用はされたものの、徴兵をのがれたほどの

貧相な男であった。若禿のせいでふけてみえたが、伸子より三つ年下であった。

伸子と田川の初対面の光景は、人に話せたものではない。

その日も、たんぼの一本道を荷物を背負った列が点々と続いていった。伸子は、ひっそりと微笑を浮かべて立っている古びた道祖神に一礼し、うしろの藪で荷物をおろし、繁みを選んでモンペの紐を解いた。汁の多いぞうすいとか、ごった煮に近いすいとんとか、ろくなものはたべていなかったが、伸子の尻は、白く艶やかであった。重い荷物を背負う生活が、かえって腰の筋肉をひきしめ、どっしりと重く大きくするようだった。

空は、ぬけるほど美しく、そよ風が頬を撫でて、すがすがしい。伸子としても白昼の野天での、それを好んだわけではない。だが、勝手もわからぬ薄暗い肥溜式の田舎の便所や汚れほうだいの駅の便所をかりるより、青天井のほうがかほど気持が良かったのである。

ろくなものを、食べていないにもかかわらず、存分に消化されつくした残滓は、ゆっくりと青草の中にうずを巻いた。予定の買い出しが終ったという安心感が、伸子を落ち着かせ、ゆったりした気分させていた。と、思

いもかけぬ忍び笑いが聞こえ、伸子は背後に人の気配を感じて、はっとした。

先客がいたのである。男であった。二人が立ち上ったのは同時である。

「驚きましたわ」

畦道を歩く田川の背中に伸子は言った。田川の顔が見えないのが、かえって幸いであった。こんな静かな雰囲気の中では伸子もやはり女に戻っていた。顔から火がでるよううで、田川の顔をまともに見られない。列車の中の切羽詰まった行為とは、気持のもちかたも違うのである。

「驚いたのは私のほうですよ」

背中の荷物が重いのか、田川は息を切らしていた。お互いに両手にも食糧を下げているは、手助けする方法もない。

「気がついて下さるかと思ったのですが、いきなり前に陣取られたので、どうも」

「すみません」

伸子は蚊が鳴くような声でいった。先客がいるのに気付かず、四囲に気を配ることを怠った伸子のほうが悪いので、恥ずかしい姿を見られてしまっても、あべこべに詫びるより仕方がない。

「私からさきに声をかけるべきだったのですし

ようが、私だってその時は……」

田川の笑い声に伸子は救われた。

駅前のしなびた旅館に田川を誘ったのは伸子のほうであった。田川があまりにも疲れているようなので、終列車までかなりの時間があり、少し休んでから帰るつもりだったのであるが、一風呂浴びたことが、二人を結びつける結果になった。

浴衣の下から、あばら骨が見えるほど田川は痩せていたが、やはり男にはちがいない。

風呂上りの女は妙になまめかしいものである。伸子の発散する女の匂いに、田川の目の色が変わった。田川もまた、生きるだけが精一杯で、女から遠ざかっていたらしかった。

畳の上に伸子は押し倒された。丹前と浴衣だけの伸子は、まったくの無防備であった。

下穿きなどは、はじめから穿いていなかったし、肌着は汗を乾かすために、着ていなかった。もっとも、田川を旅館に誘ったとき、伸子の気持にそうなるのではないかという予測と期待があったことは否定できない。

伸子は自分から働きかけた。田川には、すべてを知りつくされているような気がして、他人とは思えなかった。

田川の手が浴衣の合わせ目にかかる、伸

子は田川の首を抱いて唇を求めた。押し倒されただけで、伸子はすでに田川の女になったつもりであった。それは生きるものの激情というものか、伸子の内心の男にすがってこのきびしい世の中を切り抜けようとする打算であったかは、伸子自身にもわからない。二人は何の抵抗もなく、燃えさかるルツボへ突入して行った。

旅館の女中に見られたらしく、部屋の前に食事の仕度をした盆が置いてあり、伸子は顔を赤らめた。米をわたして夕食の支度を頼んだのを忘れていた。女中が部屋の戸を開けたのも気がつかなかったことになる。

女中が、あとかたづけにきたとき、田川は心付けを渡して頭をかいた。女中は「用事があつたら呼んで下さい」といっただけであった。まだ布団を敷く用事が残っている。

卓袱台におかれた茶飲み茶碗を部屋の隅にかたづけると、田川は卓袱台に腰掛けるように伸子にいった。

「まだ時間は、はいいよ」

腰紐を解き、浴衣の前をすっかりはだけた伸子は、戦後の食糧事情の悪化にも負けず、中年になってふっくらと肉付きが増した胴や腹をおしげなく見せて、前に坐った田川をい

とおしそうに見上げて、まばたいた。

なめくじが這うような、くすぐったさと同時に伸子は身体中の知覚が一度になくなり、脳に霧がかかったような虚脱感に襲われた。現在の状態も場所も念頭にはなかった。

田川は伸子の尿を顔一面に浴びても、たじろぐことはなかった。伸子の思いがけない失禁に田川は驚いたのだが、同時にむやみに感激してしまい、我を忘れてその尿を受けとめた。田川は伸子のすべてを呑み込んでしまいたいと思えた。

最初の予定は無言のうちに変更され、終列車で帰るのを止めて、二人は一泊した。

田川に誘われ、伸子は里子と一緒に、田川が番頭をしている旅館の女中になった。旅館の経営者は田川の遠縁にあたる老夫妻で、郊外の本宅に引きこもったまま、経営の一切を田川にまかせていた。

里子は田川をお父さんと呼ぶようにといわれたが、二人が正式に結婚したのかどうかは知らない。同棲だったのだろうが、里子にとっては、その日から田川は養父になった。

戦災をまぬがれた戦前の建物である旅館は、かなり古びていたが、煩雑なマーケットで

ぎわう駅に近く、旅館は売春婦の連れ込み宿として、かなり繁盛していた。

若い女中は、売春婦たちの派手な生活に接して、自分達の地味な生活に嫌気がさして転業する者もかなりあり、田川は伸子を妻兼用の女中に拾うとともに、連れ子の里子も女中に雇ったようなものであった。

はじめは不規則な生活に振り回されていた伸子母娘も、慣れてくると本建築の畳の生活を楽しむゆとりがでてきた。屋敷の瓦礫の中にささやかな堀立小屋をつくり、マーケットで水分の多いぞうすいを売るといふ、櫛風沐雨の生活よりは、はるかに幸福であった。

はじめは、客が帰ったあとのシーツの乱れなどすら気になったが、それが日常茶飯のことであれば、いつのまにか少しも気にならなくなつた。しかし、無遠慮極まる汚し方をする無神経な客も多く、洗濯する身にもなつてくれと、伸子と里子をうんざりさせるのである。

街娼に呼ばれたものの、女のサービスが悪いのか、客が約束の金を支払わなかったのか世の中が殺伐なのも手伝ってか、くだらない喧嘩も絶えず、田川が中に立って納めるのはまだいいほうで、女が先に帰り、客があとか

ら逃げだすように帰ったときなど敷布団一面に糞尿がぶちまけられ、泣くに泣けないことも、あるのである。この臭気は、そう簡単に脱けるものではなく、数日、部屋を使えないこともあり、悪質な客を注意するのは骨の折れることであつた。女に腹を立てるのはいいが、旅館に八つ当たりされてはかなわない。

部屋の掃除に洗濯、客の送迎と、伸子と里子の役目も決まり、田川は食糧の買い出しと風呂たきに専念するようになった。

すっかり落ち着いた里子が、三年振りに母親の情事を見てしまったのは、最後の泊り客を送り出したあとの昼下りであつた。一つだけ残っていた部屋の掃除をするために、里子が二階にあがったところ、廊下のつきあたりの部屋から、異様なもの音が洩れているのである。

旅館に来てから里子は、自分の部屋として三畳の女中部屋をあてがわれた。母親からはなれて一人で寝るさびしさはあつても、生まれてはじめて、自分だけの一面を持った喜びも、十五才になった里子にはあつた。戦災のどさくさで、女学校には行けなかったが、学校では教えてくれない生活の知恵を里子なりに体験し、年のわりにはませているほうであ

つた。

街娼の中には、布団に入ってから里子を呼び、いろいろのものを注文するののもいて、里子は実地で性教育をされているようなものであつた。布団をわざとはだけて「教えてあげるから見ておいで」などとからかわれ、顔を赤らめて逃げることもあつた。

里子は足音を忍ばせて隣りの部屋に入り、帯をおいて押入れの戸を静かに開けた。押入れの下段に節穴があるのを、布団を出し入れしている里子は知っていた。布団を一組だし里子は節穴に目をつけて、息を止めた。

全裸の母親が、テーブルを抱くようにして荒縄で縛られていたのである。伸子は手足を左右に大きく開かれて、テーブルに這いつくばっていたが、腹部あたりに枕が差し込まれて、分厚い尻がやけに盛り上がった。手拭の猿轡が顔半分をかくしていたが、伸子の苦しそうな呻き声は壁を通して、里子の耳にも伝わってきた。

里子は母親が養父に折檻されているのかと思つたが、夫婦喧嘩にしては少し妙である。「痛くないかい。苦しかったら縄をゆるめてあげるからね」

という田川の優しい声が聞こえたからであ

った。それにしてもあまりにも変っている。里子は目を瞬いた。

買い出しで遅く帰り、田川はまだ寝巻のままであったが、養父の目がかなり血走っているのに里子は驚いた。寝不足のせいばかりでもないらしい。

生活が安定し、またひとまわり肥った伸子の艶のいい尻を、まるで家宝でも愛でるような扱い方をするのを見て、里子は、そんなに大切なら縛ったりしなければいいのに、と思った。だが次の瞬間、齒型がつけられ赤く血がにじみ出した。伸子の悲鳴は、猿轡に消えた。手拭ばかりでなく、口の中にも布が詰め込まれている様子であった。

田川の稚気めいた仕草は、おませの里子も知らない夫婦の遊びかも知れないと気付くと里子には、何か滑稽な見せ物でも見ているように思われた。貧相で見映えのしない田川だが、無邪気なところがあるので、そんな大変な構図も陰気な感じは受けなかったが、伸子は緊縛をまぬがれた首や、肩をくねらせて悶え、ただ、

「うっ、うっ、うっ」

という、力のない呻き声を立て続けた。その辺りまでは里子も好奇心で見ておれたが、

田川の顔に会心の微笑が浮かび、寝巻を脱ぎ捨てて次の責めに移ってから伸子の呻きが悲痛になり、里子は不意に頭から血が消え失せて、からになったような、かつて経験したことのない不均衡な状態に追い込まれ、頭をかかえてうずくまった。

しばらくして、氣をとり直した里子が再び節穴から覗いたとき、伸子の白い肌は赤く染って汗をしっかりとにじませていた。猿轡がなければ、きっと唾液を垂らして半狂乱になっていたと思われる。

田川の手注射用のアンプルのような品物が握られ、それがアメリカの軽便浣腸器だと里子が気がついた。いつかGIの好きな街娼がアメリカ兵からもらったものらしく「いらないからあげる」と里子においていたもので、母親にわたして忘れていた品であった。

田川の手首ほどの長さの浣腸器は、大人用ではなく、小児用のものだった。形態も液量とも日本のより物凄く、伸子から受け取った田川が珍しそうにいじくっていたのを思い出した。

四角いテーブルに伸子をうつ伏せに縛ったのも浣腸遊びを円滑にするための準備であつたらしいと里子は気付いた。

里子は押入れから這い出し、もどろりに布団をしまうと、忍び足で部屋を離れ、階下の便所に入った。あまりにも異常な光景に、小水を漏らしたような気色悪さを感じたからであった。

母親が小麦の袋でつくってくれた、ごわごわした下穿きを脱ぎ、丸めて古新聞で包むと塵箱に捨てた。里子の手製の下穿きは、立派に女になったことを証明していたのである。遅かったが、里子の初潮であった。

里子が驚かなかったのは、期間中でも客をとる売春婦がいて、汚されたシーツを前に母親からきいて知っていたからである。

三畳の部屋にもどった里子は、しばらくの間、鏡の中の自分の顔を見つめていた。

(註、栗瀬長氏「フリートエネマ使用の記」を参考にしました)

客を送り出したあとの不快感は慣れるに従って感じなくなったが、やはり伸子や里子の眉をひそめさせる不始末は跡をたたない。

ブツブツいいながら掃いているのを見ながら、それは捨てないで、新聞紙の上に集めておいてくれといわれたとき、伸子は怪訝な顔で田川を見た。

「好事家からたのまれてるんでね」

顔をくしゃくしゃにさせて田川は答えた。

「こんなものを集めてどうするのしょう」

「さあ。枕でも作るつもりじゃないかな」

「枕、ですか」

「そんなことをいつていたよ」

顕微鏡で調べて、よりわかるのだろうか。

男と女では違うそうだが、田川も伸子もくわしいことは知らなかった。

蒐集家は意外に多いそうで、かなり高価に売れるらしい。

「売れるものならなんでも売るさ」

と田川は新聞紙を引寄せた。塵も積れば山となるのである。

便所に流すべきはずの紙が、臆面もなく紙屑籠に捨てられてあり、風呂の焚付けにされているのだが、その紙からも一本、二本と田川は採集しているらしかった。そこまですななくても伸子は思うのだが、田川にしてみれば結構、楽しいらしいのである。常連の街娼のには、あまり興味がなく、フリーの女客があると田川は落ち着きがなかった。

伸子が駅前のマーケットを田川と二人で歩いていたとき、人品の卑しくない初老の男に

田川は声をかけられた。用人棒らしい屈強な

男が三、四人従っており、何者かと伸子は疑

ったが田川は別に紹介するわけでもなく、白

髪のまじった男は田川と二人で、従者や伸子

から離れなにやら小声で立ち話をしていた。

初老の男は、たまに伸子のほうを振り返り、

低姿勢の田川は、しきりに頭をかいていた。

用談が終ったのか、ボディガードが老人の側に寄り、田川は上体を深く折って幾度もう

なずいていた。老人が去ってしまうと、田川は伸子を追いかけて、

「困ったよ」

と笑いかけ、あまり困っているようにも見受けられなかった。

「このあたりの組長さんでしょうか」

駅前のマーケットを縄張りに持つ博徒の親

分だと伸子は思ったのである。

「そんなに小さくないよ」

くすくす笑いながら田川はいった。

「この親分の上の、またその上の親分というところかな」

そういえば、マーケットを歩いていても、

田川は組の大幹部と思われる金バッチのいさんたちから挨拶され、伸子はどぎまぎすることがあった。虎の威を借りる狐ということ

ろだが、田川は腰が低いから摩擦はない。

初老の男は政治家で、黒幕の一人らしかった。田川は学生の頃、わずかな期間だったが

その男の書生を、していたことがあるのである。書生といっても立関番で、最下級の使用

人であった。

「伸子に頼みたいことがあるのだが……」

いいにくそうに田川は伸子を見た。

「これはきいてもらわないと困るのだ」

「できることならかまいませんわ」

「そういわれるとよけいに頼みづらいな」

奥歯にものが挟まったようないい方であった。初老の男に、田川は何か無理な注文をされたらしかった。

「伸子のをもらいたい」

「えっ」

「人に洩らしては困るが、たのまれた人というのは、あの先生のことだ」

伸子は「あっ」と思った。好事家が姿を見せないはずであった。注文の品は、田川がしかるべきところにとどけているのだろう。

「あのう……」

「そうだ。少し剃らせてほしい」

「——」

「いいだろう」

「ことわることはできないのでしよう」

「できない」

「それなら仕方ありませんわ」

「すまない」

おかしな会話だと伸子は思った。笑顔は見せていたが、伸子を前にして弱り切っている田川を見ると、不思議に腹も立たなかった。死んだ夫には悪いが、田川のほうが好きであった。相性なのだろう。

「採集家にも種々ありますのね」

「なにぶんにも趣味が趣味だから、先生は私に頼むのだよ」

「いいわ。わたしがあなたのお役に立てば、うれしいわ」

「有難う」

これが夫婦というもののなのだろう。夫唱婦随という言葉がある。

家に帰ってすぐかと伸子は思ったが、田川は好事家の先生からの連絡を待っている様子であった。

伸子が、まだかなと思っっているうちに、好事家からは早々とダイヤの指輪が伸子にとどけられ、留袖模様の盛装をさせられた伸子は迎いの車で料亭に案内された。

二十畳ばかりの広い座敷に伸子は通された

が、酒席の用意はされておらず、茶菓子をだされただけで伸子は待たされた。他の座敷から三味線が聞こえ、芸者衆がはいっているようであった。

お茶がすっかりさめて冷たくなった頃、唐紙が静かに開いて、羽織袴の老人が微笑を浮かべて姿を現した。

「野暮用があつて遅くなった」

伸子は座布団をはずし、座敷の隅にかしこまった。

「高価な品を恐縮に存じます。そんなつもりではございませんので、いただくわけには参りません」

伸子はダイヤの指輪を老人の前に置いた。

「いや、奥さんに無理なことをお願いしたお詫びのしるしだ。えんりよせずにとつておいて下さい」

老人は一服すると、

「着物を脱いでもらおうか」

人ごとのように伸子にいった。伸子は老人に背を向けて帯をとき始めた。床の間の前に坐る老人に射竦められ、伸子はまるで夢遊病者のようであった。

一度は承諾したものの、手を下すのが田川でなく、老人であると知って、伸子はかなり

の抵抗を感じ、前言を翻したのだが、田川が平身低頭して頼むので、なかば自棄になって迎いの車に乗ってしまったのである。

政界の黒幕と知って身体が委縮してしまつたのか、老人からあらためて指にはめられたダイヤの指輪に、それまで張っていた気が、もろくもくずれてしまったのか、田川のためなのか、伸子はよくわからない。

「長襦袢一枚でいい」

肌襦袢も裾よけもと、緋の長襦袢を素肌にとつて、伸子は老人を振り返った。留袖模様の着物に西陣の袋帯が山をつくり、帯締め帯揚げ帯まぐらの小物が目にしみた。

「こっちへおいで」

老人は伸子を膝へ抱き寄せ、満足そうにならずいた。

脱け落ちたのを手に取り、目を細めて見つめ、

「こういう種類のは、愛情過多の傾向があるそうだよ、奥さん」

と老人はいつて、鼻をヒクつかせる。

「この年になつてもこの匂いが好きで困る」
床柱を背にして一段と高い床間に伸子は腰掛けさせられ、両手を揃えて引き上げられ、両手首をまとめて腰ひもで柱に縛られた。

両手を柱に括っしておいて、老人は伸子の足を引っ張り、伸子の尻は畳に落とされ、脇腹の筋肉がすじ張って伸子は呻いた。後頭部だけが柱を支え、背中が床の間に滑り落ち、首と胴体は直角に屈折した。

老人は伸子の足の裏を合わせて帯締めで縛り、両手首を固定した柱の上に両足を持ち上げ、帯揚げで引っ張って括った。両膝が折れて菱型をつくり上げた。

鈍痛がじわじわと折れた首を襲い、胸は圧迫されて苦しく、膝頭に激痛が集中して、伸子は唾液を流した。あられもない恰好を見せたまま、伸子は顔を紅潮させて老人の責めにしたえた。思わぬ緊縛に伸子の心は沸騰する湯のように、ふっふっと燃え上った。

見得も外間もない、浅間しい恰好を悶えさせ、伸子は息もたえだえに呻き続けた。

老人の手に鋭利な剃刀が握られている。

「それでは、奥さん、いいね」

観念して目を閉じていた伸子は、かすかにうなずいた。

伸子を老人のもとに送り出してから、田川はなんともいえない忿懣と嫉妬に不気嫌になり、里子が帳場に金を持ってきても、むっと

した顔で顔をそむけ「そこにおいておけ」とぶっきらぼうにいい、里子を驚ろかせた。

里子に八つ当たりなどはしたくなかったが、胸の中に燃っている歪んだ感情が発散しないままに、露骨に顔に現れてしまうのである。

老人が人妻を相手に耽ける不倫な行動を思うと、腹わたが煮えたぎるようで、妻を老人の生贄にした自己嫌悪と重複して、田川の感情はますます不得要領になり、頭を下げて頼んだ癖に、妻の承知したことさえ許すことができず、何もかも承認できない憤怒で田川はますます硬化するのである。

伸子の承知したことだけでなく、きっと老人は、伸子の身体を勝手気儘に蹂躪するだろう。老人の申し出を受けたときは笑ってすましていたが、いざ当日となると田川は複雑な気持ちをおさえることができず、仕事も手につかなかった。拒絶すればと思うものの、老人の無言の圧力に田川はただ屈服するだけなのである。

廊下に立っただけでも聞こえてくる、芝居気たっぷりの街娼の嬌声も白々しく、布団の中から呼ぶ破廉恥な客の部屋にも、しるる里子処理にいかせて、田川は無然として腕を組んでいた。

時間の客も絶え、一応泊り客が寝静まっても、伸子はとうとう戻らなかった。予測はしていたが、当面するといいい気持はしない。里子が戸締りしてからおそろのおそろ風呂に入るかどうかをききに来た。

「先にお入り」

田川の声は意外に優しく、田川の目がねちっこく光って、里子を舐めまわした。このまま寝られそうになかった。伸子が里子連れで旅館に来たときは、浅黒い顔立ちの子だという印象だけであったが、今は精神状態が不安定なせいか、里子の腰のふくらみが目立って田川を狼狽させた。一年もたてば女としての肉体の変化があるのも当然であった。

浴室から湯の流れる音がし、里子は仕舞湯に入っているらしかった。浴室の前で田川は立ち止まり、耳をすませた。

浴室にある等身大の鏡の前に立って、里子は自分の体を見ていた。どことなく変って来たようだ。身体全体がなんとなく丸味を帯びてきたように思え、浅黒いだけだった肌も、少しずつ白くなってきたような気もする。腕や脚などに目立っていた産毛もあまり見られず、肩までたれた髪の毛も煙のように柔らかかった。

母親に似ていつかはふっくらと肥ってくるのだろうが、見かけはほっそりと華奢な里子の肢体は、きゅっと緊まって魚のようにしなやかな線を描いていた。

里子は近づいて体の側面を鏡につけた。鏡の冷たさがはてった身体に染み透って心地良い。お腕を伏せたような綺麗な乳房を両手で抱きしめ、里子はしばらく動かなかった。

母親が盛装してどこに出掛けたのか里子は知らない。ただ、養父の田川が不気嫌なのは母親に原因があるのだろうと察したが、はかりしれない歪んだ情事のあることを里子が知るわけがない。

鏡からはなれて掛かり湯をとろうとしたとき、今日一日の労働が終ってほっとしたためか、鏡面の冷たさのためか、里子は尿意を覚えた。仕舞湯とはいえ浴室のタイルに流してやりたく思ったのは、子供っぽいいたずら心か。里子はペロッと舌を出して独り笑った。

ちよろちよろしたせせらぎが、やがて本流となってタイルに激しくたたきつけられたとき、浴室の戸が静かに開いて田川がのっそりと里子のうしろに立った。

「いや」

驚いて身体をすくめたが、隠れるわけには

いかない。田川は浴室の鍵をかけた。

「好きなんだよ、里子」

浴室の隅に縮込まっている里子の背中を抱き、髪に顔を埋めて田川はつぶやいた。弱々しい声であった。

声も立てず、抵抗らしい抵抗もせず、里子は黙ってじっとしていた。男が女に求めるものは、いつも客達を見ていて知っていた。里子は田川が嫌いではない。旅館にひきとられてから、一度も怒られたことはなかったし、ぶたれたこともなかった。里子には優しすぎるほどの田川だった。

唇が、髪をかきわけてうなじに移ってきたとき、里子は田川が養父であることを忘れていた。里子をはじめて女としての感情を覚えなかった。母親に対する罪悪感是不思議と湧いてこなかった。里子にとって、父親は死んだ実父だけだったのかもしれない。

「くすぐったい」

里子はくすつと笑って立ち上った。田川は里子のすんなりした脚にしがみついた。

「里子」

見上げる田川を眼下にみて、小さく整った里子の唇から、ふっと嘆息が洩れた。

「里子がほしい」

田川は謔言のように繰り返した。

眼下の田川をみつめている里子の頭の中に悲鳴をあげながら跳く白い肌が拡がった。その肌は、まといつくような縄にきびしく噛みこまれていた。縛られてもがいている肌が、押入れからのぞいた時の母のものか、今しがた写していた鏡の中の自分のものはわからない。でも、もし田川が、縄を持ち出してきてもいいと思った。

里子は、ふと、死んだ兄の進一を思い出した。自分はまだ処女なのだろうかと思いついて。進一のあの時の言葉が別の意味で思い出される。

「ここではいや」

静かに田川をはなし、伏目がちに里子はいった。どうせ誰かにあげるものならば、田川にあげてもいいと思った。伸子と里子の二人の恩人なのである。

「里子のお部屋で……」

言葉尻はよく聞きとれなかった。

「里子」

素肌に浴衣をまとっただけで、里子は浴室を飛び出した。

秋に想う

天野利平

秋が来た。だがやっぱり、海と太陽は切っても切れないイメージとなって、僕の頭の中に残っている。太陽が昇りはじめる海の朝、ヒンヤリした風を肌を感じながらメイン・セイルをあげる。セイルは風を一杯に受けてふっくらした曲線を描く。ハタハタとたなびくジブを引くと、ヨットはゆっくりと滑り始める。掌に二重三重に巻きつけたロープが、グーッと風の抵抗を伝えてくる。これが僕になんともいえぬ快よさを与え、連想のいとぐちになるのだ。風をはらんだセイルのふくらみと、ロープの手応え。

柔らかな、そして反撥力の強いこの手応えは、僕にずっと昔のことを思い出させる。そして更に、女体にかけたロープの抵抗も、やっぱりこれに似た手応えなんだろうなあとと思うのだ。

僕は、まだ小学校の頃、ケンカした女の子があまりうるさいもんだから、縄とびのロープで、後手にしてギューギュー縛ってやったことがある。普通だと、ケンカ相手の女の子

はいつも泣き出し、最後に叱られるのは僕だったけれど、その時だけは、その女の子は泣かなかった。取り巻いて見ていた連中も、いつものようには騒がずに静かだったことも、はつきりと憶えている。なぜだろうかと、思い出す度に今だに考えるのだが、その頃から女にはマゾ性があるのだろうか。僕も、縛るとモヤモヤした気持ちになったことは確かだ。そのことがあってからというのではないけれど、仲良く遊んでいるときに、チャンバラゴッコでお姫様役のコを縛ったり、ギューギュー縛っておいて何分で解けるかなんていう遊びもよくやったものだ。だが、その時の手応えまでは憶えていない。

中学生の時、同クラスの女の子に「恋」をした。その頃から「女」を見る目が変わったようだった。つまり気軽にケンカして、ひっぱたいたりけつとばしたり出来なくなった。縛ってやりたい気持はずっと強かったが、とても実行に移せるものではなくなったわけだ。奇巧の世界を知ったのはずっと後のことだ

が、いくじなくなった気持のモヤモヤが、当時のグラビア写真で、ずい分救われた。その後、実際に縛る事など出来なくなった僕の頼りは、誌上の写真のみとなった。しかしその写真も現在は無い。僕は、世の「堅い女族」の被害者になった。縛りたい僕が縛られて、猿ぐつわの代りに目隠しをされてしまった。その内、猿ぐつわも、噛まされるかも知れない。そんな世の中になったら、僕は生きていくのがイヤになりそうだ。

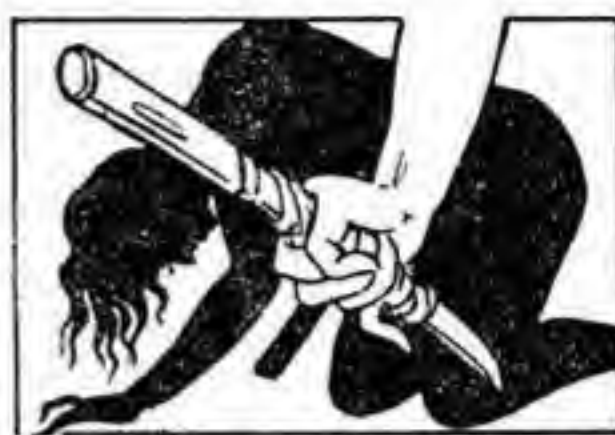
ここに縛ることに非常に興味を持つ男がいる。どこかに縛られることに非常に興味を持つ女がいるかも知れない。男は、愛車トヨタS800で探しに行くに違いない。根気強い情熱で探し当てたら、きっと二人はデートを約束するだろう。興味のある話題は二人を夢中にさせることだろうが、互いに衝動的になることはなく、自分の望むことをじっくりと話し合うことだろう。そして二人が、本当に安心してプレイに没入出来ると思えたとき、趣味の一致した者同志として、押えに押えてきた情熱の発露を約束するだろう。

僕はヨットの上で、ロープの手応えを味いつつそんなことを考え、波に向かって呟いた。

「僕と趣味の合うガールフレンドが欲しい」

切腹研究夜話

愛と死の映像



中 康 弘 通

前稿に引き続きTVドラマにおける悲愴美の表現を記録する。

もっと古く、TVドラマの草創期から記録しておけばよかったのであるが、何分、時間帯を等しくする二つ以上のTVドラマを見ることは不可能であるし、(VTRの廉価普及が可能となればまた話も交って来るが)ストリーが詳しく週刊誌や日刊紙上に紹介されていない場合は、見逃がす可能性も少くないに違いない。

従って筆者の目に触れた範囲というものは全くごく一部分にすぎない。その上に残念ながらTVタレントの方々の配役氏名は最初に流されるが、うっかり見落とすことが多い。だから、あッと思って折角注目しても、その

女優さんのお名前が判らないことも少くないのである。TV局によっては、一々照会に對しお返事下さる場合もあるが、応答に接し得ない事もある。是はやむを得まい。何しろ分秒で動く忙しい職場である。市井一介の無名人が照会状を差上げて、そう一々回答して

いられないのであろう。是は劇場用映画のTV放映においても、たとえば主役クラスではない腰元役の女優さんなどの場合に起り得る現象である。そんなわけでやはり、どこまで行っても残念ながら、ついウツカリの連続になってしまうのは、致し方のないところである。

前おきが長くなりすぎたが、筆者の記憶にあるもの、また青山芳樹、飯森潔、兵頭庫一

森田敬三氏らのご教示による事例を記録しておこう。

少し古いところでは、「徳川家康」(毎日TV)で、武田勝頼夫人を演じた川口敦子さん、この女優さんは古典的な美貌の持主で、戦国武将夫人の小袖姿がよく似合う。

天目山に一族ごとく露と消えるシーンでは、名家の奥方が無残にも野戦であわただしく自刃する傷まじさが十二分に発揮されていた。

部将の裏切りで包囲され武田家もいよいよ終焉と見てとった奥方は、実家北条家へ逃れようとすすめる侍女を静かにたしなめ、実兄への遺書を侍女の一人に托して、今は思い残すことなしと、覚悟の風情を示す。おもむろ

に敷物の上で端座のまま懐剣を胸もとから取り出すのである。

頭を垂れていた侍女の一人が、こらえかねてか「お先に」と、抜く手も見せず己が懐剣でみずから左乳下を突いて俯伏すと、川口さんはさすがに名門の夫人らしい風格で落付いて、両手を伸べて胸の前で捧持した懐剣を引き抜き、左の袖で刀身を巻いて隠すように左手で支え、一呼吸、右手に力を籠めると見る間にグザと胸に突き立て、心もち仰向くと見えたが次の瞬間ガバと前に倒れ伏す、全く天正の春三の花の散りぎわさながらであった。残る侍女たちも、一人は胸を突き、二人は刺し違えて果てるが、服装が華やかな小袖姿なので、一種舞踊劇を見る思いにさせられるのであった。

是が「燃える白虎隊、歎呼の果てに——」(朝日TV)で、白虎隊長、日向外記の妻・志保を演じた加藤治子さんとなると、かなりリアリスチックで、凄烈悲愴の思いを深からしめる。

黒紋服の正装で仏前に端座して自害の刻限を計っていた夫人は、いよいよ自決の刻と思い定めると、おもむろに膝の前の短刀の鞘を払う。右手に柄を握りしめ、決意の瞳を見ひ

らくと、切先を左乳下に押しあて左手を添える。刀身の鈍い光が、リアル感を高めないではない。

唇かんでグツと刃を胸に突き立てる瞬間、苦痛と決断の悲愁を示す表情は、明眸の加藤さんならではの、深く切なるものがある。

しばし心の臓を突き貫ぬくしぐさと共に、グラリと体が揺れ、カットと眼を睜ったまま右横に倒れて絶命の姿となるが、全く百年の昔の会津婦女子悲壮の最期もかくやとばかりの熱演である。

女人の自刃の演技として、筆者が見た範囲ではリアルにして迫力に富み、かつ悲愴哀婉の美を湛えるもの、かくの如きを見ない。カメラもロングとアップで旨く表情姿態を捉えていた。

一体武門の女性が自刃せねばならぬとき、というのはどういうときであろうか。前述の二例はいずれも敗戦という悲痛な事態によりもたらされたものである。

その次に重大な事態としては貞操の危機であろうか。そうした例の一つとして、たとえば「お江戸日本橋」(関西TV)(41・10・22)があった。磯村みどりさん扮する旗本の

娘千鳥が、襲われて一時放心ののち、ひとりの部屋で坐り直して帯に挟んだ懐剣の袋を解き、ゆっくり鞘を払う。袖で巻いて刀身を上に向け、切先を胸へ当てようとしてしばしあり、突然カラリと落として、その場に泣き伏す。つまり未遂ではあるが、磯村さんの甘く優しい声音と、愛くるしい美貌とは「死のうにも決断のつかぬ娘」という設定にふさわしい哀しさを湛えて、好演技であった。

余談ながら、千鳥の兄は勘定奉行宅へ侵入して捉えられ、浪人者に罵られて切腹を強いられる。彼は諦めて、一旦は刀を抜き白布を巻き、腹を寛ろげて突き立てようとするのだが、恐怖から刀を投げ出し、妹を捧げる約束で命を助けて貰うシーンが続くのである。

愛憎の相克が招く、女性の自刃を描くドラマでは、NTV・YTVネット、CAL制作「剣」シリーズに二つのケースが見られる。

まず「残雪」(42年7月3日放映)を週刊TVガイド二五三号に拠りつつ解説しよう。

剣士片桐空鈍(木村功さん)の若き日の悲恋物語である。武州の針ヶ谷夕雲道場師範代だった片桐は、武芸者真壁八郎太の所望で立合い、相打ちに終わった。八郎太は夕刻、牡丹雪の舞う町外れで白刃を揮って片桐に斬りつ

け、真剣勝負を拒む片桐は木刀で受けたが、さ・さ・らになつた木刀は八郎太の喉を突いた。八郎太を殺した未熟を恥じ、彼は師のもとを去って深川の広徳寺に陰棲した。

翌春、遅咲きの桜の美しい寺へ、な・み（園まりさん）という娘が来た。仇討ちのための剣道修業を願つてのことであつた。な・みの熱意に片桐は負けて弟子入りを許したが、な・みには素質がなかった。しかし彼女が悲愁の中で吹いた横笛に聞き入つた片桐は、吹針を彼女に教えた。一年のきびしい稽古の中で、片桐はな・みを愛し、結婚した。

な・みを手助けする武士たちが、また牡丹雪の舞う夜、片桐を襲うことになり、な・みは吹針で片桐の眼を潰しておく手はずになつた。しかし、彼らが襲つたとき、片桐の眼は潰れてはいなかった。「われらは真壁八郎太の同門、な・みは八郎太の妹」と叫んで襲いかかる武士たち。茫然としながら、抜くまいと下げ緒で縛つてある刀で防ぐ片桐——、斬り込まれて受けた瞬間、下げ緒は切れ、片桐は刺客を倒した。

「な・み」悲痛に叫ぶ片桐は、「偽りの情だったのか」と叫びた。そのときな・みはガツクリ雪の上に坐ると、短刀を抜いてみずから胸を

刺した。「な・み！」と驚く片桐に寄り添い、な・みは「うそでない印に、死んでまことを捧げます」と苦痛をこらえて告げた。片桐の腕の中で、な・みは笑顔を見せて息絶えた。そのとき残雪が、牡丹のように降り注いだ——

こうしたストーリーで、な・み役の園まりさんは、思いつめた娘のまことを、転瞬の間にわが胸深く刺す刃によって示す好演技であつた。

壮年の剣士と可憐の美少女、という組合わせが、こうした悲愁の結末に至るのには、園さんのように可憐な姿態の持主がふさわしいであろう。園さんにしては珍しい時代劇出演にもかかわらず成功したのは、近真的な「愛と死」への道程の演技によるものであつたろう。この脚本は菊島隆三、安藤日出男両氏による。

同じように「愛と武」を描く「祭り囃子」(42年12月15日放映)、是は岡田正代、国弘威雄、橋本忍氏らの脚本で、同じく週刊TVガイド二七八号に拠つて紹介しよう。

百二十石取り酒井文之進(平幹二郎さん)は城中きつての美女たか(久我美子さん)の婿である。釣三昧に余念がない。家がら大切のたかには慾のない夫がやり切れない。とうとう十四才の息文吉を急いで元服させてしまった。その夜うれしさに昂ぶっているたかを愛撫したのち、文之進は家出してしまった。江戸へ出てたかは文之進を探し歩いた。夫が病氣と届け出たの上のことである。しかしやうと神田祭の前で賑わう界限に見かけた夫は女と二人づれであつた。美津若(北林早苗さん)という常盤津の師匠と同棲していたのである。

美津若と争うたかを、文之進は制し、一方美津若を町内の若衆たちと共に、お囃子に送り出してやった。お囃子の聞える美津若の家で、たかは持参の大小を取り出し、大刀を抜いて文之進に見せながら、家の為に武士の魂を忘れないでくれ、と口説いた。しまいには私のために今一度、私のところへ……と両手をつき泣いて懇願した。しかし文之進は拒んだ。もう遅いと云つた。お前には文吉が、俺にはおみつがいる……そのときたかは泣きやみ別れることを納得したかに見えた。ほっとして、立ち上がった文之進の背後から、たかは大刀を力一杯突き刺した。倒れる文之進を凄愴な眼で見たたかは、ゆっくり白刃をおのが体へ向けて袂で刀身の中ほどを巻いた。立ちながら、一気に帯の下ぎわへ……。苦痛に

見ひらかれる瞳、次第に硬ばる表情。そしてたかはよろめきながら文之進の亡きがらへと近づいた。刀を放し、寄り添うて逝く……。「残雪」のなみは兄の仇を愛してしまい、武家社会の倫理に従って彼を討ち果たす手引きをしながら、やはり、彼への愛の証しのために身みずから刃に伏して果てねばならなかった。それがまた亡き兄への申訳でもあった。

武家社会への背反を、彼女は自からに処罰して裁いた。文字通りの自裁であった。「祭り囃子」のたかは、やはり武家社会の倫理と慣習のためには、武家社会の枠からはみ出す夫を一旦疎外し、疎外したことによって自分も疎外されようとする。それがまた彼女の人間性恢復になって行くつもりであった。そんな喜びが、かつて夫の見たこともない

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真を撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に発表します。

歓喜にみちた風情となつて、子供の元服の夜に表現される。しかし夫は、疎外を妻からの疎外と信じて、家出して行く。武家社会だけでなく、養家だけでなく、妻からも逃れようとする。

たかが探し求めて夫を見つけたとき、夫は旧知の女と同棲している。女としての自我に目ざめたたかの、プライドを捨てた懇請も、夫の容れるところとはならなかった。たかの嫉妬と傷心は、刃傷と自殺、つまり破壊でしか救いようがない。その心情の激発は、無銘ながらの名刀で夫を刺し殺し、返す刃で立ちながら我とわが腹を刺し貫くことでしか消散しないのである。

たかの揺れ動く心情を、久我さんは理性に裏打ちされた端麗な美貌で、平静から蕩揺へ虚心から激発へと見事に表現してみせてくれた。結末、さながら立ち腹を切る武士の様に壮烈な姿態で、グザと帯の下ぎわに突き刺した逆手の大刀を、ジリジリと押し込むまでの表情の、真摯さ、懸命さは鮮烈な印象を遺さずにはいなかった。「残雪」におけるたかのあつと云う間もない自刃のシーンとは対照的に、粘っこくヒロインの年令を示した好演技であったと云える。

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第八回)

白鳥大蔵

女の体臭

歯ざしりするような切実な声が、お静の唇から思わずほとばしりてた。

肌身に残されたたった一枚の水色のものの裾を、立花屋久六の左手がつかんだのだ。そのまま、するすると引く。

「や、やめてッ……」

無我夢中で、お静はさけんだ。

さけんだあとで、すぐに娘のお雪が、目の前でさいなまれていることに気づく。

お雪を抱きしめているのは、久六のめかけ

のお仙だ。そのお仙の右手の指さきの悪戯のために、いま羞恥の果てまで追いつめられている十六歳のお雪だった。

お雪を責め道具にして、お静のすべてを剥ぎとろうという、狡猾で残忍な久六の魂胆なのだ。めかけのお仙の手が、どういう責め方を、お静の心をえぐっているか、いまのお静の位置からは見えない。

しかし、お雪の痛ましくゆがんだ表情で、それが十六歳の生娘の身にとって、どんなに屈辱的なものであるか、お静には容易に察しがつくのだ。

「なに、やめてだど……そうかい。まだ強

情を張る気かい。まあ、いいさ。そのかわり娘のほうを、こうしてやる……」

久六はふりかえり、左手をのばして、お雪の小豆粒のように愛らしい乳首を狙った。

「ひいッ」

と、お雪はうしろ手に縛られた不自由な身を、腹からねじるようにして悲鳴をあげた。

その痛烈な悲鳴に、お静の母親としての理性が、ハッと前にもどった。

「ぬ、ぬぎます。ぬぎますから、お雪をいじめないで……」

お静は、唇をふるわせながら哀願した。その哀願するより仕方のない、母親の立場だっ

た。

久六の左手の指さきが、やっとお雪の乳首から離れた。

よほど痛かったのだろう、お雪の目から涙がこぼれている。

久六は、お静の前にむきなおって、

「ぐずぐずするんじゃないや。ぬぐぬぐと言ったって、さっきからちっとも脱がねえじゃねえか」

じれったそうに顎を突きだしていった。

しかし、じれったそうなのは表情だけで、心の中では、お静の悩乱の姿態を楽しんでいるのだ。この時間の経過を、うっとり味わっているのだ。

お静にとっては、絶対絶命だった。

「ちくしょう！」

と、久六にはきこえないほどの低い声でお静はうめき、決意した。

つぎの瞬間、最後までまといついていた水色縮緬のものが、魂のない一枚の布きれとなつて、お静の足もとに落ちた。

声のない感嘆が、久六の口からあがり、まぶしいものを見あげるように、両眼が細くなつた。

すみからすみまで、むっちり女ざかりの

脂肪ののった、あまりにも豊満なお静の裸身

だった。着物をきていたときは、もうすこしほっそりと見えたのだが、いまは信じられないほど、むちむちとした白い肉づきだった。

とくに、巨大な白桃のような左右の乳房に久六の目が、あらわな驚異を示して吸い寄せられた。

むせるような女の体臭が、たちまちこの部屋に充満し、そのにおいは、とくにお静のみごとに盛りあがった乳房のあたりに色濃くわだかまっているようだった。

もっとも女らしい部分を両手でかくし、寸時そのままの姿勢で、お静は石像のように動かなかつた。

シミひとつない乳白色に包まれた、お静のあまりにも女らしい肉体と、その肉体から発散する体臭に圧倒されて、しばらくの間、久六は息をのんだままだった。

「どうしたんだよ、お前さん、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしてさ」

お仙が、口をとがらせていった。

お静の裸身をみた瞬間、お仙にしてはめずらしく、あらわな嫉妬を表情にうかべたのである。

「な、なにも、あわてることはねえさ」

久六は、ごくりと生唾をのみこみながら、自分にいいきかせるようにいった。その声もうわずっている。

「縛るんだろ、お前さん」

いらいらしながら、お仙がいった。

自分よりも数倍美しいこのお静のからだを存分に痛めつけてやりたい。そうしなければ腹の虫がおさまらない。こんな美しいからだ、この世の中にあつてはならない。

存分に痛めつけ、泥の中に突き落としてやりたい。めちゃくちゃに踏みにじってやりたい。

「お前さんは片腕なんだからね、あばれる女は、縛っておかなけりゃ、なんにもできやしないんだから……」

久六にむかって、ばかにしたような顔つきで、お仙がいった。

「そ、そりゃまあ、そうだが……」

久六は、なおもお静の裸身に茫然となつている。

「ふん」

お仙は、いっそういらいらして、お雪を縛った縄尻を、柱につなぎとめた。逃げられない用心のためである。

それからお仙は、畳に落ちている縄をひろ

いあげて、お静の両手を縛るために、ゆっくりと寄っていった。

お仙の動作はにぶいが、蛇のように不気味な気迫があり、お静はそれにおびえて、思わず二、三步後退した。激しい憎悪の目で、お仙はお静の顔をにらんだ。

毒 の 花

「もう観念したほうがいいよ、ええ、大津屋のおかみさん。さあ、あきらめて、両手を背中にまわすんだよ」

縄をしごきながら、お仙がいった。縄をしごいてその感触を楽しんでいると、憎悪の感情が嘘のように消えて、べつの感情がむくむくと湧いてくる。

「そらそら、手を背中にまわすんだよ」

この白いなめらかな肌に縄をかけたなら、どんなにいい眺めになるだろうか、ともうよだれを流しそうなお仙の顔だった。

「さあ、大津屋のおかみさん、あたしが癪癪をおこさないうちに、言われた通りにしたほうがいいよ」

お仙は縄の先でお静をぴしりと打った。白い太腿に、たちまち赤い筋が走った。

「な、なんでも言うことをききますから、縛るのだけは、もう、やめてください」

お静は、合掌するような姿勢になって哀願した。

「だめだめ。大店のおかみさんだからといって、いつまで上品ぶってるんじゃないよ。ぐずぐず言ってる、またかわいなお雪さんがヒイヒイ泣くことになるんだよ」

それは、まさしくお静の泣きどころにちがなかった。それを言われると、なんの抵抗もできなくなるお静なのだ。

「縛らなくても、いうことをききます。あばれたりしません」

お静は、歯をくいしばって頭をさげた。

「うるさいねえ。つべこべ言っていないで、早く手をうしろにまわすんだよ」

「お願いです、縛らないで……」

「お雪がどうなっても、いいと言うんだね」

「そ、それは……」

「あたしゃ、お前さんを縛りたいんだ。そのきれいな肌を、この汚ない縄でぎりぎり縛りあげたいんだよ！」

お仙のかん高い叱咤に、お静は唇を噛んでうつむいた。もう、どうにもならない。あきらめるより、仕方がないのだ。

娘のお雪が捕われているかぎり、この女のいうことをきかねばならないのだ。

畳に膝をつくと、お静は首をうなだれ、左右の手を、自分から背中へまわすのだった。

「そうそう、それでいいんだよ」

そのお静の背後に、縄を持ったお仙がまわった。にやりと笑うと、お静が自分からまわした左右の手首に、ゆっくりと縄を巻きつけていく。

お静は目をとじた。もう抵抗はしない。屈辱のために、全身の血が音をたてて逆流し、火をつけられたように熱くなった。手首を嚴重に縛った縄を、肩から腕へきりきりとまわして、お仙は力まかせにひきしぼった。豊満な乳房の上に縄がかかり、肉を割るように、その縄がきびしくくいこんだ。

「う、う、う……」

と、のどの奥でうめき、お静はその白く脂肪ののった肩を、縮めるようにしてふるわせた。やわらかい部分に、縄は容赦なくくいこんでくるのだ。

女のくせに、お仙には馬鹿力があつた。あるいは、女の嫉妬が、お仙に力以上のものを出させているのかもしれない。

あまりの痛さに、お静は二度三度と腰を浮

かせた。その弱腰を、お仙の足が無情に蹴りつけた。

お静が苦痛の声をあげるたびに、娘のお雪が「おっかさん！」とさけんで、母親のそばへ寄ろうとする。

が、久六の左腕にさえぎられて、うしろ手に縛られた不自由な身を、いたずらにもかかせるだけである。

お静の胸に、三巻きほどの縄がくいこみ、余った縄でもう一度しっかりと手首を縛ってから、お仙の作業は終わった。

お静の白い無抵抗な裸身に、垢に汚れた黒っぽい縄だけがからみついている。縄の力によって、奇妙な、痛ましい形にくびれた乳房のあたりが、荒い、せつない息をついてうごめいていた。

骨がきしむような屈辱を耐えて、お静は、じっとうつむいていた。膝と膝とを固くよじり合わせ、前こごみになって耐えていた。

それをにくしくしげに見おろしていたお仙が、ひとつ大きな舌うちをすると、足をあげて、そのお静の肩さきを強い力で蹴った。

「あッ！」

お静は、ひとたまりもなく前へのめった。顔を畳の表面に、したたかに打ちつけた。

鼻柱をまともに打って、こめかみのあたりがじいんとしびれ、涙がでた。

ちくしょう、こんな醜い、化けもののような久六のめかけのために……と、お静は涙をこぼしながら、うめいた。

久六の目が、うっとり細くなり、すべての抵抗を封じられた、あられもないお静の姿態に見入っている。

いまや、めかけのお仙は、文字通り久六の片腕の役目を果たして、お静を縛りあげたのだった。

「さあ、お前さん」

と、お仙は久六にふりかえった。

「煮て食おうと、焼いて食おうと、もうお前さんの心のままだよ。こうやっておけば、いくら片手のないお前さんでも、存分に料理ができるだろう」

しゃあしゃあとして、お仙はいった。

化けもののような久六に、この美しい豊満な女体が、汚辱の泥沼に突き落とされることを想像すると、お仙の胸には、たまらないほど快感が湧いてくるのだ。

しあわせなものを、ぶちこわしてやりたい女特有の残忍な本能だった。

「あたしゃ、おかみさんよりも、こっちのお

雪のほうがいいや。このお嬢さんは当分のあいだ、あたしのオモチャさ。まったく、かわいいたら、ありゃしない」

お仙は、まだ酒のにおいの残る息を、ぷうと吐きだすと、畳にうち伏しているお静の顔をのぞきこむようにしていった。

「ねえ、大津屋のおかみさん。お雪はねえ、もう、あたしの味をおぼえかけてきたんだよ……ふふふ、なにも、そうおどろくことはないやね。あたしのこの手にかかったら、どんなにきれいごとを言ってる娘でも、三日と持たないんだからね、ふふふ……」

お仙は、鼻筋に醜い小皺を寄せて、お静の顔の前で笑った。

もと芸者だったお静には、それだけでもうお仙のいった言葉の意味がわかるのだ。お仙が、無垢なお雪に、なにを仕込んでいるのかわかるのだ。

無駄と知りつつ、お静は身悶えた。

そのお静を、心地よげに見おろしながら、なおもお仙はいつのののだ。

「ふふふ……お雪だって、まるきりの子供というわけでもないんだからねえ。感じるところは、ちゃんと感じているはずさ。まあ、細工はりゅうりゅう、仕上げをごろうじろって

えところさね。これからが楽しみだよ。あたしが精いっぱい仕込んでやるよ」

お仙は、得意げにまた咽喉をころがして笑った。

「おい、お仙」早く向こうへ行け、といいかける久六の鼻さきへ、自慢の右手を突きだして、妙な恰好でうごめかして見せる。

それからお仙は、柱につなぎとめてあったお雪の縄尻を解きながら、その毒花のように赤い唇で、お雪の白い頬を、音させてチュッと吸った。

お雪は本能的にお仙の唇を避けて身をのけぞらせた。お仙はしつこくお雪の耳の下あたりを唇で追って、ようやく目的を果たすと、ケラケラと笑った。

「おい、お仙、いいかげんにしねえか」

久六がじれて、大きな声をあげた。

「それじゃ、お前さん、しっかりおやりよ。」

あたしゃもう、このへんで消えるからね」

といって、久六にふりむいたお仙の顔にはいかにも妖婦といった感じの、濡れたような艶っぽさがあつた。霧に濡れた毒の花のように、妖しくずれた美しさがあつた。

お仙は、自分が縛りあげてころがしたお静へ、もういちど視線を送ると、お雪の縄尻を

とって、この部屋から姿を消した。

あとには、お静と久六だけが残った。久六の呼吸の荒くなるのが、お静にはわかつた。

久六の目が、いま自分のからだの、どこを見つめているか、両眼をとじていても、お静にはわかつた。そこが、灼けつくように熱くなつた。左右の腋の下から、汗がにじみだしていた。

どんなに四肢を縮めてみても、もう無駄だということが、お静にはわかつていた。それでも、縮めずにはいらなかった。

久六の足が、そろそろと畳をすべった。

お静は、観念した。が、心のどこかでは、まだ救いの手の現われるのを待っていた。

いまここに、自分を救ってくれるものが現われたら、それは奇蹟だつた。お静は必死になつて神を念じ、奇蹟を待った。が、奇蹟は現われなかった。

久六の手が、ついにお静の肌に触れた。

地獄で仏

寺尾半九郎は、手持ち無沙汰だつた。

この離れの部屋には、半九郎のほかに、女拘摸のお京しかない。

お京は、手足を縛られて、部屋の隅にころがされている。腰に赤い布きれを一枚巻きつけただけの姿である。これでは手足を縛られていなくても、うっかり外へとびだせない。

半九郎はつまり、お京の見張り番をしているのだつた。久六に雇われた用心棒だから、この役目も仕方がない。

大あぐらをかいた半九郎の前には、酒徳利が一本置かれ、茶碗がころがっている。肴は目刺しだつた。

徳利のなかの酒は、すでにのみほしていたが、代りを催促する気にもなれない。

寺尾半九郎は、いま、不機嫌だつた。

立花屋久六は、いつ約束の金の残りをくれるのか。

大津屋の手から自分を助けだしてくれれば千両さしあげます、と久六は言ったのだ。

半九郎は、その金額の大きさに釣られて大津屋を裏切り、橋場の隠れ家から、久六を駕籠にのせて、かつぎだしてやったのだ。

花屋敷の地下部屋で、半金の五百両はたしかにもらつた。

しかし、あと五百両が残っている。

半九郎は、それを早く手中にしたいのだ。もともと粗暴な性格で、こまかいことには

こたわらない半九郎である。

しかし、いつまでもこんな久六みたいな男のそばにいと、やがて、とんでもない身の破滅に襲われるぞ、という予感が、次第にしてきた。

久六からもらった五百両の金は、腹の周囲に巻きこんである。かなり重いし、金冷えがする。半九郎のように、武術で鍛えた肉体ではないと、とても五百両を腹に巻いたままで歩くことなんかできない。

五百両といえば、大金である。うまく使えば一生、楽に食べていける金だ。

だから、このままずらかってしまってもよさそうなものだが、人間、欲がある。

千両の約束だから、あと五百両もらわなければならぬ。その五百両に未練があって、こうしてぐずぐずと久六から離れないでいる寺尾半九郎だ。

庭をはさんだ向こうの部屋から、数名の男たちが、なにやらどっと笑っているのがきこえる。

見世物師ヤレツケの岩松の家だから、若い者がごろごろしているのも当然である。

広い庭を囲むようにして、小さな座敷がいくつもある。その座敷のひとつで、博奕に飽

きた岩松の子分たちが、酒盛りでもはじめたのだろう。やがて手拍子を取りながら、下品な歌をうたいだした。いかにも見世物師の親方の家らしい雰囲気である。

半九郎は、またイライラしてきた。

おれは、いつまでこの女の見張りをしていなければならぬのか。

半裸で縛りあげられ、畳の上に、かなりあらわに太腿をむきだしたまま押しころがさされているお京の姿も、いまの半九郎の心をなぐさめることはできない。

だいぶ痛めつけられたらしく、お京の鬚の根はがっくりとくずれ、さすが気の強い女、胸の顔色も、死んだもののように青い。

両眼はとじているが、ときどき長いまつ毛がピリリと動くので、生きていることがわかる。

久六はいまごろ、さらってきた大津屋の女房のからだを、思いのままにしていることだろう。あの強欲な久六のことだから、どんなに意地汚ない、卑劣な責め方をするか、と半九郎は思った。

そしてあの、めかけのお仙とかいう妙に色っぽい女は、いつもお雪にびったりとくっついて離れようとしない。奇妙な女だ。

それぞれが、勝手なことをしているのだ。

手持ち無沙汰なのは、おれだけだ。

半九郎は、手をのばして酒徳利をつかむとさかさにふった。二、三滴の酒が、掌にしたり落ちただけである。

大声をだして、岩松の子分を呼び、酒を持ってこさせればよいのだが、それもなんだか面倒くさい。いまはそれほど、のみたくもない。腹に小判を巻いて冷えているせい、食欲もない。

「おい、女」

と、なにを思ったか、半九郎はお京に声をかけた。

呼ばれて、お京はうっすらと両眼をひらいた。

「お前は、なんのために、久六につかまっているのだ」

半九郎の質問に、お京の唇は皮肉な微笑をうかべた。

「あたしは久六の子分の女、胸摸だったのさ。ところが、つくづくこの商売がいやになってね、足を洗おうとして立花屋一家から逃げだし、途中でつかまって、このザマさ」

自嘲の声音で、お京はこたえた。

「そうか。源次とかいう子分とくっついて、

立花屋一家を乗っ取ろうとした女というのはお前か」

半九郎は、ふと好奇心をおぼえたらしく、お京の顔を上げしげと見なおした。

お京は黙った。

べつにお京は、立花屋を乗っ取るつもりで源次と組んだわけではないが、結果としてはそういう形になった。

死んだと思った立花屋久六が生きていて、源次はこの半九郎浪人のために、斬られて死んだ。世の中、うまくいかないもんだ、とお京は苦笑する。

「弁解するわけじゃありませんけどね、あたしは、好きで源次とくっついたんじゃないよ。まして、立花屋を乗っ取るなんて、そんなケチな考えは、小指のさきほどもありやしません」

もう、殺される覚悟ができていて、なかば自暴自棄になっているお京だ。

なにしろ、縛りあげたお仙を、源次と一緒にあって、あれほど手ひどく責めなぶったのだ。

女の執念で、お仙はあたしに、数倍の仕返しをするにちがいない。半殺しになるのは、目にみえている。

しかし、おめおめとお仙なんかには殺されてなるものか、とヤケになりながらも、まだ気力は衰えていない。

たとえ両手を縛られていたって、いよいよとなったら、お仙の咽喉笛に食らいついてやる。

「おい、女、助けてやろうか」

ふいに、半九郎がいった。

「えッ？」

と、お京は思わず半九郎のひげ面を見あげたが、この用心棒が、いまなにを言ったのか信じられない。

「助けてやろうか、と言ったんだ」

べつにからかっている様子でもなく、半九郎はむしろ茫洋とした目の色でいった。

「助けるって、だれを？」

お京は、まだ自分の耳が信じられない。

「お前をだ。お前の手足を縛っているその縄を、拙者が切り解いてやろうか、と言っておるのだ」

半九郎の言葉に、お京は警戒の目の色になった。反射的に肩をすくめ、縛られている手足を縮めた。

どうせ、ただであたしを助けてくれるはずはない、と女の本能が直感したのだ。

もっとも、たとえこのからだをやったってそれで命が助かるとなりや、けっして損な取り引きではない。

しかし、半九郎は、にやりと口もとをゆがめていった。

「誤解するな。おれには、いまのところ、お前を抱く気なんかない」

なにしろ、腹にずっしりと小判を巻きつけているのだ。お京を抱くには、その小判の包みを解かなければならない。

「ただ、気持ちが悪くしゃしていてな、久六のやつに、一杯食わせてやりたいだけなのだ」

お京は顔をあげて、この用心棒浪人の顔色を、注意ぶかくうかがった。

人相はあまりよくないが、半九郎の表情に嘘があるとは思えなかった。半九郎は壁のほうを向いて、所在なげに鼻の穴へ指をつっこみ、鼻毛をぬいている。

お京を抱こうと思えば、黙っていますぐにでも抱ける立場にいる半九郎だった。

しかし、お京に、これまでその危機感はない。助けてやる、と言うのは、本当かもしれない。これが地獄で仏、天の助けというやつだ、とお京は思った。

「恩にきます。助けて、助けてください」

半身を起こして、いつのまにか、ひたむきになっているお京だった。

「やっぱり、助かりたいか」

一度にふとい鼻毛を三本もひっこぬき、それを行灯の火にかざして眺めながら、半九郎はいった。

「あたり前ですよ。命はひとつしかないんですよ。だけど、ねえ、旦那、だますんじゃないでしょうねえ」

「だましたりするものか。本当に助けてやろうと言うんだ」

鼻毛をふうと吹きとばすと、半九郎は片膝を立て、大刀の鞘を抜きはなった。

一瞬ぎくりとして、お京は心身をすくませた。しかし、お京を助けるといった半九郎の言葉に、嘘はなかった。

立ちあがった半九郎は、大刀の先で、こじするように縄を切り、お京を縛った手足を自由にさせてやった。

「さあ、逃げろ」

と、なんの感情もない、つないでおいた犬でも放つような顔で、半九郎はいった。

お京を逃がしてやるのが、久六に対して裏切り行為になるのを、半九郎はあまり深く

考えない。ただ、退屈しのぎと腹立ちまぎれに、こんなことをしているだけである。

赤い腰のもの一枚だけのお京は、逃げろといわれても、さすがにこのままの姿では逃げることはできない。が、そこは頭の回転の早い女掏摸だった。

勝手にこの部屋の押入れをあけると、古びた衣裳行李をひきずりだし、その中から、なにやら見世物の女に着せるような、よれよれの着物と帯をさがしだした。

びんつけ油と、安白粉のにおいが、べったりとしみこんだ衣裳だが、裸で逃げるよりはいい。

お京は、手早くそれを身にまとった。「旦那、ありがとうございます。お京、恩にきます」

嘘もかくしもない感謝のまなざしを、半九郎に向ける。

「ああ、恩にきろよ。いまはわけがあつてお前を抱けないが、こんど会ったときは抱いてやる。それまで貸しておくぞ」

「借りておきます」

白い顔に微笑をうかべて、お京は障子をあけた。廊下があり、すぐに庭へ出ることができる。裏庭へおりてしまえば、あとはもう、

こっちのものだ。

家の周囲にはぐるりと板塀をめぐらしてあるが、木戸口をさがせば、わけなく外へぬけだせる。

心身ともに疲れ果てているはずだが、さすがに腕ききの女掏摸としての修業をつんでい

るお京だった。

天井裏

ヤレツケの岩松は、思わず声をあげそうになる口を、自分の手であわてておさえた。

見世物師の岩松は、いま四つん這いになって天井裏にいる。

これまでに、数多くの珍奇で卑猥な見世物を考案して、客によるこぼれ、金を儲けてきた岩松だった。

だが、過去のどんな奇怪な見世物よりも奇怪な見世物が、いま岩松の眼下で、極彩色のなまなましで展開しているのだった。

岩松は天井裏に這いあがり、こっそりと四つん這いになって、天井板の節穴から、下の座敷をのぞきこんでいるのだ。

眼下の部屋で、裸にむかれて、うしろ手に固く縛りあげられたお静と、片腕のない久六が、美と醜のあざやかな対照をみせてもつれあっている。

どこもかもまっ白な女ざかりの肉体に、あぶら汗を流していどんでいく久六の赤黒い醜悪な容貌は、どんなにあくどい趣向を凝らした見世物よりも強烈だった。

岩松は食いつくような目になり、なんども舌なめずりをした。どんな刺激にも慣れているはずのこの男が、目を輝かして節穴から見おろしているのだ。

まぶたのはれぼったい、針のように細い目の、鈍重な感じのこの男が、いまは別人のように生氣に満ちた表情をみせていた。

——そうか、大津屋の女房は、もと柳橋の芸者の小静だったのか。そういえば久六兄貴が、柳橋の芸者に惚れて、毎夜通ったという噂は、おれもきいたことがある。いくら惚れて通っても、ふられっぱなしだったという話だが、なるほど兄貴のご面相とは月とスッポんだ。首をたてにふるわけはねえ。ふられるのがあたりめえだ。あの兄貴の気性だ。さぞ口惜しかったことだろう。つまり、兄貴にとつては、江戸の仇を長崎で、というわけか。

岩松は、咽喉の奥でぼそぼそとつぶやく。節穴の下では、お静がきれぎれの悲鳴をあげてのたうちまわっている。

片腕の久六もまた、顔じゅうに汗をふきだしながら、すさまじいうなり声で這いずりまわっているのだ。その熱気が、天井板の上まで、むんむんと伝わってくる。岩松の口のかなかに、生唾がたまった。それをのみこむ余裕もない。

——それにしても、なんていい女なんだ。あんなに色の白い女を、おれはいままでに見たことがねえ。肌のなめらかさといい、乳房の形といい、腰の張りといい、東両国あたりじゃ、めったにお目にかかれねえタマだ。鬚の根がくずれて、乱れ落ちた毛が白い襟すじに汗でねっとり貼りついていてる図なんだあ、ちえッ、たまらねえ……あ、あ、あ、ちくしように、兄貴のやつ、あんなことを……あ、あんなことをしてやがる。な、なんてえひでえ真似を……あ、あれじゃ、女が、いくらなんでも、か、かわいそうじゃねえか。いくら片腕がなくてイライラしているからって、あんなけだものみてえなことを女に……あ、あ、こいつはひでえ……まったくひでえや。とても見ちゃいられねえや。

見ちゃいられねえといいながら、いっそう節穴にびったりと目玉を押しつけ、岩松はもう夢中だった。

いくら両手を背中に縛られてはいても、お静は五体満足で元気な女だ。久六は右腕を斬り落とされて、まだ六日目、その傷口もまだ癒えていない。ズキズキと疼痛がして、全身がまだ熱っぽく、けだるい。自分では力を入れてるつもりでも、かんじんなところに力はいらない。

あばれないようにと、お仙が縄で入念にくくりあげていったのだが、いざとなると、女の抵抗はものすごく、久六は全身におびただしい汗をかき、呼吸も荒くなっている。

それでも、執念ぶかい久六だ。縛られているお静は、やがて根まけしておさえこまれてしまいうだろう。

岩松はもう、まばたきするのも惜しい気持ちだ。

——おれも、男と生まれたからには、一度でいいから、あんな女と……。あ、あ、またあんなことをしてやがる。兄貴もまったく、しつこい男だな。いくらなんでも、あれじゃ女がたまらねえ……。

ふとい猪首を、いっそう短くまるめて、岩

松はうなった。

うなった瞬間、岩松の視界から、久六と女の姿が消えた。

お静は必死に全身を芋虫のようにくねらせて座敷の隅まで逃げていき、久六はそれにすがりついて追っていったために、岩松の眼下から、二人の姿が、それてしまったのだ。

——ちくしょう、これからだっていうときに……。

岩松はあわてた。だが二人に、節穴の真下にもどれと命令するわけにはいかない。

仕方がない。また節穴の下に、二人のからみ合いがもどってくるまで、声と音だけで我慢しよう、と岩松はあきらめて目をとじた。

が、肌と肌とが激しくぶつかりあう音が、すぐに耳の中にとびこんでくる。それも、汗に濡れているらしく、どこことなく、べたべたと湿っている音だ。

それと同時に、久六の妙に濁った、腐った泥のような声音がひびいてくる。声というよりは音だった。

それに混ってお静の「ひい、ひい、あッ、ひいッ……」という恐怖をふくんだ、せつなげな悲鳴も這いのぼってくる。

——ちくしょう、な、なにをしていやがる

んだ、見せる、おれに見せろい！

岩松は、あせってまた両眼をひらき、節穴から下の座敷を見おろしたが、わずかに女の白い足のさきが三寸ほども見えるだけで、あとは相変わらず視界の外だった。

久六がなにをしているのか、お静がなにをされているのか、岩松にはさっぱりわからないうのだ。妄想だけが、いたずらに大きくふくれあがっていく。

「やめて、やめて、やめて、やめてッ……」という声と、畳を蹴る物音。

岩松の頭の中が、カッカッと燃えてくる。頭の中だけでなく、全身の血が逆流して、カッカッと燃えさかっている。いくら燃えても、天井裏にひそんでいる身では、どうにもならない。

そのうちに鋭く「ヒイツ」という悲鳴があらると、三寸ばかり見えていた女の白い足も岩松の視界から消えてしまつて、あとは赤茶けた古畳だけが、目の下にある。

——くそッ……。

岩松は怒った。いくら怒っても、これは怒るほうがまちがっている。

——ようし、おぼえていろ！

口のなかでののしつたが、どうすることも

できない。

視界から消えたお静の白いからだだけが、岩松のまぶたの裏に灼きついていて、あるいはお静に対して「おぼえていろ」といったのかも知れない。

このとき、岩松は、自分の考案したヤレツケの見世物に、お静を出すことを思いついたのだ。思いついてみたものの、これはあくまでも妄想だった。しかし、岩松はこの妄想にすぐ夢中になった。

女をすっ裸にしてうしろ手に縛りあげ、左右の足首にも縄を巻きつけてひらかせ、客にタンポ槍を持たせて突かせるヤレツケの見世物。さるぐつわを噛ませ、声をだせないようにし、嚴重に手足を縛りつけておいて、好きなところを客に突かせるのだ。

「上見て下見て十六文じゃ安い、上突いて下突いて十六文じゃ安い」

岩松は、ここが天井裏だということも忘れて、口の中で歌った。

すると、お静のそのあられもない姿が、鮮明なかたちとなって、岩松の目の前に、なまなましく浮かびあがってくるのだ。

(つづく)



新女性乗馬考

佐野

寿

エロチズムと女性乗馬及び、マゾヒズムと女性乗馬の間には、直接的な関連はないと主張する心理学者や、多くの人々の居ることは知って居る。又、少くとも高等馬術や障害跳躍レースのプロ、及びアマの女流選手も、乗馬は純粋なスポーツであり、健全な競技以外の何者でもないと認識して居ることも知って居る。成程、例えば英国では

皇族の前でも正々堂々と女流選手は出場してゐるし、スロイヤルカップに出場する女流競馬選手も少なからず居る事から判断しても、それは格調高いコストの掛かるスポーツであることを、あえて否定しようとしているわけではない。

しかし筆者が主張したい事は、すべて物には表裏と云うか二面性がひそんでいることを見逃がせないし、又それが否定できない証拠があると云う事実である。余談になるがオリピック競技に女流騎手が参加を許されたのは戦後の、しかもわずか十年位前からで、それ以前は禁じられて居たと云う事実は、興味をお持ちの読者は、その理由が多分おわかりにならうと思う。それに関しては、英国のプロ女流選手パット・スミス女史が、その著書『Horses and Places』に記述している。

19世紀後半から20世紀初期に急激に興った女性の地位向上も、この「女性乗馬」に関しては一番おそく迄取りのこされたのである。ところが、一九六〇年代の今日は、少くともヨーロッパの先進諸国では、がらりと事情は一変したではないか。今日の信頼される統計では実に全乗馬愛好家の内70%強は年令22才迄の若い女性である。米国でも60%強はそう

だそうである。今日の欧米先進国の乗馬クラブ、乗馬学校は従って女性無しでは考えられないし、実際経済的に成立たないと云われるのも本当である。乗馬クラブをおとずれれば窓口は若い女性の列がずらりと並んで居るのを見るのはめずらしくないのである。

私の考察では、乗馬は本来女性にも非常にむいたスポーツで、専門家も、それは女性の情操を養い、体力を均一に向上させるのに優れたスポーツであると見做して居る。全身美容にも悪からう筈はないし、乗馬に関して男性より女性の方が生理的に不利と云うことは決してないどころかむしろ逆だ、と専門家はいつて居る。

さてそれでは、ここに数葉の典型的なその面でのフォト資料を吟味しながら、考察解説を続けることにしよう。

前述の二三の前提とは逆に、少くとも我々にはすべての「馬に乗ろうとする女性」「現在馬に乗りつつある女性」及び「馬に乗り終った女性」「馬に習慣的に乗る女性」及び、「かつて馬に乗った事のある女性」は、どの一つをとっても、いわば一種のマゾヒズム或いはマゾヒズムの変種として考えられることは更々否定出来ない。尤も、厳密な定義に従

えば、マゾヒズムとは人間の男性中心に考える世界であるので、筆者も「女性乗馬イコール、マゾヒズム」と云う方程式には疑問を感じて居るが、ここで何を云わんとして居るかはほぼわかりただけだと思ひ、念の為附記した次第である。

更に、いわゆる男性側から考える俗に云う人間馬とか、被乗馬願望、及び馬化と云うものと「女性乗馬」は、全く共通点が無いとは云えないが本当は混同されては間違いになるうと考える。何故なら「女性乗馬」なるものはリアルな実体に他ならず、空想の産物とす

る時に、その力を次第に失うに至るからである。故に筆者は出来るだけ「女性乗馬」のリアリティに即して考察し、観念の空転に転落してマンネリにおちいらぬ様に致すつもりである。尤も、すべての近代人は何事にも多少なりと実証性とか証拠主義がなければ、満足し納得出来かねるからであり、筆者にとっても又同様である。と云ってもいつも充分な証拠資料をそなえることは、正直云って簡単には実行し難いことも告白しなくてはならぬと思つて居る。



三年程前の夏に西独のある週刊誌に、若い

女性騎手に関する性心理のドクターのインタビューに対する答えが載っていて、その要約しか出来ないけれど、『大半が20才台の女子が多い』理由として、『丁度その年令は、女子は男子より早熟で発育が早く、情操がすみやかに成長し、同時に母性愛の芽が生じ始めさかんに、自分より下のもの、つまり馬とか犬を一種の母性愛で、飼育服従させ

たい本能に基づくからであり、又、彼女等は体格ではたくましい馬にほれるのであり、その結果男子より乗馬を好む。更に男子は馬よりもオートバイとか、機械いじりに夢中になり、女の子みたいには馬に関心をよせる程度が低いからである……』と結論して居る。筆者も成程とその意見に賛成して居る。

私も、やはり乗馬には「馬を従順に服従させたい」と云う意志や、其の心理学者の言の如く母性愛的なものが働かねば、女子のように喜々として乗馬はしないと思うのである。そしてそれは、我々が時々想像する様な、女性のサジズムが「女性乗馬」を動機づけると

一概に結論出来ないのである。

しばしば観察される如く、一見確かにいかめしい扶助（答、くつわ、拍車等の総称）を彼女等は駆使し、時に馬をきびしく虐める様に見えるが、馬が女性騎手の意に従った時はすぐやさしくほめて、労をねぎらってやるのが見られるのである。いつも懲罰とほうびは交互に行なわれ、単に責めるのみでは、勿論ない。

ここに筆者が、読者の方に提供するフォトは、皆オリジナルであり決して他の雑誌類から盗用したり、引用したものではないので、安心して見ていただきたいと、願う次第である。フォト（1）は、或る



朝に北欧の野外で撮られたもので健康美輝く女子高校生がちょうど二時間程の馬術練習を終え一汗かいてちよつと馬を休ませるようである。夏らしく白いシャツがくつきり青空にうかび上り、金髪は相当のスピードで野外馬場でギャロップさせてる間に乱れてしまっ

たが、かえってダイナミックな感じを我々に与える。きちんとキュロットの乗馬ズボンと高等馬術で使う拍車を付けた長靴をはいて、いかにもさっそうとして居る。乗られている馬は少し首を右に傾けているが、これはやはり調教が厳しく、ギャロップや速歩を命ぜられたので幾分、疲れたのであろう。荒い鼻息であった。今一段落し放免してもらい、やれやれと云った表現をしている。女騎手は充分乗馬を堪能し満足そうにこれから厩舎へ引き上げようと考えてるらしく見える。はげしい女騎手と馬の長い馬場での格闘の如き運動は誠に見事であった。右手に答は持って居たがあまり度々は使用しなかった。拍車は相当入れて居た。

写真（2）はデンマルクの女子大生の馬術部員で相当のベテランであり、大学対校試合を間近にひかえてのそれは、はげしいものであった。一心不乱に殊の外、熱を入れて彼女の愛馬を調教しつつあるスナップ写真で、びっくりする程大柄でグラマーな女子大生である。時期は初冬で雪さえまばらに降る頃であり、赤い頭巾がいかにも女性らしい雰囲気をかもし出し、上等な黄色い鹿皮のコートと清潔な乗馬ズボンをはいており特大の長靴もよ

く調和して居る。先刻迄つけてた拍車をはずしたのは、あまり馬に強く利きすぎる為慈悲深く加減してやった為かと思われた。

野外馬場を早いテンポで右廻りに馬を進めつつあるが、その二三周後に砂じんをけたてて猛烈にギャロップし、又速歩にもどった。その後には障害飛びの練習も行つて居た。手綱は短かめに持たれ、慎重に馬を駆り、右手ににぎった鞭で、いつ反抗をしてもそくぎに罰する事が出来る用意も怠らない。全く一分のスキを見せない乗馬ぶりに感心する。

ベテランらしく、鞍上にきわめてステイブルに跨り、重心の掛け方や扶助の使い方は完璧。法学部の三年生とかで、土、日両日の朝の遠乗りにはよく、先頭か二番目の所でグループをリードして居る。拍車は使わないかわり、長靴のかかところによるけり込みはすさまじい音を立てて馬腹にひびきわたる。しかも何回も度々ける。答打もするどい。馬は走り出し、直ちに服従する。ポケットの人蔭を時折与え、やさしい声を馬に掛けて休ませるが、しばらくすると又虐めにかかる。はげしい責めと服従の強制がいく度ともなく続き繰り返されるのだ。冷い外気に馬の鼻から火のように熱い息が白い蒸気となって出る。調教はそ

れでも続き、答の音があたりにこだまする。

次の写真(3)は、めずらしい英国婦人の休日の乗馬姿で、ヘルメットは被らないが正に正式な乗馬スタイルで典型的純英国スタイルとも云えよう。黒光りする長靴はいかにも引きしまつて居り、気品高く、かかとの拍車は意識的にか内側に向いて、馬腹に有効に利く様になっている所に御注意願いたい。

今は馬は香気に幸福そうに草を喰わせてもらつて居るが、この婦人騎手が一旦命令を下したら、仲々容赦なく、馬を自由に駆るだろう。新しい鞍に安定して跨り、馬にエネルギーを与えているところである。亜麻色の頭髪は後へ垂らし、又ランカシャーの上着には金色のメダルが光っていたが、恐らく馬場馬術の優勝者の一人だろう。胸がくすぐられている様な感じに陥いる。

このシーンが終ると周りに林で囲まれたグラウンドを速歩で、やがてギャロップで廻り始めるのであった。予想は当たった。馬は真っしぐらに疾走し、只命令に服従せざるを得ない体勢になった。先刻の淑女はたちまちに

して勇婦と化し、馬に対し少くともその時点では完全なサディスティンと変ぼうするのを目のあたりにしたら、誰しも驚嘆を禁じ得ないであろう。

その時間中、女は百パーセント支配慾を保有したのである。砂塵を立て猛然とギャロップする。上着と結んだ栗色の髪は後方にたなびき、馬の鼻から火のような息を出しても尚、女騎手の拍車は容赦なく馬腹を虐める。疾風が落葉と砂塵を吹き上げ、その婦人騎手は極の林へと蹄の音を残して消え去る。

次は、フォト(4)であるが、これは先刻のカテゴリ分類に依れば「馬に乗り終った女性」であり、十二分に馬を調教し虐めつけた後に、この四十代の女性はやや放心した態度



はあるが、手には未だ先刻馬を咎で無慈悲に乱打した、その長々とした鞭が、生々しく握られて居るスナップ写真でありM系の人々には讚美の対象となり得よう。尤も、フォトではもう下馬しているので、そのかもし出す印象は、前の各フォトに比べれば軽度ではあるが、反面、この婦人がどの様に馬に乗ったかの想像を与える余地はあるので、その点で興味をよび起すかも知れない。

フォト(5)を注目していただきたい。これはカテゴリーに従えば「これから馬に乗る



うとしている又はその準備をしている女性」と云える。寒くてふるえるスカンジナビヤの冬の早朝にしゃれた毛皮のいでたちで遠乗りに出るスナップ写真であり、彼女の横顔は緊張と喜び、及び馬を御そうとする鋭い意思がみなぎって居る。これもフォト4と同様現在馬には乗っていないが、我々は数十秒後の堂々とした女性騎馬像の姿を容易に思い浮かべる事が可能であり、又想像をするのも楽しい。いかにも鋭角的で、馬に乗る際気性が厳しくなることが予想出来る。いつも馬に乗り慣れた女性でないとこう云ったスナップフォトは作れないと考えられる。事実彼女は二十年近くのベテラン女騎手なのである。

最後のフォト(6)は、二人ともセミプロの競馬の女流選手で、もう堂々と鞍に跨り、いつでもスタートラインにつけるように準備して居る。日本では恐らく無いがスカンジナビヤ諸国では未だずい分、女流騎手が進出するチャンスが多く残されて居る様に見える。

冬の日には北国では短くすでに真暗で、場内には何十と云う水銀灯が輝いて居る。このシートの約四分後には、スタートラインに女流選手を含んだグループが、一列に並ぶ。これは二千五百メートルレースであった。コース



は長くグラランドの向うの方は夜霧の為かすんでよく見えない。スタート後、私共は双眼鏡で懸命に各騎手を追跡した。五頭の男子騎馬に三頭の女流騎馬が混って、猛然と先頭をうばいあって居た。巨大なグラランドで一周と半分でもう二千五百メートルになってしまふ。ゴール二百メートル程でかなり差が大きくな



る。八番と六番はぐんぐん前方へ出る。婦人騎手とは思えぬ程ラストシートで笞を馬に乱打。女性騎手は夫々二位、三位、五位となった。割れる拍手と歓声が耳をつんざく。女子騎手グループは、男子に比べ何ら遜色なかった。

さておしまいに、最近と云ってもやや古くなるが、ここに、乗馬の習慣のある女性、又はそれを好む女性を一人紹介することにしよう。

彼女は22才になるストックホルムの会社の秘書で、ジュリエッタと呼び、フオトの如くプラチナブロンドに美しく端整な容姿をして

相当なグラマーである。仕事の暇には旅行を好み、趣味も豊かで多岐に亘り、ダンス、料理、スキー、スケート、そして勿論乗馬である。普段は都会で働くが農繁期には帰郷し田園生活をたのしみ、農業牧畜を営む両親を手伝ってトラクターさえ運転すると云う。勿論田舎では乗馬の機会も更に多いに違いない。乗馬の習

性ある若いアマゾンの一典型であろう。このフオトはクリスマス頃のもの。

以上でだいたい今回のフオト説明はおわりたいと思うが、冒頭に述べたように、乗馬は純粋なスポーツである。これをサドだマゾだというようにとり上げるのは、乗馬をスポーツとしてたしなんでおられる人達の不快を買うおそれは十分に考えられる。

しかし、同じ一つのものでも、それを見た個々の人間が、それぞれの受けとり方をし、それぞれの美醜感を得るように、乗馬というスポーツを眺めて、マゾ感覚に作用を及ぼす人間が居たとしても、それがスポーツを冒瀆

していることにはならないだろうことは、今更云うまでもないと思うのである。

従って、乗馬をされる女性方を冒瀆するわけのものでもなく、強いて冒瀆しているというなら、羨望の眼で見詰められる「馬」であろうかと考える。

文中に「サディスティン」なる言葉を使っているが、これは、筆者の主観としての表現であって、乗馬女性即ちサディスティンであるという意味ではないことを、改めて申し添えておく。

筆者の戯れに創った俳句コントめいたものを左記にしてこの稿を終りたいと思う。

天国の白昼夢

- 一、夏の宵、金髪妻の馬になり
ハイハイドウドウ乗りしごかるる。
- 二、美しきハイドパークの馬事公苑
巨大なヒップ、アマゾンに行く。
- 三、夢うつつ、白人妻に組みしかれ
重さに負けて慈悲を乞うなり。

自由詩

アニタ姐さん お馬の練習
それを見ていた痴呆の青年
胸ときめきて 我を忘るる

薔薇と蜜蜂

(12)

第五章 いざない (二)

田代俊夫

41

メロンが王様の寝所へ出頭したとき、王様は白いターバンと青絹の下着だけで豪華な寝椅子に横たわっていました。むろん、例のごとく、あごひげの変装は忘れません。

「よいよい。ゆるすぞよ。もそつと余の近くへ参れ」

床の絨毯に額ずくメロンに、王様は優しい作り声でそう命じます。おそろおそろ近づくと、寝椅子の傍の食卓を指さし、

「まず、充分に腹ごしらえするがよいぞ」

台の上には、パンや肉、果物などが豊富に

置かれています。そこで仰せに従い、メロンは食べはじめましたが、心配のあまり、ろくろく喉を通らないありさまです。

「遠慮はいらぬ。腹がへっては、いくさまできぬと申すではないか」

王様は、そんな暗示的なことをいって、若い娘の人前での小食ぶりをたしなめるのでした。さて、食事が済んだところで、いよいよ獲物の料理にとりかかる。王様はメロンを手招きました。

「これ、もそつと近う寄れ」

メロンことウソップ嬢は、がたがた小刻みに震えています。夜伽未経験の処女の風情が

そこはかと、なまめかしい。若い娘の感じがよく出ています。だが、その心情を思うと、王様に化けたサファイヤは、おかしくって仕様がなない。まず、何食わぬ顔をして、あんまを命じました。

「身を屈めて、余の足を揉むがよい」

メロンは床にひざまずき、王様の御足を揉みはじめます。しばらくして、

「その方、なかなかマッサージが巧みじゃ。今度は、すねと腿を揉んでくれい」

と王様は、一層挑発的な態度に出ます。メロンは早速、指示に従い、その部分のあんまを始めましたが、何となく妙な感じでした。

いうのも、王様の脚は雪のように白くしなやかで、腿はむっちり充実して、そのうえムダ毛一本、生えていないのです。

「どうもおかしい。余は確か、その方に見覚えがあるぞ」

メロンの心中に水をさすよう、王様は昼間の論議をむしかえます。メロンは、どきどきして、

「いえ、そのようなことは断じて——」

「ならば、余の脚はどうか」

「……」

「不審ならば、もっと上を揉んでも差支えないぞ」

王様は露骨きわまりない示唆を与えます。

メロンは、おどおどあんなの手を休めてしまいました。

足揉みサービスはそれくらいで切上げて、夜伽第二部へ移る。

「そちは生娘と聞いたが、しかと左様か」

「は、はい。ピクピク……」

そこで、王様は、いきなりメロンの手を取り、抱きすくめようとします。

「あ、何、何をなされます！」

「いわずと知れたこと」

「お許しを。どうか、お見逃しを」

「うい奴、うい奴。そう震えずともよい」

委細かまわず、王様はその胸に抱きしめてしまいました。メロンは絶体絶命、

「わ、わたくしは女でございますれば……」

「何をとぼけたことを申す！」

と王様、知らぬ顔の半兵衛を決めこむ。メ

ロンは正体露見の恐怖に怯え、必死にもがきますが、鉄のごとき両腕にがっちりとかかえこまれ、もうどうすることもできません。あつという間に、唇を奪われてしまいました。

「い、いけませぬ。今宵は、今宵はなりませぬ……」

メロンは往生際が悪い。

「どうしてじゃ」

「ウ、ウソップは、今、今宵不浄の身でありますれば……」

と、苦しまぎれに珍説を立てる。王様のサファイヤは吹き出しそうになりました。自分の普段使っている専売特許を逆用されては興ざめでしよう。王様はしよっぱい顔をして、

「うそを申せ。大方、何かの錯覚であろう」

と、ウソップ嬢にとりあいません。メロン

はついに万策つきました——。

「……おお、これは、何としたこと！ うぬ

っ、余をたばかりおったなっ！」

メロンの胸もとを探り、そのふくらみの不存在を確認した王様、予定どおりの激怒を装うとみるや、虚脱状態に陥ったメロンを床の上へ放り出す。厚い絨毯が敷いてあるので、腰を痛める危険はない。もっともメロンは、とつくに腰を抜かしています。

さて、一大事。王様は、壁に立てかけた黄金造りの大刀を手にし、刀身すらりと抜き放つや、メロンの眼前に突きつけました。この刀は第27節で女賊紅さそりの寝室から失敬してきた代物ですが、おろおろのメロンは、むろん気づきません。

「しれ者め！ 成敗してくれる。そこへ、直れ！」

王様は威丈高にそう決めつけました。存亡の危機に直面したメロン、悠長に放心状態を続けるわけにはいかず、

「お、お、お許しを！ 命ばかりは、お助けを。うわぁーん、わーん……」

と、大声で泣き出し、王様の足下に身を投げ出しました。

「だまれ！ 余を愚弄したる者を許せると思うか！」

「ぼ、ぼくのせいじゃないんです。ド、ドロップさんのいうとおり、ただけなんですよ

う。あーん……」

共犯者の名前を持ち出せば、責任も半分に軽減されると思っているらしい。

「なに、ドロップの差し金とな。その委細を申してみい」

王様は幾分、語調を柔らげました。そこでメロンはホッとして息を詰まらせ、しゃくりあげながら、女装に及んだ一部始終を、必死に弁明しました。

「で、ですから、王様を愚弄しようなどとは毛頭——」

「ふむ、けしからぬ侍女じゃ」

いかにも心外だといわんばかりに、大げさな身振りで、ウソップを非難した王様でしたが、すぐ語を継いで

「なれど、その方とて余を欺かんとしたるは同罪。よって処断は免れぬぞ」

と、きびしく裁定いたしました。死一等は減ずるが、無罪放免はならぬとの意向でしょう。どっちみち、メロンは助かりません。

「して、その方の本名は？」

「メ、メロンです。ガタガタ……」

「よし、メロンとやら、まずその衣服を脱ぎ捨てい」

まず、何をおいても裸にさせるのが常道で

す。無気味に光る刀身を突きつけられ、メロンは震えながら女装を解消させていきます。普断と勝手が違うものだから、このストリップは手間がかかる。

「何をぐずぐずしておる。早くせぬか！」

「は、はい、只今——」

ついに、腰のもの一枚になってしまいました。だが、これでは未だ不充分。

「脱ぎ惜しみするでない。それもじゃ」

「こ、こればかりは——」

最後の砦を死守せんとしたメロンでしたが「余に逆らう気か！」

と、大喝一声、鋭い切先を肩口に押しあてられては、それまでとなりました。

「ア、脱、脱ぎます……」

かくて、強制ストリップは無事終了です。

メロンは両手で胸を抱くようにして、その場に小さくかがみこんでしまいました。だが、

これでは懲戒の意味がない。王様はメロンの頭髪をわし掴みにして、情け容赦もなく引き起します。

「ちゃんと立つのだ、そら」

恐怖に顔をひきつらせ、ぶるぶる身体を震わせながら、メロンは首うなだれて立つのでした。

「両手は、まっすぐ下ろす。直立不動！」
気をつけの姿勢です。羞恥に全身赤く燃え立つメロン。だが、この場合、メロンならずとも従う他ありません。

王様はそこで、手にした鞘に刀身をパチンと収め、寢室の元の位置に戻すと、改めてメロンの前へ来て、その白い華奢な裸身を、しげしげと眺め入るのでした。

「うむ、実にすばらしい。全くほれられするわい」

その一点に熱い視線を感じたメロン。眼前の偉丈夫が自分の細君だとは思ってもよらず、王様の不可解な科白に一層おじけづきます。

王様は腕組みしつつ、今度はメロンの背後に回って、

「だが、こちらから見ると、とても男とは思えぬのう」

などと、不謹慎なことを言い、亭主のヌード観察を続けます。これからどのような懲罰を受けるのかと思うとメロンは、まるで生きた心地もありません。

王様はしばらくそうやって、ぶしつけな視線をメロンの裸身に注ぎ、久しぶりの再会を楽しんでいましたが、やがて食卓に腰を下ろし、メロンを手招きます。

「これ、ここへ来て余の酌をいたせ」

メロンのヌードを酒の肴に一杯やろうという趣向です。なるほど、ヌード喫茶というのはある。しかし、この場合はバタフライもつけさせないのだから、風俗営業法違反は明らかです。だが、王様は一向頓着する風もありません。これぞ、王者の特権だとばかり、「それ、どんどん注ぐのじゃ。もっと尻を上げて、……馬鹿、そちのヒップではない！」

と、満更でもない面持ちで、芸者ボーイを叱ります。メロンは、ますますじめな思になるのです。その白い肩がわなわなと震え、すんなりした形のいい両脚が小さきみに震動しています。そんな状態のメロンを王様は、さも満足気に目を細めて見やりながら、「肌の白さといい、お尻の丸さ加減といい、全く申し分ないわい」

などと言ひ、メロンに注がせた琥珀色の美酒を、さもうまそうに飲み干すのです。人の迷惑など問題ではありません。

「かわいい手をしておるのう。これ、少し見せてみい」

王様は、つとメロンの片手を取りました。びくっとして、メロンは朱に染んだ顔をそむけます。

「まるで、白魚のような指じゃ。……おや、この指輪は——。ふうむ、その方、独り者ではないのだな」

王様は合点したようにうなずき、自分が以前メロンに買ってやった、その結婚記念の指輪を取り上げてしまいました。メロンは、しゅんと鼻白み、うなだれてしまうのです。

ああ、サファイヤさえいてくれたら、こんなじめな境遇から救ってくれるのに。第40節で、ぼくが早合点したばかりに、この淫蕩な王様の仕掛けた罠にまんまとかかり、これから散々なぶりものにされたあげく、最後には中性人間にされてしまうのだ。ああ、ほかあ、何て不幸な人間なんだろう——。

「これ、何を考えておる。早く酌をせい」屈辱の涙が、ポトリとメロンの足下に落ちました。

このようにして、奇妙な酒盛りは尚しばらく続きましたが、すっかりいい気持になった王様、やおら食卓の下からリコートを取り出し、腕にかかえます。そして、ほろよい気分で瀏亮と弦をかき鳴らし、

「一つ余興に踊りを所望いたそう。余の演奏に合わせて踊ってみい」

と、無理難題を吹き掛けてきました。宴に

歌舞音曲はつきものとはいひながら、メロンは舞踊の素養など皆目ないのです。

「早く踊らぬか！」

「で、でもダンスは知りません」

「何でもいい、とにかくやってみい」

奇妙とも珍妙ともつかぬ踊りが始ります。

へムスンデヒライテ、テヲウツテムスンデ……マタヒライテ……

「もっと元気よく活潑に！ それ、脚を上げて！」

王様はいい気なもの、演奏者兼コーチ気どりで次々に適切な助言を与えます。メロンは今にも泣き出しそうな顔で、身をくねらせ腰を振り、でたらめなダンスを演じます。

へソソラ、ソラソラ兎ノダンス……足デハネハネ、ピョコ／＼オドル……

「そんな兎があると思うか！ 狸のようにぶらぶらさせおって！」

踊りが気に入らないと、声を荒げて叱責する。そのくせ、メロンの調子はずれの間のとり方に腹をかかえて大笑いする王様です。メロンは全身を火柱のように赤くして、屈辱的なポーズを示さねばなりません。

「雀の学校」や「鴉の水兵さん」など、低学年向きの急テンポな曲が何曲か続くと、メロ

ンは、ふらふらになってしまいました。

すると、曲は変って、今度は濃厚なムード音楽が始まりました。メロンは泣きべそをかいて、

「も、もうお許しを」

「この曲を知らぬとは言わせぬぞ。普段、だれかに踊らせていたはず、さ、始めたり、始めたり」

メロンの顔に血がのぼります。知るも知らぬもない、いつもサファイヤに踊らせて、鼻の下を長くして悦に入っていた、その伴奏曲なのです。しかし、そのことを何故、王様が知っているのか、そこに思いを致すだけのゆとりはありません。仕方なく、メロンはまた踊り出します。

王様は、おかしさを噛み殺すようにして、「その方、なかなか筋がいいと見た。将来有望であるぞ」

などと揶揄します。だが、メロンが少しでも手を抜くと、即時、落雷するのです。

「たわけ！ 何という尻の振り方だ。もっとゆっくり回す。そう、その要領。……そこでヴァンプに替えて、はい、脚を上げる……」

メロン君、必死の熱演に王様のサファイヤついにたまらず、ぷつと吹き出してしまいま

した。

ようようにして、全ストは終了。メロンは全身汗まみれ、吐く息も苦しく、床の絨毯にへたりこみました。

しかし、懲戒訓練はこれからが真打の登場です。ふうふう言っているメロンの前に、ずいっと王様が迫りました。片手に細身の鞭を持っています。それを見たメロン、ぎくつと裸身を硬直させて、

「あ、お許し、お許しを。盆踊りでも、美美容体操でも、何でもします——」

美容体操なら、先程の全スト同様、細君の実演を日頃、無料鑑賞しているのです。

「踊りは、もうよい。そら、そこへ四つん這いになるのだ」

王様は軽く鞭に素振りをくれました。ひゅっ、と空気を切り裂く音波に、条件反射的に人間馬のポーズをとるメロン。鞭のおそろしさは第20節その他で体験済みです。

「まず、その方の体力とスタミナを調べてつかわす。余と契りを結ぶ際の参考資料だ」

王様はそんな出鱈目をいい、寝巻のひもを手綱代りにメロンの口にかませました。

——一度ハズを馬にして乗り回してみたかったの。またとないチャンスなんですもの。だ

けど、この泣虫坊や、きつとあとで怒るだろうな、亭主の威信を傷つけられたって。愉快々々——。

王様は鞭を片手に、むんずと短脚馬メロンの背に、打ち跨りました。ずしっ、とくる重圧を受けて、しなやかな背中が柳のようにたわみます。ピシッ、とメロンの丸い尻に鞭が飛びました。

「はい、進行始め！」

かくて、人間馬はのろのろ動き出す。むろん、超安全運転です。メロンの細腰をかつちり太腿に挟みこみ、馬の体力を十分考慮に入れないが、王様のサファイヤは巧みに馬を操ります。乗り潰してしまうとアトに差支えるから、時々は跨ったまま騎手の両脚を床につけて、人間馬を休ませるのです。大切な亭主ですから、第22節のような乱暴な取扱いはいたしません。

メロンの身体が予想外に強靱なので、サファイヤは内心驚きました。すぐへばってしまふと思ったのに、ずいぶん体力が続くこと。しばらく会わないうちに、筋肉に力がついてきたのかしら。そう言えば、背も少し伸びたようだわ——などと推理します。

あ、そうだ、とそこで気がつく。第31節で

わたしがコテンパンにやっつけてやった、あの亭主泥棒の女賊紅さそり、あいつがメロンを専用馬にして、毎晩のように自分の寝室で乗り回したのだ。だから、馬乗られ方が上手なんだわ。「馬」には乗り手のくせがつくという。全く以て、不愉快な現象ではないか。

何をおいてもメロンの身体から、あの女賊の乗りぐせを早急に除去する必要がある。かくなる上は、これから毎夜わたしがメロンの騎手になって、わたしの乗り方を覚えこませないといけない。それが妻としての当然の権利であり、義務なんだから。早く洗脳してしまわないと、いつまでも、あの女のことを忘れないだろう。

——人間の利慾とはおそろしく、右のごとき虫のいい「理論」をも、道德的見地より信奉せしめるのであります。

ところでメロンの方も、先刻からどうも変な具合なのです。というのは、騎手たる王様が薄い絹の下着だけで御乗馬遊ばされているからで、自分の腰を絞めつける太腿の感触やある部分の接触感覚が男性のそれのように思われなのです。それに、でんと背中に鎮座したお尻の弾み加減が、赤の他人のものは考えられない。騎手と馬とがアベコベにな

っているような錯覚さえ起こす。一体、どうなってるんだろう。

王様はメロンの馬を一旦停止させました。

「これ、その方、身体つきに似合わず頑強であるな。乗り心地満点じゃ」

「いえ、それほどでも」

「乗られ方が堂に入っておるぞ」

「そうでしょうか……」

お馬ごっこの御兩人、休息時間を利用して間の抜けた乗馬問答を始めました。

「その方、室内乗馬には多年の経験ありと察した。どうじゃ、図星であろうか？」

知ってるくせに、大仰なことを言って、とぼけます。

「はあ、それは、その……」

「あるのか、ないのか！」

「あ、あります——」

胸に一物ある王様のサファイヤ、馬君との対話を一定方向へ誘導していく。

「して、その騎手とは、その方の細君か」

「いえ、それが、その……」

お馬のメロンは、にぶい。正直に返答するものだから、以下のように話がもつれてくるのです。

「何、細君でない？ 妻以外の女に、さよ

うな振舞をさせるとは、不徳義千万ではないか。その女とは何者だ」

女房が亭主を尻の下に敷くのは、道德的に是認できると思っっているらしい。また、騎手は女であると、メロンが答えない前から、勝手に決めている洞察ぶりです。

「あの、それには事情が」

「申してみい」

「でも、話すと長いですし、第三章を読んで下さい。第18節から第27節までです」

「調子に乗るな！」

王様は語気を荒らげ、メロンの丸い尻をピシャリと平手で引っぱりました。

仕方なくメロンは、馬乗られ態勢のまま、ぼそぼそ事の次第を話し出す。その内、当然のことながら、我が身の現状に思いを致して

胸が熱くなってくるのでした。

「なるほど。サファイヤとかいうそちの妻、豪勇無双ながら才色兼備の絶世の美人と聞くが、しかと左様か」

「は、はい、……シクシク……」

王様はニコニコして、

「クレオパトラや楊貴妃以上の美貌——」

「それは、さっき言いました……」

「その方が深く妻を熱愛しているとは、まこ

とであらうな」

「そうなんです、……クスン、クスン……」

王様は、ますます上機嫌。馬のたてがみ？を優しく撫でながら、

「さもあらん、さもあらん。そのような妻を得て、そちは全く果報者じゃ」

などと、メロンの現況と矛盾することを平気で言い、自分だけ悦に入っています。メロンはたまらず、泣き出しました。泣きついでとばかり、

「うえーん、王、王様、お願いでございませう。ぼくを、このお城から出して下さあい……アーン、アーン……」

「また、調子に乗る！ 事理を弁えぬやつじゃ」

と、再度メロンのお尻をピシヤリ。先程に較べてダメージは、ずっと軽微です。

泣かれると困るので王様は、さりげなく話題を転換させました。

「ときに、その方と不純な同棲関係にあった紅生・姜なるフラチ女のこと、そちはどう思っておるのか」

メロンはここで、第21節同様失敗します。

「はい、気の毒なことをしたと——」

「何、気の毒？」

王様の語調が変りました。ぐいと馬の手綱を引きしぼり、

「さてはその方、まだベニショールガに未練があるみたい。全く呆れたやつじゃ」

と、忿激やる方ない表情を示しました。だが、ここで怒っては自分の正体がバレルと悟り、何食わぬ顔をして

「しかし、両手に花というのも悪くないな。その方、妻の目をかすめて、チョコチョコ浮気したいのであらう」

などと、理解ある態度でそそのかす。メロン君、果然生来の欠所に呐喊してきました。

細君は美人でグラマーなんだが、不必要なほどよくにやきもちを焼くので、うるさくて困る——などと、世間一般の亭主並みのことを、馬の分際ではさくのです。

王様に化けたサファイヤ、もうすっかり、かんかん、

「ふーむ！ すると、その方の望みは、サファイヤを第一夫人、ベニショールガを第二夫人として——」

「はあ、たくさんいる方が張り合いがあるし二人とも平等に愛してさえやれば……」

何たることをユーゴスラビヤ。これは、ミッチリ再教育する他はない。「結婚話」は

後まわしにして、とりあえずもう少し油を絞ってやろう。

「ブウブウとよく舌の回る青二才じゃ。今までは手加減して乗ってやったが、もう容赦せぬぞ。それっ！」

ピシッ！ 馬の尻に鞭が入り、メロンはヒューッと悲鳴をあげました。

初級馬術から中級馬術へと移行します。最初の予定を変更して、徹底的に乗り潰してやろうとの騎手の意向ですから、取扱いも乱暴です。むろん、休ませたりなどしない。女騎手の指示命令は専ら臀部の動きと、手綱、鞭の使い方を通じて伝達されます。前進、後退だけでなく、障害飛越？などもやらせるのです。

「う、うっ、もうお許しを。王、王様、苦しゅうございます……」

「馬鹿者！ 馬が口をきくと思うか！」

いくらメロンが馬乗られ上手だといっても体力には限界があります。長身肉体美を誇るサファイヤが、馬のスタミナも何のその、本気になって乗り回しては、潰れてしまうのも当然でしょう。鞭と重圧で、とことんまで責められたメロン、ついに体力を消耗しつくして完全にダウンいたしました。胸も腹も汗み

どろ。白い背中がぬめやかに光っています。

「だらしないやつだ！ 左様なことで、余の『馬』がつとまると思うか！」

毀譽褒貶は世の常とはいえ、王様はさっきとは正反対の評価をメロンに与え、その弱腰を酷評するのでした。メロンはそれどころではなく、先程の重労働で喉がからからに渴いています。目玉をへこませながら、

「お願いです。水を、水を一杯、下さい」

「ふん、水か。——よしよし」

王様は意外にも同情的態度を示し、食卓上の水差しからグラスに水を注ぎ、床に伸びているメロンの前へ置いてやりました。念のためいいますが、本物の水ですから、誤解なきように。

ああ、うれしや、甘露の水とばかり、メロンが手を伸ばして、容器を掴もうとしたとたん、

「間抜け！ 水を飲むのに、馬が前脚を使うか！」

やはり、そう甘くはなかった。メロンの手首に、ぴしりと鞭が打ち据えられました。

一瞬、鼻白んだお馬のメロン、止むを得ずおそるおそる這いより、口を近づけ飲まんとしたが、今度は肩口をピシリ。簡単には飲ま

せてくれません。

「只はやらぬ。芸当をやってみい」

「……………」

「三遍回ってワンというのだ」

この馬には特別の才能があつて、犬の真似もできると考えているらしい。あまりの屈辱に顔を朱に染めたメロンでしたが、焼きつくような喉の渇きには勝てません。のろのろと緩慢な動作で寝室内を三周し、やっとのこと元の場所へ戻ってくると、鞭を手にした王様が椅子にどっかと腰を下ろし、水がめの前に坐っています。ふうふう息を切らし、容器に口をつけようとしたが、王様の素足がさつとその上をふさぐ。血走った表情のメロン。

「あ、ああ、お慈悲でございます」

「ワンはどうした、ワンは」

「ーワ、ワン」

「よし、今度はおあずけだ」

なかなかOKが出ません。メロンは気も狂わんばかりの思いで、王様の命令に従う。

「よろしい。では、最後にチンチンだ」

メロンは半泣きになって、その屈辱的な姿勢をとるのでした。死ぬほど口惜しいが、服従する他はありません。

そんなメロンのポーズを、サファイヤは口

許に温雅な薄笑いを浮かべて眺めながら、

「その方の妻がこの様子を見れば、何とと思うであろうかな」

などと意地悪く言い、先程の腹いせをするのです。メロンは口惜しさと情けなさにとまらず、ポロポロ涙を流して、この最高の恥辱に耐えました。

「よし、飲め」

待望の許可が、ここでやっと下り、メロンは息もつがず、床に四つん這いのまま水がめの水を飲み干してしまいました。

だが、この程度では、まだ許してもらえません。犬の真似くらいで、サファイヤの腹の虫が収まらないのです。メロンに生色が戻りはっと一息ついたところで、王様は鞭に軽く素振りをくれ、

「両手をうしろに組んで中腰になれ」

と命じました。手を膝にやれば、力士が仕切りに入る前の見合いの姿勢となります。

「余の馬になれるよう、足腰を鍛えてつかわす。兎跳び五百回、始めっ！」

この兎跳びというのは、学校の運動部へ入れば必ずやらされる、一番つらいトレーニングです。デブは真先にあごを出す。メロンはすばしこくて身軽ですから、百回くらいは何

でもない。だが五百回とは無理なノルマで、その半ばに至らぬ内から、腰つきが不安定となって、ふらついてきました。

「何だ、そのぶざまな跳び方は！ もっと元氣よくはねる！……ぶらぶらさせるだけが能でないっ！」

王様は物理的に不可能なことを言って、メロンの弱腰を叱ります。そして、時には背中をびしりと鞭打つのです。その痛さと恐怖にメロンは、はあはあと苦しげに息を弾ませ、顔中脂汗をにじませて跳ねたものの、ついに体力続かず、ノルマ未達成のままダウン。長々と床に伸びてしまいました。

「こら、シャキッとせんか！ 次は、かたつむりの行進だ。両手を頭のうしろで組む」

王様はメロンを足蹴にして、馬・犬から軟体動物へと格下げいたしました。

「お、お許しを。もう、お許しを」

「ならぬ。足腰にスタミナをつける絶好の運動じゃ。——腹這いのまま、膝だけを使って前へ進む。いいか、ひじを使ってはならぬぞ——さあ、進行始めっ！」

メロンの丸い尻に、鞭が炸裂しました。

にわか蝸虫は、うねうねと珍妙な腰つきで動き出す。これも先程の兎跳び同様、相当な

ハードトレーニングです。何しろ、ひじを床につけられないのがつらい。膝と腹だけしか使えないので、尻の突き上げと突き下げが交互に繰り返されることになる。全く滑稽そのものの所動です。何を連想したのか、王様のサファイヤは、くすくす笑いました。

「その方の妻に、この運動を見せてやりたいものじゃ」

などと言い、床の上を行軍中のメロンをからかうのです。だが、少しでもメロンがたるんだ動きを示すと、叱声が飛び、容赦なく鞭が見舞います。むろん、手加減して打つのですが、痛さに弱いメロンのこと、その度に悲鳴を挙げて悶えます。死の行進とは、このことでしょう。

「もっとスピードを出せ、スピードを。本物のかたつむりの方が早いぞ、それでは」

この苦しい運動に、たちまちメロンの身体は汗まみれ、そのため膝が滑って、ますます前進は困難の度を加えます。あごを出し、完全にグロッキーとなつて、もうお許しをと哀願しますが、その返答は常にお尻に受けるのです。悲惨といおうか、愉快といおうか、その形容に苦しみます。とうとう、全力を使い果たし、精根つきはて、蝸虫らしくもなく白

眼を剥き泡を吹いて、完全停止状態に立至りました。鞭の御馳走を与えても、叱声を飛ばし号令をかけても微動だにしません。ほとんど失神しているようです。

このくらいでよかろうと、王様は鞭を捨てうつぶせになって伸びているメロンの前に立ちました。そして、その肩口を軽く足でふみ

「これ、メロン。その方、今少し理性あらばかような目にあわずに済んだのじゃぞ」

お芝居の台本を自分が書いておきながら、無責任なことを言う。メロンはぐったりして反応を示しません。

「まだ、わしの正体がわからぬか。……第39節でその方に会った時以後の出来事、とくと思いかえしてみるがよい」

メロンは、ぼんやり薄目を開けましたが、ハードトレーニングで疲労困ぱいに達し、考える気力もないようです。さればと王様、

「どうじゃ、その方の妻、サファイヤの消息を知りたくないか」

この切札は効いた。仮死者が強電流を受けたように、メロンはびくっと身体をふるわせ瞬時にして蘇生しました。必死の形相で、

「サ、サファイヤがどうしたんですっ！」

お芝居は終りに近づきました。王様のサフ

「アイヤ、メロンの問いに直接は答えず、

「その方はサファイヤと『再婚』せねばならぬぞ」

と、妙なことを言い出しました。

「再婚？」

「第38節と第39節を読めばわかるが、サファイヤはさる国の王となっておる。いいか、男の王様じゃぞ。さすれば、当然『妃』を迎えねばならぬ。が、娘を娶れば自分の正体が露見する。それでは身の安全が危うい。とはいえ、いつまでも独身でおれば、いつかは怪しまれよう。この困難な状況に、対処する方策は、たった一つ。それはメロンを妻にすることだ。メロンはまたとない美少年ゆえ、外見をうまく女に化けおせるのも容易じゃ。それにメロンは、とかく浮気したがる性分なので、妻として後宮に閉じこめておけば、その心配もない。正に一石二鳥とは、このことではないか」

メロンも事の次第が、うすうす理解できてきました。

「でも、どうしてそれを王様は御存知——」

白いターバンと偽のあごひげが、メロンの前に音もなく落ちました。はっとして見上げれば、もうそこには、王様はおられませんでし

た。

「あ、お、お前は——」

と絶句するメロン。サファイヤはペロリと赤い舌を出し、

「最後まで気づかないとは、何てにぶいハズでしょう。でもあなた、わたしの可愛いワイフにはなれそうよ。踊りだって、とってもお上手なんですもの」

そう言って、さもおかしように笑うのでした。

メロンは、カーッと全身の血が逆流しました。思えば、この第41節の屈辱を何とする！どこにそんな体力が残っていたのか、メロンは物凄い勢いでサファイヤに飛びかかりました。

が、さっと体をかわされ、つんのめる。

「よ、よくも、よくもぼくを——」

あとは言葉にならず、何か喚きながら、むしゃぶりつこうとします。そうは問屋が卸さない。

「動物の真似も、全くお上手でしたわ」

笑いながらサファイヤ、隣の部屋へ逃げこみます。からかわれ、ますます頭にきたメロン、逃がさじとそのあとを追ひ、一歩次の間に踏み込んだとたん、足許の何かにつまづき

あっという間に身体が宙に浮き、全然動けなくなってしまう。

こは、そもそも、いかなるトリックに依るか。一本の綱で天井からぶら下っていた霞網に飛込んでしまったのです。出口のないハンモックです。もがけばもがくほど、綱目は身体にくるまるばかり。メロン君、中空約一・五米の高さで宙吊りになっています。

「下ろせ、下ろせ。下ろせたらっ！」

綱の機能に無智なメロンは、尚も必死にあがきながら、怒り心頭に達しています。

「そんなに怒らなくてもいいでしょう」

サファイヤが鳥もちにかかった状態のメロン鳥をのぞきこみました。

「馬鹿野郎！ もう、絶対に許さないぞ！」

「そんな乱暴な言葉使い、困りますわ、あなた。わたしの妃に、なっていたたく方ですのに」

のれんに腕押しメロン、一層怒り狂って

「だ、だれが妃になんか、なるもんかっ！」

「ま、しばらく、このままで頭を冷して頂戴な。いくらもがいたって無駄ですからね。鳥の鳴き声なら、聞かしていただきますけど」

サファイヤはそう言って、メロンの入った網製鳥かごを、ゆっくりとゆするのです。



ミニ・フィクション

襲われた一夜

水 沢 登

きかけたのだ。「ねえ、縛って。きつく」眼を閉じ、その意志をはっきり印象づけるよう夫の背にまわしていた腕を自分の背後に組んでみせた。

夫は不器用であった。結婚して未だ一年にもならない夫は、ベッドの片隅に自ら解き放って、無雑作に抛り出されたままのガウンの帯を引き寄せたが、その手は細かく震えていた。

男なら誰でもが持っているサジスティックな願望を、大胆に表現することに躊躇したのだろうか。それとも妻のマゾヒスティックな要求にとまどったのだろうか。

いずれにしても、小市民としての堅いだけが身上の銀行マン。眼鏡をはずした時に現われてくる生白い、自信のなさからくる、おど

おどしたような眼付き。それでいて、粗野な一面をのぞかせる夫の姿がそこにあった。

乳房の上下をそれぞれ締めつけたはずの帯も、ともすれば緩みがちだった。後手にまわしてある腕も、もっと強く、ぎゅぐゅと縛り上げてもらいたかった。しかし、そこまでする口に出すほどの勇気はなかった。この夫にはこれぐらいがせいぜいなのだろう。苦痛を与えてしまつて妻の気嫌をそこねたら、といういらぬ思惑が、そうさせたらしい。もっとK・Kを読んでくれたらいいのに……。それでも帯にくびれ上った私の豊胸は、夫に新鮮な魅力を与えたに違いない。夫は空きっ腹の子供が、豪華なケーキにとびつくような恰好になった。

私の欲求は、完全なかたちで満たされたも

「お願い。縛って……お願い」

私は、襲ってくる激情を覚え、唇をわななかせながら譫言のように言った。その声は低く、夫は私が喘いだように思えたのだろう。やはり情熱に燃え盛った唇が、私の唇を塞いだ。長いくちづけだった。私のすべてを吸いつくすように、絶息させんばかりにだったが私には甘美なものだった。漸く唇がはなれた時、私はほんとうに喘いだ。むさぼるように空気を味わった。そして、このことで、更に被虐を求める気持の燃え上った私は、夫に囁

のではない。もっと苛酷な、縄目が欲しかった。不満をカバーするために、私は後手に組んだ手をしっかり握って、緊縛された自分を想像し、積極的にイメージの中の被虐の世界に没入してゆこうとした。夫は焦りを覚えたらしい。男としての誇り、優越を誇示しようと懸命になり始めたらしい。しかしその気配が感じられるのに比例して、私の不満感は増した。この人の得意なのは接吻だけなのだろうか。すがりかかる女性を、いざとなると途中で放り出してゆくエセ紳士。ひよっとすると預った荷物は投げ捨て、自分の体だけしか運び得ない登山案内人なのかも知れない。

世の中は春が立ったばかりである。未だ北国や裏日本には丈を越す白雪が、鉛色の雪雲が、そこに住む人々を冬のままの生活に放置しているに違いない。しかし今日の陽気は、五月下旬の暖かさだったという。春一番が、例年よりも早く関東平野を吹き渡っていったのかも知れない。

マンションならいざしらず、東京郊外のこの建て売り住宅では、やはり冬のプレイは制限せざるを得ない。ストーブを焚いても、夫婦は若くとも、夏と同じような思い切ったプレイは不可能に近い。それだけに今日のよう

な日は、夫は、逸ったに違いない。それもいい。しかし、私はまた取り残されたままだったのである。

胸の帯は、すでにゆるみきっていた。エセ紳士は、既に、その正体をさらけ出した。涙が、眼尻から頬を伝わって枕にしみこんでいった。外は今や恋人達の世界であろう。共に生ける者の喜びをわかち合っているに違いない。それなのに私は……。夫はもう穏やかな寝息を立てて眠っている。きっと明日の朝はケロリとして、いつものようにアクビをかみ殺しながら洗面所に行くことだろう。

かけっ放しの深夜放送。ムード音楽が途切れ、女性アナウンサーの甘い声が時報を告げた。午前一時。私はマンジリともせず、このまま夜明けを待たねばならないのかも知れない。

私は突然、寒さをおぼえた。背筋に戦慄にも似た寒さが走った。言いようのない悪寒だった。慌てて毛布をかぶる。ブルーのショーツも、その上につけていた白いドロワースもそのままに、両脚を曲げ海老なりになった。肌に毛布の繊維が快くつき立ってくる。

何度も転々と身もだえた私は、その何回目

かに大きく呻くと息を呑みこんだ。一人の男がベッドの側に、ぬっと立っていたからだだった。スタンドを後にしたその男は、黒々としたシルエットとなって私の眼を射た。

どこからどうして入ってきたのか、どんな男なのか見分ける余裕は全然なかった。あたかも、翼を拡げて棺桶から抜けてでてきた吸血鬼の、無気味な雰囲気包まれてしまったかのような、降って湧いた恐怖。

「誰か、助けて。誰か。あなた」

私は、わめいたつもりだった。しかし、それは声にはならなかった。男は、素早く動いた。ショーツをすくいあげると見る間に、開きかけた口の喉の奥底まで押しこんできたからである。舌はショーツに押しこまれ、今にも嘔吐しそうなになった。胃の腑から逆流するような激しさであった。

その顔に、強烈な平手打ちが、見舞ってきた。左、右、左、右……。猿轡のために唇を切ることはなかったが、反抗の意気は完全にそがれてしまった。呆然自失の態で、詰め物を吐き出すこともできず、ショーツを噛まされたままの頬に涙が流れていった。

涙のベールを通して、夫が起き上がるのが見えた、丁度、高速度の映画を見るようにノ

ロノロと。この場面には全くそぐわない間抜けさ加減だった。と、その体に男のフックが飛んだ。

たったの一撃で、夫は腹をかかえこむように二つ折りに崩れ落ちていった、ボロくずが放り出されたように。おそらく夫は、自分の身に何が起ったかもわからずに気絶したに違いない。

男は軽く上衣の裾を払った。ちょっとした仕事を仕上げた後のような素振りである。そして私の方に大股で戻ってきた。手には夫の使った帯があった。

呪文をかけられたように、私の四肢は硬直したままだった。腕をつかまれ、乱暴にうつ伏せさせられた時、はじめて「縛られる」という実感が湧いてきた。いくらもがいても、男の力は盤石のように強く、エキスパートの精確さで私の自由を奪ってゆくのだ。

後手に縛られ、縄尻を両足首に連結されて無理やり曲げさせられた背景の痛みに呻吟したのは、一瞬といってもよいほどの短い時間だった。自分でもグラマラスと誇っている乳房は、シートと体にはさまれて扁平になり、もたげようとする頭も、異常な姿勢に疲れて床に落ちた。ブルーのショーツは依然として

口中の唾液を吸い続けている。胸を押され、口を閉ざされて息苦しく、絶望感が体全体に拡がっていった。

虫の息のような私に、更に暴力が続いた。髪をつかむと私の首を持ち上げて猿轡を調べた。ショーツが溢れ出ているのを見ると、軽くなずいて乱暴に引き出した。ショーツは唾液と涙でベトベトになっていた。堰かれていた空気が勢いこんで流れこむ。新鮮な空気に舌が口中でもつれた。むさぼるように味わう私は、無意識に男に頼んでいた。「水を、水を下さい」だが返事はなかった。

ストッキングで顔を包んだ男は、まだ一言も喋っては、いないのだ。囚われの身にとつて、言葉のないほど不安なことはない。沈黙の中で男は無惨だった。逆海老の私の頭をつかむと、水のかわりに今しがた引きずり出したショーツをもう一度、口に押しこみはじめたのである。私は口を開けまいと必死になった。既に捕われた身であっても、この抵抗だけは勝たねばならない。そんな私を嘲けるように、男は行動を緩慢にした。唾と涙を吸いこんだつめたいショーツを、口にあてたり鼻をふさいでみたりし始めた。

男は急ぐ必要を感じなかったに違いない。

捕えた鼠をいたぶる猫のような、惨忍さだった。そんなたわむれを繰り返した後にゆっくりと男は鼻をつまんできた。いかに必死であろうとも、呼吸をしないわけにはいかない。いつかは、うっすらとでも唇を開かなければならない。歯の間にじわじわとショーツがもぐりこんでくる。その量が増すにつれて、空気を求めて唇は開かれねばならない。溢れ出るショーツの一部までも、男は私の顔をかかえこんですっかり噛ましてむと、吐き出せないように今度は、唇を閉じさせた。ゆっくりと入念な動作だった。急ぐ必要はないのだろう。朝までにはまだ大分、間がある。男の片手が、自分のネクタイを解いているようだった。

案の定、ネクタイが唇を、歯を割ってくびれこんできた。ついに唯一の抵抗にも敗れた私の口は、大き過ぎる詰め物に醜くも開かれたままで、無情にも固定されてしまったのである。

男は悠々と私の側に腰を降ろす。流石に疲れたのか、煙草を取り出した。用心深く顔にかぶっていたストッキングを、鼻の辺りまでたくし上げてライターをつけた。今までシルエットにしか見えなかった顔の一部が浮き上

った。高い鼻、惨忍さを象徴するうすい唇。私は一瞬に捕えたその部分に言い知れぬ恐怖を感じた。この男は知っている。たしかにどこかで、私の過去のどこかで、見知っている男のものなのだ。眼をこらすうちに火は消えた。やがて香り高い高級煙草の煙が室内に漂いはじめた。

つけっ放しのミッド・ナイト・ムード・ミュージックは、いつの間にかクラシックにかわっている。午前一時半、長い暴力行為も時間にすれば二十分にもみたなかったのだ。甘い旋律はシューベルトの未完成だ。受験勉強に徹夜する学生のために、放送局はポピュラーなものを、えらんだに違いない。

男は一本が吸いつきる瞬間に、立ち上って言った。はじめての声だった。

「未完成か……。こっちも未完成だったな」

その声にも、たしかに、聞きおぼえがあった。昔いつも、聞いていた声、それに違いない。しかし、記憶の糸は、ほぐれてこなかった。「グググッ……」私は猿轡の中で絶叫した。

男が燃え残りの煙草を、私のそり返った背中に押しつけて消したのだ。きつと、夫のほめてくれた肌が無残な火傷を負ったことだろう。

う。男は三たび襲いかかってきた。逆海老をおおむけにひっくり返えされると、すぐ眼の下に、押しひしがれていた乳房が、ふくれ上って見える。こと更に強調された双丘が、男の攻撃目標になった。背中火傷と胸元の苦痛。のけぞる私の体から、脂と汗が噴き出した。耐え難いような激痛と屈辱。

しかし、この攻撃は、私のマゾ性を眼ざめさせるかも知れない。猿轡の呻きは、絶え入るような、すすり泣きに変っていった。しかし、その陶酔も束の間だった。ぐいと引き絞られる激痛が、全身を貫いた。男は、はじめて用意してきたらしいロープを使ったのだ。乳房を避けもせず、グルグルと三重四重に縛り上げ、首にかけて余ったロープを後に送って、後手の縄目をくぐると高々としぼりあげたからである。

責めは、これから始められるらしいのだ。男は、脱ぎ放されたままのドロアースを取り上げた。

「その顔じゃ醜いね」

つぶやくと、それでやにわに、ショーツを詰められネクタイでくくり上げられたままの唇と鼻を掩ってきた。首のうしろで締め上げられ、猿轡は完全に本格的なものとなった。

苦しい。それでも苦しいのに、ほとんど断絶された空気。恐怖に眼をかつと見開いた。眼前に、死を見たからである。殺される。

被虐の欲望なんていうものは、死を直前にしたらば霧散してしまうものなのだ。生きること。死の怖れのないが故に、陶酔も湧くのだ。これこそ本能なのだから。

男は自分のベルトを、ゆっくりとズボンの腰から引き抜くと、おおむけで死におびえつづける私に、近よってきた。生きようと、もがく虫けら同然の私に、更にどんな責めを加えようとするのだろうか。

男が第一撃のベルトを振り上げた時、私はそこに見てはならぬものを見たような気がした。ストッキングに掩われているものの隠しようなないその実態を、感じ取ったような気がした。高校時代に腹違いとはいえ、挑み掛ってきた兄の顔。深夜の帰途、私を強引に暗がり引きずりこんでなぐさみものにした若者達の一人。初めて縄と責めの陶酔を呼び覚まして、消えたダンディなS。いつも男装していたサジスチンのM子。もうろうとしてくる意識の中で、その過去の何人かの中の一人に今、この男と合致するものがあつたことを想

を出す。

しかし、それが誰であるか識別するには少な過ぎる酸素。眼くるめく驚き。私は暗黒の世界、背徳の深淵に吸いこまれるように急速に意識を失なっていたのである。

素肌の感ずる寒さと、喉に流れこむ冷氣とから、私の意識は奈落から再び地上へ戻ってきた。夜の帷は既に巻き上げられ、朝が訪れているのを知った。

枕元の赤いシェードの電気スタンドも明るくなった寝室では輝きを失いかけていた。あれ程恐怖を覚えた息苦しさは嘘のよう。生きている実感を快く肌に感ずると、昨夜の暴漢から受けた拷問が思い出される。逆海老に縛られた記憶が蘇えってくると、ゆうべの出来事を反芻せずにはおられない。

男は、とうに姿を消したらしい。あれ程嚴重に肌を噛んでいたいまわしいロープも、苦痛のベルトも跡形もなかった。猿轡のネクタイも見当らない。

突然くしゃみがでた。とたんにゾクツとする寒さを覚えた。夫に脱がして貰ったままの姿で一夜を過ごしたのだ。陽光のもとで羞恥が生まれる。顔の前にあるショーツに伸ばし

た手を、反射的にひっこめた。やっぱり濡れているのだ。無理矢理にほうばらされた、いまわしい名残りが、歴然と、そこに残っている。私はふるえ上るほどの想いになった。無意識に攪んで抛りなげた。

弧を画いて落ちた先に、夫のベッドがあった。一撃で倒された筈の夫が、ベッドの上にチャンと寝ている。未だ気がつかないのかも知れないが、眼鏡をはずしたその顔は、しまりなく口を軽く開けたまま、夜明けも知らずい汚なく睡眠をむさぼっている。私の受けた凌辱も知らぬげに幸福そのものの姿で……。

私はショーツをあきらめ、ドロワースに手を伸した。鼻口を塞ぎ窒息寸前までに迫いこんだ兇器。やはり、おぞましさは私の手を慄えさせた。だが、思い切って手にした白いドロワースは、しわ一つなく、唾液や涙にも濡れていなかった。不思議な気持ちになった。少くとも私が味わった責苦を知っているはずのそれは奇妙にも何の変化も留どめずに目の前に置かれたままだったのだ。私は思わず首をひねっていた。そして、たしかにしびれる程にくいこんだロープの跡を、確かめにかかった。あれだけ強く縛られたのだから、当然、内出血ぐらいはしているはずだった。だが、

それに答える片鱗さえも見出せなかった。いつも通りの、すべすべした自慢の肌が匂っているばかりなのだ。

こんな不可解なことはない。冷酷な侵入者は、私を虫けら同然に、いたぶっていたのに。しかし、その痕跡は何処にも発見できない。背中でもみ消された煙草の火傷の跡さえもない。感覚的には、たしかに激しい苦痛が残っているというのに。

夢だったのだろうか。私は悪夢にうなされたのだろうか。私自身のマゾ性から、願望が幻覚症状となったのだろうか。だとすれば、体に残る痛みはどうしたというのだろうか。ぐっしり唾液に濡れたショーツは、どう説明したらよいのだろうか。

すべては闇の世界の出来事。混沌として、定かなものはなにもない。謎は私の体に沈澱したまま、永久に溶解することなく暗黒の世界に葬り去ってよいものだろうか。

けれど、動かすことの出来ない現実、私は、やがて眠りからさめるであろう平凡な夫が、今日も銀行へ出勤するための朝食を仕度しなければならぬということである。

つけっ放しのラジオが朝の六時のニュースを流しはじめていた。

読者のウッポン

私にも一言

『本誌自粛の徹底』にふれて

＝ 新宿町人 ＝

雑誌の、はじめの第1ページは、人間でいうなら「顔」である。その月々の編集が、成功か失敗かは、この巻頭言できまる。

右は、私が若いころ、ある婦人家庭雑誌社に入社し、駆け出し記者になりたてのころ、編集長から、くりかえし教え込まれ、今日に至っても脳裡に焼きつけられた言葉である。

だからこそ、ここには、編集長なり、社長なり、あるいは、外部の寄稿家でも、高名人の、エリを正した文章が飾られ、そして短文ながら、読者の胸をうつのである。

いままで、なぜか毎号、目も通さなかったわが奇ク誌の巻頭言を、フト、ある日読んで私は、つくづくなさげなく、また本誌が、かわいそうになった。なぜか。『本誌自粛の徹底』という、この文章が原因である。

—〇—

青少年の保護育成のために、グラビヤは止めました。口絵も全廃しました。サシエも減らします。写真、見出し、キャッチフレーズを改訂します——までは、まだよしとして、末尾の『本誌の発行部数は、最低限度にとどめ、その増大を企てるための努力はいたしません』

とは、よくまあ、ここまで遠慮できたも

の。この文章を書いた、編集長のフンマンやるかたなき表情が、目に浮かぶ。

私は、本誌を読みだして、十六年。とくに27年6月号の本格的SM誌となって以来の読者であり、当時、別途に刊行された『KK通信』まで直接購読、現在に至るまで本誌、増刊からパンフレットのたぐいまで、一号の欠もなく保存している。

十六年間、そっくりバックナンバーを誇る読者は、そう多くはないはずだ。筋金いりの愛読者と、自慢させてもらってもよろしからう。

このぼう大なバックナンバーの、どの号でもよい、いかなる個所にも、こうしたセックスを主テーマとする刊行物でありながら、いわゆるノーマルな、しかし遊びとしての不倫な性行為を、たんに好奇の目だけでとらえる表現は一字もないことは、識者はごぞんじであらうか。

いいかえるなら、社会常識というモノサシで計った、遊びのセックス、いわゆるベッドシーン、ついで掲載されてない。

つまりノーマルな、男女間の性行為の描写が、一字一句もないという健全きわまる事実をである。

このことは、本誌の性格を決定し、その内容なり、編集方針を論ずるうえに、きわめて重大な意味を有するのだと思う。

—〇—

つまり、ひとしくセックスを対象としながらも、すくなくとも興味だけに訴えてないことが、わかるのだ。

世俗的な、ピンク雑誌などとは、異質のものが、ここにあるのである。通俗をねらう、一般大衆雑誌は有名、無名を問わず、作家のシリをたたいて、これでもか、これでもか必要以上に、あの手この手で、いわゆるベッド・シーンを登場させ、読者の歓心を買おうとする。

甚だしきは、春本一步手前の「スーハー」的なものや、文中人物の口をかりて、その快感まで、得々と、しかもリアルに描く。

しかも、公刊誌なるがゆえに、こうした、ズバリ、セックス雑誌が店頭には山と積まれ、平然と、青少年の立ち読みをゆるすのみか、比較的買いやすい価格で自由に販売されている。

その行為のどこに、「自粛の徹底」精神があるだろうか。どこに、自ら『部数を最低限度に止どめ』る良心的編集者の身がまえがあ

るだろうか。

私事にわたるが、私どもには現在二十二才の娘と、二十才のむすこが同居家族としていっしょに生活している。

二人とも、物心つき初めた三、四才のころから、オヤジの秘蔵するKK誌のぼう大な山にとり囲まれて育ったのである。

二人は、文学作品の熱心な読者である。

新刊雑誌は、置場に困るほど買うし、テレビみるより小説がよい。ステレオかけながら目は活字を追うという読書マニアだ。

その二人が奇妙なことに、オヤジの文学全集は読破するのに、絶対KK誌だけは指一本ふれようとしない。

これは、幼時から左様に、きびしく躰け、「読んでよい本、いけない本」を、厳格に管理した、母親の指導よろしく、こうした結果を生んだのだ、と私は信じている。

『青少年育成の上に有害』とかいういわゆる「悪書」を云々するまえに、母親たちは、まず自己の、子どもにたいする読書指導と管理をやりなさい、と体験から私は主張する。

—〇—

思いおこせば昭和2年十五才の時だった。

私は父から、改造社版日本文学全集の、谷崎

潤一郎篇をもらった。

父はうかつにも、例の『少年』のタイトルのみを信用して、少年である私に、自分も目も通さずに、くれたのだろう。

おかげで、私のコプロ癖は、体系づけられて今日に至ったといえるだろう。

URINEの文字を、コンサイスから引いて、あの甘美なおどろきと戦慄が、身内を通りぬけたのは、昨日のことのように、記憶にあたらしい。

それから谷崎にひかれた。ツウ・ウオッチとかいう、しゃれた英文タイトルの小説では「あの女のクソなら、舐めてもいいがな」と、主人公に云わしめた一節にも、脳天を

ガンと一発やられ、あれから四十年の余もすぎた現在も、このシークレットな、甘美な人間の裏面の美しさに目を見張った記憶が、新鮮によみがえる。

大谷崎は、純真な十五才の少年に、甘美なコプロの世界の存在を教えてくれたのだ。

おそらく私は、死ぬまで、コプロにたいするはげしい憧憬を捨てる日はないであろう。

だからといって、谷崎文学を悪書よばわりする馬鹿者は、さすがに一人もない。

発禁にすら見舞われてないのは、ナゼだろ

うか。

今日、KK誌の編集者が、ビクビクしながら？ 不穏な個所に目を光らせ、赤エンピツの大ナタふるうのに、大わらわのとき、それを尻目に一般大衆雑誌が、それ以上のきわどい描写を、これでもかこれでもか、と見せつけるのは、なぜだろうか。

入用とあらば、私は、左様なキワドイ個所を片はしからスクラップしてあるから、いつでもお目にかけてもよろしい。

—〇—

問題は、こういうことなのだ。

一般誌は、そうしたアブノーマルの行為をいわゆるオードブルとして扱い、そのつぎの場面へのチェンジの道具として、たんに興味本位にこれを見るのに反し、わがKK誌は、アブの行為と、オードブルクスのな性行為は、判然と切りはなして考える。

いきおい、アブが、記述の中心になってしまふのに反し、一般誌は、おなじく、女体にムチをあてても、そのつぎにくるケンランたる場面を吹き消す作用をするらしい。

本誌の、グラビア口絵を飾り、雑誌口絵としての常識をみごとに破り、ついに識者から叩かれ叩かれたすえに姿を消して久しい。

私は、ナワとかムチには無縁の人間だが、でも淋しかった。

青少年、と一口にまとめるが、これの定義はアイマイである。すでにおとな顔まけのすごいのだって、かなりいるのである。

小、中、高校が暑中休暇にはいった本日、すなわち七月二十三日の昼さがり、東京山手の高田馬場駅前の書店に、そう、小学校五年生くらいの男児がひとり、コソコソと週刊誌をひろげている。

いくらかくしてもダメだ。裏表紙に、時計会社の通販広告や、はだかのおねえちゃんのカットいりの、下着の広告が出ているじゃないの。キミ、おじさんは裏表紙を一目見りゃ、それがエロ週刊誌くらいなこと判るんだぜ。

そんな思いで、その少年のこせつく様子を見守った。かれは、しきりにヌードに魅せられてるのだ。

一冊としては、ちょこちょこと開き、それを置いては、別のをとりあげる。思うに、思春期の少年としては、はだかの、じぶんより年上のおねえちゃんに、たまらない好奇心とあこがれがあるのだろう。

だから、恥ずかしいのをこらえて、おとな

にまざり（場所がら、ここは、大学生が多いので、受験雑誌など多数おいてあり、夏休みというのに、大入りだった）ドブネズミのごとく、こそこそとヌードに食らいついているのだ。

かわいそうに、と私は思う。

なぜか。

見たいものは、なんとしても見たいのだ。いけない、取りあげられるから、よけい見なくなるのだ。

—〇—

ここで私は、じぶんの小学生時代を思い出す。

とうちゃんは、つれていくだけで、よく洗ってやらないから、と母は私が四年生にもなった夏まで私をおんな湯に連れていった。

いまなら喜こんでついていくだろうが、そのころは、おもしろくもなんともなかった。

友だちのように、一人でいきたかった。

はだかに、興味がないわけでもなかったろうに、あまりアケスケに、さらされちゃったんで、好奇心などは、ふっとんだのだ。

もちろん、当時のおんな湯の、はだかのおねえさんや、おばさんのヌードすがたなど、毎夜のように入浴していやというほどみてい

るのに、今日に至っては、記憶のヒトカケラもない。

こどもとは、そうしたもののなのだ。

もしもそのころ、私の母親が現在のように青少年の保護育成を汗かいてさけぶオリコウサンのママのようであつたら、私を、おんな湯に、さばさばと連れていくようなマネはしなかつたらう。

しかし、くさいものにフタをしても、くさがなくなるわけじゃない。

いつときおさえの、保護育成など、おとなのうわつつらを撫でるような、対策をやったって、効果はないだろう。

おんな湯に、いやがる私の、耳たぶまで引っぱって、連れていったオフクロのぼうが、あるいは、保護育成の本道を進むように思われてならない私である。

—〇—

地方の都市ではどうか知らないが、東京の国鉄の駅には、『悪書追放箱』とかいうものが設置してある。

『買わない、売らない、読まない』の三ない運動を達成するために、団体さんがこしらえたものだ。

お父さんよ、ピンク雑誌は、家庭まで持ち帰るな。会社で早いとこ読んじまって、ここへ放りこんでください——という主旨には共感できるが、しかし好奇心の旺盛な青少年たちは、かえって、この箱のために、悪書の存在を知り、よけいのぞきたがるような結果を招いてないだろうか。

ここに『悪書』取り扱いのむづかしさがあるのである。

—〇—

私は、識者に設問を呈したい。

こんにち、サケ、タバコ、シンナー、マージャン、パチンコ等々、いわゆる青少年の育成に有害なものが街にハンランしている。

ストリップ劇場の毒々しい、裸の看板の前に、修学旅行でやってきた、地方の中、高校生が、立って、じっと見入ってる風景などはしばしば新聞ダネにまでなった。

しかし、こうした成人むけの『悪』の存在を、認めないわけにはゆかないとして、ならば、それらの製造元は、それらが青少年の手になたらないようにするため、どんな努力を重ねているだろうか。

本来ならば本誌が、大切な人間でいえば、顔ともいふべき巻頭言を割いて、自らの自肅

を宣言しているひそみにならって、

『酒は、青少年の保護育成のために、きわめて有害な面があるので、当社の酒はアルコール分を弱め、いっさいの有害成分を取りのぞきました。呑んでも酔わない、水のようにうすくなったのは、そのためです。なお、売上げ増大をおさえるため、自から販売促進のための努力はいっさいせず、できるだけ製造数量をおさえ、その販売量は最低限度にとどめ、その増大を企てるための努力はいたしません』

と、一本一本、現品に表示させるべきではなからうか。

盛り場の、人の行き通りメインストリートのビルの横腹に、とほうもなくでかいネオン看板があがっている。文面にいわく『きょうも元気だ。タバコがうまい』と、きた。

よけいなことをネオンで宣伝しないで、でも、左様な上すべり文句をどうしても書きたいなら、それと並べて、

『青少年の保護育成上タバコは有害です。売らない、買わない、吸わないの三ない運動に協力しましょう』

と、バカでかい文字の看板を、専売公社に

掲げさせるべきではなからうか。

識者のみなさんの、賢答を得たいものだ。
ふしぎなことに、青少年保護育成の声が大
きい地区にかぎって、書店での本誌の入手を
求めるのは困難になりつつある。

書店側は、仕入れをやめたのではなく、お
やじに言々と、奥からこっさり持ってくる。
予約しておかないと買えなくなり、古本店へ
出るバックナンバーの影までひそめてきたよ
うである。

そのくせ、わがKK誌よりも、何オクタン
カ上の、すげえ雑誌が、堂々とまかり通るの
は、くり返えし言うことになるが、なんとも
奇妙な現象である。

一〇一

そして、一流婦人雑誌を頂点とし、女性週
刊誌に見るセックス記事のハンラン。

クンニリ……云々という用語がある。

むかしは、活字にするさえはばかられたこ
の用語が、こんにち、女性のあいだで公然と
使用され、電車のなかで、堂々と、つかわれ
ている、と、ある高名なルポライターは、報
じている。

しかし、本誌のどこを用いても、左様な、
“いやらしい”ナマの学術用語は、ありはし

ない。

小説作者や、体験の告白を寄せる人々は、
周到な考慮をめぐらし、カナ七文字で、かん
たんに表現できるこの用語すら、使用を自粛
し、遠まわしな表現で、それとわからしめる
手法をとっている。

したがって雑解である。

とても書店の店頭で、あわただしく眼を走
らせて、理解できるような、生やさしいもの
でない。

やれ、体位がどうの、バリエーションがど
うの、上位だ、下位だ、そんな好奇心をとも
なったセックス記事などお呼びでないところ
が、本誌の身上らしいけれど。

グラビヤを割愛し、表現をセーブし、自ら
手をもぎ、足を斬って、本誌は、自肅の姿勢
をとりつづける。

それなのに、まだ、悪書よばわりされるの
は、なぜだろうか。

愛読者として、私は合点がゆかない。

卒直に云って、高々本誌をズタズタに斬り
さいなんだところで、日本の、いわゆる悪書
なぞが、影をひそめる、とでもお考えだった
ら、それはナンセンス。

それよりも問題は、家庭においての、読書
と管理こそ大切だと思う。

悪書追放に血まなこになるのは、結構だけ
ど、それと同時に、併行して、健全な読書指
導をも行なわなかったなら、あなた方の目的
は、永久に達成できないであろう。

あなたがた、おかあさまが、ノーマルのも
のさしで計った『いかがわしい雑誌』を、公
然と山と積んでも、青少年たちが見むきもし
ない風潮のおとずれる日こそ、青少年の保護
育成は、りっぱに実をむすんだということが
できるのだろう。

きょうも、近所の古本店に立ちよったら、
ちやうど都の若い役人が、ピンク雑誌の調査
にきているのにぶつかった。

その若い役人は、あまり知識がなく、ただ
本誌あたりを、ピンク雑誌と思いこんでいる
ようであった。ベテランの店主は、

『告々も注意して（本誌を示し）この種の本
は、十八才以下のこどもには売らないように
気をつかってるんですが、むしろ一部の週刊
誌のほうにねえ』

と、駅の売店でも、スイスイと、無造作に
（誰にでも）売られている男性週刊誌の名を
あげていた。

有明友之助

「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」

と、いって殿様を凌ぐ豪富を称えられた大地主の話がある。アフリカ、ガボン共和国で成功した日本人、有明友之助の富ははかりしれないという評判だった。一説には、ガボンは勿論、相当数のアフリカ諸国の経済が、何等かの形で、陰に陽に、有明にコントロールされているといわれている。そうなってくると、有明は、新興諸国家の大統領より実権が

あるということになる。「せめてなりたや大統領」といったところか。

しかし賢明な有明は決してその権力を表面に出さず、巧妙な手段で分散陰蔽していた。そして、彼自身も、世界中を旅行して、いつでもどこに彼がいるのかわからない程であった。彼はユダヤ人やシナ人のように、コロニーを作って勢力を伸ばすという方法をとらなかったのである。コロニーはしばしば国家権力の反揮を招き、思わぬ被害を蒙ることがある。インドネシアやベトナムなどで、富んでいるからという理由だけで射殺されてしまった華僑の実例があるではないか。



第三回

——前号まで—— 新津謙介。世界中に起る不思議な、美女失踪事件を追う捜査官。怪しいウィリー夫人の船上パーティに招待された世界の美女たちは、カンヌの沖合で原子力潜水艦の中へ連れ込まれる。中国女優の王明齡、日本女優望月レイ子、イギリスのジュリー・シェリバン等五七名だ。その他は全員海水に漬けて溺死させた上、ヨットもろとも吹き飛ばしてしまふ。潜水艦は奴隷のように鎖でつながれた乗組員で操作されていた。指揮をとっているのは裸の美女達、エミーという日本女性とその司令で、捕獲された犠牲者を等級別にする。

そこで、むしろ彼は国家権力の内ぶところへ飛び込んで行くといった方法を選んだのである。言いかえれば国家権力そのものが、彼の出店であり支店であったといってよい。そして、彼等に巨大な利潤を与え、ホンの少しの分け前を彼がとった。投下した資本に対して、彼の取り分はおそろしく低かったので、国家権力は、自尊心を傷つけられることもなく、それによる事業もほとんどがうまく行くという結果になった。

しかし、事實は彼がそんな甘くなかったことがはっきりしている。国家権力に物を売るプラントメーカーにしても商社にしても、大なり小なり、なんらかの形で有明の影響下にあったからである。たくみなカラクリで、秘密の利権が設定され、それが雪だるま式にふくれ上って行った。

わずか十数年後、独立を目前にしたガボンへ乗り込んだ有明友之助はそのとき乞食同然だったという。彼の成功のきっかけとなったのは、彼がイブンディの近くで、新しいウラニウム鉱山を発見したときからだった。彼はその利権をあっさり、国に譲り渡してしまった。見通しに優れた彼は、ウラニウム鉱山のようなものは、しがみついていただけでは

国家権力の干渉を招き、ひいては、彼自身の命取りとなりかねないということを感じていたのである。ガボン政府は狂喜した。何しろ、この新興国家の予算ぐらいは、この鉱山からの利益でまかなえるからであった。実際のところ現在では半官半民のフランスビル・ウラン鉱会社が莫大な利益を上げている。反対給付も物凄かった。新興国家にとっては今日の経済が先決問題であって、今現金を払わないで済むことだったら、大抵のことは聞き入れてくれたからである。有明が代償として公けに与えられた利権は多種多様で複雑だった。一つ一つをとれば、どれも大したことはないように思われた。役人たちは、折角のウラニウム鉱山の代りに、こんな利権で満足するなんて馬鹿かお人好しではないかとさえ思っていた。彼等は、その利権がもたらす相乗効果を知らなかったのである。

とに角、一九六〇年八月にガボンが独立してから、彼の諸事業は一気に上昇した。そして有明友之助は今やアフリカにおける新興財閥の随一のしががったのである。そして、その公表された天文学的な財産でさえ、秘かに彼が自由にできる全体の富に比べたら氷山

の一角だとさえうわさされていた。

そんな有明友之助なのに、私生活はきわめて質素だった。ガボンの首都リーブルビルにある彼の自宅は、ごくありふれたフランス人の持家を買ったものにすぎなかったし、世界的な富豪がするように、マイアミやモナコに別邸を作るといった様子も見られなかった。

ただ一つ、彼の贅沢といえば、「希望」号という航洋ヨットを持っているということだけかも知れない。それに乗って、彼は世界の隅々にまで旅することを好んでいた。

彼の完成した事業組織は、日常彼の存在を必要としないようになっていた。つまり、黙っていても毎日彼の財産は自動的に増えて行く。そこで、彼は気尽に世界を股にかけられるのである。

有明は四十才に近づいた今でも、独身を通していたが、女に不自由するような男ではなかった。中でもリーブルビルの社交界あたりで殆ど公認の間柄とされていた相手は、彼の美人秘書、星恵美子である。

有明の前身はほとんど知られていない。功成り名遂げた今、彼の名前は当然日本にも聞

えて来て、日本のマスコミが海外での成功者などといってニュースにとりあげはじめてから、色々と調査が行われたけれども、諸説紛々として、どれもこれも推測の域を出なかった。ただ、彼が大戦末期に、十四、五才の少年時代、空襲で両親を失った戦災孤児であることは、有明自身の口から語られたことなので、間違いはないことだとされている。

それかあらぬか、彼は不幸な境遇に置かれた少年少女に激しい愛情を示した。彼の事業が或程度成功の段階に達した一九五五年（昭和三十年）から百万円の年金を日本の孤児達に提供しはじめた。

その他、世界の各地、特に低開発地域で彼の援助によって発掘され、育てあげられている青少年たちは数えきれない程である。その頃、悲惨な交通事故で一挙にみなし子となってしまった星恵美子は、まだ十才を過ぎたばかりの可愛い小学生だった。当然施設へ行かされるところを、有明が救いの手をさしのべたのである。勿論、彼が、自らしたのではなく彼の依頼で行動している三村弁護士が一切を取りはからったのだが、すべてがトントン拍子に行って、恵美子は、有名なミッシェン・スクールの寮生となることが出来た。それ以

来、有明は恵美子にとって「あしながおじさん」となったわけである。

学生生活で、彼女は天性の伶俐さを示して見事な卒業成績をあげ続けた。とりわけスポーツを好み、万能選手の名声をほしいままにしてきた。その上、年頃になるにつれて生れ



ながらの美貌が次第に磨きあげられて行ったので、才色兼ね備えた美少女として、しばしば国際会議のホステス役をつとめたり、雑誌の口絵を飾ったりした程だったのである。

彼女の自覚が固まるにつれて、有明に対する敬愛と思慕は嵩まる一方だった。大学に入った年の夏休み、渋る三村弁護士を説きつけた彼女は、ガボンへ飛んだ。何年もの間、アルバイトでためてきた、貯金三十万円を投げ出して、自分の力だけで行ったのである。

有明を一目見た瞬間から、恵美子は彼のために、一生を捧げる決心になった。それは男女の愛というよりは、主従の誓いといった方が適切なくらいだった。哀願する彼女を、何故か有明はかたくなに拒否した。しかし、恵美子はいくじけなかった。有明の下で働かせてもらえるなら女中でも何でもよいといった。彼女の願いを聞き入れてくれなければ、自殺してしまうとさえ叫んだ。さすがの有明もホトホト持て余したのか、それなら大学を卒業したとき改めて相談しようということと妥協してしまっただけである。

三年の歳月は、恵美子の初一念を忘れさせるどころか、反対にますます強化させる役割を果たした。一度会って以来、彼女の頭の中に住みついた有明のイメージは、一日一日と熟成され大きさを増して行ったからである。

有明も次第に彼女に惹かれるようになったらしい。大学を卒業するのを待ち兼ねるようになり、彼女を自分の個人秘書に採用したのであった。そして自分の秘密の一切を打ち明け、彼女をその共犯者としてしまった。従って数多い有明の秘書グループの中でも、第一等の地位が、この大学を出たばかりの小娘に与えられたのである。

テル・アビブ

津田は打ちひしがれたような気持でパリを離れた。疑惑は殆んど確定的となっていたが、さて、今一息というところで具体性を欠いていたのである。

それより彼のパリ滞在中に起こった怪事件で、大切な証人と思われたマリ・フリーエールが、死んでしまったらしいということにも、彼は何かこだわりを持つのだった。

カンヌ沖でのキャロリーヌ二世号の突然の

爆沈は、捜査当局の努力にもかかわらず、何の進展も見せなかった。

死体も極く一部しか揚がらなかった。その中に主人役、ミセス・ウィリーの遺体も含まれていた。しかも、爆発時の衝撃で無残に半身を引きさかれていたのである。

津田が不審に思ったのは、死体の中に、マリーをはじめとして、若い女たちのものが、一体もなかったことだったのである。

大、小のちがいはあっても、彼の調査している一連のリストの中に、当然加えるべき事件のように思われた。

しかし、それとても「疑い」の範囲を一步も出ることが出来ないのである。壁に打ち当たったまま、新津は帰国することになった。

帰路は南廻りをえらんだ。ニューデリーとマニラにあるインターポールの出張所で打合せの要務が残っていたからである。

パリを午前十一時に発ったエールフランス一九六便は午後五時十分テル・アビブ空港についた。給油その他の整備で一時間待たされることになったので、所在のないうままロビーの中をあるき廻っていると、ベンチに腰かけている素敵な日本女性が目についた。まだ二

十三、四でもあろうか、それでいて中年の貴婦人といった気品と落ち着きがある。服装なども決して華美ではないが、パリの最もうまいベスト・ドレッシングにもひけをとらない位のシックなスーツを着こなしていた。そんなわけで、色とりどりの国際線乗客たちが右往左往するなかでも、とりわけ目立って見えたのである。行き来する男たちが、チラッと流し目で通りすぎるのがよくわかった。こんな女こそ、あの不可解な「神かくし」の餌食にされるんじゃないかな——と四六時中、頭を離れない問題と結びつけて考えたりする。新津とて木石ではない。サングラスをつけていることに力づけられて、何気ない風を装いながら、その女に近づくと、背後に立って見た。

女は熱心に新聞に読みふけていた。その一面に写真入りの大見出しがあった。フトそれに目をやった新津は、息がとまるようなおどろきを覚えた。その写真は、あの不幸なキャロリーヌ二世号のありし日の姿だったではないか。この女の読んでいたのは、例の遭難事件を詳細に報じている古新聞だったのである。

もう容易に気づかれたと思うが、新津が目をつけた女こそ、星恵美子であり、もっと種あかしをすれば、エミー司令その人でもあった。運命のいたずらか、何の気なしに読んでいた新聞のおかげで、彼女は不覚にも新津謙介を刺戟してしまったのである。

しかし、その新津を又、かなり離れたところから見張っている男がいた。有明が恵美子のためにつけたボディガードである。空手や柔道で、腕には自信があったので、彼女はボディガードなんか要らないと言ったのだけれど、万事に慎重な有明は、見えかくれについて行くようにといって、フランス警察官あがりのジャン・シュレッサーを派遣したのである。巨大化した有明の事業は、彼個人のための国家のような組織を必要としていた。私設警察といったような機関も当然あるべくして作られて行ったのである。ジャンは、そういったグループの一人として、高給で雇われていた。

恵美子が背後に視線を感じて振り向いたときには、もう新津の巾広い背中だけしか見えなかった。丁度、アナウンスが塔乗開始を告げていたので、彼はゆっくりと機内へ戻った。

窓から見ていると、彼にとって不審な女が、つまり、星恵美子が前方のタラップの方へ歩いて行くのが見えた。彼女は新津と同じ飛行機のファーストクラス乗客だったのである。

思わず窓ガラスに額をおしつけるようにしてみつめていたので、隣のシート、今まで空いていた座席にジャンがすわったのに気がつかなかった。国際線はツーリストクラスでも座席指定があるが、ジャンはスチュアーデスに頼んで席を変更して貰ったのである。

職業的直観でジャンは、新津が警察官か探偵らしいということを見破っていた。それだけに相当慎重に行動しなければならないと思っている。ただ、この日本人が何故、恵美子に目をつけたか、その理由だけが知りたかった。だから、若干の危険を覚悟の上で、新津の隣に席を占めたのである。

誰でも旅行をした経験のあるものならわかることなのだが、隣席の印象は案外希薄なものである。何かのきっかけで話し合う機会があれば又格別であるが、特に外国旅行の場合には、言語の関係から一層厚い仕切が隣席の人との間に生れてくる筈である。そんな訳で、新津がジャンに余り、関心を持たなかったのも、あながち無理からぬことといわなければ

ならない。

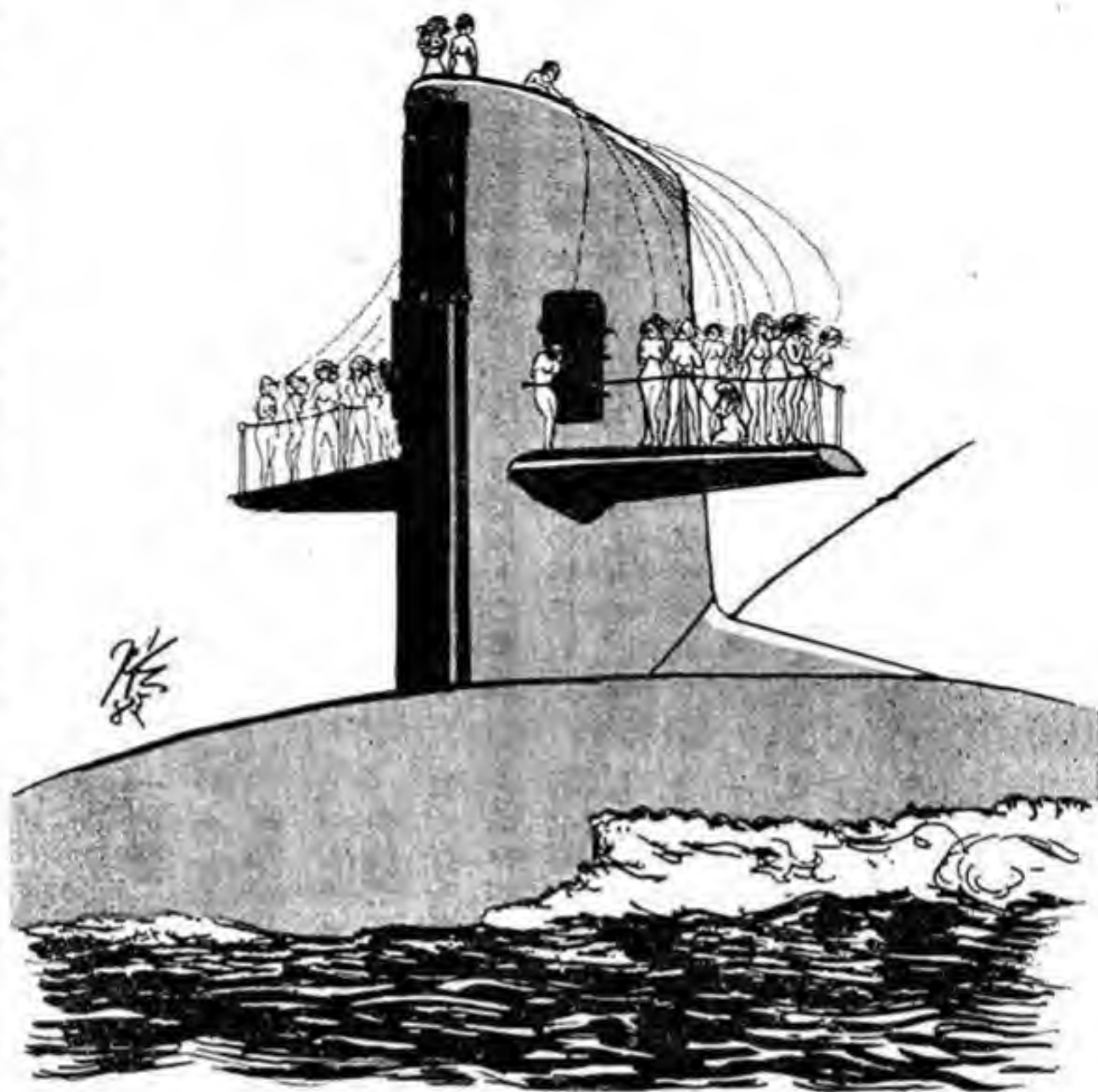
で、しばらくすると新津はブリーフケースを開いて書類整理をはじめた。ジャンは勿論せい一ぱい横目をつかつて、怪しまれない限度で盗み見をしようとする。新津のような相手だと、余程用心をしないと視線を感じられてしまうおそれがあったから、ジャンにとっても容易なことではない。

しかし辛ろじて断片的に覗き見し得たところから、ジョセフィーヌとマリイ、不幸な二人の姉妹の失踪に関する調査報告らしいということがわかった。ジャンは彼女達と有明および恵美子との関係を知らされてはいない。そこで、事件の背景を想定する力がなかったけれども、この二人の姉妹の名前だけは胸にしまっておくことになった。

テルアビブを十八時に出発したエールフランス一九六便は、廿二時廿五分にテヘラン空港に着く。

標高千二百メートルの高原では、日中の猛暑を忘れてしまったように夜間は涼しい。爽かな気持で機外へ出ると、新津は新鮮な空気を胸一ぱいに吸い込むのだった。彼はこのままニューデリーへ飛ぶ積りだったから給油中

のスタンバイの間、待合室へでも行って見る積りだった。しかし、目の前をスーツと通り過ぎた女を見ると、全く突然に予定を変える決心になった。いうまでもなく、彼が目をつけたのは星恵美子なのだ。彼女は入国口へ歩いて行くではないか。彼はタラップを駆け上



に乗り込む。わけのわからないアラビア語でしゃべろうとする運転手の首根っ子をつかまえて、ゆびで前の車を指し、追ってくれと手まねをしながら、素早く五ドル紙幣をちらつけてやる。空港からダウンタウンへ八キロばかりの路程はタクシー代で五十リアルにしか

って、ブリーフケースだけを掴むと、入国手続をするカウンターへ急いだ。

幸いこの国に入るには、二カ月以内なら査証は要らない。つまり思い立って行くには、きわめて簡単な国である。エールフランスの事務員に一日遅れるから荷物はニューデリーで保管しておいて貰うように依頼すると、ロビーへ飛び出した。丁度、タクシーへ乗り込もうとする恵美子の後姿が見えた。見失っては大変と、すぐ後の車

ならない。五ドルといえば約三百八十リアルにもなる。運転手は、大喜びで前の車を追った。ジャンを乗せたタクシーがもう一台、新津を追っているのを、彼は依然として全く気づかなかった。

恵美子を乗せたタクシーは、ダルバンドホテルに横づけになった。暫くして次ぎ次ぎと二台のタクシーがその玄関に着いた。こうしてホテルは、三組の客に夫々三部屋を提供することになった。けれども、その三人をつなぐ運命の絆を洞察する者は、誰一人いなかった。

日 光 浴

東経六十五度、北緯十五度といえば、インドとアラビア半島の間にあるアラビア海のド真中である。どちらの大陸からも数千キロを離れた海上である。

世界一塩分が強いといわれるねっとりした海水が、強い陽光にてらされて静かにうねっている。その紺碧の海面をかきわけるように浮上してきたのは、原子力潜水艦「ネプチューン」号だった。

高い艦橋のハッチが開かれると、数人の裸

のアマゾン達がとび出して来た。白い肌が快晴の太陽を受けて、キラキラと輝くばかりだった。

エミー司令は、ガボンの沖合で有明のヨット「希望」号と会い補給を受けたときに、有明の秘書、星恵美子その人に戻ってしまい、秘密の任務につくことになった。そして、彼女は今やテヘランの一隅、ダンバンドホテルで目をさました頃だったのである。

潜水艦の司令は、従って、文官ながらミセス・ウィリーが代理することになった。で、司令塔の中では、ひときわ目立つ彼女の赤毛が風になびいていたという次第。

勿論実際にアマゾン達乗組員の指揮をとるのは、もとミス横浜だったタイピストの高橋淑恵である。彼女も、もともとこの艦に収容されている哀れなけいれと同じように、この巨大な秘密組織に誘拐された一人だった。それが数々の試煉と努力を経て、今やアマゾン女兵たちの高級将校となり、ネプチューン号の副長ともなった。

ミセス・ウィリーが高橋副長にいった。
「異常ありませんか」

いつの間にか艦橋の上では、折畳みのレー

ダーが高く伸びてグルグルと廻っている。インターフォンが男の声で異常のないことを告げた。無言でミセス・ウィリーに頷いてみせる高橋副長、小柄ながら均斉のとれた肢体、ピッチリと胴をしめつける白いなめし皮の制服がそれを一層強調するかのように見えた。
「又、十名ぐらいずつ、日光浴をさせましょうか」

「結構ですミセス・ウィリー。すぐに手配をいたしましょう」

高橋副長はなめらかな英語で、必要な命令をインターフォンにあたえた。

やがて、全裸後手縛りの姿を、はずかしげに、身をちぢめながら捕虜たちが一人、二人とエレベーターをあがってきた。彼女等は、司令塔の中間に飛行機の翼のように左右にひらいている水平舵の上に導かれた。司令塔の上から吊り下った細いロープの束、その一本一本に後手が結び合わせられる。海中に落ちるのを防ぐためである。

「三十分間、日光浴をさせる。自由にしろしい」

高橋副長が手すりから身をのり出すようにして、メガフォンで叫んだ。

——後手にしばっておいて、何を自由にしろというの——

唇を噛みながら望月レイ子は思った。彼女も、この潜水艦の二等囚としての日々に、漸く馴れはじめていた。もっとも、気性の強い彼女は、あれ以来、事毎に激しい抵抗をくりかえしてきた。特にアマゾン女兵たちが全部日本女性であることに憤りを爆発させた。しかし、機械力をそなえた非情な強盗団には、所詮彼女の抵抗は、彼女自身を苦しめる以外の何者でもなかったのである。丁度、アフリカのサハリのように、生けどりにされた野性の動物たちが、最初こそ檻の中で必死にあばれまわるけれども、やがてあきらめておとなしくなっていく過程に似ていた。非人間的な扱いに、心中は屈辱に慄え、怒りにうずまいていたが、物理的な管理には抵抗しても無駄だということをさとりはじめていた。

最初、彼女は尻にチクリとする刺戟を感じて眠りからさめた。ところが、頭からスッポリかぶせられている厚い麻袋が、完全に彼女の自由を奪っているのを知って夢中でもがいた。

それは外から見れば、芋虫がくねっている

ような滑稽な見物にすぎなかった。アマゾン女兵の一人が彼女の尻のあたりに、麻袋越しに気付けの注射をしたのである。

足首だけを出して転げ廻るレイ子の芋虫をおさえつけるようにして、兵士達はレイ子の靴を脱がし、その足首に皮製の枷をつけた。その枷は夫々別々に鉄の鎖に連なっていた。

「オーケー」

と一人の女兵士が叫ぶと、忽ちレイ子は逆吊りになってしまった。激しい痛みが足首を襲った。全身の重みが足首に集中したからである。レイ子は、思い切り悲鳴をあげたのだけれども、厚い麻袋にさえぎられて、何やら迫力のないくぐもり声が洩れるにすぎなかった。

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

た。勿論兵士たちは、そんなことに頓着する筈はなく、革バンドで麻袋のまま、レイ子の胴のあたりを縛ると、それも天井から下っていた鎖に引っかけて留めた。つまり、望月レイ子は三本の鎖で天井から逆吊りにされたことになる。こう書くと、面倒なようだが実際は、わずか数秒のことにすぎない。

そしてレイ子の両足首を麻袋と一緒に縛っていた紐が解かれると、まるで手品のように両脚がひっぱられて行った。足枷に連なった鎖が急速に反対方向に引かれたためである。

麻袋はスカートと一緒に腰のあたりまでまくれて、胴を吊った鎖にひっかかって留まっていた。レイ子の身体は丁度逆吊りのままY字型にされてしまったのである。しかも足首を引張る鎖は、まだ止まらなかった。そしてY字がT字になるところまで行って漸く動きをとめた。彼女の意思にかかわらず勝手に動かされて行く両足に、袋の中のレイ子の上半体は哀しいもがきをくり返すのだが、それも、どうにもならない。靴下が切りさかれると、あとは巾十センチばかりのパンティである。

しかし、その白い小さな帯さえ、悪魔の手から免れることが出来なかったのである。無造作に鉄が入れると、切れはしが前後に

ダラリとたれ下った。麻袋の中の彼女は気配でそれを知って慟哭した。それとても、どうすることも出来ない無力感に、身体中の力が抜けるような気がする。麻袋の中に顔があることが、まだしも救いといえた。悲情な女兵士の手は容赦ということを知らないらしく、た。豊かな臀部が引きさかれそうにつよく張られたまま、彼女の気持を表わすように慄えていた。

「おや、バージンですね」

「女優には珍しいこと」

勝手な会話が上の方で聞えてきた。

測定器具が肌に触れる毎に、手術でもされるような感覚で、ゾツと総毛立ち、いい知れぬ怖しさで、レイ子の全身は鳥肌立った。

プスツと内股に注射針が刺さる。ミックスされた予防注射液に、バランスが混ざっている。恐怖の余り気がふれてしまわないように精神安定剤をつぎこんでおくのだ。

動きまわる固い異物感のおぞましさ。何やら訳のわからない術語と一緒に、色々の計数値が読みとられて行くのを、麻袋越しにかすかに耳にしながら、望月レイ子はまたもや次第に気が遠くなって行った。

(未完)

牧高志氏に捧ぐ

帯紐よ永遠なれ

古留節人

(1)

日本婦人の和服美は、世界の女性風俗中でも、白眉のものとされている。その素材、色彩、デザインの美しさは、いうに及ばず、衣服とアクセサリーとの調和、日本女性の体位との適合性、これらの諸要素の総乗が和服美を形成しているのである。

市村清氏は、かつて女性の和服美を称して「拘束美」とあるという意味のことをいわれたがまことに至言だと思う。何故なら女性の

和服はこれを着装する手段としての帯紐の拘束を措いては、語ることができないからである。私は寧ろさらにこの語意を強めて「緊縛美」と呼びたい。事実肌つきの細紐から帯締めにいたるまで、日本女性の肉体を縛りつける帯紐の種類とその数、さらにはその着装の複雑多様性は、世界でも全く類例が見当らない。

平林たい子氏はその作「愛と幻」の中で、「帯や伊達巻をきゅっ、きゅっ」といって冷い着物に着替える。女が着物を着るのは何



本も紐を体にしばりつけることだと言ってもよい程紐の数が多」と述べておられる。

西欧にも女性特有と思われるファウンデーションとかアクセサリーなどのさまざまな道具による締めつけが行なわれてはいるけれども、それらは到底、和服の帯紐の複雑多様性には較べられない。

未開発地域の女性風俗の中には、幾多の金環、布、蔓の類いによってなされる ligature を見ることが出来るが、それらは日常締めた

り解いたりすることのない代物だから、着物というよりも、寧ろ肉体装飾品として認められるものといえる。もっとも締めつけの厳しさ、つまり緊縛の強度だけでいえば、これら諸外国の道具のうちには、和服の帯紐の締めつけよりも数段厳しいものもある。

その或る物は女性の肉体の奇形に変えさせるほど、過酷な品さえもあるほどだ。敢えて遠国に例を取らなくても、隣国中国では戦前の婦人達は平服のズボンの紐を肌との間に指を入れることもできないくらい、厳しく締めつける風習があった。それがため彼女達の胴体は、その紐の締まる箇所だけ極端にクビレで、胴体を一周する一本の深い条痕が肌から消えることがなかった。日本婦人の坐りダコと、この中国婦人の胴の条痕とが、当時日本両国婦人を識別する有力な証拠とされていたものだった。

(2)

和服美については牧高志氏によって様々な研究が重ねられ、そのユニークな挿絵と共に我々に提供して下さっている。賢兄の研究分野の広さといい、その造詣の深さと情熱の激しさについても、私は多大の敬意を抱いてお

るものである。

中でも帯を締める位置に関する見解は、軽輩である私も大いに首肯される所があった。昭和の初期が締め位置の最も上方に上った時代であることは、正にご指摘の通りである。広帯の上縁が、ほとんど脇の下に届くまでに胸高々と締め上げられた帯つきの姿は、可憐な娘役だった滝花久子の「君恋し」のスクリーン写真に代表される。

兎に角その当時の女性達は、今の若い人達には想像もつかないほどの熱心さで彼女達の帯紐を胸高に、しかも厳重に締め上げていたものだった。それがため、当然乳房は高く上方に押し上げられるか、広帯の下に圧しつけられるかしなければならなかったし、肋骨を余りに緊しく縛り上げたために胸郭の変形をきたした。下肋部の圧迫によって胃袋は下垂し、下腹は丸々と太鼓のようにふくらんだのに反して胃袋を失った鳩尾は空虚になって深く陥没した。即ちチャールズ・D・キブソンの描く蜂腰美人の形容語である「ノー・ストマツチ」の状態にさえなるものが多かった。要するに、この時代の帯紐の存在と価値とは、あたかも西欧におけるコルセットと同断であったといっても過言ではなからう。そう

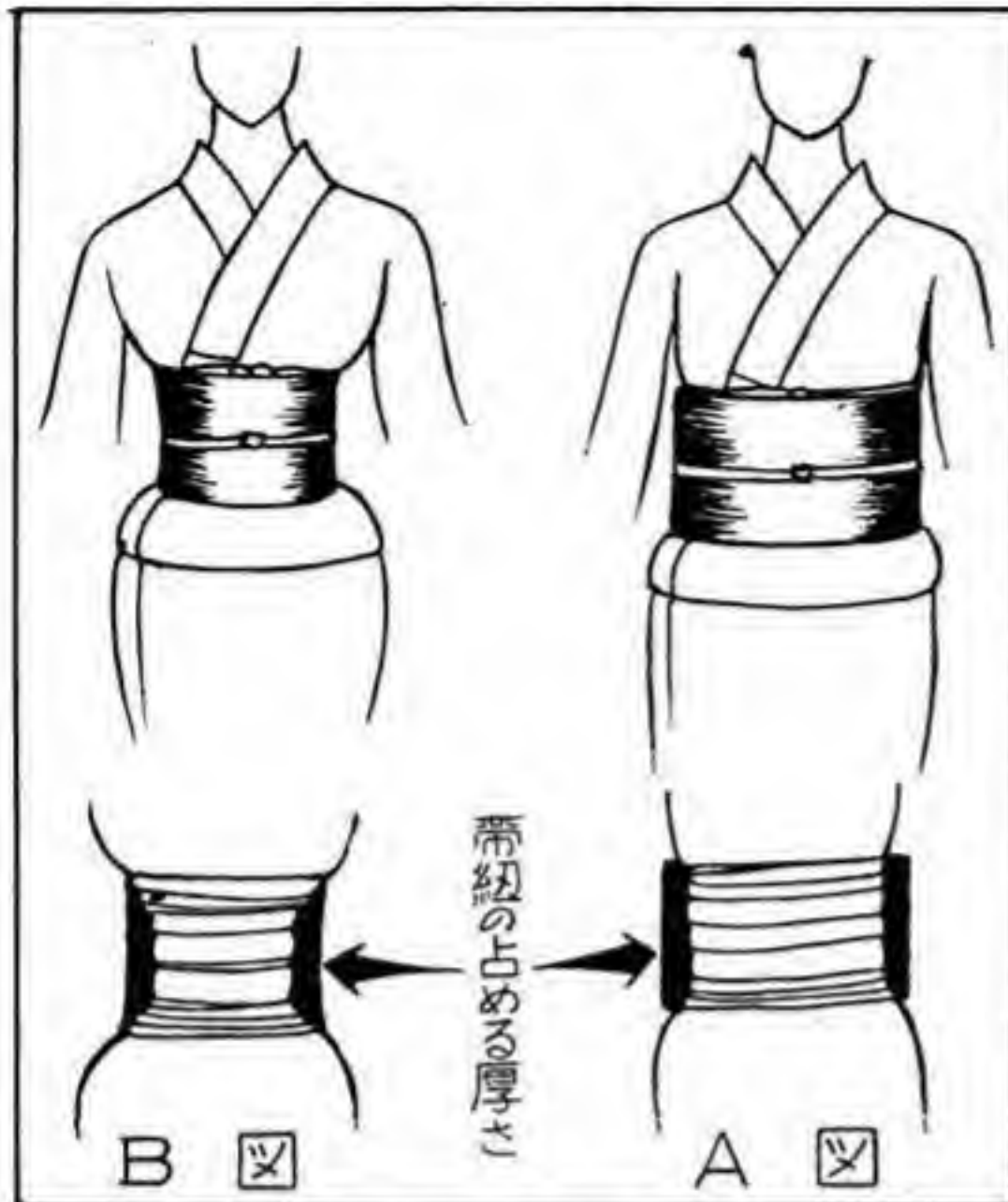
いう時代に少年期を過ごした私にとっては、女性の和服の美しさは、帯紐の緊縛美に外ならないのであり、これ即ち女性美の極致であるとさえ心得ていた。長ずるに及んで「女性」は縛られた時が一番美しい」と信ずるようになったのも、その源は、この辺りに由来しているのではなからうかと思われる。

これは余談だが、今ここで「女性」といい「女」と呼ぶことを敢えて避けたのは、表現上の一つのアヤである。つまり、私の女性に対する好みは、優美さ、淑やかさ、可憐さにあってその容貌も体質も気性も、全てがこれらの語義の範疇に入る女性を好む故である。

(3)

私にとって、女性服装における帯紐の存在価値は、単的にいえばそれがギリギリに厳しく締めつけられていること以外にはない。その素材、色彩、デザインがどんなに美しくても、又どんなに、綺麗なお太鼓が結び上げられたとしても、それらの帯紐の全てが、女性のか細い胴中に厳しく食い込むように締め込まれていなければ満足を得られない。

例えば帯を締めた時、その表面が着物の表面よりも外側に出張って見えるような帯の締



め方(A図)は嫌いである。帯つきの姿は、丸で糸巻に巻いた糸のようにふくらんだ形状であって欲しくないのである。締め上げた帯が、着物におおわれた体線よりも内側に食い込んだ姿(B図)をこそ好むものである。

これを美人画に例をとれば一層解り易く説明できる。伊東深水画伯の描く美人は、その広帯の前に小鏡や紙入れの類を沢山押し込んでいるかのように突き出た状態である。これに対し岩田専太郎画伯描くところの美人は、広帯が乳房の下に深々と喰い込むほど締って

いて、胴と帯との間には、帯の上からも下からも手を差し入れる余地が全くないように、密着している作品が多い。つまり私は岩田画伯の描く美人画のような帯つきの姿が好きなのである。

話が少し横道に外れるが、「手を差し入れる余地が全くない」といえば、少年の頃入院した病院での、私の付添看護婦にこんな人がいた。

彼女は白衣の腰に締めるウエスト・バンドをいつも必要以上厳しく締めつけている人だった。当時看護婦の締めるバンドは

巾六〇センチ。長さ二メートルもある白キャラコを幾重にも折りたたんで、帯巾一〇センチほどに仕上げ、頑丈なバックルで止める式のものであった。これはバンドの布を緊急時にいつでも三角布や包帯の代用に供する用意のためだと聞いた。彼女は、この厚くて固いバンドを胴との間に手を差し込むことができないくらい締めつけるのが好きで、少しでもその間に緩るみがあるのを嫌がった。それだから寧ろ太りじしと思われた彼女の体格にも拘らず、その胴は巾

広いバンドに締めつけられたウエストだけが瓢箪のように細くクビレて、そのバンドの下に連なる曲線が、子供心にもまぶしかった。

その時の彼女のウエスト・サイズがどのくらいだったかは分らないけれども、色白で優しいお姉さんのような娘盛りの彼女の中くびれの腰付きに限りない魅力を感じた私なのだ。但し、今使われている看護婦の白衣のバンドは薄くて巾も狭く、あのころのような迫力に満ちた腰付きの人を見ることが、できなくなったのは如何にも寂しい。

(4)

和服の着付けは、女達にとって兎角難儀なこととされている。従って着付けのコツを伝授する教本が沢山出版されているわけだが、これを要するに帯紐を如何に上手に締めるかという一事に尽きるようである。

特に当節の若い人達は近代生活の影響に慣れ、身体の発達の具合も昔日と大分変化を来たしている。それがため、着付けの教本もまたこれらの若い人達を対象として編まれたものが多く、それらは例外なく次のように指摘している。即ち

「和服は直線美を基本としているから着付けにもこれを重視しなければならない。特にウエストのクビレた人はその俣で着付けをすると着くずれのおそれがあるから、予じめ胴にウエスト・パットを入れるなりして胴線を平らにした上で帯を締めなさい。帯紐は無暗と締めつけることを避けて楽に着こなすようになさい」と説く。

このようにして、自然の肉体的凸凹を平たくして帯を締め込むから、前記のような糸巻状の女が現出することになる。何故もっと体線の美しさを強調しては、くれないのだろうか。胸の隆起やヒップの豊かさを、あからさまに表現した着付けの開発に努力してはもらえないのであろうか、と残念に思う。まして生理衛生に熱心な余り

「帯紐は身体に跡が残らない程度に締めれば害はありません」

などと説かれるに至っては、情なくて涙が出る。

若い娘達の中には

「着物は帯が苦しいから嫌!」

という女がいるけれども彼女らは女性特有のM性向を、自ら放棄してしまっているのだ

ろうか。これとは逆に

「帯をキツチリ締めると身も心もシャンとして気持ちがいいから好き!」

という女もいる。人には各々に考えもあり好みも違うものだから、自分と異なる意見や嗜好に対して、相手を兎や角いう可き筋合いではないことぐらいは、充分承知しているものの、私は当然後に挙げた帯を締めるのが好きな女性に微笑をもって賛同し、軍配を揚げることにはいささかも躊躇しない。

新吉原最後の日も近い一夜、店口に佇んで私に呼び掛けた女の艶姿が、不図先日のことのように追想される。

屋内の電光を背に受けて、逆光の中に立つたその女の顔は灰白く憂いを帯びて、無造作に束ねた髪型が、全盛期の入江たか子を偲ばせた。濃青色の単衣に、黄色の広帯をキツク締めつけたその女の胴は、ゴヤの描いた「キルバ公夫人」の胴のように細々とくびれていだ。胸元から骨盤の上縁までの中間が、カナリヤ色の広帯でギリギリに締め上げられていて、その締めつけた帯のシルエットが漏斗のように、下すばまりに細く狭搾されているのであった。夜目にも鮮やかな色彩の着物をピツチリと着こなしたこの女の、中くびれに締

めつけられた細腰の美しさに、それを見た瞬間、実に素晴らしいものとして心から感動したことであった。

(5)

洋装全盛の現今ではあっても、時偶私の好みに合った和服の着付けをしている女性がないこともない。胴の体線にピッタリ合わせた帯紐の締め具合を鑑賞することは楽しい。

和服の女性に出会うと、私はその女の帯紐の締め数が何本だろうかと考えるのが習慣になっている。それは宛かも世の多くの男性諸君が洋装の女の肌に着けた下着の色や形状を秘かに想像するのと同様である。

観察の対象になる相手の女性は、年令、職業、環境などに適応したそれぞれの着物を着こなしているから、帯紐の種類や、その締め数、締めつけの度合などもさまざまである。が、一般成年女性の普段着なら、少なくとも六、七本程度の締め紐が、彼女達の胴中に締め込まれているはずである。眺めやる女の帯紐の締めつけの具合が特に著しい場合には、それらの帯紐を頭の中で、一本一本解きほどこいて行きながら、その帯紐の下で締めつけられ、痛めつけられているであろう胴体の形態

が、自然の姿に較べてどのように変形しているであろうか。肌色がどんなに変色しているだろうか、などと思ひ廻らして、独り楽しむこともある。

盛装の時とか、特殊な職業の女性ならば、帯紐の数は十本から十二本、さらにそれ以上に及ぶこともある。このように数多く締め上げられたこれらの帯紐は、西洋風のベルトのように、胴をただ一卷きしただけのものは帯揚げと帯締めだけに過ぎない。その他の全ては二巻きも三巻きも、或はそれ以上も女達の細い胴体を巻き締めているわけだから、その締め紐の一卷きずつを勘定して見ると、この限られた部分が一体幾筋縛られていることになるのだろうか。概ね帯紐の本数の二倍強と推定すれば誤りはなさそうである。

去る二月初旬の11PMで、司会の藤本氏とカルタ取りをしてミスが続けた芸者が、その罰としてミスある毎に、一本一本帯紐を解いて、着物を脱がされる場面があった。

勿論この芸者のミスは、番組を面白く見せるためにする芝居であり、着物を脱がせるプロセスを楽しむ余興なのだが、長衣を一枚脱ぐまでに実に七本もの帯紐を数えることができたのは嬉しかった。長衣を脱いだその下に

は、当然長襦袢を着ているから、それに必要な伊達巻や腰紐を締めていたし、さらにその下に着付けた下着類にも、それぞれに付属した細紐による緊縛が、なされているわけである。

如何に着物を着慣れた職業婦人だからといっても、それらを息をするのも苦しいまでに締めつけている道理はないし、それでは肉体的にも長時間の勤務に耐えられはしないが、毎日のお座敷着に、要する帯紐の数を考えると、お勤め柄とはいえご苦労千万と申し上げ度い。むしろこうした着付けをすること自体に何等の抵抗をも感じない彼女達に哀憐の情を抱かせられる。

芸者の着付けといえば、祇園の舞妓達のダラリの帯の着付け役をしている男衆が、私には羨やましくてならない。何人もの若々しく柔らかな女の肉体を、毎日男手の力の限り心ゆくまで締め上げ、締めつけながら生活し続けるこの人達こそ、男冥利に尽きるという可きであろう。

(6)

「帯を解く」という言葉は、大変含蓄のある言葉として用いられている。要するに、女が

男に肌を許すことの象徴として、意味づけられておる処に男達にとって魅力があるので、これを西欧風に表現すれば「コルセットの紐を解く」とでもいうのであろう。

ところで私にとっては帯を解くということよりも、反対に帯を締めることに異常なまでの魅力を感じる。これは元より、縛られた女性を熱烈に愛好する性向の現われに他ならない。男性が女性の帯を解く姿を愛するのは当然のこととして、女性の着付け姿を愛好する男も相当数はあろうと思う。

姿見の前に立って背伸びするようなポーズをしながら、女の力を振り絞って腰紐をキリキリ締めつける姿。衣紋をつくり、おはしよりを決めてから、巻き絞る伊達巻の厳しさ。伊達巻を引張る方向とは逆に身体をよじるようにしながら細腰に巻いては締め、締めては巻く度毎に「キュッ! キュッ!」と鳴る伊達巻独特の布擦れの音。大きな広帯を締め上げ、お太鼓を形どるために反り身になって鏡台を覗き込む真剣な眼差し。上手に着付けし終わって、気持ちよい身体の締めまり具合に微笑む満足気な女の顔。

「愛してるよ!」

とは、M性を自覚してか知らずでか、斯く

も自縄自縛に熱中する女の、いじらしい仕草の一部始終を飽かず眺めた男の口から思わず漏れる一言であると思う。

多くの帯紐類の中で最も貴重なものは広帯であることは勿論だが、着付けをする上で最も重要な地位を占めているのは、伊達巻と腰紐である。従って、その他は、それぞれ役目の違いこそあれ、補助的性格のものと解される。腰紐と伊達巻とによって着付けの基礎が完成されなければ当然その着付けは落第である。その意味から離れて、この二種の帯紐は他に較べて最も厳しく女の胴を縛り上げる道具であるという点で、私はこの二品を最も好む。この二品を身につけた女性の姿を心から愛する。その情愛の程度は、晴着の上に着飾った豪華な広帯姿より勝ること数段であるといえる。

腰肌深く喰い込むばかりに締め込まれた腰紐の厳しさ。細胴をくびり切るかのように絞り上げられた伊達巻の美しさ。その何れにも私は、筆舌に尽されない魅力を感じるのである。

(7)

胸高帯時代の末期、水島早苗という女優が

花嫁の着付け写真のモデルとして撮った組写真が雑誌付録に載っていた。その幾つかの写真の中で彼女の伊達巻姿が未だに忘れられない。

それは伊達巻をただ胴にグルグル巻いていくのではなく、骨盤の上端の辺りから巻き始めて次第に上胴まで巻き上げ、胸元まで及ぶ縦長の締め方をしていた。その締め巾は広帯の巾よりも広いほどに思われた。しかもその締めつけ方の厳しさがまた格別で、恐らくこの女優の体質が特別柔軟なためと思うが、伊達巻のシルエットが締めつけられた巾だけ一直線にしばらく、まるで細い茶筒を胴体に嵌め込んででもいるかのように細く、長くくびれていたのであった。

これを西欧風に表現すれば Pipe Stem であり、Tubular waist であるわけだ。

伊達巻は巻くだけが目的のものではなく締め上げるための道具である。それ故キツク締め上げて巻きおさめた末端を、胴に狭んで置くだけでは締め緩むおそれがある。そこで両端に別の細紐を縫いつけ、この付け紐を結んで緩まない工夫をしたものもあるし、予め布地を織る過程で、はじめから末端部を細紐状に編み込んだものさえできた。それがさらに

進んで伊達締めが生まれて来たわけではあるが、この伊達締めよりも伊達巻の方がはるかによく締めまり、美しくさを感じさせる。

その主な原因は生地の変遷によるように思う。博多織りにしろ、ナイロン製にしろ、細腰に巻き締められた伊達巻が光線を受けて、胴の丸みの為に艶やかな光沢を放っている風情は、伊達締めでは味わえない悩ましさを持っている。当時着付けに厳しい女性の中には伊達巻を二本繋いで、倍の長さにして使用した例もあると聞く。この婦人は特別に肥満体であった訳でもないのだからその締め付けが如何に厳しいものであったか想像がつく。こうなるとコルセット顔負けの緊縛がなされるわけである。

(8)

腰紐はそれを締める部位と締め方が非常にむづかしいものらしい。その締め場所や締め加減には人それぞれに個性もあろう。が要は着崩れしないための着物の押さえに過ぎないものである。にも拘わらず、着付教範には例外なくこの腰紐の締め方の講義が、重大な項目として飽きもせず繰返されている。この腰紐は胸高帯時代の到来する以前は、明らかに

骨盤に締めていた。明治生まれの私の母は、戦後までも終生腰紐を骨盤に固く締めていたが、当節の女は骨盤よりもっと上の方に締めている。これは胸高帯時代に衣帯の下縁が上がり過ぎたため、おはしよりの位置も上に上らざるを得なくなったからであろう。或は教本の説明にもその一因があるのではなからうか。「腰紐は、骨盤の上にキリッと締めます」と多くの先生はおっしゃる。

はじめ骨盤の上といったのは、骨盤そのもの。骨盤に締めるという解釈であったものが骨盤の上という「上」の意味が、「骨盤よりも上の方に」という風に理解が変わったからではなからうかと思う。それは兎に角として今では骨盤に腰紐を結んでいる女性は何んぞ老人の外には見られなくなった。骨盤を締めるのならば安定も良いし、どんなに強く縛っても内臓に影響はない。しかしそれより上のウエスト近りを締めるとなると、腰椎骨以外に全く骨のない柔らかな胴部に締め紐を安定させるわけだから締め方もむづかしくなるう道理である。

先に述べた昔の中国婦人の話ではないが、現代日本女性のウエストには肌深く一本の腰紐の条痕が、喰い込んでいるのではあるまい

か。

女優京マチ子の話として、彼女は腰紐をいつも余りに強く締めつけるので、長衣のその部分に当る背縫いの縫い糸がほつれてしまうのだそうである。

岩田画伯は骨盤を固く縛って肌深く喰い込んだ腰紐の美しくしさを迫真の筆致で表現して下さる第一人者である。そして伊藤彦造画伯は伊達巻姿の艶やかさを鮮やかに描き尽して下さる得難い人材である。長襦袢に腰紐、伊達巻という後ろ姿が同氏によって描かれた場合、帯紐の厳しい緊縛の状態はいうに及ばずその締め付けの上下に連なる丸やかな肉体の曲線の魅力に至るまで、微に入り細を穿って描写し尽されていることである。愛妻の不貞を怒った某氏に依頼されて、彦造画伯が描かれた「吊るし責め」の名画をプリントながら知っているが、その凄まじさは、格別である。これは同氏の理解力と表現力の卓抜さを示す証左である。

今述べた、伊達巻姿の美しさにしても、凡庸の画家の真似のできない筆力が示されていて、見る者にエクスタシーを感じさせずにはおかない。

(9)

広帯の魅力は、即ち和服美の魅力の尤たるものであることは誰しも認める処で、その種類も、その品質も、価格も他の帯紐と較べものにならない。この広帯の締め付けによる肉体的弊害については、明治期以来多くの学者先生によって論じられて来た。既述のように極端な緊縛を原因とする胸郭変形や、帯圧の加重による呼吸不全。内臓の転位。その転位も、単に在り場所が、移動するだけに止まらず、腎臓に縦皺が刻まれたりする例を挙げられている。

こうした事柄についての詳細は、それぞれ専門著書に譲ることとして、例によって私自身の偏向的嗜好から見るならば、上記の肉体上の弊害を伴うほどの厳しい緊縛がなされればこそ、広帯の価値があるのであり、魅力が生まれるものと信じている。その意味では芸者衆や日本舞踊家など和服のプロフェッショナルが、胴の外側にハミ出しそうに帯を緩る目に結んで、いわゆる巧者に着こなしている姿よりも、和服の着付け一年生の娘達が、着崩れを心配する余りギリギリに括り上げているいじらしい姿に愛しさを感じる。

帯を何故胸高に締めるかという問題に関して賢兄牧氏は、某芸妓の言葉を借りて、締めつけた帯の下方に張り出した下腹部の魅力について、論及されたことがあった。なるほどその通りだと私も賛同する。度々の引用で恐れ入るが、コルセット姿にしても、その締め付けによって行き場所を失なった内臓の一部が下腹部に押しやられ、風船のように脹らんだ形状を特に好む国柄（例えばフランス）もあるのだから。

帯を固く締めた女性が、正座した姿は美しい。しかもそれが三指を揃えて淑やかに挨拶をしたりした時、広帯の圧迫によって、下胸が真二つに折れてしまうように感じることもある。下腹は当然ブツクリとはじけるように前方に押し出され、帯の下縁が、その丸々した腹部の奥深く切れ込むように喰い入っている。その帯圧は胸の両の乳房から脇腹にまで、ひしひしとその緊縛の度合の激しさを伝えていく。広帯の上縁と下縁とによってくびられた肉体が、帯の上と下とで急激に反撥する豊満な隆起。しかもその隆起した肉体が、着衣によってピッシリと反撥力を閉じ込められながら、なおさら脹らんで見える悩ましい曲線。帯つきの姿としては盛装直立のポーズ

よりも、こうした正座姿にこそ、強いマゾヒスティックな魅力がある。

(10)

帯の厳しい締めつけによる肉体の反発的隆起については、兵児帯の締めつけもまた興味深い。殊に兵児帯の前部に帯板を入れて固く縛り上げた胸元の美しさは、若い娘達にのみ見られる魅力となっている。

娘の中には、自分独りの力では締めつけが物足りなくて、他人に頼んで、締めつけてもらっている人もある。「これ位ではどう？」「否々。モットよ。ウンと力一ぱい締めて！モットきつく！モットきつく」

M性向を露骨に示したこういう娘を見てみると、思い切り縛り上げてやり度い欲望にかられることがある。

帯板といえば、岩田画伯の作品中には帯板ぬきの広帯の美しさを、表現されたものが数々ある。帯板を帯に挿んだ場合、帯の前面は横に屈折のない平らな弧線を描く。帯板がない場合は、胸の屈折に従って帯の前面に横襷ができる。特に普段着に締める、生地が軟らかいものには横襷がよく出る。この横襷の美しさ、そして横襷と平行して帯の中央を横切

る帯締めが、帯に喰い込むように固く締め括られている形状を、胸の曲線に密着した美しい姿として描いて下さった。

一方、胸高帯の美しさは、牧兄ご指摘の通り、田中比左良画伯によって、いかん無く表現されている。特に大きく突き出た下腹の球形の面白さは氏の独壇場であった。

(11)

近頃改良帯とか新種の着付道具が色々出て回ってきている。それらはいずれも着付けをする女性達のさまざまな労苦を幾らかでも軽減し、和服を現代的簡易生活のテンポに遅れさせまいとする、積極的かつ善意の企図でなされていることに、深甚な敬意を払うのに吝さかではない。

けれども、帯紐が世界に類例のないまでに発達し、重要な意味を持っている日本女性の衣裳は、わが国の服飾文化が、到達した一頂点を示すものであり、これこそ世界に誇り得る、文化的貢献であると理解している私にとっては、右のような簡易製品の発明普及は決して嬉しいことではない。「帯紐よ！願わくば日本女性と共に永遠なれ！」私は心から声高く叫びたい気持である。

(完)

= 平家物語 (第三回) =



奈良炎上

黒
湊嬰
一

治承四年十二月一日。

時限の断層から十二世紀に迷い込んだ信乃と賀集子は、未だ脱け出せずにいる。

何とかして出発点の伊東へ辿り着き、二十世紀への入口を見つけないのだが、襲いかかる戦火はその隙を与えない。

琵琶湖南岸一帯、瀬田から山科にかけては野も燃え山も焼けた。数千の兵馬は山城、近江を縦横に疾駆している。

× × ×
京都は反平家ゲリラの中に孤立していた。福原遷都半歳の間に形勢は斯くも悪化したのだ。西方の山陽、山陰は平家の勢力範囲だったが、東の近江には源氏を称する盗賊的集団が蟠居し、北方の若狭もこれに応じ、園城寺の残党も加担し、南都の諸寺は武装中立を称えているが明らかに敵対勢力であり、最も友好的な比叡山の同盟も信頼に値しなかった。

「近江源氏を討伐せよ」

清盛は左兵衛督知盛に近国平定を命じた。知盛は清盛の四男。智勇兼備の名将である。

当時、山下義経、柏木義兼等の近江源氏は飛騨守景家の家人を殺し、瀬田沿岸の船舶を奪い、北陸道の貢物を掠めて京都の経済に大打撃を与えていた。延暦寺の上層部は親平家の態度を保ったが、これを不満とする過激派三百余人は山を下って近江源氏に合流し、甲賀入道義重や錦織一党等これに協力する者多く、総兵力一千余と玉葉には記されている。

京都の治安を確保し、美濃、尾張へ出征中の平家勢に対する補給を維持するために湖南掃蕩は是非とも決行しなければならなかった。

知盛を主将とし、忠度、資盛を副将とする精兵三千は直ちに京都を出撃し、和仁、堅田

を襲った。海軍提督知盛の指揮する海兵隊は平家の最強部隊。水陸両用作戦に熟達し、琵琶湖の平水や沿岸は最も得意な地形である。

十二月一日は終日の激戦。夜から翌二日の朝にかけて山下館は遂に焼き落され、近江源氏は四散敗亡、一部は三井寺に逃げ込んだ。

× × ×

「お姉様、火事よッ」

賀集子が撥ね起きた。

「只の火事ではありません。放火ですよ」

信乃も潜伏していた庫裡から駆け出す。

戦火は遂に園城寺を焼き立てた。

三井寺は嘗て以仁王や頼政の挙兵に際し、

これに依じて平家に挑戦し、知盛、忠度の討伐を被って寺域の大部分を焼かれていた。福原遷都後は平家の監視が遠退いたので復興に努めたが抱るべき坊舎墨澤は未だ少く、地形も平坦で本格的な防禦戦には不適當だった。

然も清盛は在京親衛兵三千を七男清房に授けて電撃戦を推進した。平治の乱における名将清盛の面目躍如たるものがある。

郎党が奔る。僧兵が潰走する。学僧、稚児が逃げ惑う。三井寺の境内から大津の町並にかけては一望紅蓮の渦、火鳥の乱舞。

火に追われ、武者に追われ、自らの恐怖に

追われ、信乃と賀集子は僧や避難民と共に、行方も定めず南へ南へと逃げ続けていた。

× × ×

後白川法皇は六波羅の池大納言頼盛邸に入御せられた。法住寺殿は余りの荒廢で御所に適さず、修理完成まで備前前司基宗が預る事となった。同じ頼盛邸の一隅には御病中の高倉上皇が疲れ果てた御身を臥せておられた。

十二月三日。清盛は後白川法皇に拝謁を願ひ出た。

「院政を再開なされますよう願ひ奉ります」
都を京に復し、旧勢力と妥協するからには院宣の価値は絶大だった。

「今となつては元の通りには行かぬでう」
法皇は清盛の焦処を見抜いておられる。進んで利用される代償は充分に要求なされた。

追放された元側近基房の関白復職。
没収所領の返還。法住寺殿の修理。

三井寺の復興と寺領還附。

後白川法皇の条件は更に続く。

「南都諸寺の意見を尊重して貰いたい。平家の方から戦など仕掛けてはならぬぞ」

「悉皆承知仕りました。違背は致しませぬ」

「もう一つ頼みがある。金売吉次と申す商人が東国より連れて参った巫女二人を、朕のた

めに捜してほしい」

× × ×

十二月四日。信乃と賀集子は宇治川の岸に沿って放浪を続けている。

「何処へ行っても武者や僧兵がいるわよ。いやになっちゃう」

「広い道に出ましたね」

「宇治の近くらしいわ。きっとこれ、奈良へ行く道よ」

「大道より山道の方が安全でしょう」

「向うから立派な行列が来るわよ。あの後について行けば大丈夫と思うわ」

× × ×

平安末期の大寺院は独立国の観があった。信仰は喜捨を呼び、寺には領土と財宝が集った。財貨が集ればその管理運用と保護に人が要る。そして僧兵団の維持には金が入用だった。これは悪循環だ。

革新政治家清盛は社寺の俗化に反対し、自ら僧形しつつも機会ある毎に寺領荘園の収公を推進した。僧徒の怨嗟は当然平家の上に集り、殊に遷都と近江源氏掃蕩は南都諸寺を刺戟した。平家が軍閥本来の武断政策に戻り、全軍勢力を挙げて寺院勢力の抑圧に着手したものと考え、誤解は更に誤解を生んだ。

「南都は武威で圧伏しなければなりません」

西八条の館で検非違使別当時忠が言った。

「法皇様の手前、それはならぬ」

浄海入道清盛は腕を組んで考え込む。

「有官ノ別当忠成殿の説得で南都が平穩になるでしょうか」

「今は坂東の源氏と対決すべき重大な時だ。

寺院勢力との争いは可能な限り避けよう」

興福寺や東大寺は自衛のためと称して僧兵を集め、三井寺の残党が、武装集団を煽動した。仏法擁護、打倒平家のスローガンが行き亘り、主戦論の過激派が優勢を占めた。

「関白基房殿の使者と雖も平和裡の解決は困難と存じますが」

「相手は藤原氏の氏寺と勅願日本国総国分寺だ。これを敵に廻してはならん」

× × ×

復職したばかりの関白基房は、点数稼ぎのために平家と興福寺の調停を引き受けた。有官ノ別当とは勸学院の長官、即ち京都大学総長。形の上では、興福寺の管理権を持っている。併し南都の大衆は既に藤原氏の権威を以てしても抑えられなかった。

「お姉様。僧兵が襲って来るわよ」

「鬻切り騒動に巻き込まれたようです。早く

逃げましょう」

行列の後尾についていた信乃と賀集子が慌てた。僧形の暴徒は百人余。太刀、長巻を振り廻し、喚声をあげて行列を取り巻いた。

「悪入道の使者を仏都へ入れるな」

「問答無用。追いつ返せ」

「牛車から引き出して鬻を切れ」

殺意こそないが衆を頼んで乱暴狼籍。車上の忠成は慌てて逃げ出し、雑色、舎人は撲られ蹴られ、鈍重な信乃と抵抗力のない賀集子は逃げ遅れて忽ち捕えられ、荒縄で後ろ手に縛りあげられてしまった。

× × ×

「有官ノ別当殿が南都で暴行されましたぞ」

時忠が西八条館へ駆け込んだ。

「興福寺と東大寺を討つ口実が揃いました」

「慌てるな。その位で出兵はならん」

清盛は落着いている。

× × ×

信乃と賀集子は散々曳き廻された揚句、奈良坂の下で松の樹に縄尻を繋がれた。

「殺生には及ぶまし。晒しものにしておけ」

陰曆十二月の厳冬。寒気が浸み透る。

「京から牛車が来るぞ」

見張りの僧兵が駆けて来た。

「又もや悪入道の使だ。今度こそ鬻を切れ」

僧兵達は一斉に走り出す。縛りつけられた信乃と賀集子がとり残された。

× × ×

「今度は右衛門督親雅殿が恥辱に遭われましたぞ。勸学院の雑色二人は鬻を切られ、親雅殿も切られそうになったとか」

時忠が注申した。

「もう少し待て。戦争はいけない」

清盛は未だ自重している。

× × ×

「お姉様は肥っているからいいわね。あたし寒いわ。骨と皮ばかりなんですもの、じかに芯まで冷えちゃうようだよ」

「わたしだって凍えそうですよ」

信乃と賀集子は未だ縛りつけられたまま。

「もう少しで解けそうなのだけど指が冷たくて思うように動かないのよ」

「頑張って下さい。このままでは凍ってしまいます」

× × ×

切り奪った鬻を長巻の切尖に刺した僧兵達が意気揚々と帰って行く。

× × ×

十二月十六日。源頼朝は大倉の邸に移った。関東新政府の庁舎が完成したのだ。

頼朝は此處で侍所別当和田義盛から御家人三百十一人の名簿を受けた。彼は漸く東方独立国主権者の地位を自覚しつつある。併し未だ平家討滅や武家政治の思想に達してはいなかった。

西の大政治家清盛も夙に頼朝の心内を察知していた。富士川合戦後の消極的動作は関東独立が野望の限界である事を示している。平治の乱で助命された恩義を感じているのかもしれない。

「寧ろ危険な存在は木曾義仲だ」

彼は父の旧領を狙って上野に向っている。

「頼朝と義仲を離間させ、相互に戦わせてやろう。本来なら親の仇だからな。それが旨く行かなかつたら積雪期の後で越後の城一族に命じて信濃を討伐させよう」

清盛は東方政策を決定した。

「当面の問題は南都対策だ。武力を用いずに解決したいが譲歩にも限度がある。遷延しては事態を悪化させようし此方から挑戦するわけには行かない。とにかく試してみよう」

清盛は妹尾太郎兼康を呼んだ。備中の住人で平家の重鎮、老巧の武将だ。

「其方を大和国檢非所に任命する。手兵を率いて赴け。だが合戦が目的ではないぞ。弓箭

は持つな。挑発されても応じるな」

× × ×

「お姉様。やっと解けたわ」

「急いで逃げましょう」

賀集子は散乱している持物を拾い集めた。

「この調子じゃあ、奈良には行かない方が良さそうよ」

「木津川に沿って上りましょう。何とかして伊東へ行かなければなりません」

日が暮れかけている。二人は北へ急いだ。

後方には荒法師が満ちている。ところが未だ木津へも着かないのに一群の兵が行方を遮った。僧兵ではない。半武装だが正規兵だ。

「待て。怪しい奴等だ。何処へ行く」

林の中や土手の蔭から続々と兵が現れた。

「奈良の方から来て我等の陣を窺うとは不逞極まる。通す事はならん」

逃げる隙はない。信乃も賀集子もその場で引き据えられ、縛りあげられてしまった。

× × ×

十二月二十四日。木曾義仲は二箇月に亘る上野国駐兵を成功裡に切り上げ、亡父義賢の部下だった土豪多数を自軍内に改編して信濃へ凱旋した。

当時、鎌倉の頼朝は既に十二箇国を領有し

二万五千の兵を動員し得た。義仲は信濃一国に過ぎず兵も少い。併し義仲の活動は積極的だった。鎌倉と並んで木曾の動きが漸く注目の対象になりつつあった。

× × ×

「拙者は妹尾兼康だ。其方達は何の目的あつて我が陣を窺ったか」

信乃と賀集子は主将の前に曳き出された。「探りに来たのではございません。逃げて来たのです。奈良の都は焼け落ちるでしょう」

篝火を囲んで心配そうな顔、怯えたような顔が並んでいる。戦意のない軍隊だ。その顔が一斉に信乃と賀集子を覗き込んだ。

「我等は南都に戦をしに来たのではないぞ」「貴方達に争う気がなくても僧兵側が承知しません。必ず南都中の人数を催して攻め寄せらるでしょう」

× × ×

鐘が鳴る。南都中に段々と鳴り渡る。

大衆の僉議せんぎ開催を告げる非常鐘だった。

「悪入道浄海は遂に武力干涉を開始した。奈良坂口に屯せる三百余人は平家勢の先鋒と思われる。黙過するか。自衛権の発動か。皆の意見を聞こう」

萌黄緘の鎧に長巻を構え、廻箭を背負った

完全武装の大法師が大仏殿前の石段に立って一同に呼びかける。坂四郎永覚だった。

「聖地を汚されてなるものか」

「悪入道の手先を倒せ。我等の仏都を守れ」

騒然たるシュプレヒコールが東大寺の境域に鳴り響き、揺れ動く太刀、長巻の波が簾に映えて薄暮の闇を幾重にも斬り裂いた。

× × ×

「即刻お立ち退き下さい。僧兵は気が立っているから道理を聞き分けません。一旦争いが起れば元に戻らないでしょう。僧兵は大勢。

貴方の郎党は幾人も斬られ、清盛公は怒って大軍を派遣し、東大寺も興福寺も焼けてしまします。平家や南都だけではなく、日本中の大不幸が起るのです」

信乃は条理を尽くして説き、とり巻く人の輪が次第に動揺し始めた。

「貴方のような人を、スタインコップと言うのよ」

賀集子も縄尻を曳きながら進み出た。

「こんな少ない人数で弓も持たされずに南都へ来させられた理由が解っているの。貴方達は殺されるために来たのよ。平家の侍が無抵抗で僧兵に殺される。それを口実に奈良を攻める。捨石に使われているのよ」

「大相国殿はそのような卑劣な方ではない。

仮にそうだとしても我等は武門。清盛公が我等の死を必要とされるなら僧兵に討たれてもよい。汝等の知った事か」

兼康の憤怒が治まらない間に不穏な騒動が闇の彼方から起こった。

「御注進。僧兵多数が寄せて参りますぞ」

「甲冑を着し、弓箭を帯した完全装備です」

「明らかに計画的な挑発です。それでも手向かってはなりませんか」

街道の方だけではない。木津方面への退路も遮断され、地理に明るい敵はこの林中へも潜行していた。篝火を目標に無数の矢が飛び交い、兼康の郎党は右に左に倒れる。と見る間に周囲は忽ち怒号渦巻く修羅場と化し、白刃閃く下で後ろ手に縛られた信乃と賀集子は無数の草鞋に蹴り返され、踏みつけられた。

× × ×

「南都の僧兵共が兼康の郎党六十余人を捕えたそうでございます」

時忠は兼康を伴って西八条に出頭した。

「あれ程固く申し渡したのに争ったのか」

清盛は先ず真赤になり次いで青くなった。

「御命令を遵守して郎党等には如何なる戦闘行為も禁じておりました処、理不尽にも大勢

で攻めかけられかかる仕儀とはなりました」幾箇所かに傷を負った兼康は言外に無念の意を表しながら平伏した。

「予測通りの結果でしょう。大軍を奈良坂へ派遣して威嚇しますか」

時忠の才智は常に清盛の先へと走る。

「勝手な推察はするな。武力行使は許さぬ。

捕虜返還の交渉を始めい」

清盛は幾分、慌てていた。

× × ×

猿沢池の畔。

妹尾兼康の郎党六十余人が縛られている。

矢傷や刀創の出血で絶命寸前の者や、足を折られた者、額を割られた者も縄附のままで転がされている。

一団の片隅に信乃と賀集子が後ろ手に縛られていた。縄を解く隙もなく、僧兵達の手に落ちてその屯へ曳かれて来たのだ。

「悪入道の手先共を地獄へ送り込め」

気合と共に白刃が弧を描き、血沫が切尖を追って天空に虹をかけた。

「思い知ったか」

首が飛ぶ。首が転げる。

数百人の群衆がその度に嘲笑を揃える。僧兵は奪った太刀を愉快そうに試している。

「此奴等二人は女だぞ」

遂に信乃と賀集子の番が来た。

「待って丁戴。あたし達は違うのよ」

賀集子が腕きながら叫ぶ。

「見た事があるぞ。最初の使者に随いて来た奴等だ」

「矢張り西八条の犬だな。斬ってしまえ」

信乃と賀集子が首を縮めた。併し未だ首と胴が別れる運命にはなっていないかった。

「少々調べたい事がある。斬るのは待て」

長巻を持った大坊主が進み出て制止した。

法住寺殿で会った坂四郎永覚だった。

× × ×

「兼康の郎党等六十余人が首を刎ねられ、猿沢池の畔に梟されましたぞ」

時忠は意地悪そうに微笑を浮かべた。

「何だと」

清盛は大眼玉を剥き、坊主頭が真赤になって湯気が立ち上った。

× × ×

信乃と賀集子は後ろ手に縛られたまま東大寺大仏殿前の広場に曳き据えられた。百余人の僧兵が周囲をとり巻いている。

「おい。この毬を蹴ってみろ」

木製の大きな玉が投げ出された。

「蹴ったら許してくれるの？」

賀集子が無難作に蹴る。

「仕方ありません」

信乃も蹴り返す。木毬に描かれた顔が恨めしそうに睨んだ。清盛の首の心算らしい。

「よかろう。汝等が平家の手先でない事は解った。併し未だ縄を解くわけには行かん。尋ねる事がある故、此方へ来い」

二人は大仏殿の中へと追い立てられた。

× × ×

「平家と南都の平和共存は遂に破れた」

西八条の館を揺るがせて清盛が呷鳴った。

血圧は二百を越えている。

「即刻討伐に駆け向います」

平伏したのは重衡と通盛。

重衡は清盛の五男で今年二十七歳。

通盛は清盛の三弟教盛の嫡男で三十一歳。

共に平家第一流の公達で青年將軍だった。

「東大寺、興福寺とて遠慮は無用。徹底的に打ち懲らせ。但し堂塔伽藍を破壊してはならん。学僧、稚児、女童は殺すな。武器を把った悪僧を見たら残らず斬り棄てい」

× × ×

此処の御堂にも、彼処の塔にも、戒壇が築かれ護摩の煙が立ち昇る。振鈴の音、読経の

× × ×

声は悉く平家調伏の祈願である。奈良の都は挙げて反平家闘争に没入していた。

「それ、悪入道浄海の首を打て」

下級僧侶は武装して屯し、木製の玉に清盛の似顔を描いて生首に見立て、毬杖を打って遊戯に興じている。

「汝等は未来が解ると申しておったな」

永覚が訊問を始めた。大仏殿の一階。喧噪を極める南都中でも此処だけは静かだった。

「申しました。平家は大軍を用意し今日中に奈良の都へ寄せて参ります。総大將重衡殿の命令で南都は焼き亡されるでしょう」

信乃は躊躇せずに断言した。

× × ×

年の瀬も迫る治承四年十二月二十八日。

平家の大軍は京都を出撃して奈良へ向う。

主將は重衡。副將は通盛。兵は一萬二千。

近衛師団に相当する平家の中核軍を含み、保元、平治の乱を戦った老巧の武將や歴戦の下

士官多数が参加していた。

「巫女の予言が実現したな。南都討伐の主將は名誉な任務だが責任も重大だ」

重衡は馬を急がせながら独語する。

「南都を焼いてはならん。巫女の予言であると同時に父大相国の命令でもある。併し火攻

が用いられないとあれば白兵戦しかないな」

× × ×

信乃と賀集子は後ろ手の縄尻を大仏殿の太柱に繋がれている。

「お姉様。奈良の大仏様を拝んだ事ある？」

「ええ。一度だけ」

薄暗い中に灯明が輝き、八万四千の尊容を湛える毗盧遮那仏の金銅像は端然として世界蓮華の上に坐す。

「この大仏様、あたしの覚えていたのより大きいみたいよ。お顔も美男だし色も金色で綺麗だわ」

「そうでしょう。大仏様は二度焼けて、その度に Casting されています。焼けた金属は元通りにならないし、奈良時代の方が信仰も純粋な上に、精錬も工芸も優れていたから、大仏様は昔ほど美しいのが当然といえますね」

永覚等は慌てて出て行ったまま戻らない。平家大襲来の危険を大衆の中で説いて廻っているのだろう。

「するとこの大仏様は開眼当時の原型というわけね。カラーフィルムを詰めたカメラ持って来るんだったわ。世界的な記録写真が撮れるところだったのよ」

「のんきな事を言っている場合ではありません」

ん。大仏殿が焼け落ちるのは今夜なのです。

縄が夜までに解けなかったら、わたし達は二人共、黒焦げですよ」

広大な大仏殿は森閑としている。

× × ×

早朝に京都を進発した平家勢は同じ日の午後早く奈良坂口に展開し、攻撃を開始した。

午後二時、奈良坂口、突破さる。

般若寺の僧兵達は般若坂の道を掘り切り、木柵を設けていた。平家軍襲来の報と共に衆徒等は駆け出し、楯を突き並べて防衛線を固めた。地形は一本道の長隘路。大兵力を以てする迂回は出来ない。然も防禦側は必死に防戦した。強襲は暫時阻止された。

坂四郎永覚等の増援が般若坂に到着した。七大寺、十五大寺の僧兵は挙ってこの防衛線に加わった。興福寺二千。東大寺千五百。元興寺、薬師寺、招提寺、崇福寺等の衆徒に三井寺の残党を合して戦闘員五千余。老若も幼若も弓を把った。総兵力は七千。その悉くを般若坂に集結して一万二千の平家軍と争った。

× × ×

「戦の音が近寄って来るわ」

「縄は未だ解けませんか」

信乃と賀集子は依然として縛られたまま。

「解けそうにもないわ」

「早く何とかして下さいよ」

× × ×

坂四郎永覚の奮戦は古典平家物語に特筆されている。萌黄緘の鎧に黒絲緘の腹巻を重ね長巻を把り伸べて群る騎馬武者の正面に立ち塞った。馬蹄下に蹂躪される危険を冒し、長柄の届く距離一杯に引きつけて馬の前脚を斬り払い、落馬する武者を突き刺し、突き伏せる。その速拔。幾人もの名ある武士が骸を並べ、平家軍の攻撃に停滞の色が見え始めた。

× × ×

戦に怯えた避難者が続々と大仏殿に雪崩れ込んで来た。老僧。修学僧。稚児。女童等。「誰か助けて。縄を解いて丁戴」

賀集子が叫んだが誰も気附かない。二人の縛られている柱は本尊の蔭にあって薄暗く、群衆は脇の階段から大仏殿の二階へと、憑かれたように押し上って行く。

「大仏殿の二階は危険ですよ。上ってはいけません。もう直き火事になりますよ」

信乃の声も雑踏に遮られて届かない。

年末は近く、奈良中が油断していた。防禦態勢は一応整っていたが斯かる大軍の迅速な襲来は予想されず、非戦闘員の避難準備に至

つては殆んど出来ていなかった。如何に悪入道清盛と雖も東大寺や興福寺を破壊する事はあるまいという安易な推測を頼り、群衆は先を争って大寺院の伽藍に逃げ隠れた。

× × ×

重衡と通盛は般若坂口に馬を立てている。

「手詰の勝負は、時間が永引く上に損害も多いな」

「火攻が許されるなら、此処に射手を揃えて般若寺に火矢を射込むのだが……」

夕闇が迫って来た。

般若坂の防衛線は未だ破れていない。

併し騎馬武者の統制ある連続攻撃で漸く僧兵側の消耗と疲労が目立って来た。

「東大寺や興福寺の建築物を戦火から守るには、犠牲も止むを得ないだろう」

「南都中の僧兵を、この口に引き寄せて漸滅させるのだ」

永覚の奮戦は依然として続いている。だが彼に続く勇士がなく、左右何れも死傷して永覚一人が乱軍中に孤立し始めた。

× × ×

「賀集子さん。未だ解けませんか」

「何とかして自由になりたいわ」

「あの大勢の人達に、早く危険を知らさなけ

れば大変です」

「もう駄目だわ」

縄は解けない。

大仏殿の二階には二千人近い避難者が詰めかけ押し上り、局外中止を実行するために階段を引き上げてしまった。

般若坂口は遂に破れたらしい。

関の聲が大きくなり、急速に迫りだした。

× × ×

決死隊の挺身攻撃が成功して木柵の一角が破壊された。騎馬武者が先を争って突破口に乱入する。

僧兵が潰走する。逃げ崩れる。

徒歩の敗兵を平家軍の騎馬武者が追撃蹂躪した。討首無慮一千余。

永覚は勇敢な後衛を務めながら退却した。

右手の長巻、左手の大太刀を交互に打ち振り幾度も踏み留まっては追い迫る平家勢を阻止しながら南の方へ落ちて行った。

午後八時。平家軍の攻撃は態勢整頓のために一時中断。両軍は漸く分離した。

× × ×

戦鬨の騒音が暫し静寂に戻った。

灯明の火も消えて大仏殿の中は暗黒。

二階に充満した群衆も般若寺の方を眺め、

次なる変化如何と沈黙。

恐ろしい程の静けさ。

重苦しい緊張が空虚を支配する。

闇の中で動き続ける唯二つの影。それは太柱の根元に縛られた信乃と賀集子だった。

× × ×

「残敵を迅速に掃蕩しよう」

「併し味方の損害も多く、兵は疲れている」

重衡、通盛は般若寺の門前に進出した。

道は此処から奈良の市街へと下っている。

「南都に突入して市街戦を行うべきだが」

「武装解除の勧告には応じないだろうか」

法師勢は死傷者、装備を遺棄して吉野、十

津川の方へ敗走した。併し一部は市中や寺院内に潜伏しているようだ。

「朝を待てば敵に立ち直る余裕が出来る」

「だが夜間の攻撃再開は危険だ」

二十八日の月は暁方でなければ昇らない。

「斯う暗くては作戦の立てようもないな」

「明るくしてから再編成だ。誰か火を出せ」

次郎太夫友方という者が直ちに楯を割り、

それに火を点じて彼方へ駆け去った。般若寺

前の民家から忽ち火の手が上り、軒から屋根

へと焼け上って平家勢の陣容を明らかにし、

遠く東大寺、興福寺の方まで照らし出した。

突然、大仏殿の扉が開いた。

「其方達、矢張り未だ此処にいたのか」

全身に傷を負った坂四郎永覚だった。

「未だいたのかとは御挨拶ね。こんなに縛られて何処へも行ける筈がないじゃあないの」

賀集子が猛然と噛みつく。縄尻を柱に繋がれていなかったら本当に飛び掛っただろう。

「済まん」

永覚は膝をついて頭を下げた。

「其方達の予言は真実だった。平家は重衡を大将とする大軍を送って南都を攻めさせた。

味方もよく戦ったが残念ながら多勢に無勢。

それに敵は騎馬。此方は徒歩。同宿の者は殆んど討たれて遂に敗れた。今は一旦聖地を棄てて退くしかない」

永覚は腰の短刀を抜いて、信乃と賀集子の縄目を断ち切った。

「此処に其方達の持物がある。俺も立ち去る故、其方達も早く逃げる」

賀集子の手提袋が投げ出された。

永覚は大股に歩み去って行く。

「待って下さい。南都の間もなく火事になります。大仏殿の二階にいる人達を逃がしてあげないと、皆焼け死んでしまいます」

信乃は必死に呼び止めた。

「心配は要らない。重衡は般若寺にさえ火を放たなかった。般若坂の上に軍を留め、我等の退去を待っている。南都を焼くような人物でない事は明らかだ。この上は僧兵が一人残らず、一刻も早く、市中、寺域から出て行くべきだ。諸寺を救う道は、奈良全市を非武装化するしかない」

永覚は言い終ると同時に駆け出した。

「其方達の予言は、たった一つ、外れたぞ」

般若坂の火花が暫し後姿を照らしていたが忽ち厚い暗闇が一切を蔽い包んだ。

× × ×

「伽藍には矢を射るな。修学僧を傷つけてはならんぞ」

「無用の殺生はするな。勝敗は既に決した。

僧兵を見ても斬らずに生捕れ」

重衡、通盛は麾下全軍に展開、再前進を命

じた。南都諸寺院の抵抗力は尽きている。火

光の下、平家勢は堂々と奈良市街に進駐。

そう見えた。そうなる筈だった。然るにこ

の時、誰もが予想しない事態が突発した。

唸り声を発して天より一陣の朔風が吹き下る。無風状態下の灯明は忽ち火焰の大渦と化し、奈良市街に向って疾駆し始めた。

× × ×

信乃と賀集子は大仏殿の下に立ち、二階の群衆に向って避難を呼びかけるが、遠くに気をとられた彼等は全然、脚下に気附かない。

「お姉様。大火事よッ」

「もう駄目です。逃げるしかありません」

奈良は盆地の底に位置し、この般若寺へ到る道の両側に带状の門前町が続いている。北風に際し北端の一軒に放火する事は導火線に点火したに等しい。

「何方へ逃げたらいいの」

「東京空襲の経験者に任せて下さい。若草山に上りましょう」

火鳥が飛ぶ。火の噴流が押し寄せる。

四百七十年の伝統を誇る仏法の聖都は忽ち現世の地獄図を描き出し、焦熱、大焦熱、阿鼻、叫喚の底に投げ込まれてしまった。

× × ×

木造の大建築群は爆発的に炎上した。

風が火を煽るのか。火が風を呼ぶのか。

猛火と烈風の暴威は南都狭しと荒れ狂う。

興福寺に火が移った。

九輪高く輝く東西の塔がそのまま火の柱と化し、生霊数百と共に燃え崩れた。

丹青を塗った東西の金堂。金銀を打った仏

閣。瑠璃を貼った宝蔵、莊嚴を極めた精舎、玉を磨いた仏像、幾多の戎壇、鐘樓、その悉くが焰の海に没し去った。

老僧が逃げる。武器を棄てた僧兵が奔る。唐櫃を抱えた修学僧が遁れて行く。稚児や女童が泣き叫ぶ。火塵はその頭上に降り注ぐ。東大寺が燃えだした。

火神の怒号か、人間の絶叫か。

大仏殿の二階に密集した群衆は驚愕狼狽。階段を自ら引き上げたため、急には逃げ出すことも出来ない。押し合い揉み合い、高欄から跳び下り転げ落ちて大地に転々。

次の瞬間、風を捲いて火竜の一呼吸は巨大な二層楼を呑み尽くし、大仏殿は床下から大

◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれていて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも箕田京二宛にお願いいたします。

屋根まで一塊の火となって燃え上った。火粉の一片と化した人間は一束の炭となって焼け爛れる。

北風に乗った火焰の気流が京極大路を突き抜ける。避難を急ぐ大群衆が折重って倒れ伏した。空気中の酸素が一瞬で悉く一酸化炭素となったためだ。そして数秒後には一切が塵灰に帰して天空高く舞い上った。

× × ×

着衣一つの避難者が若草山に逃げ上った。信乃と賀集子もその中にいる。

「こうなる運命だったのでしょうか」

「お姉様。大仏殿の屋根が落ちるわよ」

千数百の人命を燃焼しながら軒が落ちた。百千万の金砂子が北斗に向って噴き上がる。

灼熱の大銅像が毒焰の中に立ち現れ、恐しくも美しい光彩を八方に放った。火焰の尖端は淡青色を呈しつつ躍り狂う。

「大仏様が空色に輝いていますよ」

「焰色反応だわ。銅イオンの色なのね」

大仏の首が次第に傾き、遂に前へ落ちた。続いて右手が熔けて垂れ下がる。

「若草山の麓に火がつかしましたよ」

「此処も危険だわ。早く逃げましょう」

「今度こそ何とかして伊東に行き着かなければなりません」

「何処からともなく念仏の声が湧き起り、次第に大きく、奈良全体を蔽う天地の鳴動となつて、焦熱地獄の上に滔々と流れて行った。」

× × ×

入道相国清盛は西八条館の高欄に終夜立ちつくし、南の空を見凝めていた。

「やったな。重衡、通盛が早まったぞ」

奈良の方角で夜空が真赤に燃えている。

「焼けているのは般若寺か。それとも只の民家か」

朝にかけて早馬、また早馬。

奈良焼亡。諸寺悉く滅尽。死者数千。

「寒い。頭が痛い。寝かしてくれ」

急に幻暈を起こしたのか、清盛は頭を抑え側近に抱えられながら寝所へと退いて行く。

× × ×

大仏殿の二階で焼死した者一千七百余入。

興福寺の焼跡で発見された焼死体八百余人。

般若坂で戦死した僧兵を除き、全部で三千五百人が死んだ。大部分は非戦闘員である。

治承四年十二月二十八日の南都炎上。史上

最大の法滅として特記される悲惨事だった。

濡れにぞ濡れし

レストランクラブ

芳野眉美

数えてみたら、十年間にアパートを七回、引っ越していた。短いのが二、三カ月、長くても三年ぐらいだから、引っ越し貧乏というところだろう。店を中心に、あちこち円をえがいている。

遊郭のあとがそのままアパートになっていく吉原のときは、一部屋ごとに格子づくりの玄関としゃれていた。(格子づくりは本部屋で、俺がかりたのは唐紙一枚のまわし部屋だったけどね)古くて、きたないから、とにかく安かった。トイレに洗浄室がそのまま残っていた。(はじめての時にね、お女郎さんが

洗ってくれたものですよ)

住んでいるのが、また面白い。

上り竜、下り竜を両腕にほり、水銀のうろこもピカピカと、粋なおあにいさんがいたけど、水銀で失明寸前になったのは、ただじゃない。カァチャンが、ぞくっとするような美人なのだが、話をすると伝法すぎてこわくなる。

失明寸前の若いダンナを抱えて、田舎に引っ込んだと思うが、よくわからない。引っ越しをしたとき、下着類をどさっと捨てていった。黒いスリッパや黒いパンティが目にしみ

たが、あつというまに誰かが、かっさらってしまった。手の早い奴がいるものだよ、まったく。

ゲイバーのママが、店のホステスをごろごろとめていたのが一室。さぞかし妖艶かと思いきや、学生の合宿みたいで、最高に男くさくきたなく足の踏み場もない。それが夜になると、お化粧してしななとおでかけ。それがまた舞台衣裳みたいな派手なのを着るのだから、女? 心はわからない。

喧嘩ばかりしている夫婦がいたが、原因はカァチャンの浮気とよめた。そのカァチャン



が、アパートの近くの温泉マークから、白昼堂々と、御主人の実弟とオテテつないでできたのだから、最高にハレンチだった。視線があつて、おたがいひやりとした。御主人より弟のほうがいい男だったな。

捨てた大根の葉を拾って、味噌汁の中味にし、つけものにし、一人でなんとなく生きていく貧相なババアがいた。別に働いている様子もなく、たくわえでも少しはあるのかと思つていた。

ところが警察からアパートの管理人に呼び出しがあつたのである。バアサンが警察に留置されているから、引受人になれというのだ。そうであつた。

バアサンの容疑は、なんと売春。

あんなババアと寝る男がいるのかねえ。うすきみわるい。いやらしい。アパートの住人たちが顔を見合せて、うわさした。

それが、いるんだなあ。売春とわかつて、バアサン、すっかり図図しくなり、客をアパートに連れ込むようになったのである。若い男が多くて、かなりの繁盛。とうとう管理人が怒った。ここは売春宿じゃねえ。売春宿だったんだよ、ここは。バアサンも負けずに、どなり返した。

安かつたんでしよう。きっと。

トルコサンが二人いた。

一人は夫婦者。ヒモ付きというところ。彼女、かせいでは男に貢いでいた。男は女に貢がせて別の愛人にそっくりいれあげていた。トンネル会社だな。それがわかつていて、女は男にせつせと金を運んでいた。男が好きだから。

女心はわからない。

もう一人は、ヒモ付きじゃない。がっちり金をためていた。夏など、すけてみえる薄いベビードールのネグリジェと小さなパンティだけで、はだしで中庭をとびまわるものだから、目の保養になった。チャージングで、小悪魔的なところのある子だった。

そういう子だから、どこか、だらしないところもある。それがまたけっこう。彼女、トイレを流すのを、よく忘れるのである。

別にトイレを見張っていたわけではない。

トイレから出てくる彼女と、あぶなく正面衝突しそうになってびっくり。あいかわらず短いネグリジェから、パンティが丸見え。

トイレに入って、あれ、と思った。水の流れる音を聞いていない。トイレは三つある。

三つとも戸をあけた。

あつた。彼女、また流していくのを忘れたのである。こんなのが、と、感心してしまうほど、健康的なのが三つ、白い便器に沈んでいる。まだ、あたたかそうだ。

消化されずに、彼女の体内を通過した。スイカの種と、ふやけた豆の粒々が、おいしうだった。

そこで、梶山季之の「コーポラスの恐怖」(徳間書房ベッドサイドブックス)より。

「ある日、マーガレットと湖畔を散策している折、彼女が不意に、

——ちよつと失礼するわ。

——と言ひ捨てて、林の方めがけて、小走りに駆け去つたのだ。

待っているうちに私は心細くなり、私はマーガレットを探しに林へ入って行った。

そうして私は、私の方に白い、むっちりした臀部を向け、樹蔭にしゃがみ込んでいる彼女を発見したのである。

私は、彼女を驚かしてやろうと、蹙音を忍ばせて近寄った。

その時、一陣の風が吹いて来て、風下にいた私は、マーガレットの体内から排泄された物件の、言うに言われぬ香りを嗅ぎ、そして湯気の立つ物件を眼にした瞬間、異常に興奮

したのだった。

私は、動悸で胸が息苦しくなり、蹙音を忍ばせて引き返したのだが、あんな美人の取り澄まし屋のマーガレットが、私とおなじ恰好で排泄物をひねりだすのだと思うと、わくわくする反面、なんとなくマーガレットに人恋しいものを覚えたのである。

翌日——私は人眼をさけながら、昨日、マーガレットがしゃがみ込んでいた樹蔭へと行ってみた。それには、木の葉が落ちてかけてあった。私は、

——ああ、マーガレット！

と心の中で叫びながら、わくわくと胸を弾ませて、その固体に鼻を近づけたのだ。

(中略)

私は、そのうち、マーガレットに恋するあまり、彼女のそれを手に入れたい、と願うようになる。彼女の居間の浴室へ忍び込んで、水洗便所のパイプに詰め物をしたのも、それを手に入れた一心からだった。

その甲斐あって、マーガレットが水洗の故障を、水道工事に電話している隙に、私は一片の黄金の物件を掬いと、ハンケチにくるむことに成功した。

——ああ、これが、あの美しいマーガレット

の、あそこから押し出されて来たのだ！

私は、そう考えただけで、射精した。』

× × ×

八月三日

カメラルポの口を割る猿ぐつわは好きである。シンプルな構図がいい。好きでも、こちらがやられるほうだから、女性に猿ぐつわなどしたことがあまりない。

そこで……

忘れた頃にひょっこり顔を見せるOLがいる。冗談ではなくどいているが、本気に相手になつてくれない。いつも逃げられる。

Hな話をする、いやだ、なんていいながら、こんな雑誌があるの、とかなんとか奇くを読むのである。

閉店時間に二人きりだったから、いつもなら、途中まで送りましょうか、というところを、軽い気持で、ホテルにでも行こうか。

「いいわ」

いわれて、あわてた。

「ホント」

「ええ、いいわよ」

土曜日なのを忘れていた。明日は会社が休みだった。

「あなたの部屋を見たいのだけど」

「男の人は、だめ」

「告白しますけど、デートするだけの金を持つていないんだよ」

アパートなら不必要でしょう。

「あるわよ、ボーナスの残りが」

「それなら、行こう」

バスつきで二千五百円という。悪いね、といたら、馬鹿ね、男がそんなことをいうものじゃないわよ。スミマセン。だからアパートで……アパートは、いや。

ホテルの前で、ここがいつも種々な女のひとと来るところなの。と、きた。そんなに来ませんよ。来られるわけがない。まったく、いいにくいことを平気でずけけいう。カマトトだか、カマゴジラだかよくわからない。洋室がいいですね、と女中に案内されたが布団を敷いてある部屋は一段高い畳で、ベッドではなかった。テーブルと椅子が控室にあるから洋室というのかな。

バスからでてきたら、先に出た彼女は胸にバスタオルを巻き、椅子に腰かけてタバコを吸っていた。

「いやだなあ」

という。

「なんで」

「タオルぐらい、巻きなさい」

「これは失礼」

「ビール、それとも、お茶」

なかなか、やさしい。

ルームクーラーがききすぎて、熱いお茶がうまい。先に布団に入り、さて、と考えた。

何故、男が先に寝なければならぬのか。ガツツイテイルカラダヨ。

電気が消えた。

「一つだけつけて下さい。まっ暗じゃ、なにがなんだか、わからない」

「いや」

バスタオルを巻いたままである。ホテルのゆかたを着なかつたらしい。のりのきいたゆかたに抵抗を感じたのかもしれない。

「カメラルポ、みたでしょう」

「——」

「両手だけでも縛る真似をさせてよ」

「——」

無言は承諾とみなす。ゆかたの腰紐があったはずだ。彼女は両手を胸で組んでいた。十字に縛る。

腰紐は二本しかない。

あとの一本で彼女の口を割った。低い呻き声は声にならない。彼女が、頭をもたげた。

縛りやすいようにである。

電氣をつけた。

彼女は猿ぐつわの下で叫んだようだ。下半身をよじった。まっ白な歯が腰紐をかんでい。この猿ぐつわを試してみたかったんだ。

タオルをはいだ。

「いやっ」

奇妙な声だったが、聞きとれた。

両足を引っぱるのもサービスのつもり。

腰紐は二本しかない。彼女が着物でないのが、くやまれる。バンドで輪をつくり、首と両膝にかけた。不安定すぎる。

猿ぐつわをとり、腰紐を、今度は彼女の口の中に押し込んだ。腰紐がたべられていく。バスタオルで顔をすっぱりと包んでしまう。

女の顔が消えた。新しい喜びが湧き上る。

なまあたかいものを感じてはっとした。

が、遅かった。

シーツの汚れが気になったが、掛布団をかけてかくした。二度とこのホテルには来られない。

彼女は、おもいがけない世界地図を招いてしまったのである。別に、暗示をかけたわけでもないのに、不意打ちであった。

彼女の友達がバーに来たとき、それとなく

彼女の悪癖をきいてみた。

「被害者なのよ」

という。彼女をとめたら、布団を汚されたというのである。

「干すわけにもいかないし、困ったわ」

それはそうだろう。妙麗な女性が部屋の窓に、世界地図が描かれた布団をかけたなら、隣近所が首をひねる。

「病気かな」

「睡眠薬のせいでしょう」

麻痺してしまうのかもしれない。なぜだかよくわからない。

× × ×

八月号に、斎藤夜居氏が、伊藤晴雨宅を訪門したことを書かれていた。私は、一度だけ残酷美の巨匠、伊藤晴雨画伯を見たことがある。今はないが、浅草の芝居小屋（といって映画劇場）で、晴雨指導の、責めの芝居があったのである。

中学生だった私は、学校をエスケープしたと思われるのが、とにかく、初日、ステージの最前列（カブリツキだな）に坐っていた。芝居の題は忘れた。とにかく筋らしい筋もへったくりもない田舎芝居だったことは間違いない。時代ものである。

初日で舞台の転換もうまくいかず、もまたたして、観客の罵声を買っていたことだけは、おぼえている。

水車に女をくくりつけて、ぐるぐるまわすシーンで、あまりもたたしているのに、晴雨画伯が、楽屋から舞台の隅まで出て来てしまったのである。観客の前で、あれこれと縛りの指導をしているのである。

丸坊主のずんぐりしたオヤジで、背広姿もいたに付かない。

芝居を見ているよりよほど面白く、この貴重な一幕しか、おぼえていない。水車に四肢を開いて逆さ吊りになった女は、新鮮で強烈な印象を、あとあとまで残した。

新宿帝都座の額縁ショウで幕をあけたストリップが、浅草を席巻し、また軽演劇も盛んな頃で、それが戦後何年目にあたるのだから、ぜんぜんおぼえていない。ロック座の「肉体の門」が爆発的人気を呼んだ頃かしら。

× × ×

八月十四日

閉店後、クレイジイドクターと近くのバー「さくら」に寄る。11PMや「宝石」でも紹介されていたが、「さくら」のママは女子プロレスラーである。H氏などは十年來の知人

だそうで、「さくら」のママのお尻につぶされたいほうなのだろう。七月末、H氏が上京された折、「さくら」に寄ってみたのだが、ちょうど休みだった。H氏は女子プロレスが好きで、カメラを片手にどこにでも見に行くらしい。バーには、黒メガネの陳大人の色紙が飾ってあった。

ホステスの可愛い子ちゃんにブドウをたべさせてもらった。可愛い子ちゃんがブドウの実で、わたくしは、ブドウの皮デアル。

赤坂までのして、往年（失礼）の新東宝の主演女優、荒川さつきさんのレストランクラブに寄る。会員制度だが、そんなことにかまっていられない。グリーンの絨氈バーで、靴を脱ぐことになっている。TBSの前を通って、赤坂不動の前だから、すぐわかる。

クレイジイドクターはママの大ファンで、主演作の「密林の女王」とか「女王蜂」とかを二度も三度も見ていたらしい。夢のようだと、しきりにコーフンしていた。

「民主主義ですなあ。荒川さんと酒を飲みながら、お話ができるとは思わなかった」

セリフも時代がっている。

「Vamp 役ばかりだから」

と話相手になってくれるママはミニスカー

トで、若い、若い。美しい人は年を取らないのかもしれない。Vamp とは妖婦。

「お尻をふかせたのでしょ」

とクレイジイドクターは、酔っているのかいないのか、勝手なことをいっている。

「まさか、ふかせるなんて。女優だって、普通の女ですわ」

「お尻をふかせたり、パンティの洗濯をする下男をやったら、いかがですか」

話が、えげつない。

「お給料が、だせませんもの」

「わたしなら、こちらから金をだしても下男になりたい」

「それなら、やとおうかしら」

冗談は冗談で、さりと受け流す。

ママのタンブラーをさげようとしたホステスさんに、彼は手をのばしていった。

「もったいない。それを飲まして下さい」

ママの仕付けなのか、このホステスさんは、おしとやかで言葉使いも丁寧。まったく

礼儀正しいので、こそばゆい。笑顔を見せてママが飲み残したタンブラーを彼に渡した。

いやらしいとか、H、なんて絶対いわない。

女性自身八月十九日号に、「天皇家三姉妹の八月十五日」という記事がある。孝宮、順

宮、清宮の御三家が、塩原温泉に疎開していたとき、お世話した温泉旅館の番頭五郎治爺さんの話である。遠足まがいの山歩きの折の山中でのトイレづくりの話が興味がある。

下水のような穴を掘り、近くの木を切って杭をつくって打ちこみ、足場を固める。木の枝を払い、外から見えないように、ぐるりと一面にさしめぐらす。即製生け垣である。

宮内省のお役人の点検を受け、宮さまからご順に使用いただくという段どりである。

学友たちみんなの用がすむと、まわりの枝と杭を燃やし、みぞを埋め、その痕跡は影もなし、というふうにするのだそうだ。

この話を荒川さつきさんにして、「ロケなら、トイレ製作者がいたわけでしょう」

ママは笑って答えない。

専用のトイレづくりだったら、なんと幸福というクレイジードクターの顔であった。

みぞを掘る必要も、足場を固める必要もない。ママの前に顔を突きだして、口を開けるだけでいいんだからね。

「荒川さつきさんの足なら舐めてもいい」などと迷言をい^{まよいごと}いだした頃は、午前三時。ママは腰が低く、なんでもない客なのに、

おもてまで送り、タクシーが去っても深く頭を下げていた。荒川さつきさんのお人柄に感服した一夜であった。すばらしい。

× × ×

十月号のとやまかずひこ先輩のマニアのノート」のうち「ベンチ」は浅草観音のゴリヤクというところである。深夜のスナックが多^いから、朝の七時八時まで飲んでいる女性は数多く見受けられる。

境内のトイレは、宝蔵門の横に一つ、観音堂の裏手、展望台の裏に一つ、立派なのがあら^るが、気がつかないと、とやまさんが見たような光景が突発するわけである。

まったく、酔った女性ほど、外でぱっと尻をまくりたがるらしい。公衆便所が汚れていて気持ち悪いし、浮浪者が寝ていれば薄気味悪いし、青天井のほう^がさっぱりしていいのかもしれない。

深夜、ライトのあかりに、まっ白なお尻が浮かびあがったなんていうのは、新世界ビル裏のにぎやかなところにある。

電話ボックスの前を通ったら、突然ボックスから水が流れだし、あわててとびのいたこともあった。電話ボックスをトイレにする女性^性は多いらしい。

男に立ちションが許されて、女に許されないのはおかしいから、星空の下でもかまわな^いのだろうが、電話ボックスはトイレじゃないよ。

電話ボックスの利用方法は、それだけではないらしく、女のなまめかしいパンティが捨てられてあり、男のあのいやな異臭が鼻についたときは、電話をかけるのをやめてしまった。

観音さまの近くに霊驗的な飲み屋があり、浅草の穴場で知る人ぞ知るのだが、なかなか痛快な女性が揃っていて面白い。

私の知人に、パンティを頭からかぶされた奴がいるし、飲むあいだ、ずっと念入りのサ^ービスをしてもらっていた奴もいるし、両手に花で二人を両側にはべらしておサワリしていたのはいいけど、一度も酒を飲まなかったなんていうのもいるし、醬油をケシカラン所についで肴のサシミをつけてたべた奴には、あきれた。

但し、客から行動的にでないと、ただだまってお酌をしているだけだから、何もしないで帰ることになりかねない奴もいる。遊び方次第というところ。

トイレに立ったとき、その若い女の子が

一緒についてきた。なんのつもりでついてきたのだろうと思っていると、

——酔ったとて 心静かに 手を添えて

外に散らすな まったけのつゆ

というところで、彼女、ひょいと手をのばして、ネ、ウタ通りにしてくれたのである。

おかげで、トイレを汚してしまった。あたりまえだよ。

松戸くんだりまで飲みに行くのだから、ノンベはしょうがない。その飲み屋は女性が七、八人もいるのにトイレがないのである。客はすべて外でやることになっているが、男だからそれはかまわない。問題なのは、飲み屋の女性方のことである。

隣の元旅館のトイレを借りるらしいが、そこまで行くのがめんどろくさいのがいるから面白い。店の裏でお尻をまくってしまうのである。

ママが青シヨンの実践者なのだから仕方がない。まだ二十五、六で、豊満で色白のママである。ママが裏手でしゃがんだので、ママの前に向い合っすわり、関東のツレシヨンときた。笑いだして、ママはしながら立ち上っちゃったよ。

このママ、スカートをまくり、なんとか街

道の真中に立ちふさがり、ダンプを止めたときには驚いた。誰だって止まってしまう。

安田徳太郎の「人間の歴史」三巻に、女の立ちシヨンが、くわしく解説されている。

「テンゲンのヨルク伯が、ある日のこと、エッティンゲンのフリードリヒ伯に申された。

わたしは、カルル皇帝の妹君のマリーア姫がライシヒの奴隷とまったくおなじに、馬の上から、しゅうと小便されたのを見ましたぞ」

「メスチルヒのエリザ・ハルトマンと申す奥方は、大へんあつかましいお方で、いつでもたくさん人のいる前で男とおなじように、掘にむかってしゅうと立小便されますぞ」

以上、十六世紀に書かれたドイツの「チンメルン年代記」から、だそうです。

「マニアのノート」のうちでは「しずく」が最高。夜尿症の女の子はいるものですね。

とやま節は、いつ読んでも楽しい。

× × ×

堀夏彦様。九月号にて拝見しました。どうぞ店にお寄り下さい。三、四年前の奇ク読者通信に、連絡場所が書いてあります。

× × ×

八月二十四日

女のこじんまりした丸いお尻が、私の顔の

上方にちんまりと浮いている。ソワサント・ヌッフから、女の上体を起こしたから、女のひ弱な背中しか見えない。

眉をひそめ、眼を閉じ、困ったような顔が見えるようであった。

女の両手は胸にまわされ、女が両膝と腰でバランスをとり、すわるような、すわらないような微妙な位置を確保しなければならぬのは、かなりつらい作業なのかもしれない。

かすかな嘆息が洩れ、バランスがくずれてしまうのも無理はない。

私はすきをみてかろうじて息を吐くわけであった。

枕もとにまわされた屏風に、夏ものの淡い水色の長襦袢がかかっているのは、彼女から剥ぎ取って、ほうり投げたからである。

いいなりに、すわっている彼女は、つらそうである。

「こんなこと、はじめて」

彼女は苦しそうにつぶやいた。

主賓ともども芸者を相手に酒を飲むだけらしいので、せっかく用意した離れが無駄になった。そこで、仲居さんが私を呼んだ。こんなPHならいつでもなる。

若くて綺麗な芸者さんを主賓に残したのは別にサービスのつもりではない。若いひとには無理な注文はつけられない。人形を抱くつもりならいいが、どちらが遊ばせているのかわからないのはつまらない。

年増のおねえさんを選んだら、仲居さんがいいのですかと念をおした。趣味が悪いとでもいいたいような顔であった。客をそらせないし、親切でやさしいおねえさんですけど、それがいいの。

ルームクーラーがききすぎて、掛布団がな

いと寒い。

「失礼します」
と屏風から顔をだした彼女は、自分が呼ばれたのが意外だったらしい。若いことに、それほど引け目を感じるものなのだろうか。

だまって手を差し伸べると、軽く握り返した。そのまま引き寄せる。

「唇にキスするのをいやがるひともあるね」
首を振った。

「甘い」

と彼女がいった。ガムが移動する。

彼女が屏風のかげにかくれた。帯を解く衣ずれの音がする。

彼女が素直にすわったわけではない。

「恥ずかしくて」

と逃げられた。

「そんなこと、できません」

ソワサント・ヌッフになるまで、それなりの屈折があった。抵抗なく受け入れさせるのには、それだけのムードが必要だろうが、羞恥心を示しながらも、彼女がやさしく従順だからできたのが本音。

ソワサント・ヌッフから、上体を起こされて、すわる破目になったとき、

「だまされたわ」

と彼女は、うらめしそうにいった。

小柄で痩せていて、肌は白いほうとはいえない。が、全身が性感帯のような女のタイプとみた。自分の肌を熟知しているが故に、彼女は拒んだのに違いない。

「顔が……」

彼女は、あえいだ。

敏感ならば、暗示にかかりやすい。

「知らず知らず失禁する女がいる」

彼女は何か叫んだようであった。逃げようと腰を浮かすのを、がっちりおさえてはならない。

「はなして」

「——」

「いけない」

「いいよ」

「でも……」

失禁していないのに、彼女はそう思ってしまったらしかった。

「かまわないよ、あなたのなら」

「そんな……」

「してもいいさ」

腰がぐぐぐと、彼女はうなだれた。顔を両手で覆う。

重い。窒息しそうであった。

「はなして下さい」

「——」

嗚咽が彼女の口から洩れ、全身がこきざみにふるえる。

「よごしてしまう」

という謔言を聞いたように思った。布団の上なのである。

必死にたえているのが限界を越したら、彼女は二度とこのお座敷に呼ばれないかもしれない。

「許して」

あわてて立ち上った彼女を、もはやとめることはできなかった。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

夜尿願望者の現状

岩 手 信 夫

8月号の読者通信欄に自分の名を発見した時、いよいよ正体を明らかにすべき時が来た。と覚悟をきめました。最近まとめて読んだ過去四年分の本誌には種々の型式の告白が載っていました。それらを読んで、私が勇気づけられたことへの感謝をこめて、ここに私とおむつの縁を告白したいと思います。

「おむつ歴」と言っても、このことに関しては日記にも書いてありませんから、記憶のなかからそれらしいものを拾うことにします。

まず小学校二年になった春の朝、不覚にもおネシヨをしたことを知った私は、恥かしさのあまり母にも言わずそのまま登校し、そのため却って甚だしく級友たちの前で恥かしい思いを一日中したという事件がありました。一方、そのころ末の弟が、夜だけはまだおむつをしていました。その一件の数日後の或る朝、私は偶然を装って、弟がおむつを外している光景を覗いてみたのです。内張りの鮎色のゴムが光る有様は、その私の子供心に、何

とも言えない感動を呼び起こしました。私は数日前の悲しい体験を思い出しながら、一見弱々しく見えながらも絶対洩らない不思議なゴム膜にあやかりたくなり——あの日の前夜おむつカバーをして寝たと仮想して——私は自分の失敗に驚きながら、一方ではフトンが無事であるのを知って安堵している心境を空想したものでした。

中学に行く頃になって個室を与えられ、いから自由な行動が可能になりました。或る日何の目的も無く私は、魔がさしたように、不要の衣類をしまっている押入れをかきまわしていました。かなり傷んだ、見おぼえのある柄のおむつの間に、紛れもなく鮎色のゴムのついたおむつカバーを発見したときには、誰も見ていないのに、ひとりで顔が赤くなるような気がしました。

そのカバーのゴムは、ゴム特有の臭気を漂わせて、その魅力を誇示するかのよう、その全姿を私の眼前にちらつかせているようでした。と思うと私はもう前後の見さかきもなく、そのまま持ち出して着用し、不思議とも思えるゴムの感触に、時の経つのも忘れたものでした。ああそれなのに、折角手に入れたものの、老化していたカバーのゴム膜は、無

理をしたためか、一回の着用で破れてしまったのでした。この時の喜びと失望こそ、私のその後から現在に至るまでのゴムカバーを求める遍歴の動機となったに違いありません。

高校時代の一時期には、ゴムカバーの無いことが余計に願望を強くしたようで、不要になって死蔵してあった例のおしめを探し出してきて巻きつけ、油紙を敷いた上に腹這いになり、無理に洩らすという試みを何回かやったものでした。しかしこれは、防水不完全で失敗が多く、いつのまにか沙汰やみとなりました。

白い六尺褌や、ゴムのレインコートを見ると胸さわぎを覚えたのも、たしかその頃でした。

いよいよ自分の収入を持つようになると、早速ゴムのレインコートを買いましたが、着ると胸がドキドキするので殆んど着ないでいました。その代り夜は、ゴムの面を肌にあてて眠るのが習慣のようになりました。だがこのことはゴムを楽しむほかに、もっと切実な要求が動機であったのです。それから長い空白、と言ってもおむつへの関心だけは募らせながら、実際上では見るべきものない時期を過ごしました。

もしあのままの状態が続いていたら、現在ほどに狂執的な私は、無かったかも知れませんが。こんな告白を書きたいと思う気持ちにもならなかったのではないかと思います。ところがその空白期間中に突然、泰平の眠りを醒ますような事件が起こってしまったのです。

一昨年の八月の或る日でした。その数日前から勤務上のことで、心身の疲労を著しく感じていた私は一夜、何もかも忘れて眠る必要を感じました。そこで念入りに入浴し、故意に長湯してぐったりとなった身体を、崩れるような風情で横たえたものです。しかし蒸し暑さのせいか眠りが浅く、時計の動きを意識しつつ何時間かを半眠半醒で過ごした後、明け方近くになってようやく意識を失ったようでした。失敗はその時に起こりました。その時の驚きは全くいいようがないほどでした。要するに、異様な感触に気づいたときは下着もフトンもぐっしり濡れていたのです。いくら疲労しているとはいえ、三十過ぎてこの失態はどういうことでしょう。子供と違って公認してもらえないだけに深刻です。

前日の呆れと心配の入り交った家族の眼にこりて次の日はおむつとして取り敢えずビニール製大人用おしめカバーと、有合わせの布

片を大量に用意しました。しかし内心では私は忘れかけていた期待が頭をもたげ、夕方から夜にかけて大量の水を飲み、おむつ着用で就床したのでした。だが、その夜は幸か不幸かおネショは起こらず、尿意を覚えて目をさしました。

いつもなら当然起きて、便所に行くのですが、私はおむつの存在に気付いています。もし昨晚こうしていたら、と後手にまわった口惜しさと、次第に嵩じて来る尿意のなかで私は追憶に耽り、あるいは現実を考えるのでした。

幼少時の体験は、今、おむつの中に再現を待っています。遠い昔、フトンを濡らし、衣服を濡らした惨めな敗北を、いつか雪辱しようと思いつつ、その機を得ないまま時を空費しているうちに返り討ちに合ったとも言えます。昨夜の失態——。今こそ好機だと私は自身に言い聞かせました。そして意を決して腹に力を入れたのでした。無意識での失態ではない点に後めたさはあったものの、何か「やった！」という感じでした。おむつカバーの内側には洪水なのに、フトンや衣類は無事だという事態が実現できたのです。

満ち足りた気持で、私はいつしか眠りに落

ち、夢を見ました。——女が現れて言いました。「これを着て寝なさい」私はだまってそれを着ます。それは水浸しです。女は言いました。「さあ、お脱ぎなさい」——

ハッと気付いた私は、とび起きておむつを外しながら、この夢が、夢というよりは願望自体であると感じたものでした。

当時婚約中だった私は、結婚を機におむつを忘れようと心に決めていました。しかし、この体験をしてからというもの、おむつが許されない生活を想像すると、何か急に味気なく思われ、決意がゆるぎました。もちろん悩みました。あれこれ考えた末、自己の本心に忠実たらんとし、巧みな言葉で婚約者にも、おむつを用いさせようとしたのでした。

これは結果として失敗でした。婚約者は私から遠ざかる結果となってしまったのです。だが、おかげでおむつに見放されずに済んだのです。このようにして、おむつは再び強力な魅力の魂りとなって、私の伴侶としての地位を占めたのです。今や私はどうしてもおむつを必要とする人間となるに至ったのです。

最近、休日の前夜を含めて毎週二回くらいの頻度でおむつを使います。九〇センチの

晒木綿のおむつ8枚と、共生地の三メートルほどの布片を腰に巻きつけ、おむつを揮のよきに支えて立ったままゴムカバーで覆うわけですが、何となく勇ましさを感ぜさせるいでたちとなります。

就寝前に排尿は済ませてありますが、床に就いてから眠るまでの間に少しでも尿意を覚えたときは、そのまま放出してしまいます。尿意が強まるにつれて、自然に抑制力も強くなり、わざとらしく力むことにならざるを得ませんが、近頃の私は、軽度のうちですと抑制を余り感じることも無く、比較的自然に思いついて出来るようになっていますが、就寝前にこうして少し口火を切っておくと、明け方近く目覚めたときに、僅かなきっかけで待望の状態を現出することができるようになった時は、人に云えない喜びを心の底から感じたものでした。

明け方は大抵、まず尿意を覚えて目醒めるのが普通でしょうが、私の場合は、既に濡れているおむつを意識しているからか、夢うつつのうちにその尿意を解放してしまいます。その後は快いまどろみが、多彩な夢の去来を伴ってしばし続きます。濡れたおむつの関係でしょうが、余震のように繰返し湧き起って

くる尿意は抑制を素通りしてしまうのです。夢とうつつの間をさまよいながら、次第に現実へと近づいて行き、起床の時を迎えるのです。

起きようとして腰の重さに気付き、改めて感じる「粗相してしまった」という、少年の頃と同様の気持。泣き出したような衝動を感じつつフトン確かめ、無事と知ってホッとするスリル。透けて見えるような鮎色のゴム膜が、濡れそぼちながらよく守ってくれている。こんな私を静かに全力で支えていてくれる——。

失敗したこともあります。あれは休日の朝でした。目覚めてから考え事などしているうちに、又ウトウトとし始め、かなり長時間の後に再び目覚めました。軽い尿意をどう始末しようかと迷ううちに、決意するともなしに抑制が解かれていました。多少、意志の力があつたにせよ、意識ある時にひとりで行なわれる排泄作用——夜尿願望者の最高のよろこびが実現したのです。私はボーッとした状態で感動を噛みしめていました。——そこまでは良かったのです。だが、その私に感動を与えてくれた分は、おむつに吸収されずにカバーの底に溜っていたのです。

体を少し動かした時それに気付いて、すぐに姿勢を直しましたが手遅れでした。慌てて探ってみたとき、完全な失敗をフトンに認めたのです。点検すると、背や腹の隙間からも両脇の重ね目からもしみ出しています。要するにおむつの布の吸水量に限度があること、カバーが至る所、隙だらけであることを見落していたのです。

この失敗により、おむつに対する信頼度は落ちてしまいました。しかし落ちたとは言っ

ても、晒木綿を腰にするときの喜び、ゴムカバーの肌ざわりと臭気、自分の尿を意識する感じ、これらは異常な魅力を持って、私を強力に捉え、それぞれに甘美な味わいを覚えさせてくれることには変わりありません。

でも私のような気難しい重症者は、これだけでは物足りないのです。おむつ自体にも執着する一方、夢とうつつの境界領域をさまようことで飢を満たしてはいますけれど、おむつは絶対必要な手段ですが意識したくないの

です。

今の私の望みは、忘れてしまっても良いほどの、安全なカバー。飛んでも跳ねても絶対安全とまでは望みませんが、仰臥や俯臥や側臥、そして腰を伸ばしても屈めても、足を大の字にして寝ていても、つまりフトンの上で寝る限り、どんな姿勢でも絶対と言っていいほど、粗相をしないような、おむつカバーを要求したい気持なのです。

夜尿願望重症者と認める私は、全身ゴムタイツに包まれた、自分の姿を空想します。だが、タイツは確かに右の諸要求に応えてはくれるでしょうが、着脱が大変だろうと思います。

実際のな解決策としては、おむつカバーごと包んでしまう特大ブルーマー型特製カバーというような物を作るか、作らせるかの一手しか無さそうです。でも、今の所入手の道を知らない私は、そんな、こちらの深刻な事情も知らなげに燃え上る切ない夜尿の願望に負けて、手持ちの小さいカバーの隙間を気にしながら、結局は見さかしくなく抑制を解いてしまうということを、繰返している現状なのです。

新発足 懸賞人告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文趣味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験▽原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

東映映画化決定作品

私本

伊藤晴雨物語

(前篇)

これは小説である

団 鬼 六

お里が、亭主を嫌って逃げ出したというだけならともかく、逃げこんだ先が、日報新聞、編集長、田所健作の所だと知ると、さすがの進吉も一瞬、気が遠くなりかけた。進吉自身が日報新聞の月給九円の臨時社員—その月給九円というのは、新聞小説の挿画が一枚二〇銭（これが彼の仕事であったが）他に演劇批評の原稿も書き、この掲載料が一回十銭で年中無休故、それで合計九円という事になるわけだが—つまり、進吉は、田所にこき使われている身分だ。上役に妻を奪われたという不自然な腹立たしさ、同時にそれは進吉にとって生命源を断ち切られたような衝撃であった。

その信じられない事がやっぱり事実であるとはっきり判明したのは、お里が進吉の留守を狙い置手紙を残して家出した翌日である。

自棄酒と寝不足で土色になったぼそんとした顔で進吉が新聞社へ出勤すると、編集長の田所が彼を呼んで近くのうどん屋に連れて行き「君の細君は僕の庇護を求めて来たんだ」という云い方で、しかし何時頃から進吉の女房と出来合っていたかは告白せず、また、部下の妻を奪ったなどといううしろめたさは微塵も顔に見せず、むしろ大変な迷惑を蒙ったような調子で「君は自分の細君に何か悪趣味を発揮したそうじゃないか。そりゃ細君が逃げ出すのは無理ないよ」と憤慨して進吉を非難するのであった。「君の細君は、僕が保護する事にした。いいね」と、田所は得々とした顔つきで云った。人の女房を奪った話合いにしては、あまりにも人を食い過ぎていると進吉は涙が出る程、腹が立ったが、田所の横柄さに威圧された形で云

いたい事の半分も云えなかったのである。また、来るべき時がやっばりきたという諦めもあった。考えれば、逃げたお里と田所との付き合いは亭主の自分よりも長いのである。

もとお里は、浅草の小料理屋「菊水」で働いていた仲居であり、田所はその店の常連の一人であった。進吉は浅草を歩いて、丁稚奉公していた頃の仲間と偶然出会い、誘われて「菊水」へ飲みに出かけた事がお里と知り合った動機であったが、進吉は色白で上背のあるお里にいわゆる一眼惚れ、もう次の日から一人で菊水へ通うようになった。浮世絵画家というのが進吉の表向きの職業であったが、無論、それだけでは食っていけず、芝居小屋の看板かき、仕事のない時は風呂場の看板かきなどにもかり出されて、生活はかなり苦しく、しかし、お里にはかなりの祝儀をはずんだ。勿論、進吉には下心があり、熱心にお里を口説くのだが、口説くといっても他の酔客のそれとは違い自分の絵のモデルになってくれ、と異常なばかりの熱心さなのだ。どんなモデルをするのさ、と聞いて、キリキリ縛られた女が、折檻され、苦悶する姿、と聞かされたお里は、冗談じゃないよ、別に悪事もしないのに、どうして、あんたに折檻されなきゃならないのさ、と、笑いつつ、適当に受け流し、奇妙な絵かきもいるもんだ、と仲間の仲居達に話して笑っていたけれど、毎夜通って来る進吉に同じ事ばかりくり返されている内ふと、その一途さに心ひかれて、じゃ、一回だけよ、とモデルを承知した時は、進吉と肉の関係が出来る事をお里は暗々裡に諒承したのだろう。あんなを縄でキリキリ縛りあげるけれど、自由を奪ったあんたに対し、不埒な行動に出る下心は毛頭ない、責められ、苦痛を噛みしめる女性の悶えを描き、残酷破壊の美を出してみたいなどと調子のいい事

を云ってるが、所詮、男とはどのようなものか、長年、水商売の垢に染まったお里には男性に対する常識といったものがある。

店が看板になるまで飲んで粘った進吉が、泥酔に近い状態のお里の肩に手をかけ、上り框を入れてたった三間しかない長屋つづきの家に連れこんだのは、「菊水」へ通い始めて一カ月たった頃であった。その夜のお里は、何か自棄になったように宵の口から店で飲みつづけ、朋輩の仲居に当たったり、店の土間の白木の卓で、相変わらず猫背になってちびりちびり盃を口へ運んでいる進吉にどんと体をぶつけて来たり、散々、手古ずらせて「私しや妻子のある男に惚れちまったのよ。何て間抜けなんだろ」と自嘲的に高笑いするのだったが、その妻子のある男というのが田所だったという事は、その時の進吉はまだ知らなかった。

「さあ、モデルにするなり、酒の肴にするなり、どうとも勝手にやってくれ」と、進吉の薄暗い家へ上りこんだお里は、酔った体をフラフラ動かしながら、帯や腰紐をキューキューと音をさせて次から次へと解いていき、緋の長襦袢姿になると、畳の上に絵筆を揃え、妙にそわそわしている進吉に、よろよろとくずれかかり、そのまま畳の上へひっくり返ると、軒をかき出した。どうした、しっかりしろ、と半分うろたえて、女を抱き起こすと、キラリと進吉に向けたお里の酒気を含んだ瞳は、ぞっとする程、妖艶で、しかもメラメラと燃え上るように挑みかかり、その妖気に当てられた進吉は、カッと血の色を浮かべ、もう矢も楯もたまず、お里を突き離して押入れから荷造り用の麻縄を取出すと、飢えた獣のような素早さで彼女をキリキリ後手に縛り上げたのだ。と同時に、進吉は、お里の襟元に手をかけ、三度四度激しく揺さぶると、お里の日本髪はがっくり

伊藤晴雨遺作集 =その1=



くずれて、おくれ毛が肩もとまでバラリと垂れ下がる。くずれた鬘を見ると、進吉は、稲妻を感じたように全身が慄え、次にこみ上げて来た嗜虐的な陶酔にもう押さえがきかず、お里の長襦袢の襟元を大きくはだけさせて、その襟を押さえ壁の所まで引きずって行きその場に引き据えた。今までに進吉は写真店の主人に頼んで、美術学校などに出入りしている職業モデルを二度ばかり使った事があったが、彼女達は、進吉が発作的にこうした狂暴性を発揮すると、金切声をあげ気狂いとか変態男、とかわめき散らして逆上するのだが、そして二度と進吉のモデルになろうとはしなかったが、その夜のお里は、正に掘り出し物であった。酔ってもいたし、何かヤケにもなっていたが、髪を無惨にくずされようと、乳房をあらわにされようと、ただ進吉にされるがままで、そんなお里の長襦袢の裾前まではだけさせ、うずら縮緬の蹴出しをすり切れた畳の上にさっと流させて、ぐいとお里の首を上へ持ち上げた進吉は、肩のあたりのおくれ毛をつかみ、お里の口に咥えさせるのだった。「恨めしげに、もっと恨めしげにこっちを見て」進吉はそうしてお里に好みのポーズをつけると、悦びに慄える手で絵筆を取り上げた。何かをじっと思いつめているのか、すっかり安心してしまったのか、お里は涙まですませた切長の瞳をせかせかと、筆を動かす進吉に向けるのである。

やはり、それですむわけはなかった。進吉のそうした女体の無残絵を描こうとする激しい衝動は、裏を返せば女体の無残図に激しい欲望を感じる事に通じるらしい。仕事をすませた進吉は、緊縛されたまま引き据えられ、おくれ毛を噛みしめながらぐったりと疲労しているお里の傍に吸い寄せられて行き、ぴったりと取りすがると、

お里の胸に顔を埋め、おいおいと泣き出した。そんな進吉をなだめるようにお里は云った。「いいのよ。好きなようになさいな」進吉は、お里の緊縛された熟れた肉体にひしと取りすがり、火のように燃えさかった――。

それが、きっかけとなって、二人は世帯を持つ事になったわけだが、勿論、進吉の収入だけではやっていけないのでお里は同じ店の勤めはつづけた。相変わらず、店でお里は売れっ子だったが、進吉の方は仕事をしくじる事が多くなった。つまり、進吉はお里に溺れ切り片時も離れたくないといった気持からで、夜になれば生活のためお里は店へ出なければならず、お里と一緒にいる事が出来る昼間の間は、看板屋の仕事が来ても、口実を作って進吉は拒絶し、注文する側の受けが段々と悪くなったのだ。しかし、お里は、そんな事には無頓着、ただし、愛欲行為には貪欲といった風な女で、更に、肉体にからみつく縄の感触を悦ぶというマゾヒストでもあり、進吉との情事は、ふと毛穴から血が飛び出すばかりにまるで、やけくそになっている。そんな女だから、進吉は惚れて惚れて惚れ抜いて、そして、何かにとり憑かれたよう必死な思いでお里をモデルにし、絵をかくのであった。

「そんな変な絵ばかりかいていたって買手があるわけじゃなし、あんたって妙な人だよ。全く」と、お里は進吉のあまりの熱心さに呆きれて、毒づく時もあったが、その責め絵をかく時の進吉の何か挑みかかるような真剣な眼つきを見ると、ふと胸がうずいて来たりして、モデルにされる事を拒む事はなかった。

進吉の絵の仕事が終わったあとには、お里の卵の白身のようにつややかな肌には、きまって、くつきりと縄の跡がつき、進吉は、半

分、ペソをかきかき、「すまねえ事したな、許してくれろよ」と、しきりに濡れ手拭でお里の肌をふきながら、女の肌が荒れないようにと気を配る。一時の興奮がおさまると、そんな風に人間が変わって優しくなる進吉を、お里はしみじみ可愛い人と思うのだ。そして、一旦、切れた筈の田所と最近またよりが戻って進吉の眼をかすめて逢う瀬を続けている自分の罪恐しさを思うのだった。

ある夏のむし暑い昼下がり、地方を廻る芝居一座の絵看板を頼みに来た松吉という男が進吉の所へ来て、この暑いのに表戸も窓もしめ切っているのを不審に思い、裏へ廻って雨戸の間から中をのぞくと、畳の上へ落ちている青い蚊帳の上へお里が縛られた熱い裸を転げ廻し、悲鳴をあげてのたうっている。松吉は仰天した。口に絵筆を咥え、手に蠟燭を持ち、お里を追い廻しているのは進吉で、悪鬼のような形相になって、全裸のお里の上から蠟燭の滴を落しているのだ。進吉が女房を責め殺そうとしている、と直感し、真っ青になった松吉は、大声をあげて近所の人達の救援を求め、声を聞いてかけつけて来た長屋の住人達と一緒に雨戸を突き破り、気でも狂ったか、とばかり進吉を取り押さえ、恰好がつかなくなって、緊縛された裸身のまま台所へ突っ走り、ガタガタ慄えているお里に、袖で眼を覆いながら近寄って縄を解くのであった。「どんな事情があったのか知らねえが女房を責め殺そうなんてとんでもねえ野郎だ」と力自慢の大工や土工達が寄ってたかって今度は進吉を縛り上げ、ポカリと頭をなぐる奴までいて、これは夫婦のざれ事だ、と進吉がいくらかわめいても仲々とり合わなかったが、机の抽出しや押入れの中から、進吉のかいた残酷絵数十枚が出て来ると、一同顔を見合わして奇妙な顔になり、こういう奇怪な絵をかく商売もあるものかと一応

納得して、進吉の縄を解き「こりゃ、とんだ事しちゃって」と皆はペコペコ頭を下げ、コソコソ引揚げて行った。

女房の裸を見られただけではなく、女房をモデルにした淫猥な肢態とも受取れる責め絵を近所の者達に見られてしまい、進吉もお里も腹立たしいやら情けないやら頭からバケツでもかぶりたい気持で何日か過ごすうち、急に里子は吐き気を催した。妊娠したのだ。

生まれたのは女の子で、甲州街道の幡ガ谷で近所の餓鬼大将相手に駄菓子屋をやっている進吉の叔父夫婦に預ける事にした。水商売しているお前の女房が子供を抱えていては何かとやりにくかろうと元警察柔道指南という肩書きをいばる叔父は顎髭をしごきながら思いやりのある所を示したが、月二円の赤ん坊の養育費は必ず捻出せよ、と如何にも警察官くずらしい鋭い眼つきを見せた。

週に二回、夫婦揃って幡ガ谷に赤ん坊の顔を見に行くのが楽しみであった。しかし、一児の父親となったのに、こう何時までもぶらぶらしては情けないと進吉は考え、以前、注文を受けていた看板屋、提灯屋、版画家などに仕事探しに廻ったが、例の一件——白屋女房に責め折檻を加え、その苦悶の図を絵に描いていた——という噂は昔の得意先の方にまで拡まって、進吉が顔を見せると、相手は妙に白々しく、何か進吉を気味悪がる風だったから、進吉はやり切れない思いで、家でしょんぼり障子紙など張る事になる。それをまた見るのが辛くて、お里は「あんた、どんな仕事が一番やってみたいのよ」と進吉に聞くと、やってみたいのはやっぱり責め絵だ、などとはさすがに云えないから、進吉は、一層、しょんぼりして見せて、新聞か雑誌の小説挿画がかいてみたい、というのだった。となると、日報新聞の編集長をやっている田所に頼むのが一番だとお

里は思うものの、姦通の相手の男に亭主の仕事を頼むというのは、どうも気がとがめる。だが、考えてみれば、田所とは、進吉と知り合う前から体を濡らし合った間柄だし、こうした時は割り切って兄貴にでも相談する気になればいいのだと、或夜、店がひけて、二人の逢引場になっている隅田川近くの旅館の二階で、互に情念のしたたりを満喫した後、田所に相談を持ちかけてみた。ああ、いいとも、とあっさり引受けた田所は、それにしても奇妙な恋仲もあるものだと思つたお里の間を振り返ってみる。十九の年で女にしてやった女は、やがて亭主を持ち、その子供まで作ったが、しかし、なお、くされ縁というのか自分と彼女との情事は、このように延長している。それだけ、彼女の肉体に妖しい魅力があったという事になるが最近、ことに子供が出来てからの彼女は、ますます肌に脂がついて、からみついて来る時の手ごたえも粘っこい。顴骨が出っ張った瘦せぎすのガリガリした感触の女房を持つ田所は、やはり、この女は絶体に手離せないと思うのだった。「亭主なんぞ持って何も苦勞することなからうに」と、田所が笑いでもすれば「何いってんのさ。私じゃあんたに復讐するため亭主を持ったんだからね」とお里は忽ち逆襲し、妻子のあるのを隠して、私をここまで引きずって来ながら、あんたにそんな事いう資格はない、と更に攻撃に出て、田所にぐの音もあげさせない。そんな時、きまって田所はニヤニヤしてしまふのだが、何だか亭主つきの妾を持てるような気がして、バカバカしくもなり「だが、よりにもよって、看板かきの女房になるとはお前も物好きな女だよ」と、一本やり返し、するとまたお里は、負けるものかとばかり「仕事は看板かきなんかやってるけど、うちの人は、閑があれば一生懸命、絵の勉強しているんだよ。やが

て、そのうち立派な芸術家に——」といい返したものの、その勉強している絵というのが女を縛った残酷画であり、自分がそのモデルになってるとは、さすがに云えなかった。

日報新聞に進吉は勤め、念願叶って、新聞小説の挿画がかけるようになったが、その頃には、お里と田所の月に二度の逢引は三度、四度、とふえていった。お里は前にもいった通り、素肌をキリキリ緊めつける縄の感触が好きなマゾ性のある女だが、進吉との夫婦行為には身も心も陶醉し切れない物足りなさを感じていた。はつきりいえば進吉はいわゆる包茎短小というやつで、妻を有頂天にはさせ得なかったのである。そこへいくと、田所は女を緊縛して行為に入るといふ趣味は全くなかったが、肉体がものをいった。何時も二時間から三時間、それも立てつづけに二度三度とくり返し、お里は煽られ、捲きこまれ、火柱のように燃えさかって泡まで吹き、完全に絞り尽されてしまう。いわばお里は、前技と後技に一人ずつ男を持ったようなものだが、或夜、店へやって来た田所は、進吉と別れて俺と結婚してくれ、と突然、お里にいい出した。「苦節十年、いよいよ妻と別れる日が来た」などとおかしな云い方をした田所は、だが、冗談ではなく、実際に妻と別れる決心をしたのである。この日を俺はどれだけ待った事かと田所は段々涙声になり、妻には手切金もすでに渡した故、もうこれでこわいものはないと今度は急にさばさばした顔になって酒をどんどん注文し始める。しかし、急に田所にそんな事を切り出されたお里はうろたえた。もう進吉とは子供まで出来た仲になっているし今更、何を……と思うものの、田所は自分に対し約束を履行したのではないか。そんな彼の気持を知らず、自分は騙されたものと思ひこみ、復讐する気で看板屋の女房になっ

たのは早計であった、と、もともと単純で奔放な女であったから忽ち田所の決心に胸をときめかしたが、やはり、子供の事がひっかかりあちら立てればこちらが立たず、などと口の中で云い、生まれて始めての苦しい顔を見せた。

それから二、三日というものは、店で働いていても、どうにも神経が落着かず、或日、早引きして戻って来ると、表のガラス戸に鍵がかかっている。今日は進吉に残業でもあるのかと思った時、家の中でガタゴト音がし、空巢が入ったと思ったお里は、下駄を脱ぎ、裏へ廻って勝手口より足音を忍ばせて中へ入ると、進吉は近くの青木写真館の主人ともう一人——あとでわかった事だが、それは横山町の呉服屋の主人——の三人で、若い女を麻縄でキリキリ縛り上げているのだ。女は、モデルらしく、洋かずらをかぶり、コルセットとかパンティとかいう西洋下着だけの姿を男達に縛らせている。お里は息を吞んで、そのまま、そっと台所の竈のうしろに隠れ様子をうかがっていた。中心になっているのは進吉で、ここを引っ張ることを緊める、と男二人に女体緊縛のコーチをしながら、女を雁字搦目にする、と、踏台を踏んで天井の梁へ小さな鉄の滑車を打ちこみロープをひっかけて、女を宙に吊り上げようとしているのだ。

進吉が、二人の男と一人の女を家へ連れこんで、奇妙な仕事を開始した理由はこうである。——進吉は写真屋の青木とは飲み友達でその青木に三日ばかり前、女を縛って吊り上げた写真を欲しがっている男がいたので協力してほしいと頼まれたのだ。そんな写真を欲しがっている男は、横山町に大きな店を持っている木村という呉服屋の主人で、金に糸目はつけぬというし、これは儲かる話だから、と青木は進吉に持ちかけたわけだが、進吉は喜んで引受けた。以前

より、一度女を吊った絵が書いてみたいと思ったところだし、この機会にスケッチぐらい出来るかも知れない、別に報酬はいらぬからぜひ手伝わせてくれ、と自分の家までその撮影場に提供したわけだが、進吉が何よりも嬉しく思った事は、そうした女の責めに趣味を持つ男はやはりいるとわかった事である。責められる女の体、苦悶する女の表情に美を見出すなど、広い世間に俺一人位のものかと思ひ悩んだ事もあったが、やはり仲間はいたのだ。モデルとして、青木が連れて来た女は、彼が最近、知り合ったという吉原の娼婦で、売られて田舎から出て来たのは一カ月前、客をとったのは青木が三人目という十八になったばかりの小娘だった。モデルには、西洋下着をつけさせて欲しいという呉服屋の注文だったので、島田雷にコルセットでは恰好がつかないと青木は浅草のちやうど屋から洋かづらを借り、それを娘の頭に乗せる事にした。何日、どこどこで撮影するからと一応呉服屋の木村に青木が知らせると、やはり、もうじつとしていられなくなったのか、木村は横山町からわざわざ撮影見学に進吉の家までやって来たのである——青木は木村に「こういう女の責めを研究している人」と進吉を紹介した。「いや、女の責めを研究している人がこの世にいるとは思わなかった。じゃ、一つ、先生、よろしくお願い致します」とえびす顔になった木村は、女に苦痛を与えて悦ぶという趣味がある人間にはどうしても信じられぬ位円福な顔つきした男で、進吉も気が許せ、とにかく、この道の愛好者を見出したという事が嬉しく、撮影に入る前のとき、色々、彼と話し合ううち、何時しか手が床のハメ板を外して、子供の頃から蒐集した様々なコレクションを木村の前へ拡げる事になってしまった。芝居番付、錦絵、絵双紙から草双紙、新聞雑誌の切抜きまで、

吉田御殿、腰元竹尾の責め場、番町皿屋敷のお菊、中将姫の雪責、明烏の浦里など——十三の時、本所の彫刻師の所へ丁稚奉公に入り二十三に至るまであちこち住みついて他人の飯を喰って廻ったが、月五〇銭足らずの小遣を節約して町の古本屋、絵双紙屋を当って廻り、とにかく十年かかってこれだけ蒐集する事が出来たと進吉は得意になって説明する。木村は、ほとほと感心した顔つきになって、「実は先生、私もかなり前からこうしたものを蒐集しているんですが、閑を見てお越し願えませんか」進吉はますます嬉しげな顔になり「あんたにや特別お見せするんだから、誰にも云っちゃいけませんぜ」と今度は押入れの奥から、お里をモデルにして描いた残酷絵を引っ張り出した。「こりゃ凄惨」と木村は血走った眼付きになって、それを一枚一枚喰い入るように眺め出す。「こりゃ、たしかに芸術品だと僕は思いますね。これは傑作だ」と木村は、ふと、こみ上って来た感興を押さえるように時々眼を閉ざしたりし、一枚一枚を丹念に見ていくのであった。相手がその道を好む者とはいえ、こうした絵を芸術品だといわれた進吉は涙が出る程、嬉しくなる。何しろ、子供の頃から丁稚奉公に出されていたので絵の勉強らしい勉強はしていないが、光琳風の絵師で野沢提雨という人につき、たった一年、手ほどきだけは受けた、と自分の粗末な履歴を語り「僕の好みからいうと、責められる女の美は、やはり丸鬘、高島田という髪の毛に滲み出て来ると思えますね。髪の毛の根元がゆるみ、しどろに乱れたおくれ毛が、こう肩に垂れ下がって、残酷な色気をもし出す。西洋髪もいいけれど、やはり、残酷美が出るのは日本髪のようなです」と、講釈し始めるのだった。木村は余程、お里をモデルにしたその責絵が気に入ったと見え「如何がでしょう。この絵を譲って

伊藤晴雨遺作集 =その2=



頂くわけには参らんでしょうか」と云う。「冗談じゃない。こりゃ金で譲れるような代物じゃありませんよ。うちのかみさんをモデルにしたものですから」「え、奥さんを」木村は、眼をパチパチさせた。

どうせ、やるなら逆さ吊りにしてみませんか、という進吉の提案に木村は勿論同意したが、部屋の隅に雁字搦目に縛られたまま、キョトンと坐っていた若いモデルがびっくりして、田舎言葉丸出しで「冗談じゃねえっす。おめえ等、少し頭がおかしんと違うけ」と、わめき出した。逆さに吊るといっても、ほんの紙煙草半分すう位の間だから、と青木と進吉が必死になってなだめ出し、あと五十銭割増し料を支払うからという事でようやく納得させた。足首を揃えさせてしごきで縛り、その上にキリキリ麻縄を巻きつかせて、滑車に通したロープにつなぎ、進吉と木村は、よっこらしょと力を合わせてロープを引いた。モデルの体がロープに引きずられて逆さになった途端、頭の洋かざらがすっぽり抜けて畳に落下し、カメラの位置を作っていた青木があわててかけより、かざらを、も一度、彼女の頭に押しつける。モデルの小柄な体が果物の皮みたいになじれながら、宙へ吊り上っていくと、ロープを引っ張る進吉の眼も木村の眼も、ギラギラと異様につり上った。

竈のうしろに隠れて、そんな事に夢中になっている進吉を見たお里は、何か進吉の浮気の現場でも見たように頭に血がのぼり、それに机の上に散乱している、モデルになった自分の責絵に気づくと、もう押さえがきかず、カッとなった。女房の羞しい姿を他人に見せびらかすとは何という破廉恥な男——お里は血相を変えて座敷へ飛びこみ、責絵をズタズタに引裂いた。進吉は、あっと声をあげ、思

わずロープを引く手を離してしまい、モデルは文字通り、真逆さまに墜落、どしん、と畳に頭をぶっつけて失神した。

お里が置手紙を残し、田所の所へ突っ走ったのは、その翌日であった。

○ ○

進吉は田所と、お里の事、今後の処置について、ほんの一時間ばかり、話し合っただけだが、幡ガ谷に預けてある女の子は、こっちが引取るという条件をつけて、お里と別れる事を、あっさり承諾した。進吉が子供を引取るというのは男の意地みたいなもので、半分破れかぶれであった。田所は、お里の勤める「菊水」の常連で、お里とは随分と昔からの馴染である事は進吉も承知していたが、最も恐れていた事——田所とお里は、以前から肉体交渉があった事——いや、それだけならともかく、進吉と世帯を持ってから後も、お里は田所と関係が続けていたなど、進吉の方で許せるものではなかった。姦通している女房が姦通している相手の会社へ亭主を就職させるなど、何たる事かと進吉は憤慨し、それに気づかず、これまで田所の下で働いていた自分が底抜けの阿呆に思われ出した。ふと、考えた、つまり俺は田所の女を数年間預かっていたようなものだ——いよいよ癪にさわり、進吉は酒浸りになった。

逃げた女房に未練はない、と一升瓶を持って慰めに来た写真屋の青木達に進吉は、ひきつった笑顔を見せるものの、しかし、ふと子供の事を考えると胸がうずいた。進吉を慰めに来たのか、酒を飲みに来たのか、わけのわからぬ近所の連中が、どんちゃか騒ぎをやって、引揚げて行った夜更けの一人、落花微塵に散らかった部屋の中

で、一升瓶を枕にしながら進吉は、たまらない孤独をひしひしと感じ、思わずはね起きて押入れを開け、お里を縛った麻縄を引きずり出すと、それに顔を埋め、お里の肌の匂いと汗の匂いを嗅ぎながら悶え泣きし、一そ、これで首を吊ろうかとさえ思う進吉であった。憎悪と未練と悲哀とがこんぐらがり、進吉は身心ともにくたくたになった。

何よりも情けなく、屈辱に思う事は、しかもなお、妻を奪った奴のいる新聞社へ出勤しなければならぬという事であった。出社しなければ食えず、幡ガ谷の叔父へ月二円の子供の養育費を払うためにも、仕事を放棄するわけにはいかない。これは少ないが絵の勉強の足しに、と田所がうどん屋で差し出した十円を馬鹿にしないで下さい、僕は女房を売ったんじゃない、と突き返してしまったのが、ちよっぴり惜しまれた。

三日ばかり休んでから、進吉は、やはり決心して新聞社に出勤した。女房を奪った男にこき使われるという事にふとマゾヒズムの快感があった。それに書きかけの原稿や挿画の事が気がかりにもなった。仮面をつけたような硬化した表情で、ツカツカ田所の机へ進み寄り、「編集長、一応、眼を通して頂けませんか」と描き上げた新聞小説の挿画を突き出す。「ああ、よく出来たじゃないか。御苦労さん」と、しかし、挿画は見ても互の顔は正面に見られず、右と左を向き合ったまま、次の仕事の打合わせなどして、どちらも申し合わせたようにお里の事は口にしなかった。

それから何日かたって、進吉が、いよいよ会社に居辛くなるような問題が起こった。横山町の木村が、ぜひとも遊びにお越し願いたい。それにも一度、出来れば先生の蒐集品を拝見したく思う。と連

絡して来たので、秘蔵品をこっそり風呂敷に包んで出かけたが、木村の所について風呂敷を開けると中から出て来たのは五十足分の下駄の鼻緒、進吉は真っ青になった。市電の棚で誰かの荷物と入れ交ったと、すぐにわかったが、十年かかって集めた貴重品がこのまま行方知れずになれば大変だと次の日は社をさぼり、市電の落し物係りや、うしろめたさを感じつつ交番に問い合わせたりした所、幸か不幸か紛失した風呂敷に日報新聞、編集部住所が書きこまれてあった所から、包みを間違えて持ち帰った下駄屋の親父が進吉の気づかぬ内、あわてて、それを日報新聞へ送りとどけていたのだ。中身が社員十五人の眼に入り、進吉のこうした秘密は、暴露されてしまい、社員達は侮蔑と好奇心の眼で進吉を見るようになった。その頃には、田所も新妻のお里から、進吉の性情や絵に何を描こうとしているか、寝物語に聞かされていて、お里がモデルにされた絵を引き裂いて進吉のもとから逃げ出してくれた事にほっとしたけれど、何を好んで進吉がそんなものばかり蒐集し、そんなものばかり描きたがるのか、わけがわからなかった。それで、三宅という社会面を担当している自分の腹心に、伊藤進吉の悪趣味にも困ったものだ、とこぼすのだが、三宅は、進吉のような男をつまらぬ変態性慾患者といえます、と自分に学のある所をほめかし、こういう患者は内に非常な危険性を有している、とも云うのであった。それから何日かたって、日報新聞創立八周年祝賀の宴会が築地の料亭で行なわれ——進吉は幡が谷に預けた子供が大変な熱を出したので欠席したが——それを幸いに、三宅は無礼講の酒宴がたけなわになった頃、フラフラ立ち上り、芸者と相撲などとなっている社員達を席へ戻させて一席次のような意味の、スピーチを行なった。

「伊藤進吉は、諸君達もすでに御存知の通り完全なる変態性慾者であり、一部の精神医などにとっては、たしかに興味の持てる人間かも知れないが、世間にとっては、これ程、物騒で薄気味の悪い人間はないと思われる。もし、彼が何らかの衝動から発作を起こし、世の婦女子に対し、不埒なる手段に出たる場合はそれは彼一人の責にとどまらず、付随的に我が日報新聞は致命的な汚名を蒙り、世間の信用は必然的に失墜するものと覚悟しなければならぬ。よって諸君は、今後とも、彼の行動に監視の眼を向け事故を未然に防ぐよう気を用いて頂きたい」

三宅がそんなスピーチを場所もあらうに祝賀会の宴席で行なったという事を進吉に知らせたのは、その宴会の帰り。千鳥足でフラフラ進吉の家へ訪れた校正係の村田であった。村田は三宅の傲慢さを嫌っていた男で、あいつはろくな死に方はしねえぜ、と進吉の家に上りこんで散々三宅の悪口を云い、「しかし、長いものには巻かれろだ。まあ、気にしない方がいい」と進吉の肩をたたいて、そのまま酔寝してしまった。進吉は寝られるどころじゃなく、田所と三宅が共謀して、自分に対する排斥運動を行なっているなどと想像すると、イライラと神経は高ぶった。思い疲れて、村田の横にもぐりこんで寝た進吉の夢の中に、お里の柔軟で、艶やかな肌がうねり舞い、やがて、それは緊縛された裸身となって、次から次と淫猥な肢態をくりひろげ、ハッと眼ざめた進吉は、思わず洩らしてしまった自分に気づいてしみじみ我が身が浅ましく、そして、次に進吉の胸をえぐるのは、お里のあの妖しいばかりに白い肌を今頃田所はどのようなに愛撫しているかという嫉妬で、成仏し切れていない自分に進吉は愛想がつきる思いだった。それにひがみ根性も生じて、自分を

新聞社から排斥しようとしたのは本当はお里なのかも知れず、前夫が現在の夫の下で働いているなど気分のいいものではなく、田所にねだって、自分を追い立てようとしたのでは——ひがみっぽくなつたついでにもう一つひがんでみれば、風邪熱が出てこんなに父親をうろたえさせた幡ガ谷の赤ン坊も、ひよっとすると田所の子供では——などと荒唐無稽な疑惑も生じてくるのだった。

翌日、出社した進吉は、まっすぐに三宅の傍へ進み寄り、酒席における貴方の演舌は僕の名譽を傷つけるもの故、謝罪せよ、と迫った。負けるものと進吉は、齒を喰いしばった表情で三宅を睨んだが、三宅も負けてはいなかった。「君が蒐集したり描いたりしているものは怪奇画というのか変態画というのか知らないが一体、どういうつもりなんだ。あんなものに芸術性があるとでも君は思っているのかね。人に誤解されるようなものには凝らない事だ」と、三宅に高圧的にまくし立てられると口下手な進吉も黙ってはいられない。「芸術性があるうとなかうと、こっちは好きだから描いてるんです。貴方にとにかく云われる筋合いはない」すると、三宅はむっとした顔つきで、ドンと机をたたいた。いくら好きでも、婦女子が折檻されている汚らわしい絵など、世間に対し、百害あって一利もない。とわめき、も一度、机をドンとたたいて、「君は日報新聞の社員なんだぞ！」こうした剣幕に仕事をしていた社員達は一せいに二人の方に視線を向け、苦り切った表情で校正刷りに眼を通していた田所も黙ってはいられず、二人の傍へやって来た。田所と三宅が揃ったところで進吉は、ここ一番に賭けたような血走った気分で、次のような事をしゃべった。

——貴方達には僕が描こうとしているものが社会に害毒を流すよ

うな代物に見えるかも知れないが、僕は自分が一番陶醉出来るものを描いている。世間がそれを何と批判しようと勝手だし、こちらも自分の描くものを世間に発表しようなどとは考えない。とにかく僕は責められる女の容貌や肢態にたまらない程の美を感じ、美を感じるからこそ、それを描いてみようと思うのだ——。

出勤する途中で三宅に投げつける言葉として何度も頭の中で練っていた言葉をしどろもどろになりながら何とかしゃべり、「美しいものを描こうとするのが、どうしていけないんですか」と、わざと喰いつくような眼つきを進吉はして見せたが、すると、田所は、紙煙草にゆっくり火をつけながら、「じゃ、君は、犬の糞が美しいと思えば一生懸命、犬の糞を集めて廻り、それを研究し、絵に描くかね」と、口元に冷笑を浮かべるのだ。「ああ、描きますとも」急にカッカと三宅は笑い出し、「やっぱり君は変態だ」その途端、進吉は手にしていた今日ノ切の小説挿画をズタズタに引き裂いて、パツと天井へ投げつけた。

それからもう出社せず、進吉は家でゴロゴロしていた。何かにとり憑かれたよう精魂かたむけて描いたとしても、所詮それは、げ・て・もの・の域を出ず、世間がそんなに眉をひそめるなれば、自分という人間はたしかに三宅のいう通り、百害あって一利もない毒虫かも知れない。どうして、俺はこんな絵を描きたがるのだろうと考えて見ても、ただ好きだから描くという答えしか出てこない。生まれつきの業というもののなか、自分の盗癖に悩む少年のように進吉は考えこみ、自分が小さく情なく思われ出し、急に得体の知れない腹立たしさがこみ上げて来て、机の上の絵筆を壁に向かって、たたきつけさっと立ち上った。

近くの居酒屋で一杯ひっかけようと、路地を出た途端、小走りにかけて来たやくざ風の男と突き当り、進吉は地面につんのめった。

「馬鹿野郎、気をつけろ」とどなった単衣物の男は、よく見れば以前、長屋にいた左官屋の仲の三郎で、「何だ、あんたかよ」と進吉の手を取って引き起こした三郎は、わざとらしくまくり上げた袖の間から刺青をのぞかせ、やはり、やくざの仲間を身をくずしていたが、親父の亡くなるまでは、律義な働き者であった男だ。久しぶりなんで、ゆっくり話をしてえが、今、ちっとばかりとりこんでいるんでね、と如何にも遊び人らしく、ニタリと口元を歪め、三郎は再び足早に歩き出したが、ひょいと立ち上り、うしろを振り向いた。

「俺と一緒に来な。あんたに面白いものを見せてやるぜ」

どうせ、こっちは閑なんだからと、進吉は三郎について田原町まで歩いて行ったが、その間に三郎の説明した面白いものというのはいくつであった。——仙造という流れ者が三郎の弟分に賭場の借金が出来、期日が来た弟分が返済を迫ると、仙造は催促のしかたが気に入らねえ、といって、弟分を足腰が立たなくなる程、なぐりつけ、お浜という情婦をつれて行方をくらました。弟分をこけにされて黙ってるわけにはいかねえ、と仲間の者達、八方手分けして仙造の行方を探しているうち、宿に荷物を取りに来た仙造の情婦、お浜をつかまえた。これから仲間の者達でお浜を責め、仙造の居場所を吐かせるのだという——。

「あんたは、女を責め折檻する趣味があるんだろう。やくざの折檻というものがどんなものか、参考のために見ておきな」と進吉に云う三郎は、以前進吉が白昼お里を縛って蠟燭責めにしていた時、騒ぎを聞いてかけつけて来た、当時長屋の住人の一人で、進吉はあの

時、三郎に一発、頭をなぐられた記憶がある。

仲間同志で小博奕する時に使っているという風呂桶屋の二階に、三郎のあとから上がって行くと、そこには眼つきの悪い三人が、畳にあぐらを組んで酒を飲み、何だ手前は、とばかりに進吉を睨むのだ。三郎は三人に、この男は俺が昔世話かけた事があり、強情な女にドロを吐かす名人だ、と進吉の事を説明し、するとやくざ三人は、進吉を刑事くずれと思ったのか急に態度が改り、旦那、どうぞと座布団をすすめる奴もいて、進吉は、ハ、と恐縮して、その場に坐ったが、一人が、この阿女なんですがね、旦那、と立ち上って襖を開けた。窓の雨戸を閉め切った薄暗い四帖半にぼつねんと坐っている二十前後の女は、富士額、切長の細い眼をした美人であった。高島田の髪が大きくほつれているのは、ここへ連れこまれるまでの女の抵抗を示すものだろう。進吉は、その崩れた女の髪を見、じわじわと揉み抜かれるような陶醉がこみ上がって来て、そのまま女を凝視していた。「おとなしそうに見えて、この阿女、これで仲々、強情なんですね」と、三郎を含めて三人のやくざは、青ざめた表情で一点を見つめたまま坐っているお浜の周りを取り囲み、やい、と一人がうしろから蹴り、一人がやにわにお浜の髪の毛をつかんでゴシゴシと揺すった。だが、お浜は取り乱した悲鳴は上げず、「何をするのさ」と血の色を浮かべた顔で四人の男を見廻すと、「私に口を割らそうとしたって無駄だよ。お前達みたいな毛虱に、惚れた男を殺されてたまるか」と柳眉をあげ、フンと鼻で笑ったので、「何を、この阿女」と、ピシヤリと一人がお浜の頬を平手打ちした。三郎はお浜の顎に手をかけると、身動きもせず、この場の成行きを見つめている進吉の方へ、ぐいと顔を廻させて、ニヤリと笑う。「あ

伊藤晴雨遺作集 Ⅱその3Ⅱ



そこにいらっしゃるのはな、女を責める事が、飯より好きだという
変った旦那なんだ。あの旦那に折檻されねえうち、仙吉の居所を吐
いた方が身のため——」その言葉が終らぬ内、お浜は、顎を押さへ
る三郎の手を手で払いのけ、「私じゃ知らないと言ってるだろ、こ
の唐変木っ」三郎は、いらいらとして、「くそっ、もう容赦はいら
ねえ、素っ裸にしろ」四人のやくざは、寄ってたかつて、お浜の帯

に手をかける。「な、なにをするんだよっ」ほどけた
帯が男達に引っ張られ、くるくると独楽のように体が
廻って、バツタリ畳に手をついたお浜に更に男四人、
組みついていき、着物を脱がせ、長襦袢から肌襦袢ま
で剥ぎ取りにかかる。たった一枚身に残った湯文字を
剥ごうとして手を差しこんで来る男の手に噛みついた
り、乗しかかって来る男を肢で蹴ったり、逆上して暴
れ狂うお浜を少し離れた所から、そわそわ見つめてい
る進吉は、恐怖とも快感ともつかぬものが身内からふ
き上がって来るのだ。湯文字の裾を大きく割り、ざん
ばら髪になってのたち廻るお浜の無惨図に全身が痺
れ切った進吉は、思わず立ち上がると、「何してるん
だ。縛れ、縄で縛るんだ」と大声を出した。おっと合
点、と進吉の一喝にやくざ四人はあたふたしながら、
散乱している着物の腰紐などつなぎ合わせ、お浜をキ
リキリ後手に縛り上げる。「何をするんだい畜生！」
と、わめき散らすお浜から湯文字も剥ぎとり、お浜の
足首を握って畳の上を引きずりながら、床の間の柱に
引き据え、ゆわえつけたやくざ四人は、フウフウ息を
はずませながら、「ざまあ見ろ」とお浜の耳を引っ張り、鼻をつま
み、あちこち肌をつねり上げて哄笑し合うのだった。進吉は突風の
ような勢で階下へ降りると色褪せた背中の彫物に汗を流させて、土
間で桶をたたいている年寄りに、紙と筆を、早く早く、とせき立て
る。「馬鹿に今日はうるせえが、仲間同志の喧嘩はいけねえ」と、
桶屋の親父がブツブツ云いながら貸してくれた筆と墨汁と紙を手

し、再び二階へ突っ走った進吉はなぶり者にされているお浜の横に
びたりと坐り、その責め地獄に呻くお浜の肢態をスケッチしようと
するのだ。煙管につめた刻み煙草を代わる代わる吸いながら、ポン
と吸殻をお浜の腿の上に落とし、悲鳴をあげさせるという陰湿な拷
問を楽しんでいた四人のやくざは、進吉がスケッチを始めたので揃
って嫌な顔をし始め、男の居場所を聞き出すため、女を拷問してい
るのに、それを呑気に写生させていては、こっちはどうも調子が出
ない、と三郎は口をとがらした。しかし、呑気に写生ではなく、進
吉の悪魔にのりうつられた妖気を含む真剣な眼差しを見た途端、ふ
と、寒気を覚えたようにやくざ達は口を噤んでしまう。この羞恥と
憎悪と恐怖に耐えるべく血の出る程かたく唇を噛みしめ、眼を閉ざ
し、元結の切れた髪を両肩まで垂らして肩を苦しげに息づかせてい
るお浜の、その凄惨なばかりの美しい横顔を進吉は挑みかかるよう
に見て、紙の上へ一気に筆を動かしていくのだ。やくざ達は、眼ざ
わりとは思ふものの、その気魄に押された形で、進吉の事は無視し
て、更にお浜を責めにかけた。「どうだい。もう一服」と、熱い煙
管の雁首をお浜の肌に近づける。ううーとお浜は白いうなじを仰向
けにのけぞらせ、額にねっとり脂汗を浮かべて、カチカチ歯を噛み
鳴らす。更に二枚、三枚と勢いを得た筆は、苦悶するお浜の肢態を
写生しつづけ、進吉は恍惚とした悲壮の感激に完全に酔い痺れてい
た。「強情な阿女だぜ全く。よし、次はここだ」一人のやくざは、
蠟燭の炎で雁首を赤く焼くと、女の急所を狙い始めた。お浜は、氣
力を振り絞るように身悶えし、ぴったりと立膝して、必死に予先を
かわし始める。「待て、そんな事したってつまらん」何枚かの写生
を行なった進吉は、恐い顔になって四人の男を見廻した。「女を責

めるには、吊りが一番だ。海老形に縛って吊ってみろ。大抵、それ
で音をあげる」何のために自分がやくざ達をけしかけ女を折檻する
のか、そんな自責の念などもう進吉にはなかった。もっと強烈な残
酷美を出してみたい、という血走った思いだけである。進吉に云わ
れた通り、やくざ達は、お浜を吊るすための縄を用意し始める。進
吉は、やくざ達と同じく双肌脱ぎになって立ち上がった。

○

○

その翌日から三日間、進吉は一步も外出せず、自宅に籠って一枚
の責め面に没入し始めた。呉服屋の木村に、興が乗った時、芝居の
責め場を一つ、自分のために描いてほしい、と注文されていたのを
発作的に手がける気になったのだ。自分の絵の価値がわかるのはこ
の世で木村だけかも知れない。それでもいいではないか、と、そん
な気持だった。世間が何と云おうと俺はやっぱり好きな絵をかく、
というより、かく事で、この逆境にある心が救われる気がした。い
や、明日の我が身はどうなる事やら、もう責め絵の中へ自分が入っ
て行くより行き場がないといった気持だった。

やくざ四人に罵り尽され、あぐくの果、達磨女郎に売り飛ばされ
た哀れなお浜の、あの夜の折檻場面が、強烈なイメージとなって進
吉の制作意欲をかりたてたのだったが、寝食を忘れて三日間、尺八
絹本に、以前、本所の寿座に連日通い、くりかえしくりかえし観劇
した吉田御殿の腰元竹尾の責め場を、自分なりに趣向を変えて描き
始めたのである。責められる腰元竹尾の顔があのお夜のお浜に、責め
る四人の奥女中の顔が、あおの時の四人のやくざに、それぞれ似て、
しかし、描きつづける内、ふと気がつけば、竹尾の顔は、自分を捨

てて田所の許へ走ったお里の顔にも似通ってくる。水の垂れるように艶々しく結い上げられた高島田が次第にくずれ出し、後れ毛を口にくわえて、のたうち廻りながら、恨めしげに竹尾が眺めた天樹院は俺の化身か。あの芝居のように気絶すれば水を吞ませ、打って打って打ちのめせ、と恨みをこめて描くうちにやがて恨みも不安も消え去って一つの法悦境に進吉は浸り出し、無限で無尽蔵な女体嗜虐の恍惚とした悦びに筆は生命力を得たよう勢いづいた。

三日目によく絹本に描き上げた竹尾の責め場を持って横山町の呉服屋を進吉は訪ねた。三人は、最近話題になっている活動写真とやらを見に行き、留守だという小僧に、これは大切なものだから主人以外には絶対見せるな、と念を押して絹本を渡し、寝不足で土色になった顔をこすりながら進吉は、フラフラ歩き出した。心身ともに疲労した感じで、家まで戻る気力もなく、一二軒、居酒屋を飲み歩いて、その日は行き当たりばったりに木賃宿にもぐりこんだが、すると日頃押さえていた放浪癖が首を持ち上げ出し、次の日も次の日も汚れた裾廻しのまま、浮浪者達がうろうろしている浅草田中町あたりをうろついて馬肉の煮込と焼酎で三銭という大衆酒場を進吉は飲み歩くのだった。一時の興奮がおさまると、やくざ達に輪姦まですされ、売り飛ばされたお浜の事が気がかりで胸が痛み、下品な暖味屋を飲み廻り、こんな女を知らないか、と女達に聞いて廻る。さあ、知らないねと、酌婦達は相手にせず、すると進吉は罪もない女を自分が音頭をとってやくざ達に責めさせるなど、ああ、俺は何という恐ろしい人間か、と盃を持ったまま、ポロポロ涙をこぼし出し酌婦達に、何だ、あんた泣き上戸かい、と笑われるのだ。そこへパツと暖簾をはね上げて入って来たのは、濃い白化粧をした十二三の

踊り子で、カチカチ拍子木をたたいて狭い土間の中を踊り出し、うちはいらないよ、と酌婦に叱られ、出て行ったが、進吉は、幡ヶ谷に預けてある子供の事が思い出されて、あの子も将来、今のような踊り子になるのでは、そう考えると、再び涙はあふれ出て、自分と子供を捨てて田所へ走ったお里が今更ながら腹立たしくなるのだ。

三日も長屋には戻らず、浅草界隈を飲み歩き、浅草寺の裏をよろよろ歩いていると、急に腰がくだけて石灯籠の前へ倒れた。そのままぼんやり坐りこんでいると、その辺は、浅草寺へ訪れる人を当てこんで乞食の団が腰を据えており、酔っぱらいは商売の邪魔だから、どこかへ消えろ、とすぐ隣の垢面襦袢姿の乞食が進吉の裾を邪険に引っばるのだ。ふと、向こうから人の来るのに気づいた乞食達は、一せいに頭を下げて喜捨を迫り、酔い疲れた進吉も何という事なく頭を下げていると、眼の前を樂しげに語らい寄りそって歩いて行く男女連れは、まぎれもなく田所とお里で、進吉は、仇の姿を見つけたように、カッと身内が引緊まり、恨めしいやら、懐かしいやら、右や左の旦那様、と哀れっぽい声を出して、ひよろひよろ立ち上がり、二人の傍に歩み寄った。キャッと声をあげて、田所にしがみついたお里は、乞食の群れから飛び出して来たのが進吉だと知って、失神せんばかりに驚き、田所も、あっと声をあげた。新聞社をやめて、まだ一と月もたたぬ内、もう乞食の仲間入りしたのか、と青ざめてしまったが、もぐりの乞食に縄張りを荒らされてたまるかとばかり、棒切れや松葉杖を振りかざして、乞食の団が、あとから押し寄せて来ると、進吉はうろたえて表通りへ逃げ出した。

もう間もなく日が暮れ切ろうとしている町の辻を当てもなく歩いていると、呉服屋の木村と出くわした。今の今まで、一体、何処を

うろついてたのですか、と木村は最初、怒ったような顔して、進吉の袖をつかみ、あれから私しや随分と先生の居所を探し廻った、と愚痴りながら、近くのうなぎ屋の二階へ進吉を連れて行った。

「先生、あんた、新聞社をやめたそうじゃありませんか」木村は銀煙管にきざみをつめながら云う。小僧を日報新聞に使いにやると、

伊藤進吉は無断退社したと編集部員が云ったそうである。あそこの編集長がどうも気に喰わないので、と進吉が云うと木村は、「それなら先生、どうでしょう。演劇月報社へ、入社する気はありませんか」あそこの社長の西川と自分とは懇意にしているし、西川社長は進吉を非常に欲しがっている、と木村は云うのである。俺を欲しがるとはまた物好きな人がいるものだ、と進吉は笑ったが、いや、冗談ではなく、これは事実なのだ、と木村はボンと煙管を煙草盆でたたき「というのは、五日前、先生がうちへとどけてくれたあの竹尾の責め絵が原因で——」と、木村の話はこうである。——西川は三日前、木村の所へ社用の戻り道に久方ぶりに立ち寄り、よもやまの話から、進吉の描いた竹尾責め場の図を木村が見せると、西川は何か琴線に触れるものがあつたようで、その作者についてくわしく知りたいがったという。それで日報新聞で、連載小説の挿画を描くかたわら、劇評なども書いてる人だと教えると、ますます興味を持ったらしく、この作者は小説挿画を描くより、芝居畠の仕事をする人だと西川は云い、うちの社に来て貰えれば有難いのだが、とも云う。それじゃ私から一応、話してみましよう、という事になり、進吉の行方を木村は探し廻った——そう進吉に説明した木村は、「とにかく演劇月報の西川に逢うだけ逢ってみてくれないか」と、懷から財布を出し、十円札を二枚進吉の前に並べて、これは描いて頂いた絵の

代金だというのだった。月給九円を新聞社より受取っていた進吉にとって二十円は大金で、こりや少し多すぎやしませんか、と云うと木村は、私しや気に入ったものを値切るようなケチな真似はしませんよ、と鼻をピクピク動かしていい、おかげで値打ちのある蒐集品が一つふえましたよ、と幸せそうに笑うのだった。

それから五日ばかりたった頃——西日の当る長屋の縁先で、進吉はぼつねんと一人酒を飲みながら、やくざの責め折檻にあってその後、行方知れずになったお浜の事など、感傷的に想い出していた時——ガラリと表戸が開いて木村呉服店の小僧が、こんちわ、と入って来た。旦那がお待ちだから、自分について来て欲しい、と小僧はいう。例の演劇月報社の件に違いないと進吉は腰を上げた。

小僧のあとについて、横小町近くの路地をくぐり抜け、仕舞屋造りになっている小料理屋へ入った。女中に案内され、二階座敷の八帖へ通ると、そこには縞お召に黒紋付を重ねた上背のある人妻風の女と呉服屋の木村が、静かに酒を飲み合っている。「よ、先生、待ってたんだよ」と、木村が席を指さすと、人妻風の女は、静かに立ち上がり、座布団を敷き、「さ、先生、どうぞ、こちらへ」と艶麗に身をこなす。「えーと、この方は、何とって紹介すりゃいいかな」と木村は、夫人の方を見て、何か照れ臭さそうに笑うと、夫人もくすぐったそうに肩をすくめて笑い、眼を柔らかくしばたきながら、「夕子と申す演劇月報にいささか縁のある者でございます。何卒、よろしく」と、進吉に挨拶し、ま、お一つ、と酒の酌をしてから、「私、日報新聞で先生のおかきになられた小説挿絵、それに歌舞伎の批評文、拝見させて頂きましたわ。絵と文章の才能を両方お持ちになっているなんて、ほんとに素晴らしい」そして、夫人は、

進吉の絵が秀逸である事、劇評にしても、役者を見る眼が実にしっかりしている事など、盛んに進吉をほめてから、御都合よろしくば演劇月報社へ入社して頂けぬか、と頼むのであった。その給料は三十円と聞かされ、進吉は驚いた。日報新聞より受取っていた給料が九円という事を考えれば、給料に異存など絶対にないけれど、果して自分にそれだけの価値があるかどうか。それに、この夕子という夫人は一体何者か、と進吉は、自分の給料までとりきめながら、演劇月報社にいささか縁のある者、とだけしか名乗らない夫人を気味悪く思った。演劇月報の重役、いや、社長の妾といった所か。もう三十は過ぎていられると思われるが、立人っぽい派手な化粧で顔を飾り立て、左手の指にはダイヤの指輪、時々、娘のようにホホホと口を押さえた笑い方するのが何か芝居がかり、そのとってつけた色気が何か不快だと、進吉がまじまじ夫人を見つめ出すと、ポンと横から木村が進吉の肩をたたいて、「さて、これで先生の就職もめでたくなりました。それじゃ、祝杯といきやしょう」と、銚子を手にする。それから芝居のよもやま話。それも一段落して、「ところで先生、責め絵というものに興味をお持ちになったのは、何時頃から——」と、夫人は、酒でほんのり染まった眼をいたずらっぽく微笑させて進吉を見た。「いや、もうその話はやめましょう」と進吉は何かをごまかした笑い方して、演劇月報の社長に木村氏が僕のそんな絵を見せてしまったらしいが、あれは僕の悪い病気で、女房に逃げられたのも、日報新聞をやめる原因になったのも、いわば、そうした絵が原因だと話したが、「けれど、先生が演劇月報に入社する動機となったのは、社長の眼にあの絵が入った事からと思われまし、これを機会にお好きな絵をどしどしおかきになるべきだと思いますわ」と、夫人は云う。「という、つまり、演劇月報の社長はそういう絵に興味をお持ちになっていらっしゃるわけで」と進吉が聞く。「いえいえ、そうじゃありませんが、何しろあの社長も少し変わった趣味がありました」と今度は木村の顔を夫人は見、さもおかしげに笑い合うのだった。進吉は、そっぽを向くようにして酒を飲み、「御婦人の前で、こんな話するのは羞しいけれど、責められる女体、苦しみ悶える女の表情、そんなものを何故自分が描きたがるのか、自分でもこいつはわからないんです」というと、木村が、「そりゃ私だって同じ事がいえますよ。なぜ、責められる女を見ると、体がこうカッカッ燃えてくるのか、こいつは生れつきのもんでしょ。それならもう仕方がないと思うんです。生まれつき好きなものを嫌になれと云うたって、そいつは無理だ」と、口を開けて笑ったが、次に夫人が進吉にいった。「生意気な事申すようですが、先生。たとえ、貴方のおかきになっていらっしゃるものが永久に人に認められないもの、いえ、人に嫌悪感を抱かせるだけのものではあったとしても、真実、自分の魂がその絵を描きたがっているのなら、迷わず描きつづけるべきだと思いますわ」「たとえ変質者と世間にいわれても」と、進吉が自分にいい聞かせるようにいうと「いいじゃありませんか、変質者だって。変質者が変質者なりの芸術を生み出す、これだって立派な仕事と思えますわ」ふと、柱時計を見た夫人は、「それじゃ私はこれで」と腰を上げるのだった。明日の十時、演劇月報社へ行き、社長の西川に逢うよう進吉に念を押した夫人は、玄関まで送りに出ようとする進吉を押さえながら、「この広い世の中に変質者は貴方一人じゃありませんわ」と何か意味ありげな微笑を口元に浮かべるのだった。

その意味ありげな微笑の意味が、はっきりわかったのは翌日である。

木村と新橋駅で待合わせた進吉は、木村に案内されて、銀座にある演劇月報社に初出社したのだが、そこへ行くまでの途中、社長の西川氏というのはどのような性質の人かと聞いても木村はただニヤニヤ笑うだけで「とにかく逢えばわかりますよ」と変に質問をそらせるのだ。近代建築といえるレンガ作りのビルの二階、十人ばかりの社員が事務をとる部屋を横切り、木村は顔見知りの社員に愛想よく話しかけつつ進吉を突き当りの社長室へ案内した。

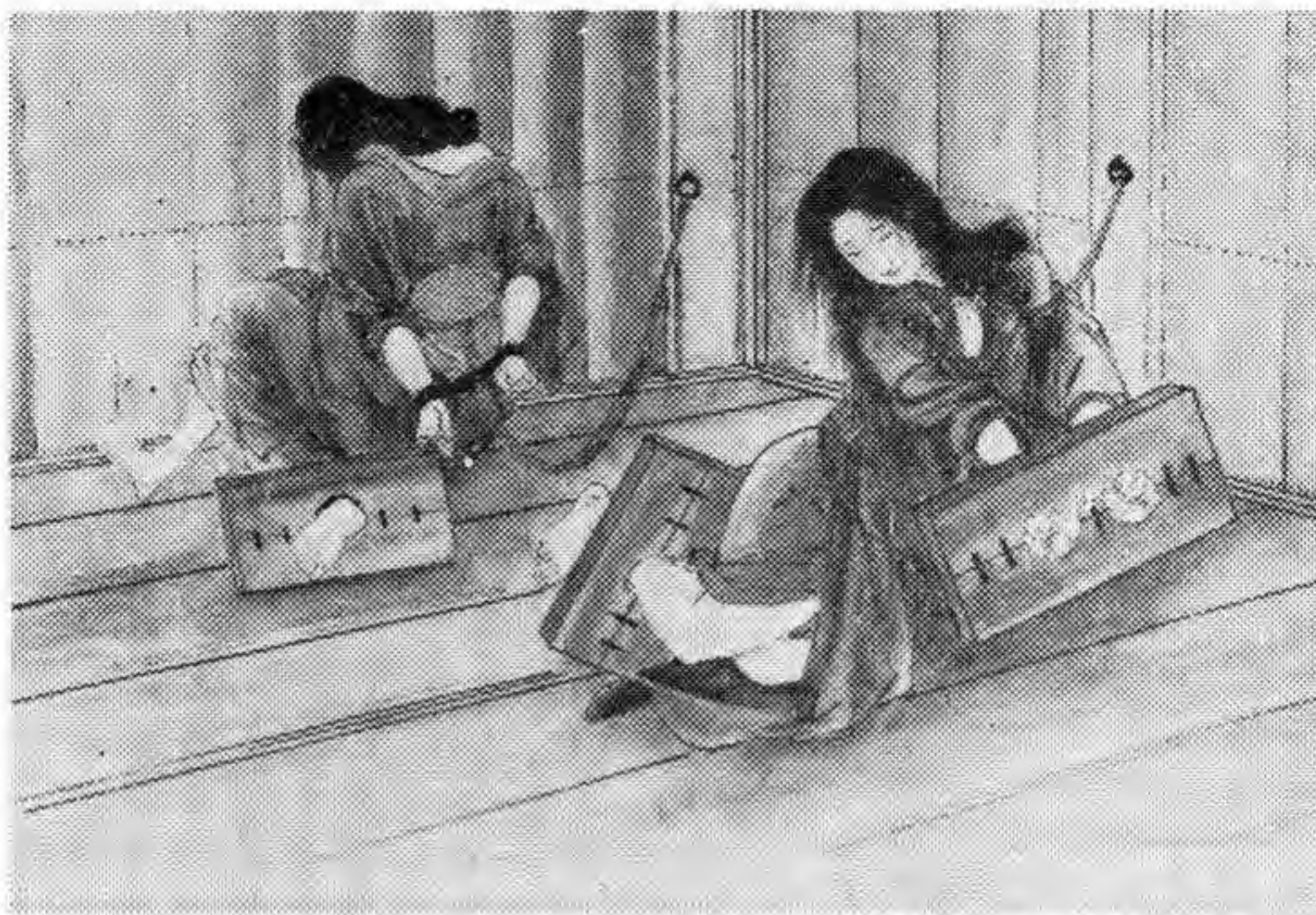
大きな机を前にして、刷り上った雑誌のページをめくっている役者のようにいい男——粋な唐綾の縞物に角帯をしめ、華奢な指先に紙煙草をはさみ、ふと、雑誌から顔を上げて「や、いらっしやい」と、人懐っこい微笑を見せたのが、西川社長であったが、その顔を見た途端、進吉はドキンとして棒立ちになってしまう。「貴方は、昨夜の——」ご婦人ではないか、と進吉は啞然として傍にいる木村を見ると、木村と西川は顔を見合わせ、腹をかかえて笑い出した。

「木村さんも人が悪いじゃないか」と進吉もつられて笑いながら、参ったと尻モチつくようにソファへ坐り、昨夜の人妻風の女は西川社長が女装したものであることを今になって気づいた自分が実に間抜けに思われ出す。「絵をかく人に正体を知らなかったとは、僕の化けぶりも相当な域に近づいたようだ」と楽しげに笑う西川は、それは、もう昨夜のようにしなを作った笑いではなく、なよなよしたところは微塵も見られない。しゃべり方も動き方も、まるで脱皮して、昨夜の人妻風と何の関係もないようであった。「十二、三の頃から女装というものに、僕は強い憧れを持ち出してね」と、西川

は、進吉に舶来の煙草などすすめつつ、女装願望、女装趣味について、その遍歴をほんの数分話したが、さて、といって腰をあげるともうその話題には触れたくないといった調子で、机の上の書類を取り上げ「えーと、貴方にこれからお願いしたい仕事だけだね。そうだ、編集長を引き合わせておこう」少し待っていてくれ、とドアを開けて出て行くのだった。女装していた時の彼と社長に戻った時の彼とは、まるで性質まで変っている、と木村はいい、西川が女になった時は女としてこっちもお相手するし、社長に戻った時は社長として、こっちも付合い、いや、考えれば骨の折れる友人ですよ、と木村は笑うのだった。また、そういう風に割り切って接しないと、大変彼の気嫌が悪く「たしかにありや変人奇人のたぐいだ、その所をよく先生も呑みこんで——」と、木村は風変わりな二重人格者との交際方法を進吉に伝授するのだった。二重人格者というより西川の場合は、西川という一個の人間が一人の男、一人の女を別々に所有していて、次元の違った場所において、その一つ一つを生かして使っている、と、そんな風にも考えられる。

西川が連れて入って来た編集長の森大森という男は、大きな体格の男で、その体格に相応した頬鬚を生やしていた。雑誌の仕事のかたわら、創作を勉強している人、と西川は、大森を進吉に紹介する。「貴方のことはこの大森さんにくわしく話してありますからね。仕事のことは、全部大森さんに聞いて下さい」西川は、それだけいうと、それじゃ、私はこれで、と帰りかける木村を送って、表へ出て行った。

伊藤晴雨遺作集 =その4=



明治の末——映画技術の発達していないこの頃は、劇場の黄金時代でもあった。歌舞伎座、帝国劇場、明治座、東京座、本郷座、新富座、市村座、常盤座等目ばしいものをざっと数えるだけでも東京には三十を越す劇場があり、進吉はそのうちの幾つかを見て廻り、劇評を書くというのと、雑誌のカット絵を描くのが仕事であった。恰好の仕事場を得た感じであった。もともと芝居は大好きで、日報にいた時も内職に劇評をかいていた程だから、いわば水を得た魚のような生活にハリの出て来た感じがする。

劇場の楽屋を廻っても、芸能記者といえど幅がきき、役者連も自分の芸にいちゃもんつけられては困るから愛想がよく、一寸、先生お寄りになりませんか、と舞台裏を歩く進吉を手招きして自分の楽屋へ招き入れ、ファンから差し入れられたスシや酒などご馳走してくれる。菊三郎、梅之助というような一流の歌舞伎役者とも懇意になり、進吉も真剣に演劇というものに取組むようになった。

黒衣を着た役者が出番を告げてくると、それまで雑談していた進吉も腰を上げ、菊三郎のあとについて楽屋を出、舞台裏まで行き、下手の袖から二、三尺も出たところで観劇、また劇中の役者をスケッチする。舞台の見得になったところで析^き打ちが木のかしらをチョンと入れ、チョンチョンチョンときざんで幕がしまるとさっと下手へ引揚げる役者について進吉もまた楽屋入り。隅の小机に坐って、早速、今見た劇の批評文を書き出すのだ。

芝居のはねたあとは、やはりいくつかの劇場を廻って劇評をかいている編集長の大森と牛鍋屋の二階で落ち合うことになっている。そこで、記事の打合せをするのだ。大森は無口でぶっきら棒な男だが、細いことにはこだわらぬ鷹揚としたところがあった。編集部員

達の仕事に気に入らぬところがあっても、大して文句はいわず、まあいいだろう、と簡単にうなずいてすませてしまふ。とりわけ、進吉には眼をかけた。進吉の劇評が気に入って、君はもう一人前だから一つペンネームを作り給え、といいそれで進吉は丁稚奉公していた当時の主人や絵の師匠のかしらをとって晴雨と作ると、伊藤晴雨か、こりゃいい、と自分のことのように喜んで、新聞雑誌関係者や劇場側にも宣伝するのだ。そんな編集長であったから、進吉は、何か実の兄貴のような気もし、大森には何でも自分のことは打ちあけた。

女体の責め場に少年の頃からとり憑かれていたこと、無惨画を描き出すようになり世間から変人扱いされたこと、恋女房はそれをだしにして昔の男のもとへ突っ走ったこと、そんなこともすべて大森には話したが、彼は頬鬚をひねりつつ、まあ世の中は複雑怪奇に出て来ているものだよ、とニヤニヤし、自分のことに関しては、目下創作を勉強中という以外、何も語らなかつた。

ところがある冬の夜——進吉が事務所で一人徹夜の残業をし、カット絵などを描いていると大森は一杯気嫌で一人の女を連れて入ってきた。何だ、残業なんてやめろやめろと高笑いしながら、この女性の酌で一杯やろうじゃないか、と戸棚の奥に隠してある一升瓶を取り出すのだ。女は、年に似合わぬ地味なコートを引き摺るように着、キョロキョロその辺を見廻して妙に落着かず、しきりにくしゃみをしてはハンケチで鼻をふいていた。「どうだね、伊藤君、この女性を女房にしないか。君の前の細君のように以前からの男がいたなんてことは絶対にない。そいつは俺が保障するよ」と大森はだしぬけにそんなことをいい出し、口をあけて笑うと、彼女は菊枝とい

い、二年ばかり前に関西から妹と二人上京して来て、美術学校専用のモデルになっている、と紹介する。美人とはいえないが、色白で鼻に愛嬌があり背丈のスラリとした女であった。「商売が姉妹揃ってモデルだから君の芸術作品に大いに協力すると思うね。どうせ貰うならこういうのを女房にすべきだと思ふぜ」菊枝に酒の酌をさせながら大森は愉快そうにいうのだが、菊枝の方はそれに何の反応も示さず、ねむそうに眼をしばたいて、柱のボンボン時計を見上げた、着物についている泥を気にして神経質なぐらいに手でこすり拭いている。何となく魯鈍に見え、滑稽な感じさえあったが、やはりモデルをしているだけあって、その上背のある菊枝の体つきは大森のいうように、ふと制作意欲をそえられるものがあった。

大森は、今日、この菊枝を連れ、小石川の紅葉出版社を強請りに行ったのだという。紅葉出版というのは、軟派本ばかりを出している小さな出版社だが、先月、慰労会という名目で、日頃原稿を依頼している作家達を招待し、箱根へ二泊旅行することになった。その際、向こうでモデルを使って作家達に絵を描かせるという趣向を立て、どこかいいモデルがいなかったかと大森のもとに紅葉出版の社長が相談に来、大森は美術学校で教鞭をとっている友人に依頼し、学校へ出入りしている姉妹のモデル、菊枝と文枝をかり出し、世話をした。しかし、箱根へ彼女達を連れて行ったのはよかったが、絵をかくなどとは表向きだけのことで、軟派文専門の作家達は酒の席で、お前達商売じゃないかと、全裸になることを姉妹に命じ、泣いても許さず、淫猥な肢態を素っ裸になった姉妹にそれぞれとらせて、酒の肴にしたという。最初の約束とはまるで違ふし、それで、モデル姉妹の受取った謝礼金は二人合わせて、たったの三円とは、あまり

にも人を食った話だと、妹の方は風邪で寝こんでいるので、姉の方だけを連れ、今日の午後から紅葉出版とかけ合い、謝罪させ、慰謝料として別に五円ふんだくって来たが、その帰り道、やはり、若い女がモデルなどやっていてはろくなめに会わぬ、早く身を固めた方が得策だ、と菊枝に諭し、いい男を紹介してやるからといって、ここへ連れて来た——そう大森は説明し、菊枝に注がれた冷酒をぐいと飲みこむのであった。

「大森さんが人を強請^{ゆす}るなんて一寸想像出来ないことですよ」と、進吉も菊枝に注がれた冷酒をぐいと飲み乾して笑うと、大森は「世の中は複雑怪奇だよ」と、何時もの口癖を口にし「吾輩の強請りは今に始まったことじゃないよ。現に、この社長、西川を吾輩は始めて逢った時からずっと強請りつづけている」といい出したので、進吉はびっくりした。もう、こうなりや何でも君に聞かせてやるがね、と大森は、自分と西川の奇怪な間柄について語り出したのである。

西川は今でこそ、演劇月報社の社長だが、その昔は、水道橋にあるちっぽけな印刷所の臨時雇の植字工員で、日給三十銭のきまりをもらい、休日の日当を差引くと、君が日報でもらっていた月給九円よりはるかに安い賃金で、一と月を食っていた男だと大森はいう。

——しかし、西川は頭の切れる男であった。女装というものにとり憑かれた少年時代からの夢は、早く金を貯めて美しい振袖を買い、心ゆくまで女装に浸りたいということで、夜店に出る絵双紙屋などのぞいて廻っては、自分の好みに合う女形の似顔画を集めるのが少年時代の何よりの楽しみだった。そんなある日、窓に金網なんかが張られた陰気くさい仕事場で植字を拾う西川の頭に、とてつもない

金儲けの方法が浮かんだのである。印刷所などで扱う新聞雑誌の木版挿画は一回使用しただけでもう用済みとなり、あとはたたき割ってストープに投げこむ場合が多いが、その挿画に当てはまる小説講談があれば、もう一度、それに使用出来ない筈はなく、地方の新聞社などでこれを使えば、まず再使用のものだと気づくまい——そう思いつくとすぐに使い古しの木版集めにとりかかった。成算があるを見た西川は、間もなく印刷所をやめ、親類を廻ってわずかな資金を集めるとあちこちの新聞社、雑誌社に当り、小説講談の古版を二銭から三銭ぐらいで買い集めにかかったが、売り渡すのをけたのは東京朝日とか都新聞などの大手だけで、あとは残業の時のうどん代になると喜んで西川に古い版画を片っ端から売り渡し、そこで西川は最初の予定通り、その版画に附随する小説家の原稿を原作者には無断で、一回五十銭位で地方の新聞社に送るという無茶なことをやり始めた。当時、地方にあって輪転機を備えていたのは北海タイムス、信濃毎日、中国民報などで何社もなく、あとはほとんど平台だけ、発行部数もわずかなもので、こういう小新聞では新版の挿絵など作る予算はない。新聞挿絵の木版彫刻料はタテ三寸六分、ヨコ四寸二分で一円二、三十銭もするのだから、地方の小新聞社などに手のとどく筈はなく、だから、西川の始めたこのインチキ事業は馬鹿当りした。下谷に新聞で用承り所という不思議な看板をかかげて、相変らず小説を連載している新聞社にも原作者にも無断で盗用したものを毎日地方の新聞社へ発送していたが、それを見つけて西川をおどかし、酒代をせびり出したのは、金沢より文学を志して上京し、結局何も書かず、酒ばかり飲んでいた大森であった。こりゃどういふわけだと東京市内の新聞と金沢の新聞とを並べて、発覚料

として五円要求したことがきっかけとなって、大森は、西川に酒ばかり飲んでいず小説を勉強しろ、と逆に意見され、月給二十円に口止め料五円、計二十五円で新聞で用承り所で働くことになった。文学修業で上京したつもりが人の小説を盗用して地方新聞に流すという浅ましい仕事にまきこまれ、もうわが人生は終りだと大森はわが身を恥じつつ、頹廢の気分になり出したが、一年ばかりたった頃、西川は、折入って君に相談があると大森にいった。西川は近く、大衆雑誌社では、一番の人気を持つ青雲社の社長、猿丸卯兵衛の令嬢みどりと婚約することになったという。文芸者同盟というものが出来、新聞で用承り所のようなインキはそろそろ店じまいにかからねばならなくなった時、青雲社の令嬢みどりととの婚約はいわば渡りに舟みたいなもので、西川は結婚後みどりの父親から、演劇月報社創立のための資金を出してもらう約束になっていたのだ。大森に折入って相談とは、西川と二年も前から関係をつづけている居酒屋の女、玉江のことであった。彼女は妊娠六カ月だという。猿丸卯兵衛の希望で、西川は彼の娘と結婚後は、猿丸家へ移り住むことになっていて、それは敷地千坪もある広大な芝生のある邸宅で何も異存はないのだが、問題は、身重にある玉江の処置であった。別に女がいて、しかも子供がいるなどと猿丸家の方に露見すれば長い間、猿丸卯兵衛とその娘にとり入っていた苦勞が水の泡、いや、それだけではなく結婚詐欺だとの頑固親父なら騒ぎかねない。いろいろ考えたのであつた。妊娠六カ月の女を譲るといわれても、大森は大した腹が立たなかつた。何んとしても出世しようとあせる西川が哀れにも思え、彼とは逆にすっかりデガダンになってしまっている大森

は、人生の苦惱をどれだけ背負って立てるものか自分を試したい気にもなり、しかし、条件は？ とこれだけははっきり聞くのであつた。一生涯、最低生活の保障はするということ、何か独立する時はその資金を出すということ、生まれてくる子供の養育費は、年間いくらにするということ、こうした証文をはっきり西川に入れさせて、大森は玉江と生まれて来る子供を自分の籍に入れ、西川は後顧の憂いなく猿丸家の次女と結婚し、かくして演劇月報が創立したが——一年ばかりたって、西川はまた折入って君に話がある、と大森に相談を持ちかけた。月に二度ばかり眼をつぶってほしい、というのである。つまり、月に二度現在の大森の妻、玉江との交渉を認めてほしいということ、やはり、玉江のことが忘れられず、また自分が生ませた子供にも逢いたいというのだ。西川の妻みどりは、深窓に生れ育っただけに、やれ琴の稽古、やれ生花の稽古の毎日で、性格的にも肉体的にも、どうもしっくりいかず、まして、自分に女装趣味の秘密があるということなど知られてしまつてからは、何と云うはしたない真似を、と侮蔑の眼差しを夫に向けるようになり、父親や母親に告げ口までし、西川は日々、家庭にあつては砂を噛むようなやり切れない思い。そんな時、甘ずっぱく思い出されてくるのは、子供つきで大森に譲った玉江のことで、彼女は西川の女装の理解者であり、西川が女装を思い立った時は、化粧を手伝ってくれたり、帯を結んでくれたり、そして一分の隙もなく女装して鏡の前に立った西川を玉江はちょっと裾元を直してみたりし、頼もしげにしげしげと見上げて、まあ、今夜の貴方は梅紅そっくり、などとお世辞であつたにせよ、思い出すと涙が出る程、玉江が懐かしくなる、と西川にこぼされた大森は、ぶっくら棒に条件は？ と、再び

取引を始めたのだ。月二回、眼をつぶるかわりに子供の養育費は倍額ということで手を打った。西川が家へやって来る日は大森は社から帰宅せず、吉原泊りということになる。その間、西川は大森の家で、子供をはさんでゆっくりくつろぎ、子供がねむったところで、持参した風呂敷を開け、新しく呉服屋で仕入れて来た衣類を畳にひろげ出す。華美で豪華なお召に羽織、長襦袢、西陣袋帯、そうしたものを玉江は一つ一つ手にとって、生き生きした表情で眺め、西川は久しぶりに玉江に手伝わせて女装にかかる。身支度が出来たところで二人寄り添い、まるで親しい女友達のように語らいながら、隅田川ほとりに夜の散歩に出かけ、影絵のように浮かんでいる屋形船の灯を眺め、川風に心地よく頬をなぜられて戻って来ると、そんな夜は、床の行為も濃厚で、火柱のように燃え上って、まるで命がけとなる。西川が女になったり、玉江が男になったり、互いにフウフウ息を切らせながら、男もかつらをつけたまま故、入れてしまえばどちらのものかわけもわからず——と、これは雑誌社々長に還元した時の西川の表現だそうである。

そんな大森の話を聞いた進吉は、すぐには声も出なかった。世の中は複雑怪奇に出来ている、という彼の口癖の意味がわかったような気にもなるが、大森の豪放磊落に見える一面、何か人生をあきらめてかかっているような哀愁がつきまとっているというのは、そうした理由によるものなのかと彼の秘密が解けた思いになった。月に二度、西川に女房を提供しつつ、西川の子供をわが子として育てていく、こうした大森の非人間的というべきか図太い神経に進吉は感動したのである。大森のそんな境遇にくらべれば、以前から関係のあった上役に女房を奪われたという自分の過去など何も喟嘆的な愚痴をこぼすにはあたらな。西川と大森は、それでいて、雑誌社々長、編集長という間柄で、表面上は結構仲良くやっているのだ。食えなくなれば俺は西川社長を強請^{ゆす}ればいいことになっているんだ、といった笑う大森は「俺もこれだけ人生を俗悪的、便宜的に考えることが出来るんだから、きっとそのうち成功すると思うよ。一丁、代議士にでもなるか」と、腹を揺すってまた笑うのだった。

その夜は、丁度、西川が大森の所へ泊りに来ることになっているので、事務所で一升瓶を空けてしまった大森は一人フラフラ例によって吉原へ出かけ、進吉は、大森の命令で、菊枝を家まで送ることになった。だが、その送る途中、急にピタリと足を止めた菊枝は、私、今夜は、家へ帰りたくないんです、といった。明日は月末で朝から、呉服屋、化粧品屋など借金取が押しかけてくるので、それと思うと憂鬱^{ゆううつ}だといひ「お邪魔でなかったら、お宅へ泊めてくれはらしまへんか」

○

○

それから三年たって——新橋、鳥森の料亭「滝川」で、伊藤進吉改め伊藤晴雨と、佐川菊枝の結婚祝賀会が演劇月報社主催のもとに盛大に行なわれた。世話人は大森で、演劇月報社の社員十六人とごとく出席した。内輪の祝いごとなんかある時には必ず女装する西川は、支度に手間どって一時間ばかりおくれ、人力車でかけつけた。その夜の彼の扮装は、藤鼠、色交りの織縮緬に唐織の丸帯で、髪は銀杏返し、綿を含んだ下ぶくれの頬から、首筋のあたりまで、艶々しく白粉をぬりたてて、これが男の化けたものとは、どう錯覚しても信じられぬ位、華麗な美女に思われた。料亭で賑やかに盃を

交換する社員達も、こうした時の西川を見て社長うまく化けましたね、などと不粋なことをいうものではなく、皆、心得たもので「さ、夕子さん、どうぞ、こちらへ」と、チャホヤ手をとったりし、頭から夕子という女性にして扱っている。夕子に化けた西川は、そんな社員達にしなを作って笑いかけながら、一人一人酌をして廻り、上座に坐る晴雨と菊枝に「この度は、どうもおめでとうございます」と、艶麗な身のこなしで畳に指をつくのだった。「まあ、きれいな方ね、どこの奥様かしら」と酌をする芸者に聞かれて大森は、ハッハッと高笑いし「おい、夕子、お前も何か挨拶しないか」とまるで自分の女房みたいに声をかけると、銀杏返しの美女は、微笑して一座の方へ体を向け直した。伊藤さんは演劇月報社にあることわずか三年にして、演劇評論家、舞台装置家、浮世絵画家として世の注目を浴び、それと同事に、私達演劇月報社の名を大きく高めて下さいました。この度、良縁を持ち、佐川菊枝嬢とご結婚されましたことは、まあまあ悦ばしく、この際、更に奮起され、自己の芸術才能をのばされて、その名を天下に知らしむよう……と、高い声で祝辞をのべ一座が一せいに拍手すると、先程から待ちかまえていた呉服屋の木村と写真屋の青木が座敷の中央に飛び出し、揃って裾からげ、ねじり鉢巻し、芸者連ががちゃがちゃ弾き始めた三味線に合わせて珍妙な踊りを始めた。大森は、それを見て豪放に笑い、大酔した体を上げると晴雨のところへやって来た。「まあ、すっかりな、ご両人」大森は、晴雨と菊枝の膝をたたいた。晴雨が菊枝と結婚に踏みきることになったその事情をくわしく知っているのは大森だけであった。

——ふとしたきっかけから、菊枝と関係が出来、その事実を晴雨

は大森だけにははっきりと告白し、それに対し、大森は、君も見かけによらず手の早い男だ、と笑ったが、しかし、それだけのことで菊枝と結婚まで考える程晴雨は単純にはなれなかった。むしろ、菊枝と関係が出来たことを晴雨は、最初後悔した。というのは、一旦肉体のつながりが出来ると菊枝は何日かたって、わずかな手廻り品を持ち、晴雨のところへ越して来たのである。一夜、菊枝を抱いた時、その場の気分から、愛しているとか、好きだとか口走ったと思うが、菊枝の方はそれをまともに受け取って、いきなり妹の文枝まで連れ、晴雨のところへ転がりこんで来たのだから驚いた。単純な女というより少し頭がおかしいのではないかと晴雨はやり切れない思いになった。晴雨は、今、世間態の悪い女を女房にするのに躊躇する理由があった。演劇月報に毎月掲載する劇評およびそれに附随する舞台の写生画が大変な好評を呼び、読売新聞から演芸欄を担当してくれと誘いの手が来、また毎夕新聞から小説挿画の依頼が来たりして、仕事は調子の波に乗って来ている。いわばツキが廻って来たという現在、裸モデルを職業にし、しかも頭の回転が鈍い女を妻に迎えるなど何も好んで肩身の狭い思いをすることはない、と思われる。それ程、菊枝という女は、まともではなく、だらしない女なのだが、進吉のところへ越して来てからも、掃除するでなく洗濯するでなく、薄汚れた肌着の類を丸めて部屋の隅へ積んで、何日もそのままにしておき、肌につけるものが垢づくとか何時の間にか妹のものをちゃっかり着こんですましこんでいるのだ。そんな菊枝にブツブツ叱言をいい、家の中の炊事洗濯をやっているのは妹の文枝であった。この妹が、姉と一緒に最初家へ転がりこんで来た時、晴雨は姉の方は厚釜しいと腹が立ったものの、おかしなことに妹の方

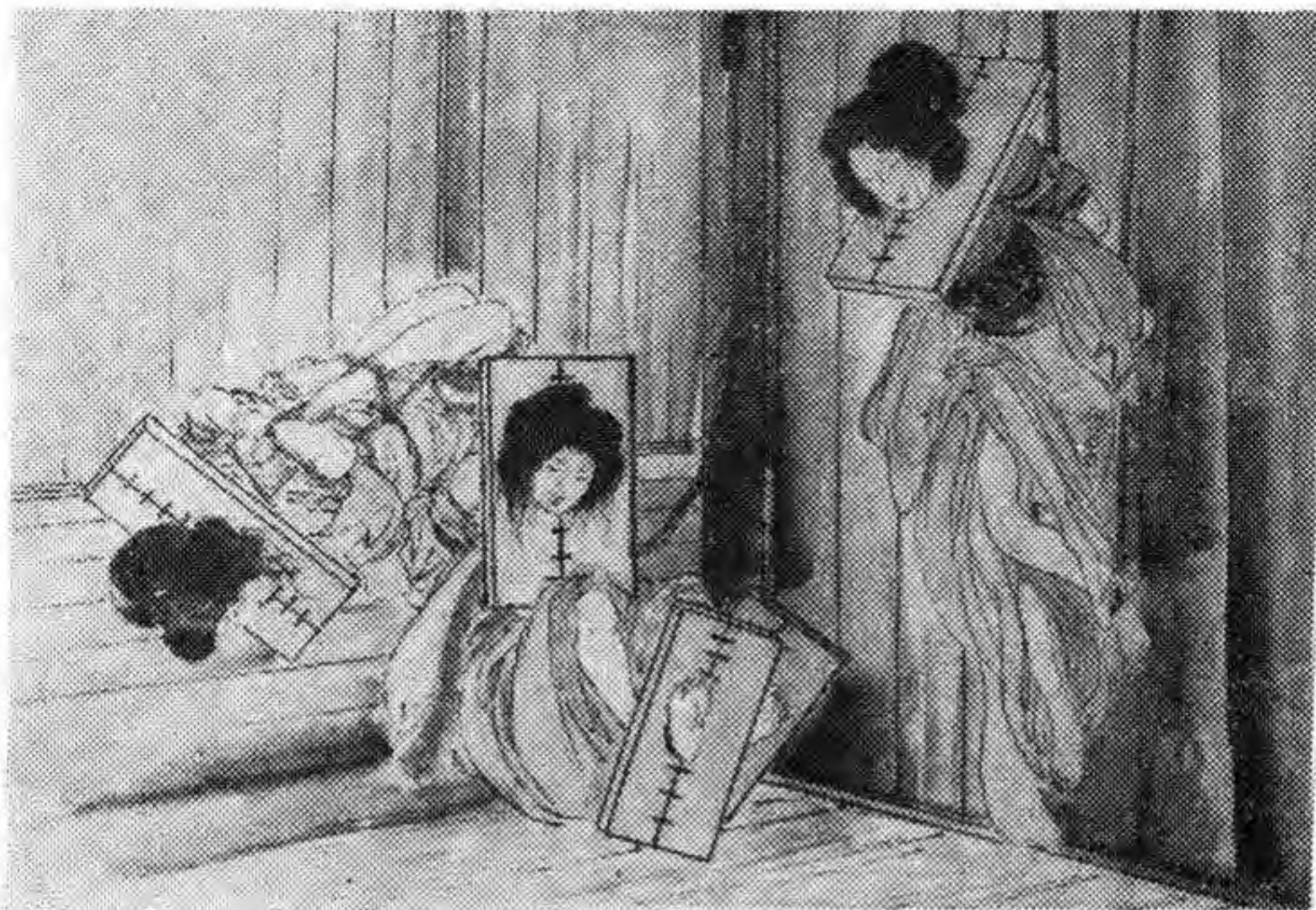
にはそれを感じなかった。容貌といい、肉体といい、姉の方よりは妹の方がずっと優れているし、モデルとしての価値も姉より上等であった。晴雨は、ふと人生の皮肉みたいなものを感じた。姉より先に、この妹の方を知っていたなら——正直、そんな気がした。姉の方とこうした間柄になった今、今更どうしようもないことだが、文枝が同居しているだけに、そうした後悔の念が一層生々しくわいてくる。しかし、菊枝は、大森がいったように進吉の研究にはかくべからざる女であった。海老責め、吊り責め、駿河責めと進吉は、江戸刑罰史の古本をひもとき当時の拷問を自分なりに趣向を変え、いろいろな角度より緊縛した菊枝をスケッチし始めたが菊枝には強靱な耐久力があった。そうした晴雨の仕事に文枝も協力した。女体の残酷美を描くという晴雨の仕事に、どれだけの芸術的な価値があるとかないとか、そんなことは、モデルの姉妹にはどうでもいいことで、進吉が好んで行なうことに、ただ協力しているといったものだが、それで晴雨には充分であった。

——モデルの姉妹と同棲し始めて、二カ月目、晴雨は、呉服屋の木村が見つけてくれた駒込の借家に引越した。長屋では、物音が四囲に響き、お里をモデルにした時のように何時近所の者達が音に驚いて飛びこんで来るかも知れず、それが心配だったし、何といても姉妹と同棲しているということが長屋の住人の好奇心を刺戟し、変に取沙汰されることがわずらわしかった。西日を受けて、家具道具をつめこんだ大八車をひく晴雨とそれを後押しする菊枝と文枝、長屋を引越して行くそんな三人を長屋の者達はキョトンとした表情で見送っていた。引越した先は、玄関の上り框を入れて五間ある古びた借家で、二階の八帖は、充分画室として利用出来、近くに人家

がないということが何よりの値打ちだった。ここへ引越したのを汐に長く幡ガ谷に預けてあった娘の常子を引取った。預る期間は三カ月という叔父との約束も随分のびのびになり、手元に引取った時、常子はもう二才、片言もしゃべるようになっていた。文枝は姉と違って子供好きで、モデルの仕事で外出しない時は、終日家で二才の常子相手にキャッキャツ騒ぎ「あら、この子、なんで伊藤さんに似てへんのやろ。けったいな話や」と当時の苦々しいことをふと思いつてこさせるような嫌なことをいったりはするけれど、よくお守りしてくれた。そんな風に無邪気に子供をあやす文枝を見ても自分とのつながりが姉と妹、逆であったならと、進吉は口惜しくなる。文枝は、姉よりもずっと心根の優しいところがあった。

——社の仕事は社ですませ、帰宅してからの晴雨は、もう誰はばかりでもないといった思いで、姉の菊枝、妹の文枝、この二人のモデルを使って、本格的に責め絵の制作にとりかかった。菊枝はたしかに耐久力はあったが表情の起伏にとぼしく、どう説明しても呑みこめず、固く平板であった。まだ十八才の文枝の方が飼育次第では、といった可能性を感じさせる。マゾヒストのお里が見せたような凄惨なばかりの艶っぽさは望むべくもないが、鋭いもの、妖しいものが苦悶のポーズに滲み出す。そんな時、イライラとして晴雨は駄目だったモデルになっている菊枝をどなりつけるのだ。緊縛されている菊枝の髪を櫛をつかって肩へ垂らせたり、裾元をはだけせたりして手伝う文枝に「そこの青竹で実際にぶって見ろ」と晴雨は命じ、だって姉さんに、そんなこと出来んわ、と文枝が嫌な顔を見せると、馬鹿、仕事だ、と大声をあげて、まるで悪鬼にとり憑かれたような形相に晴雨はなってしまう。肉に喰いこむばかりに

伊藤晴雨遺作集 =その5=



縛った縄の間へ青竹をねじこませ、ねじり上げ、菊枝に悲鳴を上げさせたあとは、菊枝も文枝も揃って裸になるように晴雨は命じる。湯文字一つになった姉と妹を、改めて背中合わせにし、太い麻縄で二人後手にキリキリと縛り上げた晴雨は、両手で二人の髪をひきつかみ、ぐらぐらと揺さぶって、二つ揃っておどろに乱れさせると、二人を縛った縄尻を天井の梁へ引っかけ、ぐいと力一杯引っ張るのだ。キリキリ舞いしながら、悲鳴を上げ、その場へ爪先立ちになった姉妹を晴雨は血走った眼で見廻し、よし、とばかりにうなずくと机に戻って、勢いづいたよう、せかせか筆を動かしていく。菊枝も文枝も互いに歯を喰いしばって、晴雨に要求された表情を工夫し合い、恨みとも、悲しさともつかぬ陰翳を湛えた瞳で、じっと一点を見つめ合うのだが、まるで蛇に見込まれた二匹の蛙同然であった。

——ある日、菊枝が買物から戻って来ると、晴雨の二階の仕事場が馬鹿に静かで、美術学校へ仕事に出かけた文枝はもう帰ったのか、玄関に履物が揃っている。何事につけ鈍感な菊枝もピンと頭にくるものがあった。赤ん坊の寝ている四畳半を足音を忍ばせて歩き、そっと階段を上るとやっぱり予感は的中していた。部屋一杯に散らばった責め絵の上を一糸まとわぬ裸をきびしく縛られた文枝がのたうち、その上にのしかかっている晴雨もまた生まれたままの姿。それを見た途端、菊枝は逆上した。隅にあった青竹をつかむとそれを大きく振り上げ、狼狽する二人めがけて戻橋の鬼女のように打ってかかった。文枝をモデルにして、仕事にかかっている内、つい出来心で、などという晴雨の言い訳などもう耳に入らなかった。

——次の日、文枝は美術学校の仕事に出かけたまま、家へ帰らなかった。五日過ぎても音信なく、文枝が家出した事がはっきりする

と、晴雨よりも菊枝の方が取乱した。浮氣した晴雨が悪いのか逆上した菊枝が悪いのか、もうそんな事はどうでもよく、菊枝はおろろして妹の行方を探し廻り、晴雨も木村や青木、大森等の応援を求めて文枝の行方を探ったが、遂にわからず、しかし、一カ月ばかりたつて、ようやく文枝より晴雨と菊枝あてに一通の手紙が来た。それは四国の高松から来たもので、以前から親しくしていた旅役者の一座につき巡業していると知らして来たのである。自分がいては姉を苦しめる事と思い、ここまで流れて来た。間もなく自分は、この一座の一人と世帯を持ち、もう二度と姿を現わさないつもりだが、今の状態では姉さんが可哀そうだ。早く正式に伊藤さんの奥さんになり、二人で常子ちゃんを可愛がってほしい、というような意味の手紙を読む内に、菊枝は肩を震わせて号泣し始め、晴雨も全身の力が抜けてしまった。

——それで晴雨は色々考えた末、菊枝と正式に結婚する事をきめた。文枝に対する未練を断ち切るためにも、はっきりした形をとろうと決意したのだ。そうした心の内を大森だけには、正直に打合けた。「俺は、人間が人間を果して本当に愛せるものなのか、こいつがわからないんだ」と大森は、晴雨の話を聞いて頬髭をしごきながら云い、「俺がああ夜、事務所に妹の方を連れて行ったなら、君の人生は明るく輝いたかも知れないな。運命とはそうしたものだ」と鼻をほじり、「幸せをつかむのに上手な奴と下手な奴がいるものだが、君は下手くその方に運命づけられているらしい」と、笑って「ま、俺のように俗悪な精神に徹し、女など道具的に考えるんだ。たとえ女房であってもな」俺を見習えとばかり晴雨の肩をたたいた大森は、「よし、菊枝と結婚しろ、俺が仲人してやる」

明治座で「明烏夢泡雪」が演じられたのは、晴雨が菊枝と結婚したその年の十二月であった。遊女浦里を梅紅が演ずるとあって、晴雨は、自分が初舞台に立つかのように興奮を覚えた。

梅紅の浦里は、天下一品だとかねがね心酔しきっていた晴雨は、初日の一カ月前から、そわそわとして落着かず、裏方達の間に入つて、舞台装置まで手伝うという熱の入れ方だったが、舞台看板作者の森田吉次が病氣になり、初日まで看板全部が間に合うかと危ぶまれ出した時、晴雨は大森を通じて、山名屋奥庭の場のみ、その看板を自分に描かせてもらえまいかと劇場側に頼みこんだ。画風の違う看板を一枚だけ描かれては、他の看板と釣合いがとれなくなるのではと最初は心配した劇場側も場合が場合だし、それに開盛座、深川座などで、責め場のある芝居のみ舞台看板を描く風変りな画家、伊藤晴雨の事と、その非凡な技倆はよく知っていたから、それでは、よろしく、という事になった。

話がきまったその翌日から、晴雨は、自宅の画室に閉じこもり、縦五尺横四尺の看板絵に精魂を傾けた。浦里の折檻場を必死に描きつづける晴雨の前の床柱には、ぐったり髪の毛の根を崩し、緋の長襦袢一枚の菊枝紛する浦里が縛りつけられていた。引きちぎった綿を乱れ髪や長襦袢の肩に散らばせて菊枝が背にした床柱は、次第に山名屋奥庭の雪をかぶった松の樹として晴雨の瞳に映じ出し、やがて耳には柝打の音、三味の音色、浄瑠璃の唄声^{ねいろ}が聞こえ出し、晴雨は浦里雪責めの幻想世界に完全に没入していく。晴雨の筆は、浦里演ずる名優梅紅と相搏つような気魄に満ちて、躍動し始めた。

明治座の支配人が、これが今評判の責め絵画家、伊藤晴雨の描いたものです、と梅紅の楽屋に出来上った山名屋奥庭の場の絵看板を参考のためにと持って行くと、それを眺めた梅紅が、まるで浦里のすすり泣く声が聞こえるよう、と評したという。これが評判となり責め絵画家伊藤晴雨の名は、芝居通の人間に知れ渡った。新聞が取上げた。演劇月報社が記事に取上げたことは勿論で、伊藤晴雨の描く、いわゆる責め絵というものは立派に芸術として通用すると、これは大森が書いた。しかし、女房を裸にして縛り上げ、これをモデルにして責め絵を描く変態画家と評した新聞もあり、それは日報新聞で、田所の腹心、三宅の書いたものだった。晴雨は別段気にもしなかった。芸術であれ悪趣味であれ、晴雨は人が何と判断しようと思ふにすまいと心掛けた。好きだから描く、それでいいではないか、と思った。

明烏の初日を見終って、晴雨は久しぶりに胸をときめかした喜びを一人味わうべく、馴染の居酒屋へ足を向けると、梅紅付き添いの男衆が追って来て、一寸、差し上げたかと思ひます故、赤坂の料亭松風へお越し下さりたく、と梅紅の言伝てを伝えた。

「松風」の仲居に案内されて、朱ぬりの渡り廊下を通り、奥の座敷へ入ると、大島緋の不斷着姿の梅紅が数人の美妓に囲まれて、何か冗談を云って一同を笑わせていた。進吉を見ると「いや、先生、お忙しい所、お呼び立て致しまして」さ、さ、と自分の周囲を包んでいた美妓を晴雨の席へはべらせて、「如何がございましたか、山名屋奥庭の場——」と、銀縁の眼鏡をかけて晴雨を見る。「いや、正に感激でした。ジーンと胸がしびれる思い——」晴雨は笑って、あれは正に梅紅の至芸と云えるもので我々如き脆弱な劇評家が下手

に嘴出すものではない、とつけ加えると、「先生は責めの研究家と聞いております。何か一言でも参考になるお言葉、お聞かせ願えれば」と、梅紅が身を乗り出すようにするので、晴雨は弱った表情になった。「強いていうなれば雪の辛さが苦痛の中に——」「雪の辛さ？」梅紅はじつと晴雨の眼を見た。遣手のおかやに割竹で打たれる苦痛と雪に責められる苦痛、この二つの苦痛が一つのものとなって身体を襲い、その言語に絶する辛さが、今、少し、表情の中に滲んでいけば——と云いかけて、晴雨は口を噤んだ。いや、これは、私の趣味の見地からいっている、舞台とは何の関係もない事、雪責めというものが現実に行われれば本体はどこまで耐えられ、どのような苦悶を示すか、ふと、興味を持ったまでだ、と晴雨は打消した。梅紅は、ぜひともくわしくお聞かせ願いたい、と云い、いずれその内、研究をすませれば、と晴雨は笑う。梅紅も笑い雪責めの話はそれで落着いて、「今夜は先生、ゆっくりくつろいで下さい」とそれを合図に三味線、太鼓などが部屋に持込まれ、美妓達の華やかな踊りが始まった。

明け烏の興業も終った次の年の二月——塩のような粉雪を画室の窓から眺めつつ晴雨は腕組みし、もう小一時間ばかりも何かを思いつめた表情になっていた。ようやく決心して腕組みをとき、菊枝を呼んだ。計画を話すと菊枝は眉を寄せ、「そんな事したら、うち風邪ひきますがな」と仕事机の上のせんべいを取り、ポリポリ噛ったが、雪の中で裸になり、それで風邪をひかない方が、どうかしている、と晴雨は思わず笑ってしまう。「つまり、これは命がけの仕事だよ」と、晴雨は、事の重大さを認識させようとしたが、数々の拷問の実験台になった菊枝は肉体と共に精神まで麻痺してしまってい

るのか、雪責めの実験という事に対して恐怖を感じていないようであつた。浦里が遣手のおかやの折檻を雪の庭で受けた芝居を見て、雪中で裸になり責めを受ける女の苦痛は如何ばかりか、また、雪にどれ程肉体が持ちこたえられるものなのか、その実験を行い記録してみたい、と晴雨は説明する内、段々と熱気を帯びた口調になり、「どうか、頼む」と頭を下げるのだった。「そんなに云うなら実験台になってあげてもいいけど——」菊枝は、せんべいを噛みながら眼をキョロキョロさせて云い「その代り、あんた、浮気せんといてや」と、おかしな事をいった。菊枝に悲壮な決心を求むべく窓の外の粉雪を見せて、それを一種の効果にしたつもりだが、晴雨は拍子抜けした。心底惚れたお里に裏切られ、ふと恋慕の情をたかぶらせた文枝とも気まずい別れ方となり、結果、実験材料以外何ものでもないといった知能の低い菊枝を妻とする事に落着いて、また反省もなくそんな妻相手に責めの実験をつづける自分がいいようのない虚しいものに思われてくる。しかし、またそれに陶醉する事の出来る自分に快さもあつた。「よし、約束するよ。浮気は絶対にしない」晴雨はそういつて菊枝の肩をそっと抱き、自分も俗悪主義に徹する大森の域に近づいて来たと思うのだった。

だが、さすがの俗悪主義者大森も、晴雨からその雪責め実験の話をも最初聞かされた時には、ふと、眉をしかめたのである。「そりゃ君、少し無茶だよ」雪の中で浦里の折檻場を実際に演じてみたいという君の研究熱心さはわかるが、何も妻を生命の危険にさらしてまで、と口をとがらせ、次にその実験が浦里どころではなく、雪中の松に全裸の妻を吊り上げるというものである事を晴雨に聞かされると、大森は二の句が告げられぬといった顔になった。少し君、気が

おかしくなつたんじゃないか、というかわりに、呆れ果てたように笑い出した。「大変な亭主を持ったもんだよ、菊枝もな」しかし、晴雨は惑いも迷いもないといったサバサバした顔つきで、大森はふと無気味になり「よし、その実験の日には俺も介添人として立ち合ふよ」といい出したのは弥次馬気分ではなく、晴雨が菊枝を凍死させる気で実験をするのではないかと心配になり、菊枝の用人棒を買って出る気持からだつた。

雪責めの実験は、この二日、雪の降り積つた快晴の日、と漠然とではあるが一応そう取りきめて、これに立合うのは大森の他、呉服屋の木村、それと写真屋の青木、その三人を予定した。この雪責めの光景を晴雨に依頼され写真撮影する事になった青木は、その場をどこに設置するかも仕事のひとつで、連日、人気のない場所を探歩き、下高井戸の雑木林付近を雪責め撮影の場と決定した。

そんな或る日、晴雨が画室で仕事していると階下で、「あんた、えらいこっちゃ」と階下で菊枝の悲鳴が聞こえた。あわてて階段をかけ降りると、玄関にしょんぼり突っ立っているのは、一年前この家を出て行った文枝で、野暮ったい肩かけを鼻まで引きあげて、如何にも情なそうに「えらいすんまへん」と頭を下げ、「よう帰って来てくれたな。はよ、上り、上り」と、手をとる菊枝に突然抱きつき、わっと号泣した。菊枝も大声で泣き出した。井上章三郎という旅役者と四国巡業の途中、一座から逃げ出し、広島まで行ったが、何のことはない広島は章三郎の故郷で、そこには彼の妻子もおり、文枝は妻子が恋しくなつて帰郷する彼のそれまでの退屈しのぎに過ぎなかつたのだと涙で喉をつまらせながら、晴雨と菊枝に語るのだった。どうせ捨てるなら巡業先の四国で捨てればいいものをわざわざ

ざ文枝を連れて広島まで行ったというのは、五年も家を空け、今頃何だと妻に閉め出しを喰った時の用心で、つまり、章三郎という男は、二股をかけていたのだと文枝は口惜しそうに云う。ところが彼の妻というのが実におっとりした女で、そんな夫に嫌味一ついわずに温く迎え入れてしまったので、それで自分は無用の長物となつた——妻子のいる故郷へ女を連れて駆落ちするなどそんな阿呆な話があるかと菊枝は妹の話を聞いて憤慨したが、とにかく妹が無事戻つて来てくれた事が嬉しくて、お腹はどうや、お酒飲むか、とそわそわ文枝に気を使って落着かず、それは晴雨も同じ事で、その夜は三つになつた常子を抱き、三人して神明町へ、ふぐを食べに出かけた。久しぶりに胸のつかえがおりたよう楽しい一時だった。「姉さんが伊藤さんと正式に結ばれて、うちもこんな嬉しい事はない」と文枝は、常子を膝の上であやしながら嬉し涙を見せていい、あの時の事はどうぞ勘忍してや、と姉に改めて詫びるのだったが、「そんな事、うちもう、気にしてるかいな」とモグモグ口を動かしつつ、菊枝は幸せそうな表情を見せた。

文枝が家に戻つて三日目——待っていた雪は降り出した。大雪であつた。何日か前より低迷していた灰色の空は降りしきる大雪で暗くなり、晴雨の画室の窓もその雪で白く厚く閉ざされた。風を伴つて降り続ける雪にマントをたたかながら晴雨は郵便局にたどりつき「明日、晴天なれば決行」という電報を大森、木村、青木の三人に打った。だがその夜更け、明日はうち、この雪の中で責められるんや、と妹にいい、まるで遊山にでも行くかのように笑っていた菊枝が、急に背中がゾクゾクすると云い出し、妹に何枚も布団をかけさせた。

翌朝は、庭に降り積つた雪からもう湯気がたちこめる位、空はくつきり晴れ渡つた。だが、菊枝が布団に伏している隣の居間で、大森、木村、青木の三人は晴雨を中にはさみ、評定を重ねている。菊枝の熱は三十九度にもなり、雪責めの実験などとてもない事だつた。

外は銀世界に輝き、しかも今日はこの快晴、またとない機会だと晴雨の残念がる気持はわかるが、モデルがこの熱じゃ背に腹はかえられんじやないか、と大森が云う。一応、菊枝の体が元通りになるのを待ち、延期する事にして、と木村も云つたが、彼女の体が恢復する頃にはこの雪は跡かたもなく消えて、今年中に機会はあるまいと、やっぱり残念がる。木村は今朝一番電車で下高井戸に出かけ雑木林、竹藪などの雪景色を下見して廻り、付近の立花旅館を一行の休憩場を選んで先にチップを置いてくるという熱の入れ方だったのだ。しかし、結局はどうにもならないという結論しか出なかった。その時、襖が開いて入つて来たのは文枝で、熱が出た姉を看病している内、四人が残念がる声を廊下で耳にして、「うちがモデルになつてはあきまへんか」と協力を申し出たのだ。どうして文枝に気づかなかつたか、と四人は顔を見合わせた。「やってくれるか」と眼を輝かせる晴雨を見て、文枝は微笑し、「義兄さんのお役に立つのならうち嬉しいわ」とうなずくのである。晴雨は文枝と一緒に菊枝の部屋へ入った。お前の身代りに文枝が実験台に立ってくれる事になった、という、青白い顔を半分布団に埋めていた菊枝は、並んで立つ晴雨と文枝を凝視して、燐光のように眼を光らせた。「あかん、今日のモデルは、うちや」そんな無茶いうたらあかんわ、姉さん、と文枝が顔をしかめるより早く、分布団に上体を起した菊枝は、

「何してんのや、はよ仕事場に行こやないか」と、あきらかに一種の嫉妬を顔に滲ませていた。

「そりやいけないよ、奥さん」と木村や青木もやって来て菊枝をなだめにかかったが、菊枝がどうしても行くといって聞かない。そんな風にガヤガヤやっているのを大きな欠伸をしながら見ていた大森が「病人を一人残しておくのも心配じゃないか。歩けるのなら立花旅館まで連れて行こう」と云った。

綿入れを何枚も着せ、懷炉を二つ腹にまかせた菊枝を晴雨と文枝が左右からかかえるようにし大森は子供を肩うまにして家を出た。

そのうしろから、カメラを肩に担いだ青木、浦里の衣裳に麻縄などの小道具を背中に背負う木村—そんな一団が雪駄に喰いこむ雪を蹴りつつ往来を歩き出すと、道行く人は、どう解釈していいかわからぬという奇妙な顔つきで、しばし立止り見送っている。

下高井戸に到着した一行は、立花旅館に一まず落着き、^{いろり}囲炉裏端で熱燗を飲みながら寒さにしびれた手足を揉みほぐしたが、ここでも、菊枝は今日の仕事はどうしてもする、といって聞かない。馬鹿を云うな、と思わず語気を強めて晴雨は叱ったが、すると、熱のある故か菊枝は神経質にぴりぴり唇を慄わせて彼女は初めて晴雨に喰ってかかり出したのである。

一年前、画室の中で晴雨が女房の妹に何をしようとしたか、この際、みな云うてこましたる、と皆んなの前で口走り始めて晴雨をうろたえさせ、「まだ、あんたは妹の文枝に気があんのやろ」ぴしゃりと晴雨は菊枝の横面をはった。菊枝は、わっと泣き出した。晴雨は如何にも情なそうな顔で一座を眺め廻し、眼をしょぼつかせたがまあ、まあ、と大森は泣きじゃくる菊枝に寄り添って、あんたの気

持はよくわかる、とうなずきながら、しきりに酒を菊枝に飲ませ出し、しかし、これは作戦で、酒の酔いのため菊枝が寝入ってしまうと「さ、決行するなら今の内だ」と、眼くばせして、菊枝を寝具に運び入れ、大森は飴をしゃぶる常子を再び肩に乗せるのだった。

旅館の裏口から出て雑木林に向かった一行は、日のかげらぬ内、先に全裸の吊りから始めようと相談がまとまり、いい枝ぶりの松を探すなどまるで首吊りするみたいだと笑いながら、ようやく、適当な高さに太い枝を拡げている松を見つけ出す。

小柄で身軽な青木がまず木に登って用意して来た滑車を太い枝の根に打ちこみ、ロープを通すと、文枝は「ほんなら脱ぎまひよか」と、人事みたいな調子で帯を解き出した。木村が雪の上へ拡げた風呂敷の上へ文枝は、お寒む、やっぱり寒いなあ、といいながら次から次と脱いでいき、松の枝から足を滑らせてドシンと雪の中へ落ちて来た青木を見て、キャッキャッと笑い出した。しかし、さすがに肌をさらすと寒気がこたえて、湯文字一枚になった体を猿のようににちこませ、齒をカチカチ噛み鳴らす。

「さ、いこう」と晴雨はそんな文枝を励まして、木の根元に積まれた麻縄をとり、文枝の両手をうしろへ廻させた。「がんばるんだぞいいな」文枝をきびしく緊縛した晴雨は、その縄尻を松のロープにつなぎ、木村に眼くばせした。さっと文枝の湯文字を剥いで雪の上へ投げるとそれが合図で、「よっこらしょ」晴雨と木村はロープを力一杯引き出した。文枝の足首が滑車の軋む音と共に雪の地面から離れていく。もう晴雨からは普段の表情は消え去り、鬼人のような妖気をはらんだ二つの眼が、カッと大きくつり上っていた。ギリギリと枝の滑車は軋んで生まれたままの文枝の素肌は寒風の吹き当る

地上五六尺の所まですでに吊り上げられていく。

青木は雪に何度も転びながら、カメラの位置を取りきめにかかり大森は赤ン坊を抱いたままかなり離れた地点に歩き、人影の近づくのを警戒していた。が、ふと、横に顔を向けた大森は、あっと声を出した。雪の上に燃え上るような緋の長襦袢の裾を引きずった菊枝が、青ざめて放心したような表情に眼だけは蛇のように燃えさせて突き進んで来たのである。「おい、馬鹿な真似をするな」晴雨の傍へ突進しようとしている菊枝を阻止しようとして、大森が雪を蹴ると横抱きにされた赤ン坊が火のついたように泣き出した。髪を振り乱し、長襦袢の裾を大きくはだけさせ、つんのめるようにして転げこむ、まるで狂女に等しい菊枝を見た木村と青木は、一瞬顔色を変え、はじかれたように後退した。しかも菊枝は、松の幹に手をかけ

て突っ立つ晴雨に血走った視線を向けながら、くるくると伊達巻を解き、かなぐり捨てるように長襦袢を脱ぎ出したのだ。しかし晴雨は、それをもう止めようとはせず、来るなら来いとはばかり殺気に満ちた眼差しで見据えている。

「さ、はよ、うちも縛って、この松に吊って頂戴」糸まとわぬ素っ裸になった菊枝は、両手をうしろへ廻し、ぐいと背中を晴雨に押しつけた。「よし」晴雨は低い声でうなずくと麻縄をつかみ、キリ菊枝の鳥肌立った裸に巻きつけていく。

「姉ちゃん、阿呆な事したらあかん、死んでしまう」と、すでに松の上で宙吊りになっている文枝は紫色になった唇を慄わせて叫び、肢をばたつかせたが、それを遠巻きにして眺める木村、青木、大森の三人は、まるでそこだけが別世界の出来事のように雪より冷たいものを背中に感じつつ、ただ呆然としているだけだった。晴雨がロープを一人で引き絞ると菊枝の体は右に左にキリキリ揺れながら吊り上って行く。

「阿呆、阿呆、姉ちゃんの阿呆」文枝は吊られたままで泣いていた。「あんたなんか負けるもんか」菊枝は文枝と同じ位置にまで吊り上ると満足したように眼を閉ざした。一種犯し難い雪に包まれた静寂の中で、姉の肉体は雪よりも白く照り輝き、折から吹いて来た寒風に如何に、も仲が良さそうに小さく揺れ合うのだった。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

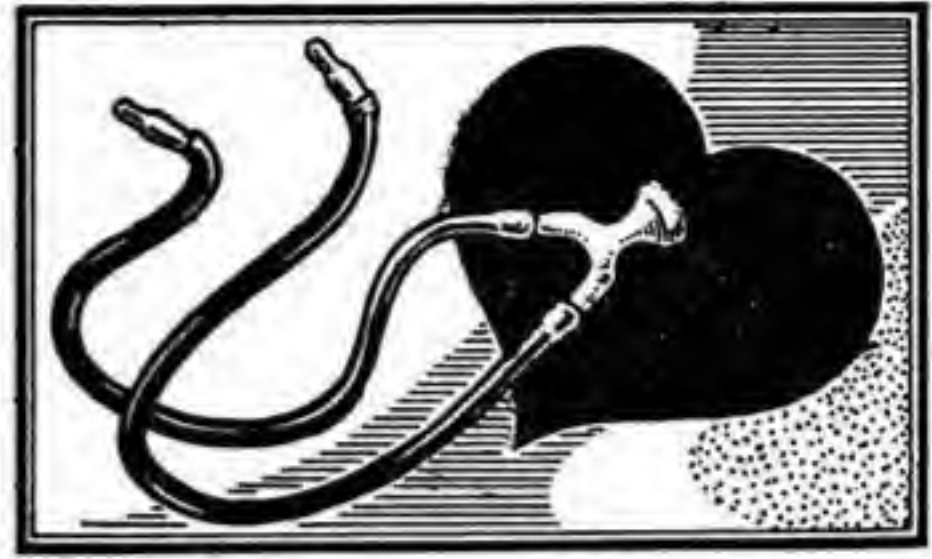
一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対し、ましては応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。



S・C・R △性問題相談室▽回答欄

「異物刺戟癖」について

医学博士 弓削達人

△質問要旨▽（23才、男性、独身、会社員）

私は、Mではないと自分では思っているのですが、肛門にビニール管（直径5ミリ程では空洞）を挿入したり、尿道にイヤホン用コードを挿入して、独り悦に入ることが時々やります。後で小水をするとき、痛みを感じるのですが、尿道に異物感を感じるのが何ともいえない気持ちになるので、つい繰返してしまふのです。止めなければいけないでしょうか。また安全性についてもお答え願いたくご相談致します。

△回答▽

私のところに寄せられる相談の多くは、あなたのように、肛門部や尿道部を刺戟することに快感を覚える「アナルエロティケル」ともいうべき人達です。

肛門部に異物を挿入して快感を得るということは、その異物が何であれ、そのメカニズムは浣腸マニアの場合と全く同じものなのであります。（奇譚クラブ9月号68頁をご参照下さい）

尿道部を異物をもって刺戟することによって性的快感が得られ、その快感に固着しやすい

いことは、次のようなメカニズムによるものです。

尿道粘膜は肛門粘膜と同様に、それ自体が敏感で、性感に近縁の快感を得ることのできる場所であります。

この特別な局所へ、なんらかの理由により——この場合、ご質問の内容からはその理由を推察することはできませんが——あなたの性的関心が集中し、それを刺戟して遊び楽しむことが、一つの性癖となって確立したものと考えられます。

それではなぜあなたの性的関心が尿道部に

集中したのでしょうか。そもそも人間の性的発達、口唇期より肛門期を経て、性器に統合され、異性を性対象としてさがし求めるようになるということは、よく知られていることです。

あなたは、恐らくまだ童貞だと思います。マジメな青年で、恥ずかしがりやで、まだ恋をしたこともないのではありませんか。そればかりでなく、女性の友人もいないのではありませんか。いやいや、女性の友人ばかりでなく、女性の前に出ると恥ずかしくて顔が赤くなり、胸がドキドキして冗談一つ言えないのではないですか。（そうでなかったらカンペンして下さい）

しかし一般的にいつて、以上のような内向的な性格の人は、自分の精神的性欲を異性に向けることができないために、自分自身に性欲をふり向け、自分自身を性対象として刺戟するようになるのです。すなわち、刺戟する自分と、刺戟される自分に分かれるわけなのです。（この分身ができることについては、9月号の「浣腸マニアの悩み」のところでは言及しませんでした、同じメカニズムが働くわけです）

この分身ができてしまうと、刺戟する自分はいろいろと工夫して、自分の思いのままになる自分自身の体に、次第に強い刺戟を加えるようになってきます。

恐らくあなたは、現在のままでは満足しなくなり、ゴム管を挿し込んだり、液体を注入したり、バイブレーターを使用したりするようになるのではないかと思います。

肛門部を刺戟する危険性については、9月号を参照して下さい。

尿道部を刺戟する場合には、次のような危険性が伴います。

1. 急性、慢性尿道炎。
2. 膀胱炎の併発。
3. 一時的な熱発。
4. 膀胱異物（挿入したものが膀胱の中に落ちこんでしまうこと。泌尿器科の先生方の話では、しばしばあるそうですが、異物の種類としては、ヘヤーピン、空気銃弾、ゴムヒモ、鉛筆のキャップなど、いろいろです）

『止めなければいけないでしょうか』と、他人ごとのような質問ですが、私は、お止めになったほうが良いではありませんか、と

申し上げたいし、お止めなさい、とはっきりお答え致します。

あなたの倒錯は、倒錯としてはまだ未熟であるし、条件反射の形成も高度ではなく、その精神病理学的なメカニズムも深いものではなく、ごく表層のものと判断します。

従って、精神分析などといった手のこんだ操作によらなくても、自分の意識レベルの主体性をもって、その性癖を断つことはできると思います。

すなわち、第一にそのようなプレイを止めること。

そしてなによりも、胸をはって堂々と街の中に歩いてゆくことです。

現代は昭和元禄といわれる『若者の時代』です。エネルギーの塊りのような若い若者が、独り自分のチンポにビニール管で、などと陰靡な快楽にふけるようなことは、この明るいモダンタイムスにバカバカしいとは思いませんか。元気を出して下さい。あなたの現われるのを待っている、素晴らしい女性がいるはず。『二人のためにある世界』の中に早く入って行って下さい。



隣りの室

原稿用紙とセクション紙や、のりやハサミやら一と山抱えて、私は渋谷のあるホテルの一室にカン詰めになった。

特約先の印刷会社が、さる信用金庫の創業三十年を記念して、関係者に配布する、『社史』の印刷を受注した。その原稿づくりの最後の追い込みに、印刷会社の近くの、小さなホテルを借り切って、朝から晩まで、無味乾燥な数字やグラフと取り組んで三日め、しごとのヤマはみえたけれど、あと二、三日は、軟禁？ 状態がつづく。

マニアのノート
美食家の手記

か
ず・とやま

ホテルといってもここは木造の離れ。一棟に小部屋が四つ。いちばんおくの、共用のトイレのとなり、昼でも日のあたらない陰気な六畳の間に、カンヅメになっている。

このホテルは、終戦直後の、連れ込み宿として建てられたもので、現在は空屋同然。近く取りこわして、あとに鉄筋のデラックスなホテルが建てられる予定だそうで、現在は、となりの新館が満員のとき以外は使われていないので、静かなことこの上ない。

いまだき、ホテルで共用のトイレなどというのは珍しいが、これでも十何年前は、押すな押すな客がつめかけ、朝から晩までア

ベックが、ワンサとやって来たというはなしだ。

さて問題は、そのトイレの存在。平均一日に三組は、客がある。

トイレを使うには、いやでも私の室の前を通らなければならず、客の足音で、それがおんなか、おとこかは大体わかる。

廊下に面した丸窓のスキマに、女性のすがたを発見すると、私は、しごとを放りだして席を移動するのである。

室の北側に、押入れがある。

そして、トイレの南側は、婦人用の個室が四つ。ということは、押入れの中かべと、婦

人用のかべは、一つものなのだ。

なにしろ、ガタガタに痛んだ建物だから、カベと柱のあいだはかなりのスキマがある。私は押入れの中に寝そべって、隣室のようすを楽しむのだ。

室のドアには、カギをおろしてある。さらに不時の必要にそなえて？ 私は、予めトイレの電灯を昼間から、つけっぱなしにしておく。一日一回、女中が掃除にきて、用がすむと電灯を消してゆく。それ以後は、ホテルの人間は、一人もこないで、電灯を消さなくても、どこからも文句はこない。

一日中アミを張っていると、平均、日中二人、夜は三、四人の女性が、トイレをおつかいになる。そのせせらぎが、一人一人ちがうのも、おもしろい発見だった。

いいとして、と、笑わば笑えだ。

私は、持参の原稿を綴じるキリで、カベに三つ、小穴をあけた。一つは相手の顔をおがむため、あとの二つの用途は、いわなくともおわかりになるだろう。

連れ込みホテルの客には、ずいぶんと変りダネがあるもので、まだ十七、八のおんなの子や、あるいは、あきらかに人妻のヨロメキと思われる女性も、日に一人や二人は、かな

らずやってくる。

トイレは和式だ。どういう習慣か、便器を逆に使うのが、これも一人二人は、かならずいる。かと思うと、ドアにカギをかけるや、着ているネグリジェや、ゆかたをパッと脱ぐ女性。使ったあとのペーパーをひろげてジッと見入ったり、その香りを嗅ぐひともある。水洗の水を流さずに立ち去るのはザラだった。

公共のものなら、汚してもかまわない。高い休憩料払ってるんだから。とばかり、わざわざ便器を、汚してゆくのも多い。もう一つ白状すると、実は私は、このカベにイタズラをした。サインペンで、どぎつい落書きの手本を書き、『どうぞ、あなたもお使いください』とばかり、寿命のつきかけたサインペンを女中さんの掃除の直後、ころがしておいたのだった。

私の、『吞ましてください』てな調子の呼びかけが、お気に召したのか、

「吞ませてやるから、口をおあけ」

「使ったあとの紙、払い下げてやるワ。ただし、一〇〇〇〇円」

なんて、仲々うれしい返事が書きこまれてカベは、そんな文字で埋められた。

おどろいたことに、寿命のつきる寸前のサインペンを、持ってっちゃう女性もあった。

私は、客たちの用済み後、用もないのに、かならずそこへ出むいて、水を充分流し、つぎの客を迎える用意をする。

いつなんどき、すばらしい美女がやってきて、ご用のあと、水を『流し忘れて』すばらしい置きみやげを、そのままにしておいてくれないともかぎらないからだ。

そして、そんなチャンスにも、数回めぐまされたことは告白しておこう。

そう。私は、水を流しおわるや、タンクのコックをちょっといじって、水を止める工作をすることを知っている。

こんなことかくと、まるで仕事を忘れて、一日じゅうトイレの番人をしていたみたいに見えるかもしれないが事実逆。その都度気分をいれかえて、原稿用紙にむかうのだから、一日三回連絡にやってくる印刷会社の進行人が、おどろくくらい能率は上るのだった。

おいしいことに、この建物も、いよいよ今月一ぱいで、取りこわされることになった。と掃除にきた女中さんが、重大ニュースでも発表するかのように言った。駅のトイレも日毎

に改築されて行く。

私は同好の士のために、このような重要文
化財？ は、のこしてほしいと思う一人だ。

懲 罰

東京の神田は学生と本屋の街。週に一回は
資料さがしに、ここを歩くことにしている。

Gという書店は、ここでも一流の新刊屋で
年中、押すな押すなの大繁盛をみせている。

本屋に万引はつきもので、このG書店も、
日々の万引被害には手を焼いているという。

つかまえると、警察に引きわたすか、または
初犯は盗品を取りあげて店外追放というのが
常例だが、この店では、少々ちがう罰則があ
る。

犯人？ をウラの倉庫に連行して、ストッ
クの整理や返本の荷造り、そのほか雑役に終
日コキつかう。

店主は、まだうらわかい、三十そこそこの
未亡人で、美空ひばりタイプの色白の美人だ
が、そのような万引犯人は、一日じゅう、こ
の美人おくさんの監視のもとに、重労働にコ
キつかわれるのだ。

「肩をもみなさい。足をマッサージして。つ
ぎは、お茶をいれなさい。なんて、わたしの

身のまわりのことまでやらせちゃうの。こな
いだはお便所の掃除や、わたしの下ばきのせ
んたくまでやらせてやったわ」

と、楽しそうに語るのだ。

懲罰が、ねらいだけど、応分の日当は払う
し、食事もだすのだから、こんな甘い懲罰は
なく、それくらい妙に親しくなって、以後ア
ルバイトにやってくる者も十人ちかくとか。
ちなみに、この店でも何部かの奇ク誌の固
定読者があるそうで、店主は奇ク誌の大ファ
ンのひとり。

「こんど、感じのいいコつかまえたら、縛る
か、叩くかしてみようかしら」

と、いたずらっぽい目で微笑する。

万引者たちは、出来心でぬすむのが多く、
つかまえると、観念してしまいが、独特の懲
罰だけで、ゆるされる制度を理解すると、安
心してよくはたらくそうだ。

「なにしろ、こちらは痛いシッポつかんじま
ってるのだから、なにをしようと平気よ。い
やといったら、つきだす、とおどすと、大て
いの学生は言うこときくわ」
と胸を張る。

くわしいことはいわないけれど、Sごのみ
のこの未亡人は、弱身につけ入って、相当手

ひどいことまでやらせるらしい。

「いうことときかないので、ついカッとなって
ビンタ張ったら、ハナ血を出しちゃって」
と白状した。

私は逆に、経理関係で、この店の弱点を握
ってるので、いちど特権を利用して、くわし
く懲罰行状記を聞きだそうと考えている。本
誌の読者とあらば、おもしろい話の三つや四
つ、かならずもっている筈だ。

ペーパー

「楽しいわが家」という月刊雑誌がある。

その誌9月号の一節より。

フランスは、パルプの生産量が少ないか
ら紙は貴重である。だから、一部の女性は
「小」の場合には紙を使わないようだ。

レストランなどで見ていると、トイレへ
行く場合に紙がはいってるハンドバッグを
持って行かないのだから、それが証明でき
る、と私は邪推するのである……と書くの
は、作家の中村武志氏。

バッグを持たなくとも、個室内には、トイ
レットペーパーの備え付けがあるかもしれな
いのだから、紙を使わないと断定するのは早
計である。でも、そんなリクツっぽいセンサ

クしてはおもしろくない。中村氏は、パリの土を踏み、そこでの体験だから、紙を使わない女性を確認したものと解してよさそうだ。

さて、フレンチ・キスということばがあるくらい、フランス人は特殊の接吻を好むので知られている。フレンチの詳細は略すが、事後にペーパーを一さいつかわないという女性と、この国民性を結びつけて考えると、少々おかしくなってくる。

このばあい、当然未処理の状態におかれているのであろう。とすると、フランスの紳士は、好むと好まざるとにかかわらず、なんらかをいただく結果になるのではあるまいか。
『楽しいわが家』誌は、信用金庫で、サービスに呉れる無料雑誌。片々たるパンフレット誌の片すみに、このような、淡い幻想を盛った、フランス・コント？があるのだから、うれしくなる。

バア S アンド M

SM趣味を看板にかかげる酒場がある。との情報で、さっそく行ってみた。

ところは、東京の新橋烏森。以前、津川博氏が本誌で紹介された店は、ここらしい。ようやくの思いで、探し当てたその酒場の

名は、バア S・M。

とび込んだ新参者は、いささか戸惑った。

なるほどママは、かなりの美人だし、店内の書棚には、わが奇ク誌をはじめ、FK誌ほか文献誌のバックナンバーが、かなり並んでおり、集まる客の表情にも、ふんい気はうかがえる。が、ボックスにきたおんなの子は平凡で、ただビールを注ぎ、かつ自分も呑むだけ。S・Mのなんたるかなど、知っちゃいねえ風情なのだ。

正直のところ、失望した。

おんなの子、曰く。

もっと、程度のたかいサービスをおのぞみなら、会員メンバーになりなさい、と。

ところが、その会費なるものがケタちがいに高い。こんなことなら無理して、それだけの大金を投げださずとも、むしろ単独で相手をさがし、思うままのプレイを考えるほうが賢明だと思われる。

眼の前の無センス嬢は、ただやたらに、高価なビールを、てめえののどに、流し込むだけ。ふつうなら、そろそろそのビールのおながれをせがんでいいころだし、そうしてこそバア S・Mの真価があるのだろうに、さすがの私も、呑みの意欲は湧かず、ただその場の

ふんい気になじめない味気なさを、かこつのみ。

情報では、何回か通えば、美人のママが、れいのビールの少量くらいは、器で供してくれるらしいが、そんな思いして、バカな金使ってまで、いまさう……。と、白々しい思いに、おそわれたことだった。

私の期待を裏切るバアのお勘定は、ビール2本とオードブル。チップいれて、会計が四千何百円。まったく奇ク誌をタナに並べるだけで、S・Mバアが名乗れるとは、結構なシヨールバイもあるものだ。

期待過剰が、わるかった。

.....

私のユメを語ろう。

ドアを開く。きれいな女の子が、長クツだけの恰好で、うで組みして立ち、カウンターには、美しい女王さま——ママが、無言。

席につけば、飛行機の安全ベルトさながらに、イスに鎖で固定され、出てくるのは、ジョッキに泡を山とうがべる、できたばかりのビール……。おつまみは、異臭をおびた、乾燥した固体。

運よく、そのタイムに出くわせば、ママお手製のナマのオードブルだって、のぞみのま

ま。

やがて、ショーがはじまり、女王さまと奴隷の、パントマイム。客席の私のせなかにもようしゃなくムチの雨がふる。

うつくしいおんなの子は、時がくると、はいていたブーツをぬぎすて、そのなかへ暖かいビールを、自然な顔付のままに注ぐ。

ブーツのまわし呑み。なかみがカラになれば、また他の子が追加してくれる。

チーズの香りだって、のぞめば存分に嗅がしてもらえし、テーブルのうえに飛び上った美女に、卓上にのべた手を、顔を、いやというほど、踏まれ、けられることのぞみのまま。美女のかみすてのガムや、ハナをかんだティッシュペーパー、耳あか、切ったツメの一片、ぬけ毛などのオードブルが出され、おのぞみとあらば、トイレへのお供から、いっさいのお世話をさせてもらえる。酔って、つぶれて、便器のなかへ顔さしのべてねむるくらいは、ゆるされる。もちろん、このトイレは美女たちの専用。

あとから入ってきた、女王さまが、酔いつぶれた客の存在など眼中になく、平然と目的を足して出てゆかれる。

……別室ではSの客が、かれんなおとめをム

チ打っており、ステージでは『花と蛇』の、ドラマのロングラン。

こよいも、静子夫人のあえぎが、マイクから流れ出、足もとに散ったせせらぎのはてのものは、特別の型をした陶製のジョッキにとられて、静かにMファンの室に運ばれる。固形は、一定量をパックに包装され、持ちかえり用に、羽がはえて売れてゆく。

……………

私はSのほうは、まったくオヨビでないので、うまいスケッチができないのがざんねんだが、こんなふん囲気のバーであってこそ本格的S・Mを売物にしてもよろしかろう。実在のほうは、公開の店だから、いろいろかましい規制があるのだろう。サービスが一定のワクから出ることを許されない事情も理解できなくはないが、期待して出かけて、みごとに裏ぎられた、私の第一印象だけを、ノートにしているところ。

暴力バーバー

暴力バーではない。バーバー、つまり床屋さんである。

『東京の池袋に、きれいな若いおんなの理容師がワンサというバーバーがあり、暑いとき

は、白衣の下には、なにもつけておらず、そして、おんなの子たちは、そろって美人。トルコまがいのサービスもやってのけ、とてもランボーで、首をしめたり、顔のヒフを切っちゃうくらいは、しばしば。そのランボーが受けて大繁盛。理容師は指名もできるが、そのかわり料金は、二、三倍』

こんな情報をつかんで、八月初旬の暑い午さがりの土曜日の午後、略図片手に、そのバーバーのドアを押した。

ビル地下、明るく広々した、冷房のきいた店だ。なるほど、白衣の女の子が、熱帯魚のように、スイスイ行き交う。

『いらっしやいませ』

ワゴンに、新聞雑誌が山積みされ、コーラーが一本と、ハイライトが一箱のって、目のまえに運ばれる。ふと目をやれば、なんと！奇クのパックナンバーが（ことしのはじめ頃のナンバー）二冊、無造作におかれてあるではないか。

聞き込みの通り、おんなの子は、ひどく手荒く客をこなす。しかし、白衣の下、ナンニモツケズは、うそだった。ブラジャーも、ピキニも、ちゃんと、つけている。

ジョリジョリとヒゲをあたるカミソリの、

いや痛いこと。面上にのせられたタオルの、熱湯のように熱いこと。

やってくれるおんなの子が、かなりの美人だったから、ガマンしたものの、その子のくちから、つよくギョーザの香りがただよったのには、まいった。悪臭？ を嗅がされるのはけっしていやではないけど、これではムードがこわれる。

『マッサージします？』

おんなの子が小声でいう。

『うん、きょうはいいや』

料金きいたら八〇〇円。まったくオドロキだ。しゃくにさわるから、五〇円玉や、くたびれた百円札まで動員して八〇〇円ポッキリを払ってやる。

おんなの子は、軽ベツの表情をアリアリとだしながら、でもお役目でブラシでホコリを払ってくれた。やけに力をいれて叩いた。

何かわりきれぬ気持でパーパーを出た。

粗末なサービスで、なにがサービスだ！

Mの一片もありやしない。そうしといて、高々五百円の理容に八〇〇円とは。情報くれた同好のK・Hに電話をいれた。

けれど、このイチヤモンは、私のほうの負けらしい。

さりげなくワゴンに積まれた奇ク誌を、とにかく手に取るのが無言の意志表示で、このサインを忘れなければすばらしいかわい子ちゃん、素早く望み通りに、手荒く扱ってくれるという。ちからいっぱい耳をねじりあげたり、ハナを思いきりつまみあげたり、芳香ただよう？ 五本のユビを、ムンズと口中へつきこんだり、カミソリだって、わざとサカゾリの、しかも切れ味のおちたやつで、ようしゃなく剃りあげたり、チクチクと刃先で、ヒフをわずかばかし切ったり、寝て身うごき出来ない胸のうえに、上半身をグイとのせたり、やってくれて八〇〇円。

『マッサージは、注文すべきだったな。馬乗りや、背中踏み、足踏みは常識なんだ』

マッサージともで標準コース終了。とK・

Hは答えた。標準コースという意味は、それ以上、パンチのきいたスペシャルもあるらしいけど、二、三回通わねばだめらしい。とK・Hはいう。ただしサイン以下の話は、体験したわけでないから真偽の保証はできない。

いずれにせよ、小道具に、さりげなく、奇ク誌をつかうのは、心ニクい演出だ。

おいしいことに、このパーパーも、ビルの改築で、八月下旬を以て一応閉鎖。来春から装

いをあらたに、オープンの予定という。

『もう一度行って、雪辱戦やってこいよ』

とHは、けしかけるのだが、あいにく八月一杯は、こちらも、いそぎのしごとで、西に東にかけまわらねばならぬ身。さんねんながら、ゆけそうもないのである。

材料

……に附着した、ババリアン・ステーキやらスパゲッティ・バジリコやらカリフォルニア・シャベットやらのなれの果てがナイロン・パンティに乗り移る……。

この八〇文字は、文芸春秋漫画読本の臨時増刊『プレイ・モア』誌より採録。

プレイガールの生態なる一文より、ひろった文字だ。

同誌には……の部分、ズバリ身体部位の俗語で書かれてある。れいの直腸の末端の部分を指しているわけだが、イメージをこわさぬため、ここでは、点線にしておく。

要するに、彼女たちが、たべた、それらのステーキや、スパゲッティが、なれの果てと化して、下着をよごし、菌を培養して、ある部分に炎症をおこすから、常によく清めよ、という親切的な解説。

よく、レストランのテーブルで見かける風景だが、レディたちが楽しそうに摂る食事やのみ物の、その行く末を空想してしまう。

つまり、何十時間かのちに至って、それらの美食を材料として生まれた、れいの「なれの果て」のものが、さぞや特別おいしいだろうな、とつい思ってしまうのだ。

イモを食おうが、たくあんかじろうが、干枚漬かじろうが、トンカツ食おうが、出てくるものの味は、変りよう筈がないが、やはり材料のほうは、このプレイモア誌のようにしやれた横文字の材料によるもののほうに、あこがれがつよくなる。いくら美人のそれでもたくあんや、イワシのめざしいりじゃ失格。まして、サツマイモや未消化のトマトの皮などが認められては、ガッカリというのは、私のゼイタクだろうか。

男を飼う

このショッキングな連載小説は、梶山季之作の小説。『週刊明星』に目下連載中。

その第4回では、

『あなたは奴隷なのよ……。わかっているんでしょうね』

冴子は、にやにやして

『どんな風に、虐められたい?』と訊く。

『どんな風について……』

アキラは口ごもった。

『たとえば、馬になりたいとか、便器になりたいとか……』

『えッ、便器だって?』

彼は咳いて叫んだ。

『そうよ……』

冴子はまた鞭を鳴らし。(以下略)

という、くだりがある。

さらに、その第10回では、馬のりと、鞭の饗宴があり、目のきらめく描写がつづく。

宮永岳彦のさしえもまたすばらしく、この回のP61のさしえなど、おもわずうなってしまうほどだ。まだ、この連載はつづくだろうから、これからが楽しみだ。

おなじく、週刊誌『平凡パンチ』の8月12

日号特集は、

『接近観察・女のせっちん』

一ページの大部分を費やして、女性が便器

にまたがり行動中を、真上から撮影した、カットの大胆なシャシンが、目をうばう。

なかの一節。

オナナの「小」の一回の発射量は約一五〇

cc。これを一日六回、一年間で、二千百九十回、日本中のオナナのを合計すると、一億六千四百二十五万キロ。

と、数字がある。

デパートの釣り具売り場で、五千四百円でポータブルトイレを売ってる。ビニール袋に用をたして捨てるのだそうだが、その袋には小石のオモリが入っており、プカプカ浮上しない用意がされ、それは、川や海の底へ沈んでゆく由。勿体ないことだ。私だったら、どこへでもお供して、奉仕して差し上げるのにと、つくづく思う。

『奇談マガジン』誌 8月号では、新宿にいる、フーテンの女の子で、生活費かせぎにじぶんの泉を売り歩く、ルポルタージュがあった。

価格は、コーラ一本につめて五〇〇円也。安い。ギャラをはずむと、直接給湯にも応ずる由。

このルポを読んでから、なんとかしてその「売り子」にめぐりあいたいと、ジュークの情報源を総動員しているが、残念ながらまだ会えない。もし首尾よく会えたら、

五〇〇円なんて、ダンピングするなよ。五

〇〇〇円だって、安いんだぜ。

と、忠告してやろうと思っている。

研究

東京の神楽坂に、『軽いハート』というキヤバレーがある。以下は、ここでの採録。

この店へ、時たまやってくる客に、医師タ

「実話」と「体験」懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお待ちいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら

原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に對して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に應じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるよう、お願いいたします。

イブの五十近い紳士がいる。

名刺の肩書きにいわく。

尿化学研究所主任研究員。

カバンに試験管をしのばせ、やってきたホステスを、うまくくどいて、研究材料と称して、試験管にとることを、千円の謝礼つきでたのみこむという。

論文の素材にとか言って、きわめて事務的に申し込むので、ついO・Kしてしまうが、それ以後、指名にしてくれ、多額のチップをくれるので、ねらわれた女性たちは、そのセンスの来店を、待ちわびてるといふ。

ちっともいやらしくなく、世間話のすえに軽く、それを求めるので、供給側としても抵抗を感じない、と、ご本人たちから訊いた。

この紳士、ホンモノの研究家か否かは知らないが、どうも話のようすでは、わが党の士らしいのがうれしく、いちど、ぜひ会ってみたいと思っている。この紳士の行動に学ぶなら、

『分泌化学主任研究員』にも、『ホルモン学の学究』にも、『排泄物研究家』にも、名刺さえつくれば、たちまち特殊研究家と尊敬され、ふつうならエッチよばわりされるのがオチの、われらの高貴な趣味も、欲するものを

楽々と入手できるわけ。津山さんもこれに似たことを書いてたっけ。アタマはつかいようだと思う。

オンザロック

知人のT氏が、わが家のドアをたたいた。

T夫人は、消化器官の疾患とかで、近く東大病院へ入院の由と聞いている。

おくさんの病状が進んで、病人用のおしめが入用になって、デパートへ行ってみたが、おとなのは扱ってないと断られ困りきった。湯あがりタオルを代用してみたが、これはゴワゴワかさばって適当でない。

思案のすえ、親しい間柄のわが家へ、助けを求めにきたという。

妻は、さっそく私の着古したゆかたをこわして、大判のおしめを仕立てた。

『意識はしっかりしてるんですが、クスリの関係でシマリがなくなってしまっ……イノチには別条なく、回復すれば元通りになると、先生はいうのですが』

と、T氏はいう。それも、急激にそうなって、ネグリジェのすそも一日中びしょぬれ。クリーニング屋へだすのは、治ってから恥ずかしいのでいやだ、と、おくさんはいうのだ

そうだ。

『それはどうも大変なこと……』

私は、なぐさめの言葉にこまる。

『いや、ほんとに弱ります』

T氏の言葉には、真実、困り切ったひびきがある。

『病気とはいいいながら、大きな赤んぼうだけに、抱えてさせるわけにもゆかず』

頭をかきながら、妻から渡された出来たてのおしめに、何度も礼を述べる。

私はじっとそれに眼をそそぐ。

三十才前の、目もとの涼しいおくさんが、これから二十四時間つかうであろう、おしめがうらやましい。

しかも、そのゆかたは、私が、ついこのあいだまで着ていたのである。じぶんの着ていたものが、いま、あの美女の流れに、しどろもどろれ、ときには、固いほうまで包まされるのだ……と、思ったら、なんだか、私自身がおしめになったみたい、奇妙なきもちになった。

『ネグリジェくらい、洗ってあげますよ。えんりょなく持ってらっしゃい』

私の趣味を、よく理解してくれている妻は話題がT夫人の失禁症状におよんだとき、意

味ありげに、わらいながら私の顔をのぞきこんだ。

(あたしに、いつか病気でもないのに、無理に、おしめをさせ、ぬらしたら、それをしぼりとして、オンザロックにしたわね。あなたTさんのおくさんのもの、しぼってみたいんでしょ。いいわ、ネグリジェがきたら、満足するまでやってごらんさい)

妻の顔には、そんなことが書いてあるみたいだった。

温かいうちに、もらうのは、いちばんだがアツイ、冷用、オンザロック、泉をじかに手にとってのすくい呑みと、わが家のホームバーは、妻のふるシェーカーで、いろいろの味をたのしめる。カクテルのおかげで、私のスタミナがモリモリという事実を、妻はよく知っている。下水に流し去る不用のものがクスリになるのなら、と進んで提供してくれる。

なればこそ、相手を変える意味で、T夫人のカクテルを賞味するチャンスを与えてくれようという心は、私にはよくわかる。おしめ抱えて辞去するT氏に、

『遠慮なく洗い物、持ってらっしゃい』と、声はずませて念を押す私だった。



＝藤村由紀子＝

告白

浣腸の

思い出

高校一年の時でしたかしら。登校して教室に入るなり、私はハッとなりました。

自分の席につかうとしてクラスの人が四五人話をしているそばを通りすぎる時でした。

太田くんの声です。太田くんは薬大志望だからかもしれません「浣腸すればいいじゃない」とハッキリ聞きとれたのです。

廊下のほうが、ガヤガヤと騒しくなっていました。私が、私は思わず聞き耳を立てていました。訊ねているのはどうやら木原さんのようでした。

「ヒマシ油でもいいのよ。わたしイチジク使おう」と西村さん。

「わたしは時たまだけど、あのイチジク一個でドンピシャなのよ」と田代さん。

これだけで「便秘」の話は終わってしまったらしく、別の話題が話されて、もう「浣腸」という言葉は聞かれませんでした。

物心のついた頃から、いつも浣腸されて育った私には、とても衝撃的な話でした。なんだからいっまでも胸が、ドキドキして、その日は、太田さん達の顔をまともに見られなかったものです。なぜだろうか、とも思いましたが、自然にそうなってしまうのです。三日にあげず母にされていながら、私にはとてもあ

んなに気やすく「浣腸」「浣腸」なんてとてもいえません。

話は少しとびますけれど高三の時に、化学の授業で女の先生が「グリセリン」の説明例として、

「イチジク浣腸は知っているでしょう。よく御家庭で使われています」なんて言われた時にも、私は先生の方を見られませんでした。うつむいて恥ずかしさをこらえたことも忘れられません。

教室で、太田さん達の話を聞いてしまった夜、私は体がほてるような感じで、熱い息をはきながら考えこんでしまいました。

小さい時、原因は何だったのか思い出せませんが、両親二人がかりで、された時のショックがよみがえってきます。浣腸なんて言葉は、小さい私にはわかりません。でも何かいやなことをされると、急におなかが痛くなってきたことや、怖くなってわあわあ泣き叫んだことが思い出されます。

おトイレで、母が私の腰のまわりに小さな毛布をまいて、「もうちょっとがまんするのよ。いい子だから」ときまっていたのを思い出されます。

でも私には、便秘したから浣腸されたのだ

とは、大きくなるまで、理解できませんでした。ただ、おなかが張って、妙な気がする必ず桃色の小さい容器が、持ち出されるのだと、子供心にもわかってまいりました。

ハッキリと便秘と浣腸が結びついて認識されたのは、小学校の六年生頃だと思います。

もうその頃、一応の事は母からきかされていたのですけれど、おトイレで何の前ぶれもなく血を見た時には、すぐ気がついたのが本当なびっくりいたしました。

母から聞いて知っていたのですが、やはり心配になって、職員室の佐々木という保健婦さんに相談しました。佐々木先生はまだ二十三、四才で、お姉さまみたいに思えたし、そう恥ずかしがらずに云い出せたことを覚えております。その時、先生は生理の事を詳しく説明して下さいました。

生理の事はそれで済んだのですが、私にはとっても気になるものか、先生の机の上に置いてありました。真新しい包装紙が開かれていて、あのピンク色をした容器がきれいに並べておいてありました。

顔がほてって来ましたが、思い切って初めて見るみたいにして先生に聞いてみました。「これ、何のお薬？」

「アラ、これ？ 浣腸のお薬よ。あなた知らなかったの？」

初めて「浣腸」という言葉が、私にあやしい響きをなげかけました。

「かんちょう？ あいう、おしりに……」

「そうよ、よく知っているわね、やはりあなたもされた事があるのね。どお、きもちよくなるでしょ。浣腸したあとね」

私は赤面して、しどろもどろでした。

「とってもいや。苦しくなるもん」

「そうね。でも便秘の時は仕方がないわよ。がまんする以外にないのよ」

私はその時、佐々木先生も浣腸なされた事があるにちがいないと思い、なんだかほのぼのとした気持ちになったものでした。

「便秘」という言葉も初めてでした。でも多分お通じがない事だろうと想像しました。

こんなことが、あれこれと思い出されてくるにしたがって、いやな感じと思い込んでいた「浣腸」が、とっても魅力的なんだわと思えてきたのです。

私は中学二年生ぐらいまでは、それまで通りにイチジクをされました。四、五日ですが母の手に浣腸器が握られると何とも言いようのない期待を感じたことも思い当るのです。

なまあたたかい浣腸液。母はいつもイチジクをおなべであたためてくれました。でもこの頃はまだ、あの苦しみがいやでした。

そのうちに中学二年、十四になりました。

このころから、母の手で浣腸を受けるのに抵抗を感じるようになりました。鏡の前に立つと、自分が何だか美しくなってきたように思えたからでしょうか。恥ずかしさが芽ばんだ頃だったからでしょうか。

母にされるのが嫌になっても、浣腸は離せないような気持ちになっていました。ですから自分でしなければなりません。でもなかなか独りでイチジクを買う勇気がありませんでした。まだ、グリセリンというものさえ知らなかったのです。だから、インクなどを入れるためのスポイドを利用して、母のオリーブ油などで、代用しようと思いついたのです。でも、あまりオリーブ油ばかり使ったので母に問いつめられたことがありました。母は察していたかも知れませんが、髪を洗った時に余分に使った上、こぼしてしまったのなどと弁解しなければなりません。それから、もう、スポイト浣腸も思いどうりには出来なくなりました。

それにしても、今の私からくらべるとずい

ぶん幼なかつたものと思います。だって保健の本に絵入りでのっていたイチジク型のものしか知らなかつたのですもの。スポイドは思いつきながら、本物の硝子の浣腸器があるなんて、少しも知りませんでした。

仕方なく薬局でイチジクを求める決心をしました。男の人の居るお店にはどうしても入れず、女店員さんのいるお店を捜し廻る有様だったものです。やっとの思いで買った時には汗ビッシュヨリで、外の風がとても気持ちよかったのを覚えています。

それからというものは、毎朝五時に眼醒しをかけて、眠いのを我慢しながら、イチジクをお布団の中で、使うようになりました。激しい便意のために目がさめて、おトイレに行った後は、気持ちよく朝の勉強が出来たものです。

その習慣がついてしまったある日、私は薬局で「イチジク浣腸」と言わずに「浣腸器」と言ってしまうしました。この云い違いが、幸運にも硝子の浣腸器となって、私に恵まれることになったのでした。

その時の、五十CCの浣腸器でした。イチジクの可愛らしさからくらべると、どっしりしてとても重量感がありました。

この浣腸器で初めて知ったことは、イチジクでは味わえないようなドッシリした、悲鳴をあげたいような感じだったのです。

中学三年くらいの時でしょうか、雷の鳴る雨の日でした。私は耐えられないまでがまんしようと思いました。その日は午前で授業は打ち切り。台風警報が出たからです。奥には母がいるだけで、何だかひっそりとしていて、味が悪いくらいです。外は激しい雨音がしていました。

雷がなっていたからかも知れません。押入で浣腸する気になったのでした。

便器にはお弁当箱の古いのを使う事にしました。なんだか体中がゾクゾク震えてきました。あまりにふるえるのでグリセリンを使うのはあきらめて、お水を百CCぐらいと、最後に十CCぐらいグリセリンを使ったのですが、二、三分もたたないうちにお弁当箱を汚してしまいました。押入れのカビくさい臭いに混ってとても嫌な思いをしました。

このころよりも少し後ですが、その頃からお風呂場で、鏡に写る自分の姿に見とれて、プレイするようになりました。浣腸の苦しみを誰に見せるのでもなく、私だけの秘密にしておきたかったのです。でも自分で自分

の苦しみなやむ姿を見ると、何だか美しく思えて、とても母に浣腸させられて嫌がったなんて、信じられぬくらいでした。でも母に、浣腸に無上の喜びを感じるなどとは、とても云えません。変態だと思われるかもしれませんが、

少し私、露出症なのかもしれません。草原の中で、全裸になって浣腸をして思う存分に駆け廻りたい欲望があるのです。その夢に負けたときのことを、恥ずかしい事ですが告白します。

私の家の裏には広いお庭があります。境は万年塀になっていきますけど、私のお部屋のすぐそばにお隣との境の万年塀があるのです。裏はうっそうとしげった木立、絶対に見えません。

これも又ある雨の日、三時頃でしょうか、思いきって、裸になった私は、十分に浣腸して、その万年塀におしりを向けてすわりました。全身を雨に打たせて、徐々に効いてくる浣腸に苦しみながら耐えている美女？ 自分では素晴らしい絵だと思って陶醉きったひとときだったので。限界に負けた時のことは許して下さい。いくら私でも勇気はありません。



花の女斗美たち

奮 斗 士 好 太

ドツとわき上がるどよめき…。ワーツとひびきわたる歓声…。耳をつく応援の叫び…。

県高校総合体育大会の花、女子相撲競技種目の熱戦はいまやたけなわ。女高生たちの歓声と嘆声が交錯し、若いおとめたちの汗のにおいが悩ましく立ちこめるその熱っぽい空気に巻きこまれて我を忘れての観戦なのでした。

会場は、去年ヒロちゃんと私が汽車に乗りおくれで遅刻した時と同じところなのでしたが、今年は、ヒロちゃんは応援する側に残り私だけが選手として土俵へ登ることができたのでした。

今年の参加校は十六校。八十人のおとめたちがきたえ上げた技と力を競います。

紺、緑、紫、えんじ、萌黄…と色とりどりのマワシひと筋に身をかがって、激しくぶつかり合うおとめたちのりりしくも美しい裸体と裸体…。豊かなポリュームを誇る白い肌のアンコ型。手も足もスクスクと伸び、引き締まった筋肉美の長身型の浅ぐろい肌。ゆったりと広い肩幅、胸のふくらみも形よく、パンと張った腰の丸味に、女性美を誇るグラマー型、ゴツゴツした、男のひとみみたいな体つきで、うしろから見ると、ちょっと区別がつか

ないようなひと…。いろんな裸体がその肉体美を競い合っているさまはほんとうに壮観です。そして、それぞれに輝くような肌の色艶がマワシに映えて、激しい練習にきたえぬかれた者だけの持つ一種の安定感が、見るひとを魅了するのでした。

柔軟な身のこなし、キビキビした動き、押し合い、もみ合い、持てるかぎりの力と技を尽くして斗うおとめたちの姿。それは女性の肉体のすばらしさ、美しさが、最も純粋に、そして最高度に発揮された姿ではないでしょうか。長びいた勝負に、固く締めこんだマワ

シも、とけ落ちんばかりにゆるみ、豊かな胸もとを大きく波うたせながら、砂と汗にまみれた体を控えにもどるひと。捨て身のうっちゃりに見事な逆転の勝利をおさめ、砂にまみれた体を忘れて、全身に喜びをあふれさせながら土俵を下りてくるひと。一瞬の勝負に髪ひと筋の乱れる間もなく、キリリと締めたマワシもうらめしく、唇を噛んでさがるひと。

でも、勝ったひと、敗れたひと、どちらにも惜しめない拍手がおくられて、おとめたちの斗いにふさわしい、さわやかなふんい気が流れているのでした。

一回戦八試合のうち、私たちの出番は七番目、相手はU女子高です。ゆだんはできませんが、まあまあ軽い相手です。

ことしの優勝候補は麗華女学園で、新聞の評などでも、ことしの同チームの陣容は、おそらく女子相撲種目がとりいれられてからの最強チームではないか、などと書かれていたのです。選手たちは、いずれも一七〇センチ七〇キロ級の大型ぞろいで、肉体美ぞろいのこの会場の中でも、ひととき目立つ存在です。とくに、キャプテンの前田ハルミさんは一七八センチ、七五キロという超グラマーです。のびやかに流れる広い肩幅、誇らかに張

った分厚い胸には、実り豊かな隆起が両方のてのひらにもあまるほどのボリュームを持って、その形のいいとがりぎみの頂点を十センチくらいもツンと突き出しているのです。

そしてその美しいピラミッドは彼女の息づかいにつれて、静かにゆれ動き、力強く踏む四股のたびごとにブルルン、ブルルンと、武者ぶるいにも似て、彼女の胸の上で躍るのでした。ふたつの峰とその間にきざまれた深い谷が流れ出る高原を思わせる、ふくよかな、肉づき豊かなおなかの中心には、おヘソのほのぐらいかけりがすばらしいアクセントをつくり出しています。ハチ切れそうな腰にキリリと締めこんだ萌黄色のマワシが、その名のとおり、萌え出るような若々しさを存分に発散させてそのほどのよさ、におうような美しさは何とも云えないりりしさを感ぜさせるのでした。その昔、江戸の大相撲にも匹敵するほどの人気を集めたといわれる、女相撲の花形力士もきつとこの前田さんのようなすばらしい肉体美の持ち主だったでしょう。豊満なおしりをキリリと締め上げたタテミツのあたりの魅力は美術品を見るような感じさえするほどのものでした。体格から云っても、実力から云っても、この前田さんに対抗できるひと

はまず見当らないというのが新聞の評なのでした。

「あのひとたち、自信満々って感じじゃないの、ちょっとニクラシイじゃないの」

「しかたないワ、強いんだから……」

「でもさ、まるでそり返っちゃって、ごはんを食べすぎたみたいな恰好じゃないの」

ヒロちゃんの奇抜な表現に、松田さんと私が思わずふき出しました。

「たいしたことないのヨ、名前負けしちゃうからいけないのヨ、強いなんて先入観を持たなきゃ大丈夫よ」

中川さんが興奮した口調で云いました。

中川さんの言うように、いくぶん名前におそれをなしているせいもあるかもしれませんが、その麗華高の勝ちかたもまた美事なものなのでした。

立ち上りからの一気の突き、寄りで、ほとんど勝負をつけてしまい、相手にまるで相撲をさせないのです。私が吉永さんに負けた時みたいに、土俵下へまで突きとばされて転げ落ちるひともおりました。

五対ゼロ。でも彼女たちはそれが当然のような顔つきで、悠々と控え室にもどって行きました。

次々と対戦が進み、次第に私たちの出番が近づくにつれて、勝負のきびしさがひしひしと身に迫ってきて、緊張のために鳥肌立つ思いがします。

さっそうと勝ち名のりを受けるひと—その中には、あの吉永さんもいました。浅ぐろい肌に緑のマワシがよく映えて、ひとまわりも大きくなった全身に自信が漲っているようでした。ムラムラと私の胸に闘志が湧きます。

「さアさア、いよいよ決戦の時、きたるだわヨ。したくしてちょうだい」

榎本さんの声に、キューツと胸が締めつけられるような緊張—そして興奮。

でも、胸はドキドキしていても、ふしぎに不安も起きませんし、そのかわり、吉永さんの勝ち名のりに感じた闘志も消えるような感じなのでした。「思い切ってぶつかるだけ」そう気持ちを整理してしまおうと、胸のドキドキもすこしはおさまって、目の前がチカチカすることもありません。

「テルちゃん、いやに落ちつき払ってるじゃないの」

ヒロちゃんに肩をたたかかれて

「落ち着いてなんかいいわヨ」

「だって、自信満々みたいヨ」

「たのむわヨ、テルちゃん。あんたの一勝はぜったいに当てにしているんだから」

ヒロちゃんの声にふり返った金子さんが、冗談とも本気ともつかない調子でそんなことを言います。

「そんなこと無理だわネエ、相手が強ければ負けるし、弱ければ勝つし…」

小林さんがのんびりした調子で口をはさみ「勝敗は時の運ヨ」

と、半ば小林さん自身に言い聞かせるように

「テルちゃん、堅くならないでヨ。練習の時のようにやればそれでいいのヨ」

と、口をそえてくれます。

練習の時のように…と云っても、それが出来るか出来ないかがまず大問題なのですけれど…。でも、そんなのんびりしたことを云っている小林さん自身も、やはり熱っぽい目をして、顔を紅潮させているのです。昨年の大会を経験し、そして、新聞紙上をかざるような大勝負を演じた小林さん。そんなベテランでもやはりこういう大きな競技には、落ちつき払っているということはむずかしいのでしょう。中川さんだって、金子さんだって、小林さん以上にアガっているにちがいないの

です。

もうむずかしいこと、よけいなことは考えないことにしようと心に誓って、

「思い切ってぶつかるだけだワ」

そつとつぶやいたのが耳に入ったのか

「そうよ、それでいきましようヨ」

松田さんが、私の手をにぎりながら、耳もとでささやきかけました。グッとにぎりかえす手を通して松田さんのファイトが伝わってきて：私と松田さんは目と目を見つめ合ってお互いの健闘を誓い合うのでした。

小林さん、金子さん、中川さんの三年生三人に、松田さんと私。それが、ことしの選手陣なのです。そして補欠は津野さんでした。

一つ残された選手の座をめぐる私たち四人の競争は激しく、部長先生もその決定には大分頭を悩ましたらしく、私たちはみんな期待と不安が半々で、毎日自信と失望が入れかわるのでした。

スゴク調子のいい日があって、津野さんやヒロちゃんをはじめ、松田さんや、三年生の人たちにまで勝ちまくって、

「あんた、いったい何を食べてきたの？」

「ゆうべ、相撲の神様かなんかから教えてもらったんでしよう」

などと、やっかみ半分に驚かれるほど強い日があつて、

「これで選手は決まったようね」

と、マネジャーの榎本さんを安心させる日があるかと思うと、別の日にはまるでダメ。

気のりのしないせいもあつて、何度やっても津野さんに歯が立たず、ヒロちゃんや西田さんにさえコロコロと転がされる始末。

「なにやってるの、あんたッ！ そんないいかげんにやってると水ぶっかけるわヨッ」

と小林さんにどなられて、落胆、失望。がっかりして乱れたマワシさえ締め直す気にもなれない時もありました。そんな有様だったので部長先生から私の名を告げられた時は嬉しいにはちがいないのですけれど何か信じられないような気持ちで、からかわれてるんじゃないかしら？ と心配になったり「ワァ、テルちゃん、うまくやったじゃないの」

と、ヒロちゃんに背中をたたかれても、すぐに言葉が出てこないのです。

「アハハ、うまくやったはないだろう」

ヒロちゃんの言葉に部長先生は笑い出して「オイ、石山、がんばるんだぞ、とくいの突っ張りだ。なんだそんなにポーツとしちゃっ

て」

と、激励されて、ようやく嬉しさが本物になって感じられてきたのでした。

「あたしが推せんしてあげたのよ。テルちゃんの突っ張りは男子級だって……」

小林さんの言葉に、私は真っ赤な顔で、口をモグモグさせてピョコリと頭を下げたのですが、その時、津野さんが淋しそうな顔でパイと横を向いたのが目に入りました。

選手に選ばれることにはかなり自信をもっていた彼女だけに、彼女に対してあまり分のよくなかった私の選ばれたことが不満だったのでしよう。私がああ青いマワシを身につけて意気揚々と練習できるのに、補欠とは云え津野さんは相変わらず汗にまみれた練習用のマワシを締め、中央の土俵を独占する、私たち選手の練習を眺めていなければならぬのです。その面白くない気持ちは、よくわかります。でも私の選ばれたことは、たとえ小林さんの推せんがあったにしろ、やはり実力が認められたからなのだと思います。そう思わなければ部長先生に失礼になってしまうでしょう。そのかわり、うんと練習して、この期待に立派に応えなければならぬ責任もあるわけです。私は、ワクワクする胸をおさえ、自

然にゆるんでくる口もとを意識しながらも、そう決心したのでした。

幸い、私たちの一回戦は、予定どおり（と云っては相手に失礼ですけど）五対〇の完勝でした。

私はとくいの突っ張りがうまく命中して、相手のひとを寄せつけず、自分ながら快心の勝利だと思いました。松田さんも、ちょっとネバラれましたけれど、がっぷりの右四つから、両マワシを十分に引きつけて吊りぎみに寄り切り、三年生のひとたちもそれぞれ持ち味を発揮してあぶなげのない勝ちでした。

やがて一回戦は終了。午後の二回戦は、またあらためて抽選が行なわれ、そこで相手校が決まるのでした。

そして、榎本さんの引き当てた二回戦の対戦相手は、なんとF高校だったのです。

吉永さんの勝ち名乗りをうける姿が目につかび、そして頭の中がカッと燃えるような興奮……。F高がもし、一回戦の時のとおりの順序でメンバーを組んでいれば、最初に土俵へ上ることになっている私は、吉永さんと対戦することになっているのです。

湧き上がるファイトと興奮。今日までのいろんな出来ごとが頭の中にクルクルと渦巻い

て、私は、まわりの騒がしさも耳にはいらずに、少しの間でしたけれど、放心したように立ちつくしていたのです。

「さあ、さあ、さあ、したくをしてちょうだい。こんどは二番目だから直ぐ出番よ」

榎本さんの、みんなを静める声に、ハッと自分を取り戻して、…でも興奮は直ぐにはおさまらず、顔の紅くなっているのがよくわかるのでした。

「さあ、テルちゃん、マワシ、マワシ」

ヒロちゃんにうながされて、はおっていたコートを脱ぎ捨てます。興奮にほてった肌には、控え室の熱っぽい空気さえも、気持ちよく感じられます。

ひろげたマワシの端にちょっとキスをし、締め込もうとして、グッと腰を落とします。

「ねえ…」

と、ヒロちゃんが、いやに改った顔つきで声をかけました。

「……？」

ヒロちゃんが、改った顔つきになって何か云う時は、たいていロクなことを云わないのですけれど、こんな中途半ばな恰好をしている時に、何を云い出すのだろうと、ちょっと不安になります。するとヒロちゃんは、

「あんた、コーラはもういいの？」
と妙なことを云い出すのでした。

「コーラ？」

「コーラよ、コーオーラッ」

へんな節をつけて云うヒロちゃんの言葉にやっと気がついた私はドギマギして、そして紅くなって、ヒロちゃんをにらみました。

「スカッ」と

というコーラのコマージュルをもじって、私たちはトイレへ行くことをコーラと呼んでいたのです。

「なにを云い出すの、こんな時に…」

「でも、きよ年マワシをつけてからトイレに行きたくなったなんて云ったじゃないの」

「あれは、あなたが云い出したんじゃないのッ」

きよ年の新人戦の時を思い出して、すこし不愉快になった私は思わず声がとがります。

「アハハ、じょうだんヨ、あんたがのぼせてるようだったから、ちょっとからかってみたのヨ」

「じょうだんじゃないワ、こんな時に」

こんなことで腹が立つのも、出番をひかえて神経がイライラしているせいもあるのでしょうが、それも榎本さんの

「テルちゃんたち、何をグズグズしてるの、ウォーミングもできなくなるわヨッ、いそいで、いそいでッ」

という声にストップ。

マワシをつけた私たちは、庭へ出て軽く四股をふんで体をならしました。

相変わらず足の高く上がる見事な四股をふむ小林さんたち、ふだんの練習の時とは別人みtainなせいかな感じでファイトが全身に満ちあふれているようでした。ただ、松田さんが何となくだるそうな感じで、いつもの精彩が見られないようなのが変った点でした。

二回戦を迎えた会場は、午前中にもまして熱がはいっているようでした。

早くもマワシをつけ、コートををはおっただけの後の出番のひとたちが、選手席から鋭い視線を土俵へ注いでいます。前田さんの堂々とした姿体が群を抜いて光っています。

型どおり、土俵をはさんで両軍一礼、コートを脱ぐひまもなく私の名が呼び上げられます。F高のトップは…やっぱり、吉永さん。

さあ、いよいよ決戦です。

私にとって忘れることの出来ないあの敗戦の苦い味を、一挙にそぐべき瞬間が、こんなにも早く訪れてこようとは…。

唇をぐっと噛みしめて腰を上げた私は、胸いっぱい深く息を吸い込むと、グイと前ミツを押し下げ、それから目を閉じて気持を落ちつけようと努力しました。

でも、…これが興奮せずにいられるでしょうか、胸のどろきはのどもとまでつき上げて爆発しそうなくらい激しく、顔は火のように熱くなっているのがわかるのです。

△落ちつけ、落ちつけ▽

△そんなのにのぼせていると、またこの前みたいなことになるわヨ▽

自分で自分に云い聞かせますと、別のもうひとりの私が答えます。

△だいじょうぶヨ、のぼせてるんじゃないでファイトを燃やしているんだから▽

△このファイトでぶつかっていけば、吉永さんなんかには負けるもんですか▽

土俵へ上る足の裏に、あの時とちがって、しっかりと土の固さが感じられ、私はそれだけでも落ちつきを知ることが出来たと思うのでした。

向き合って一礼。チリを切る時も、私は思いきり見はった目で吉永さんを見つめてやりました。視線が合ったとたん、吉永さんの表情に一瞬変化が走り、そして彼女はチラ…と



ファイトに押されたのです。

土俵中央に進んで再び、そんな姿勢で向かい合う—その時も吉永さんは視線を私の胸のあたりに向けたきりでした。

私は、吉永さんの、ややこわばっている顔を見つめ、そこからおもむろに視線を下に移して行きました。

去年の最初の出会いの時にくらべますと、ひとまわり大きくなったような感じで、あの時はやや淋しかった胸のふくらみも、そのつぼみの重みを増し、相変らずたるみのない張り切ったおなかの中央に、定規で突いたようなおヘソが軽く一の字を描き、キリリと締め込んだ真新しい緑色のマワシのあでやかさ…敵ながら美ごとな、いでたちです。

△負けるもんですか▽

もう一度、自分に云い聞かせて仕切りに入ります。

立ち合いは、ふたりともきれいでした。早目につっかかったつもりだったのですけれど吉永さんも、同じような考えだったらしく殆んど同時の立ち合い。けれども、私のファイトの方がやや勝ったらしく、思い切って突っ張った右手に十分な手ごたえがありました。

ちよっと後退する吉永さん。

△しめたッ▽

私は、もう何も頭に浮かびませんでした。ただ、右手、左手と力いっぱい突っ張り…吉永さんも、私の腕をはねのけて、なんとか飛びこもうとしますが、最初の一発が利いてやや体勢が浮いてしまっているのです。そのスキがつかめず、私の追撃にタジタジと後退、

きかん気の顔にも、はっきりと焦りの色が見られました。

土俵のまわりの歓声はおそらくかなりにぎやかなものだったのでしようが、私の耳には全く感じませんでした。私は頭の中が火のように熱いものでいっぱいになりながらも、目だけは吸いつくように吉永さんを見つめ、両方の腕を夢中で動かしていました。

防戦一方の吉永さんは、いよいよ体勢が浮いて、私の突っ張りはおもしろいように彼女の肩に、胸にさく裂します。快よい手応え。

そして、彼女のかがとは、とうとう土俵のタワラにかかりました。

土俵の下で、顔をしかめているF高の選手たちの表情もはっきりと見えました。

△勝ったワ！ 勝ったワ▽

私は、体中でうわごとのように、その言葉を叫びながらなおも突き進みました。いや突き進もうとしたのでした。あと一突き……

けれども、どうしたというのでしょうか。

足が急に石のように重くなって、ヒザがガクガクして、ちっとも力が入らないのです。

ふみ出す足に土俵の感触も消えて、どっちの足が前なのかわからなくなっていました。体が土俵へ沈んでゆくような気持ち。

△あと一突き！▽

私の目の前には、土俵ぎわまで追いつめられて、半ばあきらめたような、けれども、あのよく光る目でさいごまでネバル吉永さんの顔が、大うつしになって見えています。

△さいごのとどめだわッ▽

もう、足の進まないことも、体勢の崩れるのも忘れて、からだ中の重みを全部それにかけての両手突き！ 吉永さんにもたれかかるようなつもりで、さいごの突進。

吉永さんの目がキラッと光ったのがわかったようでした。そして、突き出した腕をパツと払われて……彼女の緑色のマワシがチラリと右の方へ動きました。

バランスを失って、アツと思った時には、私の両手はバツタリと土俵の土をつかんでいたのです。

△シマッタ、負けたかしら▽

火のようだった頭の中が、一瞬真っ暗な冷たさに変わり、私はチラリと横目で吉永さんの方をうかがいました。彼女の足はたしかに土俵を割っていますけれど、彼女の表情は勝利の喜びに輝き、そして土俵の下でF高の選手たちも……

私は再び敗退したのでした。あと一步まで

追いつめて、九十九パーセント勝利をにぎったというのに……

私は、ぼうぜんとして土俵を下りました。でも、涙は出ませんでした。

くやしいにはちがいないのですけれど、相手を追いつめて……勝負には敗れたけれど、あの相撲は誰が見ても、私の一方的なものだったということがわかるはず。そんな気持ち、わずかになぐさめになるのです。

「テルちゃん、残念だったわね。ちょっと負いすぎネ」

「でも、あんたの突っ張りに麗華のひとたちがびっくりしてたようだったわヨ」

榎本さんや、ヒロちゃんの話しかけるのへ軽くうなずきながら、私は次に土俵へ上った松田さんの後ろ姿を追っていました。

淋しいけれど、何となくサバサバした気持ち……

ウォーミングのとき、ふと感じたとおり、松田さんは、不調でした。どこか体の具合が悪いのを、がまんしていたらしいのです。一回戦の時も彼女のふだんに似ずサエない取り口でしたが、この時も、ほとんど相手のペースで戦って、四つに組んでからの巻きかえも相手に十分のもろさしを許してしまい、高

々と吊り上げられてしまったのでした。

早くも二敗。私たちの準決勝進出はあぶなくなってきました。

この苦境に、小林さんは気負って立ち上がりました。必勝の期待を背負われた小林さんは、顔を紅潮させ、唇を噛みしめて土俵へ上りました。でも、その気負いが彼女を堅くさせ、どこかギコチない動作にさせているのでした。

相手のひとは身長こそ小林さんよりやや高いくらいですけど、向かい合ったところを見ますと、ふたまわりほども細い感じですよ。色白で、やさしそうな顔立ちのちよっと気弱そうな感じ。でも名だたるF高の選手です。決して、ゆだんはできません。

立ち上がり、相手のひとは頭から突っ込んできました。立ちおくれぎみだった小林さんは、この突っ込みをまともに受けてしまい、ちよっとのけぞりました。でも、直ぐ重い腰でこたえたと反撃に出ました。そのとたん、それを待っていたらしい相手は、左へ変わりながら強烈な引きおとし、小林さんの大きな体がグラツとのめり、私たちは思わずアッと悲鳴をあげました。押し返すではなを見事に交わされて、小林さんは、あやうく左手で土

俵の砂を掃きそうになりましたが、辛うじて残りました。私たちのどよめきは、安心のため息に変わりましたが、体勢を立て直すいとまもなく、再び突っ込んできた相手に押しまわられて、小林さんは大苦戦。このへんは完全に向こうのペースにはまった感じで、私たちはハラハラして見守るばかり、応援の声も出ない有様です。ヒロちゃんはお祈りでもする時のように胸の前で両手を合わせ、松田さんは何のおまじないのつもりなのか、両手で横マワシのあたりをしきりになでまわし、榎本さんは、コブシを握りしめ、唇を噛んで、ジツと土俵上をにらんでいます。

この勝負、組んでマワシをひき合っては、とても勝ちめはないとみて相手は動きまわって小林さんの体勢を乱そうという戦法らしく押し込んで変わり、また突っ張ってはひくといった、徹底的なゲリラ戦で小林さんを悩まします。そのたびに小林さんの大きな体がグラリ、グラリと傾き、そのたびごとに、土俵下の相手側からは歓声が湧き、私たちの方からは悲鳴が上がるのでした。

けれども、猛練習できたえ上げた小林さんの足腰はこの苦境をよく耐えて、土俵ぎわまで後退させられたところで、何とか相手をつ

かまえることに成功したのでした。

手に汗をにぎりながら見つめていた私たちの間からも、ようやくひと安心のため息がもれます。でも、つかまえたとは云っても、向こうはもろ差しの有利な体勢。小林さんは左手がマワシをとれたものの右手は小手にまいただけです。それでも動きのぶくなったのに乗じて土俵中央に戻ることができたのでした。やや持久戦の態勢。小林さんはマワシのとれない右を巻き替えようとし、相手のひとは逆に小林さんの左の上手を切ろうとしますが、両方とも不成功。ふたりともやや疲れた様子です。私たちの相撲としてはめずらしく激しい、そして長い勝負—小林さんの汗にぬれた真っ赤な顔に髪がはりつき、おなかが大きく波を打っています。私が堅く締め込んであげたマワシもゆるんで、一重マワシがおなかの上に伸び、前の端がはずれて、組み合ったふたりのからだの間にゆれていました。

けれども、ここまでくれば体力に優れた小林さんの方が有利。ようやく小林さんの七十キロの体重がジリジリとものを云い始めました。相手の動きが止まったと見た小林さんは、十分に引きつけた左上手から強引な上手投げ。体重のない悲しさか、これが意外に利

いて、相手のひとは大きく後退、追撃する小林さんを下手投げの打ち返して防ぎます。でも、これは、せっかくひいている一重マワシが伸びているのではと効果はなく、かえって自分から体勢を崩してよろめきました。すかさず小林さんの寄り……。それを俵に両足をかけてけんめいにがんばる相手のひとの驚くほどのねばり……。両方の土俵下からいっせいに声援がとび、場内も歓声につつまれました。

けれども、さすがに小林さんも疲れたのでしょうか、一息には寄り切れず、いったん寄りを休むと、今度は十分に腰を落として吊りに出ようとしていました。相手のひとの両方の下手はほとんど遊んでいて役に立たず、「ヨシッ、勝った！」私たちが歓声を上げたとき、どうしたことでしょう、審判の「待った」がかかったのです。

せっかく必勝の体勢に入ったというのに、小林さんは明らかに不満な様子。審判はそれにかまわず、一言二言小林さんに注意。どうやらゆるんだマワシの締め直しを命じたようでした。こんな場合、プロのお相撲さんは、取り組んだ形のままで締め直すのですけれど私たちの場合は、いちいち土俵をおりて締め

直さなければならぬのです。ですからこんな場合、相手を追い詰めて立ち直るゆとりを与えず攻めに出ようとしていた小林さんにはスゴク不利になります。だいいち、動きが止まったわけではないのですから、あそこでストップをかけた審判は、何と云っても不手ぎわです。私たちは、いっせいに不平を鳴らしました。

「あんなとこで止めるなんて……」

土俵を下りてきた小林さんは、汗びっしょり、激しい息づかいで、ほんとうに恨めしうでした。

盛り上がった肩が大きく上下し、顔じゅうの汗がのど元を伝って乳房の谷間を流れ下ってゆきます。ズリ上がったマワシにこすれたおなかのあたりが赤く、そのあたりも波を打って苦しい戦いを告げていました。

「あの審判、シロウトだワ」

「そうよ、もう完全に勝負がきまるってのに止めたりするんだから」

「抗議ヨ、ゼツタイ抗議！」

私たちは、小林さんを囲んで、汗をふいてあげたり、すっかりゆるんだマワシを締め直してあげたりしながら、口口に不公平さを非難するのです。

「あまりキツク締めない方がいいわヨ、直き伸びてゆるんじやった方が有利だから……」

中川さんが、小声で注意しました。

「ユルフン作戦」の元祖らしい彼女の知恵です。

「いいわヨ、どうせ直ぐ勝負つけちゃうんだから。テルちゃん、キツクしてもいいわヨ」小林さんは、ちょっと捨てバチな言い方でマワシを手に行っている私に言いました。

締め直すといっても、せいぜい上の二巻き分くらいを直し、垂れ下がった前の端を折り込んで、ていさいを整えるくらいなのです。そして、私がそうやって締め直している間中ヒロちゃんと津野さんが、前と後ろから、小林さんの分厚い背中と胸の汗をぬぐってあげているのです。

少しはなれたところから、一年生の人たちが目ばたきもせずこの光景を見つめています。勝負のきびしさに、すっかり圧倒されたようでした。

やがて、戦闘再開。もどおりに組み合っただふたりですけれど、マワシを締め直したおかげで、相手のひとの両下手は十分な力を発揮できるようになり、この有利、不利はだれの目にも、はっきりしていました。

一刻のマニア装女



於秋呂風井

秋、というよりも……

私にとってはまたもや、待望久しの感がする結婚シーズンの到来でございます。

春同様、この季節の到来は、私には実に楽しいものになるのです。

いや、待望久しと言ったって別に私は、結婚式場なんかをオッ建て縁結びの神様のスネ

花

嫁

を噛じったりしているわけでもなく、ましてや私自身が、そのシーズンのどさくさにまぎれてもう一度結婚式を挙げようなんて、そんな太い簡でいるわけでもない。

ただ単に、あの、純白のウエディング・ドレスにつつまれた花嫁を、華麗にして清楚、豪華にして優美なる花嫁のすがたを、また、

あちこち
彼処此処で、堪能し得ないまでもよく観られるからでした。

むろん真夏や真冬が、ウエディング・ドレスの花嫁が皆無というわけじゃない、てことはよくわかっておりますが、近頃はてんで結婚式なんてシャレたものからはお呼びが掛からない私としては、やはり花嫁さんを気易く観たいとなればこの春と秋の季節のほうが俄然、そのチャンスが多いということになるのであります。それにたとえ私の住む周囲で真冬の結婚式があったとしても、此処が雪国ではない以上あの情緒的ですからある結婚風景はのぞむべくもなく、また余りピーンときたものじゃありません。真夏にしたって、当世はどう進化したのか退化したのか知らないけれど海底結婚式やら突っ走る車の中での結婚式——本人たちは多分イキがってやってらっしゃるんだらうけれど、いみじくも習慣には極く弱い性であります私ではサッパリ。

サテ、と言ってそのシーズンになっても私は、手あたり次第に……じゃなかった見あたり次第に、他人の結婚式場へノコノコ入りこんでドサクサにまぎれて料理を盗み喰いしながら花嫁さんを「観賞」する、なんて苔むした的な心臓は残念ながら持ち合わせていないと

きているから——

せいぜい出来得ることと言えよ。

吉日のデパートの結婚式場とか、巷のナン
トカ殿とか、または近くの神社の前をうろち
よろしういて、到着した自動車からいかに
それらしく緊張？ した風情で降り立つ花嫁
さんやら、やっと式を終えて……と思ったら
もう青味のとれた畳みたいな感じでイヤに堂
々と出て来る花嫁さんなどを、見るとはなし
に見ないとはなしに？ 凝っと窺い「観る」
ぐらいが関の山。

サテ……それまでにして、他人の花嫁さん
を見て何になるというのか？

いい年令^{とし}ひっからげて、今更^{よそ}他所様の花嫁
さんでもあるまい。現に、お前もその結婚式
とやらは、たったの一回きりではあったけれ
ど、ちゃんと経験させていたでいるでは
ないか——。ところが、ドッコイ。

私は、なにも、その他人の花嫁さんを横取
りしたくなって窺ったり、また、

「こりゃ、いいぞオ、綺麗だ！」

「ああ、こりゃ駄目だ、まるで宇宙人が、シ
ーツ被って出て来たみたい！」

なんて、無責任な批評を楽しむだけが目的
でこんなことをやっているわけではありませ

ん。……そんな批評が、本気で出来るぐらい
なら、時折りテレビの音楽番組に登場なさる
審査員とか称する先生方でも目指して勉強で
もしていますワイナ。

私が「観る」のは、ひと言でいってその花
嫁の「本体」なんかじゃなく「外味」であり
ます。

つまり、花嫁さんの顔なんか？ どうでも
よくて、その花嫁の着ているウエディング・
ドレス……姿を観るのであります、はい。

これが、日頃から観たくて観たくてたまら
ない。自分で言うのもおかしいけれど、余程
好きなんでしょうな。

そして附記すれば、このウエディング・ド
レスの花嫁に関するかぎり、常日頃から雑誌
新聞の切抜きはもちろんのこと、目についた
ものはそれこそ手あたり次第に本屋さんから
買ってきて、我が物として保蔵している仕末
です。いまではこれも積もり積もって、扇風
機の空き段^あボール函に約九分目。

それに。

私の過去、遠影なる結婚式においては、コ
レマタ残念至極にも現在の古女房は、ウエデ
ィング・ドレスではなかったのであります。
女房、その時分からアメリカ大陸のサボテ

ンみたいな感じだったのに、何をどう間違え
たのか、結婚式には日本古来の角^{つの}かくし——
金欄緞子の帯に白地の打掛けといったデザイ
ンで登場したもんではありません……

サテ、さすれば尚更——今更に、オノレに
全然関係のない他人の「花」のウエディング
・ドレス姿を熟視する理由は？

ほかでもありません、この花嫁すがたを、
このウエディング・ドレスを、わが秘めたる
「趣味」のなかに、是が非でも「活かして」
みたくてたまらなかつたに過ぎません。

女性^{ひと}によっては、その女性が最高に美しく
見えるというこの花嫁すがた。その花婿、そ
の列席者の人々をして、

「ううむ！ この女が、こんなに別嬪になる
とは思ひも及ばなかつた！」

と思わず讃嘆せしめるというこの花嫁姿。
ならばこそ——私は是が非にでも此の「す
がた」を、わがものとしてその「趣味」の世
界で実現させてみたかったのであります。

熱望が、自意識なくとも次第に蓄積されて
きた熱望が、ついには雑誌新聞の切り抜きを
ながめているだけでは飽き足りなくさせて、
まさしく「現場」である結婚式場前にまでと
私を駆り立てたに他ならなかつたのでありま

した。

——私の趣味。はい、それは例のごとく、一向に相も変らぬ「女装」のことです。

あ、失礼しました、最初から好き放題を書くより、これを早く書かねばならなかったのです……。

で私は、その一夜を、このウェディング・ドレスの女装というわけで楽しく過ごす。

「架空のひと」の花嫁となって、いままで着たこともなかった、純白の服につつまれて、「女性」として最高に熱っぽくなる、嬉しい一夜を過ごす……。

ああ、これは考えただけでも、女装の夜としていちばん楽しいことではありませんか。

思っただけでも胸がワクワクします。

もちろん、私ごときが如何にガンバッテみたところで、とてもそんな清楚とか優美とかいった感じの出せよう筈がないだろう、ってことは誰よりも私自身がよくわきまえております。せいぜい、衣裳のほうだけでも、ちよつとでも優雅に見え華麗に見えるような、そんなドレスをつくることにして私自身を納得させるよりほかないでしょう。

また、その衣裳を着てみたところで……小柄小肥りと言えば体裁がいいけど、実は

甚だスタイルいびつなる肉体を有する私ともなれば、ハテそんな衣裳づくりの苦心も結果としてどれほどの効果やあらん——と、まずはそのほうから心配になってくるのです。

まるで、さまよい出た、宇宙人ならぬ豚がシート被っているような、そんな「危険」が大いにあり、とせねばならなかったのです。

しかしです。

女性を最高に美しくみせるというこの衣裳の實際を、はじめに書きましたように色々に見学？ してまいりました私は——、悪戦苦闘、ただし楽しみも大いに味わいつつ、今日までエッサッサと女装をつづけてきた手前、「——さればとて、ただ指をくわえて世のホンモノの花嫁を物欲しげに見てばかりは居られるか」

という気持。また、

「なアに、ひろい世間にや、偶には何かたまがシート被ったような、そんな花嫁だってあらうな」

という、多分にヤケツぱち的、不遜ともいふべき判断の末、私はとうとう、やがてくる実地見学の秋も俟たずしてここに突如、その準備のために猛然？ として立ちあがったのであります。

私の女装。それは……春くれば花柄の服、あかるく、かるやかな服を選んで着ることにしています。

すると、いっそう気持も若やいで——

ときには、なぜか凝つとはして居られず、出まかせのメロディをくちずさみながら鏡の前に立つと、モード雑誌で空覧えのそのポーズのいろいろを、思いつきり派手に、そして刻のずいぶん経つのも忘れて、夢中で真似しはじめることもあります。

と思えば、ときにはブラウスなどひっぱりだして、これをこれ以上、どのようにして可愛らしく美しく飾ってやろうかと投げ首思案もします。そして、やがて考えがきまると心も浮きたち、窓辺の椅子にもたれて……熱心にフリルなどの手縫いをはじめます。

夏くれば。

あるときは着ていたミニ・ワンピースなど景気よく脱ぎすてて、みるもすさまじい真紅の水着すがたとなって「黄色い」掛け声よろしく、狭い部屋いっぱい躍動を開始するのです。

エア・パットの「豊胸」が、ゆさゆさ。ぴっちり水着につつまれたお臀がぷりんぷりん。



ほんに快適な気分が、すぐさまに、その躍動を狂乱まがいの美容体操と化さしめてしまふのでした。――

秋ともなれば。

フトもの佗びしげな周囲に気づいた私は、これまで滅多に腕を通すこともなかった和服の函を、ホコリ吹き吹きひっぱり出すこともありました。

そして顔化粧も、つとめておとなしく？ まア何とかかんとかして、見た眼もなにやら佗びしげな「愁い」のいろにと刷いた――つもりで。髪も、本当はいちばん好きだったアップの形にきれいに梳けた――つもりで。そして、またもや窓辺にチンマリ？ 坐っ

て、夜空の果て、風に追われて儚くながれゆく薄雲をいつまでも、いつまでもジツとしてみつめているのでした。

冬になれば。

外出など、する機会もないのに。いえ、あっても肝心の度胸がひとかけらもないくせに……

一張羅のオーバー・コートをやわやわひっぱり出し、今度は、下に着る長袖ワンピースの色や柄が、そのオーバー・コートに似合っているかどうかを鏡とにらめっこ。ありもしない服飾感覚をやみくもにささけ立たせようとするのです。

或るときは、「これでいい」と安心。

或るときは、「全然、駄目！」と悲しむ。

おなじワンピースを着ていても、その時その時でホッとしたり悩んだり千変万化。まったく感覚ゼロとはこのことかしら……

かくて。

部屋の四囲に貼りつけた大鏡が、その時折りの私の女装すがたをジツと映しつ

づけて間もなく春夏秋冬、二めぐり目となりました。

飽くことも知らずに。

ひとり、ひそかに閉じこもって。

気分のおもむくままに、空想の相手にむかって、煽々？ と語りかけたりする時もあるば、ときには鏡のなかの「女」の立居振舞にしばれるような陶酔をおぼえたり、いろいろとそれは、楽しい楽しい私の夢の世界、女装の二年間でございました。

そしてこの、全くの自己流儀で世間知らずでしかない私の女装、その夢の世界は、現今では成り行きのままに――自然のかたちで、私の日常のなかにすっかりと融合を終えていくことも事実だったのです。

街に灯がともり……

大通りを往き交う洪水のようだった自動車のひびきが、やや鳴りをひそめたところになってから……

私は、私だけの此の小さな夢の世界を、閉めきった奥の部屋のなかでこっそりとひらいてきました。

私だけの、だアれも知らない夢が、その夜もまた悦びとちよっぴりの不安と、そして身もこころも、やがて震えてくるような陶酔の

「幕」をそっとしずかに上げてくれるのを、まさしく夢うつつに感じとりながら今日までを過ごしてまいったのです……

そしていま、私は。

女装を好むひとなら一度はきつと、ユメに見ることでありましょう花嫁すがたを、この私だけの世界のなかに実現させようとしていました。

なるほど、考えてみれば過去に一度だけ、「花嫁」のそれらしき姿をした私の写真を本誌に掲載していただいております。

ただし、それはまったくの「それらしき」すがた——女装ぶりでしかありません。

こんなものを花嫁すがたというには余りにもインチキ。「花嫁でございますよ」とは、どうにもこうにもノドチンコがこそばゆくて言えたものじゃない。

と言って、私は別段、「それでは今回こそは！」などといった、ワザとらしい気負いでもって仕度に取り掛かったのではない、ということを加筆しておきます。いまはじめて、女装する楽しみおぼえてからいまはじめて、「花嫁」になるのだという至って鮮烈な気持ちで、実の女性が嫁ぎゆく日の遠からぬ心境は斯くもあらんかとばかりに、「素直」に胸お

どらせ、頬紅く染めつつ仕度に取り掛かったということをお記しておきます。

いまでは物怖じするどころか、平氣の平左で、デパートなどへ出掛けては婦人服売場をほっつきまわったり、氣に入った服地がみつければ、大きな顔で女店員さんに、「これ……色彩ちがいで同じ布地のもの、ほかにありますか？」

とか、

「ワンピース、それもテント・ルックとやらにするんですが、七分袖にして、裾に同じ布地でこれ……くらいのフリルをつけるとすると、大体何メートルくらい要りますかネ」などと、自分ながら随分と馴れたものだと思ひながら、買ってくるのです。

いまではこの買物も楽しみのひとつになっております。

そして例えそのとき、氣に入った豪華な服地が其処にあったとしても、そこは一番、私はグツと我慢して、脳裡にえがいてきたデザインのあれこれをすぐさま思い出して、なるべくは数枚の服地を買うように——つまりは質より量の文句を實踐して、ふところの許すだけの数着分を購ってしまうのでした。

今回のウエディング・ドレスをつくるために出掛けたときも、やはりそうでした。

貧乏性、底浅い女装経験を丸だしに、安物布地ばかり二着分を買ってしまったことにデパートを出てから気づいたのです。

自分のことながら、これを「ちっぽけな趣味」だと、かんがえている所以だと申せましょう。——かくて今回も私は、布地を持って帰ると早速その型紙作りから裁断、部分的なしつけ縫いを悪戦苦闘で経て、ようやくミシンにかじりついたのです。

あかるい部屋で。

しずかな、私の小さな「城」で。

回りをいっばいに散らかしながら。

だれに気兼ねをすることもなく、思いのままに、私は私だけの、そのちっぽけな夢想の世界にいつしか浸りつつ……

ミシンにむかって、「花嫁の女装へのリズム」を踏みはじめたのでした。

しかし、これはいつものことなのですが、二週間もかけてようやく仕立てあげたそのドレスは、やっぱり初めに私が考えていた感じとは違ったドレスに化けていたのが口惜しかった。

自分でデザインし、それで納得して縫いは

じめた服だというのにいつも縫っているうちに飽き足りなくなり、思いつくままにデザインを変更してしまうのですが、やはりこの時もそうでした。なんとも不様な恰好で、そのドレスはハンガーにぶら下がったのでした。そしてその服は、不遠慮にもつめたく私を見くだしながら、ゆらゆらと嘲笑いはじめたのです……

(どう? こんなあたしでも着れる?)

(着ても、鏡をのぞく度胸がおあり?)

ドレスは、私に挑みかかるのです。

が、しかし、そこは神経の粗いのを身の上とする私のこと、

(ふん、着るさ……着れるさ。お前はなににも知らないだろうけど、私って人間はね、どんな服を着たって、よく似合うように出来ている……女、なんだよ!)

などと鼻にシワを寄せ、唇をゆがめて精いっぱいに見栄を、意地を張っているうちに、いつにない苦勞をして仕立てあげた故か、そのドレスにいつしか愛着めいたものさえ胸にあふれてきて……

知らないうちに、私は陽気な口笛さえ吹いていたのでした。

その翌夜。

私は早速、「花嫁」となりました。

鏡台にむかい、ながい時間をかけて丹念に化粧を済ませると、愛用のコルセットで、いつもより「肉体」をつよく締めつけました。

が、新品でないのは此のコルセットだけであとはパットにしるパンティにしる、みんなこの夜のためにと用意しておいた、私の女装用としては極上の部に入るだろうものを、着けました。

ドレスを縫ったついでに、と言ったらおかしいですが、一応、ペチコートも恰好だけながらも新しく作ってあります。

こうして。

やがて私は、ふと指先もふるえがちになるのを意識しながら、ドレスを着はじめます。

ゆっくりと……わざとゆっくりと背中のアスナーを閉めて、鉤ホックを掛けます。

すると、首のまわりがびっちりつまって、

一瞬「花嫁」の気が張りました。

うつむくと、胸のふくらみからすこし締まって、そこからゆるく、ながれるようにひろがる長い裾。とても、ミニ・ワンピースなどでは味わえぬ感じではいいです。いま「正装のドレス」を着ている? というよろこび

が、徐々に胸を満たしはじめます。

私は、鏡台から気に入りの香水を取って、つけました。

ヘッド・ドレスをしずかに被ぶって、そのとき頬に触れたチュールのやわらかさに何故ともなく甘々しい気持になりながら、手袋をしました。

そして私は、長い裾に馴れていない、いかにも頼りなげな足どりで、ゆらゆらと鏡の前へとすすみました。

胸が、よりときめいて、ちゃちなクーラーなどすっかり利き目がなほほど、全身が熱くなっていったのはそのときでした。

鏡には——なんとも奇妙な、緊張した表情の「花嫁」が突っ立っておりました。それはぎこちなさを、露骨なまでにハッキリと見せていたのでした。

私は大きな吐息をつき、それから、無理に取ってつけたようなほえみで、鏡のなかの「花嫁」にウィンクを送っていました。

すると、他には誰も居る筈がないこの部屋なのに、私は不意に周囲から注がれる無数の「視線」を感じ取ったのです。

無言で、肩をならべて、凝っと私をみつめているたくさんの眼、眼、眼……



その不自然さ、ぎこちなさ過ぎる姿態だけはどうにもなりません。

周囲の、みえない視線が、そのとき一様に嘲笑いはじめた——ように思えて、余計に身体が火照り、次のポーズのことが、さっぱり思い出せません。

だけど私は、強引に、大仰に、ただ夢中になって身振り手振りをつづけておりました。

——と。

私は思わず顔を伏せてしまい、はげしく動悸を打ちはじめた胸を押えました。こうして、身の置き処もないような、そんな羞恥と怖れの時間が——どれほど過ぎたでしょうか。

やがて私は、それら「無数の視線」に堪えやらぬままに強いて顔をあげ、みずからを叱咤すると正面をみつめて、右の掌を頬のあたりに、左足をそっとうしろへひいてポーズをとりました。

いつかみた女性誌のグラビヤにあった、花嫁モデルのポーズの真似であったのです。でも、精いっぱい鏡のなかの「花嫁」と一体となろうとした私だったけれど、やはり

な悦びにあふれて、ふらふらと、後方の鏡の前の椅子へ、くずれるようにして腰をおろしていました。

見ると、鏡のなかの「花嫁」も、もうすっかり上気した様子で、それは臙に、陽炎のように揺らいで見えるのでした。

やがて。いくら顔の火照りがうすらいでいったとき、私の目のはしに映ったのは卓上のブーケでした。

私はしなやかに腕を伸ばして、その布製のブライダル・ブーケをとりました。

胸もとに抱くようにして持つと、正面にむかって、今度はウンとお澄ましをやったのけました。

（——記念写真？ あ、そうだわ。花嫁は記念写真を撮るときに、よくこんなポーズをとるものだわ）

そのころになると、いつものように、私はもう「女装をしているのだ」という意識は消えていきます。

私は本当に——本当に自分が花嫁になりきった気持で、いわば一種厳粛な気持にすらなつて、正面を瞬きもしないで視つづけていました。

その強引さが物を言ったのかどうか、そんなことをつづけているうちに、私は周囲の視線もわすれて……正面の鏡のなかの「花嫁」が……世の例にもれず何と愛らしく、美しい女性に見えてきたことでありましょうか！

こうなると私はもう、制する意志は持たない。全身を、妖しいよろこびと陶醉に打ちふるわせはじめたのです。

ああ、これはまアなんと甘ったるく、そして底知れない妖しい悦びでしょう、陶醉でしょう。

目の前が、まるでキラキラと七色の光りの金の粉でいっぱいのような……

私は、立っているのも苦痛のような、そんな

するとまた、先刻とおなじような錯覚が、幻覚が私に起こりはじめたのです。

このとき正面に見える「花嫁」の横に、薄ボンヤリとではあるけれど、いかにもこの晴れの場の若者然としてキリリと立つ「花婿」のすがたが、浮かんで見えたのです。

純情からくる羞らいをただよわせながらもこの「一生一度の晴れの場」に随分と気負った表情で、その「花婿」はあらわれてきたのです。

——錯乱を意識しない錯乱のなかに、このときまたも私たちに浴びせられてきたのは、周囲からの「フラッシュの閃光」でした。

同時に聞えてきたのは、遠く天上から、奏でられてくるような、「ウエディング・マーチ」でした。

私は、夢うつつにも、精いっぱい微笑を浮かべながら、身近く寄り添っていてくれる「花婿」のほうを見あげて、低声で、はずかしいのを我慢しながら「なにかしら」を話しかけていました。「花婿」は、その私の話し掛けに、ニッコリとうなずいてくれました。

そしてやがて「フラッシュの光り」がとぎれたとき、その「花婿」はしずかに——この可憐な？「花嫁」の前にまわってきて、やさ

しく手をとりながらそっと身をかがめて——しかし熱っぽい、燃えるような口づけをするのでした……

私は、われにかえりました。

漸く、自分がいま女装をしているという、つめたい現実にかえりました。

醒めてみると、もちろん「花婿」のすがたなど、うたかたの彼方です。

私は鏡のなかの「花嫁」に、ちいさく舌をだしてわらいました。

その自嘲にも似た気持の底に、花嫁にはなってみただけ、今の悦びや陶醉は、すべてが「女装という虚無態」の生じた泡沫に過ぎなかったのだ、ということをつめたく感じておりました。

しかし、空しい現実にくらべて、この女装という「虚無」が、私にもたらす楽しさ、幸福感はどうでしょう。私は、できることならいつまでも、その虚無の世界に浮遊していたかった。この身を融けこませていたかった。が、こうなれば、仕方ありません。

一度現実にもどってしまったら、いますぐにトンボ返りができるような私ではなかったのです。

私のそれからは、やはりいつものように、不様な恰好……つめたい現実を象徴しているようなカメラを相手にでもして、「遊ぶ」よりほかなかったのです。

——部屋の隅にあるカメラ。

それはもうストロボも三脚も付けてありました。二個しかない照明ライトも大層に据え付けてありました。

そして遊ぶとなれば、私は、其処へ行ってもう一度、いつでも撮れるように点検して、自写すればよいだけでした。

女装したときは——

私は大抵このカメラの厄介になっていました。このカメラは、ときには寒気のするような「醜女」を、しかしときには嬉しくなるような「美女」を、今日までずっと写しつけてきてくれたのです。

が、カメラには悪いけど、正直言って私には斯うといえた撮影技術などありません。頭から知らない、と言ってもいいでしょう。

この程度の女装ぶりではあっても、一応、記録だ記念だと思えばこそ、無茶苦茶ながらもパチパチと、なんとか写してきたものでした。おかげをもって、アルバムにたまってい

くこれらの写真は大部分がピンボケです。

そんな、私の女装すがた相手だけの用途しかもたないカメラだったけれど、やはり私はその時も、そのカメラで……思いのままのポーズをつくって次から次へと自写していきました。

気取ったポーズ。

ほほえみ、ゆったりしているポーズ。

そして「芸」も細やかに、架空のひとに話しかけ笑い興じている一瞬などを、パチリ、パチリと写していきました。

そのうちに――

また先刻のものとは違った楽しみが私にもどってきて、気がつくところの撮影、二時間あまりも費していたのでした。

これだけの楽しみを過ごしてしまうと、いつもならこれで、何となく後片付けに取りかかり、ひとまずはこの「夢の世界」からサヨナラするのでした……が、この夜はちがっていました。

私は、あと一枚となったフィルムを、やや疲れを覚えながらも撮り終えたとき、不意に――それは自分というのもおかしいことですが、全くの突然に、或る想念を浮かべてしまったのです。

同時に、胸が何かにつよく締めつけられた

ような、そんな痛みにしびれてしまったのです。そしてすぐに、私は言い様のない苦しさで熱い熱い息を吐きながら、思わずその場にべったりと坐りこんでいました。

やがて、炎が、全身に猛り狂いはじめました。――そのくせ、胸奥には、妙に燦ったような、重たく澱んだものが次第に詰まりはじめています。

ふりむいて、鏡のなかの白く刷いた自分の顔をみつめようとしても、それは空虚な視線となつて定かではありません。

或る想念。

炎。

くすぶり。

それはほかでもありません。例の、私のどこかに巣喰っているマゾヒズムの頭れだったのです。

いくらこの肉体から、いえ、意識の彼方へ押しやろうとしても、絶対にどうにもならなかったマゾの性。これが一度私を支配しはじめると、私自身しばらくは押さえようととても押さえきれぬものではなかったのです。あやしい衝動が、ともすれば私を何かにむかつて走らせようとしています。

このときも、それは、誰にどのように説明していいのか判らない不安の炎となつて、私を苦しめはじめたのでした。

どうしてだろう？

何故こんなことに？

ふと、もうひとりの私が頭をもたげましたが、それも一瞬に消えていきます。

やがて、私は……

過去の、あの「後手しぼりにされた感覚」をよみがえらせて、思わず、

「しぼって！」

と口走っていました。

鏡のなかで白くぼやけて揺らぐ「花嫁」ともども、私は、

（縛って。――この花嫁を身動きもできないほどに縛って、そして、そして思いつきりの辱しめをあたえて！）

と心中にさけんでいました。

現実にはウエディング・ドレスの花嫁が縄でしばられて、ということとはまず有り得ないことでしょう。しかし、自分が花嫁すがたとなったが故に……それを鏡のなか間近で見たが故に、この突然の想念を呼び起こしてしまつたものなら、常々「縛りたい」と欲する想念の上からいって、当然「被縛の花嫁」は

最美の姿態であり、最高の法悦感を与えてくれる「形」ということになるのでしよう。

事実、私はそのとき「被縛の花嫁」を空想の片隅へ押しやってしまえるほどの理性は失

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

っております。

「ねえ、はやくあたしを縛って!」

と、私は見えない相手にねがい、

「ネ、そうでしょう? 貴女」はしばらく

一〇五〇円、半年分六冊二二〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

で、そして思いつき苛められたい……と、

そうねがっているんでしょ!

と、鏡のなかの「花嫁」に、幾度となく問いかけたのです。

「花嫁」は、そのようにくどい質問に、その都度ハッキリと、大きくコックリして頷きかえしてきました。

私は次第にたまらなくなり、わが身をつよくだきしめると、キリキリと鳴るほどにつよく歯をかみしめました。

——縛ってほしいにも、いま此処にはそんな人が居ない。

——縛る縄は無数にあっても、いま此処にこの腕をうしろに捻じあげ、くくりあげ、そして苛めてくれる人が居ない。

口惜しいことに、悲しいことに、私は奥歯を噛みしめているぐらいが精いっぱいだったのです。

情ないことに、この苦しみが薄らいでいてくれるのを、ただジツとして待っているよりほかないような、気がしました。

私にとっては、この女装はマゾ性の発露でしかなかったのでしょうか。

一時期は、女装して、そんな自身を鏡など

に映して視つめてみると、きまって緊縛されることへの憧憬が、欲求が、ここに満ちあふれてどうすることも出来ず、そんな自分が世にも不可解な、いえ、社会から完全に遮断されてしまった、陰湿極まる異病者とは思えなくなっておりまして。

女装しても、すぐにもう、その悦びだけでは飽き足りなくなつて……

女装した自分を、どうでもいいから早く、縛り、苛めてほしくつてたまらなくなつてしまふ……

いやその頃は、ただもう縛ってもらいたい一心で、よろこび勇んで？ 女装したことさえあったのです。

最近では、哀しいことに縛ってもらえる機会もなく、なんとなくそれも押さえられた形になつていたのですが——その夜は、そのときは、またしても、その緊縛されることへの凄まじい欲求が、この身に興つてきたのでした。

そして。

それはどうして？

と訊かれたら、

「こんなドレスを着た故に」

「花嫁」となつたが故に」

と応えるのは、私のこじつけでしかないでしょうか？……

私は、曳き寄せられるように——
ふらふらと立ちあがると、ロープの仕舞つてあるところへいきました。

(もう、真似ごとでもいい)

せめて。

せめてものこと、この「花嫁」の身に縄をからみつかせたかつた……

私は鏡の前にもどると、いったんヘッド・ドレスを脱いで、綿のロープを、胸のまわりに丹念に巻きつけました。

一メートル足らずを残して縄止めすると、その結び目が後中央になるよう回しました。

不自由になつた手でヘッド・ドレスを取つて、何度も失敗しながら、ようやく頭に乗せました。

そして両腕をうしろにまわし、結び目から垂れているロープを手首にからませました。

かなり乱暴に、左右の手首を上下させて捻じ入れましたが、手袋をしているので痛みは感じません。私は、縛られた……いえ、縛つた身全体で、いやいやをするように揺らしてみました。

そつと横坐りになつて、瞬きをやめて、鏡

のなかの「縛られた花嫁」をジッとみつめました。するとやがて、目の前の「花嫁」ども、私の視界のものは次第にぼやけていったのです。

そのまま、どれくらいの時間が過ぎたでしょうか。

長い間そうしていたようでもあつたし、そうではなかつたようでもあり——

こうして、私は自分にかへつたとき、またしても、またしてもこの冷酷な現実を、思い知らされてしまつたのでした。

いくらこんなことをしていても、やはり真似は真似に過ぎない。

解こうと思えばいつでも解ける手首の縄。けつして、「縛られた」ものではないこの緊縛感。

掌の指から大切なものがこぼれ落ちるような——思いつめれば思いつめるほどに怖しいばかりの寂寥感が、私を襲つてきました。

——いつしか。

私の片頬に、そのむなしさ、くやしきの泪がひとすじ、つたいおちていました……。

(カット・野江三郎)



水
沢
登

あ
ぶ
ら
ぶ
す
こ
ん
と

中学三年生の秋、学校の図書館で美術全集を繰っているとき、一枚の殉教図に眼を奪われた。その絵は今でもルノアールやロートレック、ゴッホの巨匠の名画に混って私の印象に強く焼きついている。というよりは、別れた恋人の面影が永遠に交らぬ姿で生き続け、時として甦えるが如くである。それは憧憬でもあったろうか。

美女と見まがう美青年が、頭上高く両手を縛られ樹につながれて、体は腰に一きれの布をまといつけただけの裸身に、二本の矢を脇窩と脇腹とに深く射こまれた処刑の像だったのである。その端麗な顔は兇器の矢傷に苦悶するでもなく、教に殉ずる荘厳さもなく、むしろ処刑されることに陶醉し、喜悅し、被虐に微笑まんばかりなのである。グイド・レーニの「聖・セバスチャン」が、私を魅了し去った、その絵画の名なのである。後年、三島由紀夫の「仮面の告白」で主人公がこの絵に衝激を受けたと書いてあるのを読み、思わず秘かなどよめきを感じざるを得なかった。何故ならこの絵はヒルシュフェルトが、倒錯者の特に好む絵画や彫刻類の第一位にあげているものだということを知ったからである。そこには倒錯的衝動とサジステイックな衝動と

が錯綜しているのだという。私自身想像だになかった病根、深層の性行を見事にえぐり出されたようなものだった。

考えて見れば、青少年時代に遭遇した小さなアクシデントにも、その原因は、案外加害者？ にあったのではなく私自身の内部から匂い出す花蜜が虫を誘うように、その香りを周囲に撒き散らしていたのかも知れない。

小学生当時、親類の大学生にやにわに抱き締められ、唇を奪われたことがあった。恐怖に涙でしか感じ取れなかった倒錯の経験。中学一年生の夏、上級生の私に対するいやがらせが、彼等の愛情の変形した表現であるとは理解できなかった或る日、樹蔭で四、五人の二、三年生に引きずり倒され、口を塞がれ、手脚を押えられた。幸い同級生の発見で未遂に終わったが、もし既遂であつたとしたら、私のその後の人生観は早くから変わったものになっただけに違いない。

大学時代、春の深夜、帰宅途上、数人の労働者に追跡されるという奇妙な出来事が起った。当時の私は青白くやせて、なで肩であつたせいか、肩巾の広いアドニスのようにたくましく男性的な友人に対して、常日頃、羨ましさといふ一種の魅惑を感じていた。秘められた

思慕であつたろうか。若し彼が抱きしめてくれれば、そのまま成行に任せたに違いない。交通の途絶えた夜更けの街を追いかけて最後まで諦めなかった一人が、とうとう追いついた。いい知れぬ恐怖の瞬間、その瞬間に男は足を止めた。「男か」舌打ちすると、酒気を帯びたその男は踵を返していった。女性に見誤られたことは何度か経験していた。余り混んでもいない電車で、奥様風な女性にしばらくの間、後から抱きすくめられたこともあったが、同性に追われたのは後にも先にも絶えてないことであつたが。

帰宅して事件を反芻してみると、汚ならしさ、恐ろしさだけではなく、捕えられ、無惨にも彼等の犠牲になる過程から、いい知れぬ快楽を汲み出したいという被虐の願望が、体内にうごめいているのがわかった。実際にそういう餌食にされかかれば、遮二無二逃走したのであろうが、難をまぬがれ得た為に、却って淡い期待が生れたのであろう。思えば、一切が過去の悪夢であつたかも知れない。しかし、加虐の者は被虐をも兼ね備えるという「聖・セバスチャン」像は、はからずも私の性行を啓示したものであつたのだろうか。

——こんなはずじゃあ——

選挙のアルバイト女子大生。髪は乱れ、ブラウスは裂かれ、スカートは泥だらけで事務所に帰って来た。同僚たちが驚く。

「マア、いったいどうしたのよ」

「先生が——これが最後のお願いです。〇〇を男にして下さい——って必死に演説なさるものだから、つい私もつられて——先生を男にするために、是非、当選させて上げて下さい。応援弁士としての私も、女にして下さい——って言ったら、皆とびかかってきて、こんなにされちゃったの」

——犯人(ホシ)——

欲望という名の電車での異常な興奮から、未だ醒めやらぬ若く美しい夫人。受付に呼ばれて診察室に入ると、医者、一瞥するや否や「奥様、早速手術しなければいけませんよ」と宣告した。

「まあ、名医ですね。私、今初めて先生にお会いしたのに、何故そんなことお分りになりますの」と問えば、

「奥様、内診は先程すませましたから」

——ハムレットの心境——

婚約者同士がデートの帰途、男は憤慨した面持でなじり出した。

「君は貞操をどう考えてるんだい。僕の家は厳格なんだよ。テストのつもりで、あの公園の暗がりでわざと、イタズラしてみたのに、君は平気で澄していたね。なぜあんな時に君は、抓ったり、叫んだりしなかったんだい」
彼女は平然としてそれに答えた。

「抓ろうかどうか迷ったのよ。でもね、あの時には何本も手が一度に来ちゃったのでどれがあなたの手か分らなかったんですもの」

——キン遊詩人——

耐熱性に難点があるが、裸身に吹きかけると透明人間になる薬というのを手に入れた、ある詩人と言われる男。夜な夜なスプレーして娘を襲った。宙に踊るロープや猿轡が意志をもつものの如く、四肢にまつわり、箝口する恐怖に、多く娘は失神してしまい、犯行は易々として成功した。しかし天網恢々粗にして洩らさず、詩人も年具を納めねばならなかった。ある夜、思いの外に情熱的だったその娘の素晴しさに陶然とした彼、夢心地のうちに、当然しなければならぬこと、すなわち薬効喪失部分にスプレーし直すのを忘れて、フ

ラフラと街に、歩き出してしまったからである。

——当意即妙——

街に散歩に出た神父さん。板屏の続く通りで、前に行く娘のグループ、突然キーンと悲鳴を上げると走り去った。

何事やあると件の場所に近寄って見ると、腰位の高さにある節穴から、ミニクもけしからん巨大なものがニョキりと頭を出している。

どうしたものかと思案していると、側に寄って来たお嬢ちゃん、無邪気に「神父さん、あれなあに」と問うのに、戒律故に嘘も言えず、とっさに答えた。

「お嬢ちゃん。あれは屏の子」

——残香——

二人の坊や、遊び疲れて母親の膝が恋しくなってきた。

「お家へ帰ろう。でもママは時々煙草の臭いがするんではないや」

「僕のママのはねえ、口紅の香りがする時もあるんだよ」

——共通の広場——

あちらの奥様

「そうそう、お宅の旦那様と宅とは乳兄弟なんですってね。ついこの間知りましたの。うかつでしたわ」

こちらの奥様、ドキンとして思わず胸元に手をやると呟いた。

「どうしてわかったんだらう。あの人、白状しちゃったのかしら」

——嵌口——

娘は口にガーゼと脱脂綿を一杯詰められ、その上から包帯でぐるぐる巻にされていた。

しかも御丁寧にパンソウコウで仕上げられていた。その口は、呻きはおろか呼吸すらも困難、いや、不可能な状態だった。たったひとり、身動きも許されぬ位しっかりとベッドに固定されたこの娘に、顔を半面かくした白衣の男が近づいていった。その男は、やにわにパンソウコウをひっぱがした。

これから傷口のガーゼの取換えが始るのである。

——非情 (一)——

冬の夜。冷えきった押入を開けると、出勤

前に全裸にむいて、緊縛した妻が転り出た。

十数時間経過した女体の有様は、みじめだった。堅くいましめた猿轡だけは、どうにか解いたらしい。紫色の唇は、わなないた。

「私は縛られるのは、いやよ。二度と縛らないうって約束したのに、なんでこんなに惨めなめにあわせるのよ」

夫は、その口に再び詰物しながら言った。「約束は守ってるよ。こうやって縛りっ放しにされてれば、君は二度と縛られはしないんだから」

——非情 (二)——

柱に縛りつけた妻に、鞭の洗礼を一しきり浴びせると、夫は猿轡を解いてやった。妻はうっとりとして言った。

「こんな愛されかたはじめて。うれしいわ。あなた、こんな風なお遊び、楽しい？」

夫、妻の体からパンティを引きちぎり、ブラジャーを引き裂き、目隠しを取り除くと、鞭を大きく振りかぶりながら答えた。

「楽しいよ。とっても楽しい。今までは序の口さ。本当の責めはこれから始まるんだよ。僕は君なんか全然、愛してなんかいなかったんだからな」



ラッシュを見た女優さんが失神したときかされて、私は改めてこの映画の反響の大きさを知った。全部が全部、映倫をパスしてほしいというような、欲張った気持はないにしても、監督さん始めスタッフ一同、異常な熱の入れようで、緊縛指導としてその末席を汚す私も含めて、この空前の映画を、なるべく原形を留めて封切に持ち込みたいと願う気持

□□□□ S・Mカメラハント □□□□

『徳川女刑罰史』

秘 銘々伝

辻 村 隆

は一樣に持っていたに違いなかった。

この稿を書くに当って、未だ「徳川女刑罰史」は一般封切はされていない。映画がどの点まで、私達の願望を叶えて封切られるかは未知であるが、私がこの眼、この肌でじかに感じた、拷問、緊縛、責め、刑罰の種々相の実体を、そのウラバナシをお伝えして、映画「徳川女刑罰史」の観賞に、更に興味を添えていただければ幸いである。

(どじょう責め)

× × ×

尼寺の戒律を破って、本寺の僧と恋に陥った若い尼僧妙心に対する、みせしめの責め場である。潜在的な女の残虐性を現わすような陰湿な責め方で、私は寡聞にして、どじょう責めなるものは知らなかった。

その日、東映京都撮影所の第七セットは、朝より慌ただしかった。

尼寺の庫裡の台所セット中央に、でんと釜が据えられ、薪の束が沢山積み上げられてある。裏方さんが、ごみとり用に使う大きなポリバケツ一杯に、生きたどじょうを三人がか

□□□□



りで運び込んでくる。中を覗くと千匹はくだるまいと思われるでしょうが、うじゃうじゃと蠢めいてくねっている。よくもまあこれだけ集められたものだ、妙なところで感心しながら、ぬめつく生ぐさい異臭に顔をそむける。大豆を沢山つけてあるので、わけをきいてみたら、水を浄化することであった。一つ賢くなった。

黒衣の読経の尼さん達が到着。この人達はエキストラである。

今日の緊縛の方法について、かねがね石井監督と打合わせていたが、滑車で高くから吊り下げ、大釜の中へ沈めるのであるが、どじようがもぐり込みやすい体位の、股開きの吊

りの縛り方をやらねばならぬので、一任された手前、私も数日前から、いろいろと、その縛り方について考察していた。

カメラ・ハント式に、素早く縛って、パツパツと撮り終り、すぐさま縄を解くというのなら、かなり強烈に無理な体位をとらせてもいいのだが、何しろ、映画の場合、ワンカットずつ撮っては、その都度カメラ位置をかえてゆくので、その準備や手間にかなり時間がとられる。映画で僅か数分そこそこのシーンでも、これが悠に一日がかりになることはザラである。

数時間も縛られ続けていたら、どんな女優さんだって悲鳴をあげる。元来がフェミニストの私に、とてもそんな残酷なことは、出来ない。さりとて、生易しい形式的な縛り方では、どじよう責めという大見せ場の私刑の雰囲気になさわしくない。

見た眼には強烈な緊縛で、その実かなりゆとりのある、女優さんに苦痛を与えぬ縛り方をするのが、私に与えられた役目なのであるが、容易な

ことではない。

監督さん始め、スタッフ一同、縛りの方はすべて私に任せてあるといった無関心さの中で、装飾の柴田さん、布部君、それに竹田君が、唯一の相談相手であった。

勿論、縛り方について、いろいろな人に、あれこれと、口出しされると、やる方の私にとっても、やり難い点もあって、考えてみれば、業務の担当は実に整然としているのであるが、反面、映画が緊縛に重点をおいたものであるだけに責任も重大であった。

午前九時——妙心役の尾花ミキさんが、小柄な可愛い坊主頭でセット入りする。どじよう責めというすごい責めをうける被虐の主人公である。

私の姿を見かけると軽く会釈をして近附いてくる。

「辻村さん、どうぞ、お手柔らかにお願いしますわ。わたし、ゆわえられるのは、どうも弱い」

彼女は縛られるという言葉を使わない。ゆわえられるというのは、関東では縛ることをゆわえるというのであろうか。関西でもゆわえるというが、言葉のニュアンスに柔か味があった。

「ええ、なるべくじんわりと縛りますが、恨まないで下さいよ。これが仕事だから……。余り早くから縛っても気の毒ですが、一応、リハーサルしておきましょうか」

「ええお願いしますわ、だけど先日、地下の岩室のセットで、使った縄は、堅くてスゴく痛い。もう少し柔かい縄、使っていたら助かるのですけど」

「そのつもりです。今エーちゃん（布部君）がとりにいっていますよ。あれはひどかったですよ。それでいて堅いから、ちっとも緊縛感がなくてね」

尾花ミキさんを始めて縛った時は、黄色いナイロン製のかたいかたいロープであった。両手脚を縛って猪吊りにし、同僚の尼僧達から、とうがらし責めをうけるのであるが、彼女の真白い柔肌は、かたいロープの洗礼をうけて、見るも痛々しい縄痕を、その全身に留めていた。

進んで引き受けた役柄の手前、彼女は必死に苦痛に耐えているのが歴々と汲みとれた。瞳にうっすら光る涙は、決してお芝居ではなかったのを私は知っていた。柔かい縄を使っ



て欲しいというのは、彼女にとって精一杯の懇願であったのかも知れない。

役柄上、縛られることは、覚悟の上とはいえ、女優になって始めての演技が、緊縛の連続であったことは、尾花ミキにとっては大いなる試練に違いなかった。敢然と緑の黒髪をきり落し、頭をかみそりで丸め、野外で全裸を曝し、セットの衆人環視の中で、縛られ続け、責め続けられる彼女の役柄は、確かに並のスターでは到底なしえぬハレンチの極みであったのだ。

そのような捨身でかかる勇気が、このうら若い二十一才の、ニューフェイスの彼女の、どこから湧いてくるのだろうか、私は眼を

瞠る思いであった。いつも蔭から、自分でかけた縄ながら、彼女の縛られている姿を、ハラハラし乍ら見守っていたのである。

賀川雪絵の珍宝と、白石奈緒美の隣徳が、女体をぶつけ合って妖しくのたうち廻った布団の上に、尾花ミキは神妙に坐っていた。台所のセットにつながる、傍らの寝室でのセットの中である。

ライトはここまでは届かず、このセットの中は薄暗く、準備に走り廻る人々の騒音からも隔絶されていた。

柴田さんとエーちゃんが、縄を抱えて入ってくる。白の綿ロープを藍に染めた縄であった。慌てて染めたためか、染めが悪く、握ると、藍で忽ち掌が青く染まる。

「じゃあ、始めましょう。脱いでもらいましょうか」

私の声に、一瞬顔を硬ばらせた彼女は、それでもすぐ素直に言葉に応じて、化粧着の浴衣を脱いだ。

豊かな胸から乳房がこぼれる。そっと抱えるようにして、両手で胸を掻き抱いた彼女のその手を、私は、容赦なくうしろに振じ上げる。映倫の関係もあって、乳房を曝してはならないので、縄を二つ折りにして、胸に四筋



ばかりかけて、乳首が縄で隠れるように巻いて、後手に縛り上げる。

彼女の腕は少し硬く、高手小手に縛ると痛がった。

「私が縛ってきた、若い娘さんは、皆腕がよく上るんですよ」

「でもわたしは、これ以上、上りませんわ。」

骨が硬いからかしら」

ベソをかいて、尾花さんは哀願する眼付になった。

私達のやりとりを、柴田さんとエーちゃんは黙って見ていた。緊縛の方法は私に任すという配慮からであろうか、口出しは何もしなかった。しかし、一旦緊縛の型がきまっただとすると、二人は、私に代って、同じ型で解いたり、縛ったりを繰り返してくれた。朝から夕方まで、ワンカットごとに、縛ったり解いたりする煩雑さを、装飾の人々は、私に代って、皆やってのけてくれたのである。

兎も角、両手を少々低めに縛り終って、ついでお尻を落として両脚を膝を折って立てさせる。膝の間に頃合の竹の棒を狭み込むと、竹棒の両端と膝を縛り合わせる。更に首縄をかけて、胸で数度ねじり、胸の縄と結び合わせて、これを竹の棒の中心にかけて引きしぼる。別の縄を腰にしっかり巻いて縛り、この縄で吊ろうという段取りである。

ゆるくしめたつもりでも、数条の縄が、私の手で柔肌にきつくしまるのか、尾花ミキはしきりに身悶えし、苦痛に頬を歪め、苦しげな眉に縦じわが刻み込まれていた。体のバランスはとれている筈であった。こうして

吊り下げた場合、両腿は開いて、臀部から大釜へ沈下してゆく段取りになっていた。

既にライトは皎々と眩ゆく輝やき、エキストラの尼僧達は肅然と居並んで、読経の合唱が始まっており、妙心を責める、同僚尼三人は手ぐすねを引いて待ち構え、冷たく見守る珍宝（賀川雪絵）の紫の衣姿が、珠数をまさぐって見じろぎもせず立っていた。指揮をとるのは憐徳（白石奈緒美）である。

私達は浅ましく縛られた、腰布一枚の妙心の体をつぐようにして、セットに運び入れた。強烈な緊縛におどろいたのか、一様に視線を送る女達の口から、ざわめきに似た驚声が洩れる。

大釜の蓋の上に布団を敷き、数人で、その上にかつぎ上げると、滑車の縄を、腰縄につなぐ。妙心の体を数人で抱え上げるようにして、二、三人で滑車の縄を引く。

受け止める人々の手を離れて、彼女の体は高々と空間に宙に舞った。吊り上げた太縄のよりが、くるくる激しく妙心の体を空中で回転させた。

慌てて脚立によじのぼり、竹ちゃん（竹田君）が、その回転を押える。ズルズルと再び大釜の布団の上に引き降された時、尾花さん

のひたいに冷たい汗があふれ、縄目は強烈に肌にあたるところすべてに深々と喰い込んでいた。

「何処か痛む？」

うしろからそっと声をかけると、彼女は乾いた笑みを泛べて、

「そりゃもう、どこもかしこも痛いところだらけですわ」

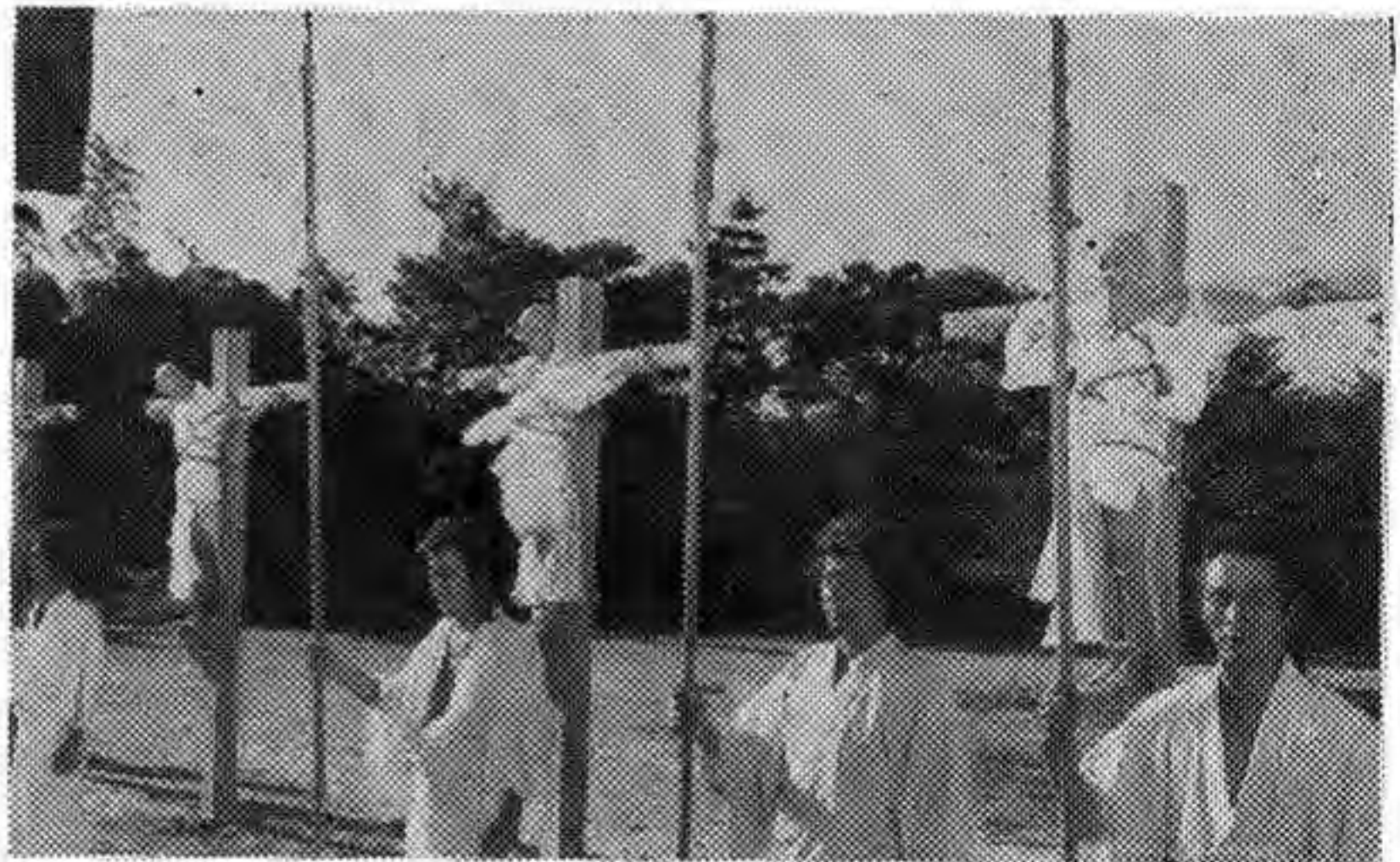
と情なそうな声を出した。縄の藍が白い肌を蒼黒く染めていた。

「でもいいんです。我慢しますわ。こんなにゆわえられて、痛くないなんてことないんですもの」

半ば諦観の念を心に決めたのか、呟やくようにいうと、身をよじって、締まる縄目の痛みから逃れようと果敢ない動きを繰り返していたのである。

木製の滑車に通った吊し縄を、二、三人の尼では、かなりの力で引いても、それを吊り下げた俣、引き絞っている力はなかった。二度、三度くりかえされて、その都度、尾花ミキの体は、宙に高々と舞い、くるくると空間に、かなり激しく回転した。

眼がマワルのか、気分が悪くなった様子であった。既に私の縛った縄は、彼女の肌に極



限にまで深々と喰い込んでいたらしい。見るに見かねて、私は竹ちゃんに手伝って貰って、一度大釜の蓋の上から彼女を抱きかかえて下におろした。

女の力では縄を引っ張るのはとても無理と

いうので、セットの天井から、男の力二人で吊り上げることになり、その準備の間、素早く縄をとく。くっきりとした縄目が柔肌に条痕をのこしている。

「落下傘を使いましょうか？ その方がラクだけど……」

「ええ、でもこれが最後の責められるシーンですから痛くても我慢します。なるべく体が安定するよう結えて下さいね」

流石に自ら買って出た役柄だけに、健気な意気込みに、私は感嘆した。改めて縛る時、腕や腰、竹棒の当る個所などに、目立たぬようにスポンジや綿を挟んで、長時間に耐え得るよう縛り直す。

吊縄に彼女をつなぎ、合図と共にセットの天井からロープを引揚げると、スルスルと苦もなく、忽ち天空高く舞い上る様に、彼女の緊縛された女体は大釜の真上にしつらえられた明り通りの天窓のセットの中にかくされてしまった。地上からは五米以上も吊り上っている。

万端用意は整い、スタッフの口々に叫ぶ、
「本番」という声と共に、大釜の下、薪に隠されたガスのバーナーに火は点じられ、炎がメラメラと大釜の底を伝い始めた。大釜の



底に沈んだドライアイスがブツブツと白い水泡を吹き上げては、パツと割れて、湯気が濛々と立ち昇るごとく見えた。

妙心の痛ましい腰布一枚で縛り上げられた体が、徐々に吊り下ってくると、大釜の生温かい湯の中へざぶりとつかって沈んでゆく。忽ち同僚尼がかけよって、箆に掬った大量のどじょうを俄破と投げ込む。のたうつ妙心。その妙心の首縄を握り、妖しい残忍な笑みを泛べる憐徳。熱さに狂ったどじょうが、その熱から逃れようと、妙心の肌の奥深く迫って

行く――。

テストの間、監督のうしろに下ってみていると、

「辻村さんですね」

と、うしろから若い声がかかった。

「えッ！」と振向くと、細面のすんなりした女性が、私をみつめていた。橘すみさんだった。

「縛る方も縛られる方も大変でしょうね。私も、もう少ししたら縛られるんですけど、やはりすこし心細いんです。海老責め

って、どんな縛り方ですか？」

と真剣な声できいてくる。百聞は一見に如かずである。セットの井戸端に腰を落して、恰好をとってみせると、ポーズだけで、腹の突き出た私は苦しかった。

「まあ大変――。とっても痛くて、苦しいでしょうね」

と彼女は眼を丸くして、そのポーズに見入っている。化粧を落した素顔の橘すみは、何ら普通の娘と交らない、純真そうな感じであった。出番なしで、縛りの偵察といったと

ころであった。

折りから嘉手納清美さんが、アイスクリームの差し入れをして覗きにくる。

二度、三度、リハーサルが繰り返され、その都度、尾花ミキの裸身の廻りを、うじゃうじゃと、ぬめつくどじょうの群が這い廻り、もぐり込んでゆく。濡れた腰布を変えること三度。身も心もヘトヘトになっているに違いない。白い肌に泥臭を匂わせて、それでも尾花ミキは涙ぐましい演技を、けなげにも必死に繰り返していた。

やっと本番の時、大釜の湯はすっかり熱くなり、どじょうはピチピチと必死に踊り、激しく彼女の体に殺到していたようである。絶叫と鮮烈な悲鳴が、セットの空気を悲愴に充ち、スタッフの固唾をのむ中で、迫真のシーンは終わった。

ぐったりとなつて、稍々蒼褪めた尾花ミキを、大急ぎで台にのって、大釜から引きずり出すようにして抱きかかえると、そっと地面におろす。数匹のどじょうが、彼女の腰布から振り落された。

人眼を避けて、濡れてかたくなった縄をようやくにして解き、ツンパ一枚の全裸のうしろから浴衣をそっと掛けてやると、やっと我

に返ったように、彼女は弱々しい微笑を泛かべたのである。

「お疲れさま。やっと終わりましたね。長い間で随分、痛かったでしょう」

私のいたわりの言葉には、心からの真実が籠っていた。

「お蔭さまで——。ああ苦しかったわ。ヘンな匂い……」

彼女は、自分の体にこびりついた魚臭をクンクンと鼻でかいでいたが、急に眼付が妖しく乱れたかと思うと、キヤーツと大声をあげた。スタッフが吃驚してかけ寄ってきた時、ピタリとセロテープで押えた箸のツンパのごく僅かな隙間から、なんと一匹のどじょうが顔を覗かせていたのである。そしてセロテープのきかない間から、白い腹をみせて、更に一匹のどじょうがポトリと地上に落ちてきた。かしましい笑い声の渦の中で、尾花ミキは真赤になって、浴衣で前を蔽い、顔を袖で隠した。

見ていたカントクさんが、真面目な顔でいったものである。

「やはり辻村さんのような、どじょうがいるもんですね」

どうということ、ソレ……

× × × (尼僧の集団はりつけ)

この日、京都府下の長岡天神でロケという進行さんの電話連絡で、急拠、車で直接ロケ地へ走る。十一時頃到着したが、恰度第三話の、刺青御開帳の料亭の場面を撮っている真中であつた。

彫丁自慢の地獄絵の刺青が、沢たまきさん扮する芸者君蝶の背一面に、極彩の色も鮮やかに彫られてあつて、その彫りものを期待して、一斉に注目している客達の前で、得意げに帯をといて、裸身の背をその視線に曝して行くシーンであつた。柳橋の料亭に見立てたここは、長岡天神境内の料理旅館錦水亭の、池に面した一室——。

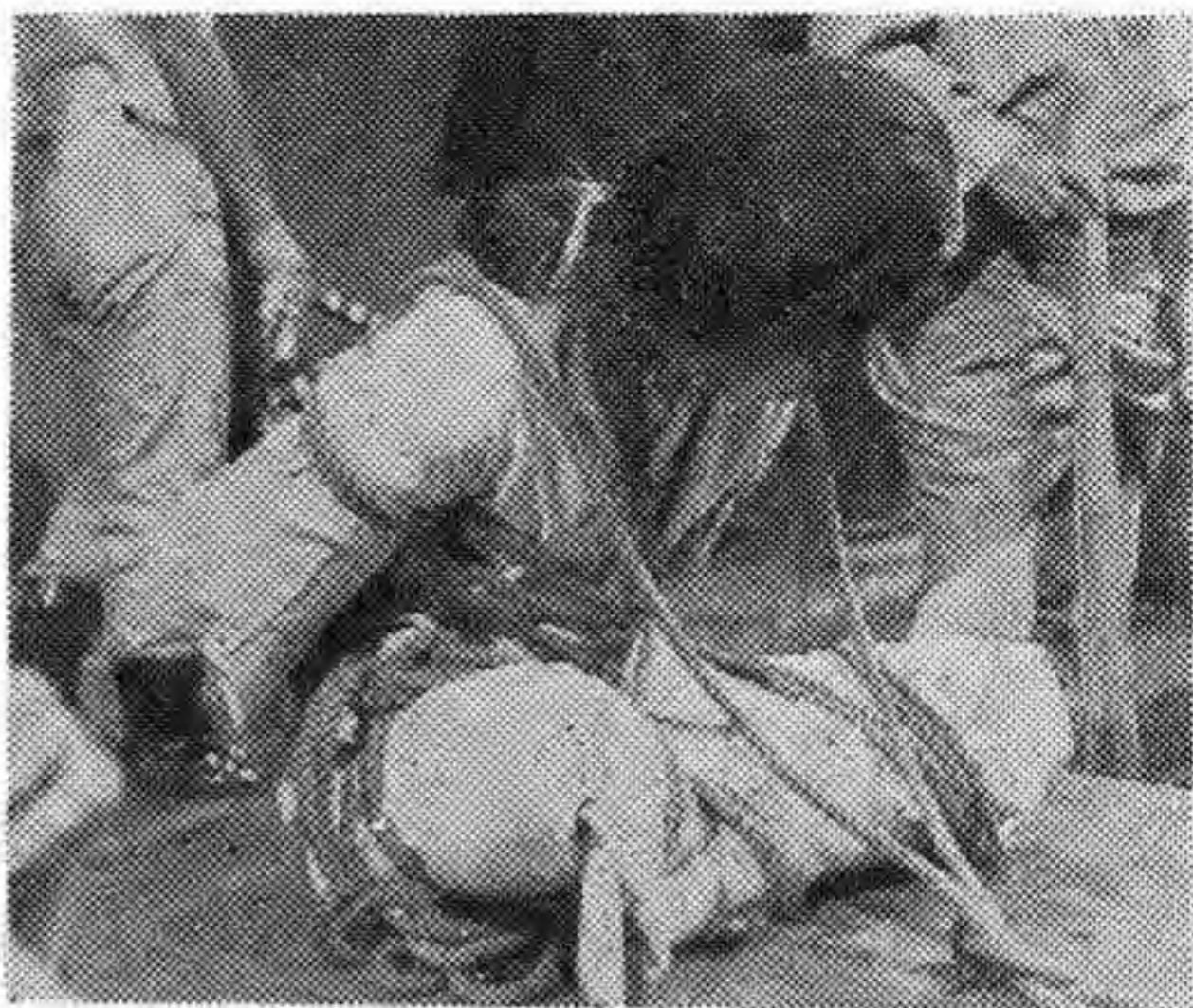


辺りの風景は、正に時代調にふさわしい。歌手であり、現代ものにチョクチョク顔をみせる、沢たまきさんの芸者姿は、珍らしかった。すらりとした鉄火な感じの芸者が、それは又それでよく似合っていた。

彼女の背の刺青の図柄が、毛利清二さんという、俳優兼業のいれずみさん苦心の作である。

私はその下絵をみせていただいたが、緊縛されて責められる美女の図柄は、下絵を凌いで遙かに生々しかった。責縄もふやして迫真力が出ている。

後手の背に、ささら竹が挟みこまれ、首縄が豊かな乳房の下をきつく緊めて血がにじんであり、股縄が深々と幾重にも喰い込んでいく、鮮やかな極彩の美女拷問の図柄が描かれていたのであった。私は近々と寄って、その背に、カメラとモノクロの二台のカメラを、交互に駆使する。刺青映画数多しと雖ども、このような美女拷問の図柄は、恐らく始めてではなからうか。この



貴重なシーンの撮影に運よく行き合わせて刺青マニアなら垂涎ものの見事な背の絵柄を、私は、堪能する程見せていただいたのであった。

沢たまきさんは、このシーンだけなので、私は自己紹介をしなかったが、彼女はこの無類な男を、一向咎めようとする気配もなく、好奇の微笑すら泛かべて、私のカメラに泰然と背を向けて最後にチラリと振り返り、もういい？といった眼で私を艶然と見つめた。そ

の眼にゾクゾクとして、あわててペコリと頭を下げると、二、三步ヨロヨロとあとずさりし、つまずいてペタリと尻餅をついてしまった。途端にオシッコがしたくなった。彼女のいれずみが、私の尿線をシゲキしたらしい。ヘンなハナシ……。

午後二時頃より、天神境内の上手にあるグランドで、壮大なハリツケの刑場の撮影が始まった。

三々伍々、スタッフや、見物人のエキストラ、それに混ってこれからハリツケにされる五人の尼僧が、坊主頭のツラにハンカチをかぶせて昇ってくる。正面は幔幕に検屍役の床几、中央に五本の礎柱。後方には竹矢来といった、グランドを一杯に使った刑場のシーンである。

尾花ミキさんの妙心を散々虐めた挙句、殺害した、五人の尼の罪状が明白になり、いよいよハリツケになる重要なカットである。

賀川雪絵、白石奈緒美、英美枝、小島恵子、牧淳子の、五人もの若々しいスターさんを、いっぺんに縛るのだから、まったく以て嬉しい悲鳴である。

五人それぞれ違った縛り方というのも、反ってゴテゴテしておかしいというので、五人

共、同一の縛り方をすることにした。縄は荒縄である。一卷き大きいのがデンとおかれてあるから、ふんだんにつかえるわけだが、そう煩雑なものになってもいけない。女のはりつけの縛り方にも、定跡といったものがあるうと思われたが、そこは辻村流で、自由な考え方でやることにした。

刑場中央の、松の日蔭で、縛ることにしたが、スタッフや、見物のエキストラ、それに弥次馬やロケ見物の人々が遠巻きにして、私達の一举一動を注目している。

五人のスターさん達は、孰れも肌が透けてみえる薄い白の囚衣をきていた。紗のような薄い布を通して彼女達のオッパイが、まざまざと私の眼にとび込んできた。スター級の女性を縛るチャンス到来。誰からでもいい、私は荒縄を握って、坊主頭にハンカチをのせた五人の女優さんを眺め廻す。彼女達はお互いに顔を見合わせていたが、さてとなると自分からは申し出てこない。無論、喜んで自から進んで縛られに出てくる人もないのは当然であるが、衆人環視の前で縛られるのは、誰しも始めてかの如く、今迄、散々妙心役の尾花さんを虐めてきたが、いざ自分の番となると、やはり気持のいいものではないらしい様

子であった。

誰も進んで来ないことを、私は数分後に知った。縛られる以前に仕掛けが必要だったからである。

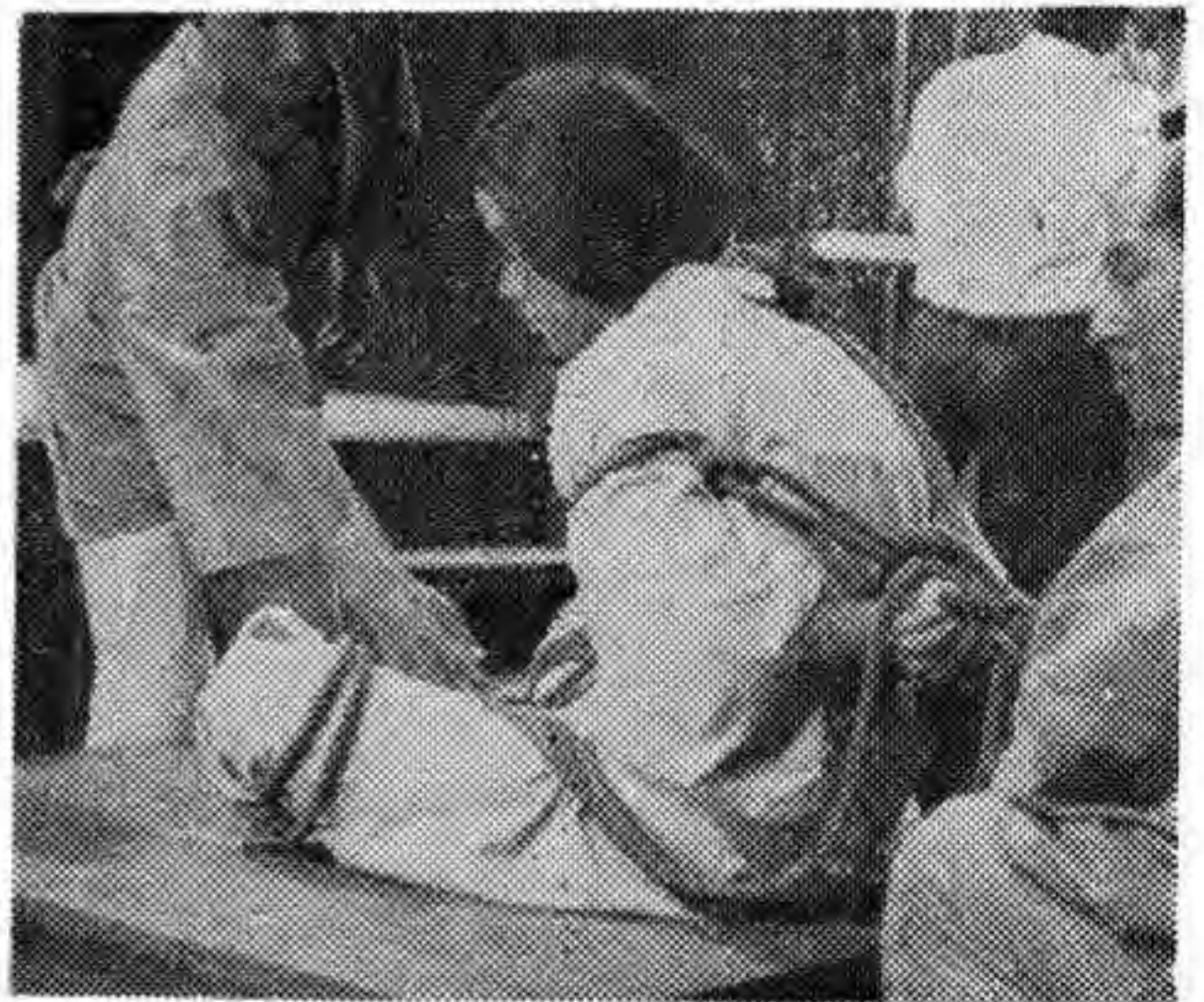
ハリツケにされた彼女達が、乳房の下を、非人の槍でぐさりと刺し貫ぬかれた時、真赤な鮮血がドクドクと白の囚衣を染めて溢れ飛散することになっていたのである。裏方さん達が、一束のゴムホースを持ってやってきた時、彼女達は始めて瞬時ざわめいた。

五人同時のはりつけなので、第一番に縛られた人は、それだけ長い間、縛られていることになる。やはり若い女優さんから行くのだろうか。

黙ってみつめていると、彼等は小島恵子さんに近づく。彼女が先ず最初の槍玉に挙げたらしい。

人垣をつくってやって、遠くからこちらを眺めている、見物の視線を遮るようにしてその囲みの中で、彼女は思い切ってパツと薄い囚衣を脱ぎ捨て、腰の布も外した。ピチッと纏いついたショーツパンティ一枚の全裸である。否応なく豊かな胸の膨らみが、私の視野を横切る。

両手で胸を抱えた彼女に、数人の裏方さん



が群がって、素早い作業を始めてゆく。万一の危険を慮んばかりで、スプリング入りのジユラルミン槍であることは当然だが、更に貫通される乳房の下に、厚いゴム板が巻かれ、左右から二本のゴム管が、目立たぬようにしっかりと胸に結びつけられる。二本のゴム管が、おしりの方からまるでシッポが生えたようにニユッと出ていて、地上に長く伸びている。再び囚衣をきてもらって、一丁上りといった恰好で、手ぐすねを引いて待つ私のところへ廻ってくる。

るへ廻ってくる。

ハリツケなので両手は縛らない。首縄にして結び、菱縄になるよう腹の辺りで更に結び胸に分けて、腰に巻きつける。ハリツケ柱に固定させるので、縄尻をかなり余らせてうしろでかためておく。私の作業はホンの数分。つづいて、英美枝さんも又裸。桜桃のようなかわいい乳首が桃色に色づいて眼に痛い。裏方さんは容赦なく、ゴムホースを繋いで行く。そして私に廻ってくる。

牧淳子さん。白石奈緒美さん。最後に賀川雪絵さんの順番である。

「私とっても縄に弱い。あまりきつく縛らないでね」

白石さんにいわれて、苦笑しながら少々手加減。出来上った処で、ぞろぞろとゴムホースを尻尾の様に長々とぶらさげて、一同ハリツケ柱に向う。これが本当のヒモつきといった恰好――。

スタッフ総動員で、五人の尼さんをハリツケ柱に縛ってゆく。私は、俄然忙がしくなつて、あちこちへ右往左往しての縛りの手直しに大童といった処――。

検屍役の正面からみて、左端から、小島恵子、牧淳子、賀川雪絵、英美恵、白石奈緒美



という順番である。五人の若い美人の尼僧がズラリと一列にハリツケ柱に並んだ処は、壮観そのものであった。

拡げた左右の手は、十字のはりつけ柱に固定され、太腿の辺りで縛り、最後に足首で縛る。遠巻きに物珍しげな視線が、一斉にこちらを注目している。カントクさんが私を手招く。かけよると、

「最後の断罪のシーンにしては、少し囚衣が整いすぎるように思いませんか」

と仰有る。ごもっとも。散々責められた罪人なのだから、もっと乱れていないとおかしい。

「みなさんには気の毒だけど、破って汚した方がいい様ですね」と私。

「遠慮なく、ビリビリ裂いちゃって下さい。

オッパイも見えない程度スレスレに出しちゃいましょうや。それに白石さんの縄がゆるいですね」

と愉快的仰せである。私の好む処――。

「どんどん破いちゃって、いいんですとさ」

とスタッフに告げると、それと許り、缺や手裂きで、忽ち真新しい紗の囚衣はズタズタにされて行く。正に危うい露出寸前まで破って、次々絵具で汚してゆく。

気の狂った憐徳役の白石奈緒美さんは、いかにも狂人のように、最初から、裾や胸を乱していたのだが、とてもじゃない。それをはるかに上回る乱しように、すっかりお株を奪われて、悲鳴をあげた。

「あらッ私のお株すっかりとられちゃった。これじゃ皆さんと一緒に、狂人にみえやしない。といって、これ以上、破くと裸になっちゃうし、私どうしましょう」

折角の自らの苦心のアイデアが、さっぱり

で、がっかりしているらしいのである。彼女は、テレビの『やどかりの詩』の先生役といったインテリ役が身についた感じの人なのでこうした役はかなり苦手の様子であったが、さすが芸熱心の人だけに自分なりの工夫を凝らしていたのであった。

珍宝役の賀川さんは、既に死人になっているが、見せしめのはりつけという事で、ぐったりとした所作をくり返している。

いよいよ本番テスト。

合図とともに、ずらりと非人が並ぶ。吉田輝雄さん、渡辺文男さんも所定の位置にすわる。実にピッタリしたチームワークである。

かなり重い、ジュラルミン製の槍を、うまく乳下に貫通させる演技は、やはり難かしいものだろう。まかり間違って、突くところが外れると、生身の女優さんに大怪我をさせかねない。それだけに繰り返し繰り返しテストは行なわれた。

非人役の人々は、真剣そのものであった。

なかに、一人、二人、怖くて、どうしても突けないらしい人があった。すかさずカントクさんの叱咤がとぶ。非人役がすべて槍の使い手じゃないし、これは確かに傍らでみていても危険が一杯のようであった。それだけにテ



ストは慎重を極めめる。

牧淳子さんが一番槍。さっと彼女に悲愴な真剣な表情がよぎる。貫通瞬間の、苦悶の形相もむつかしい。ゴムホースに手押ポンプが連結し、血糊の入った石油缶につけられる。もし失敗すると、白衣に真赤な鮮血が流れて忽ち着換え直さねばならない。と同時に、槍が突きささった瞬間に、血しぶきを挙げねばならず、とり直しは許されぬ重要なシーンである。

一同シーンとして固唾をのむうち、監督さんの手が挙り、いよいよ本番——。

見せ槍。そして交叉して、二の槍がしどかれ、ぐさりと乳下に、深々と入る。ドツと溢れ、飛び散る鮮血。

白目下に度胆を抜かれる衝撃的な凄惨なシーンに克蘭クの静かな音。ガクリと首を垂れ、悶絶した牧淳子の下半身をドクドクと鮮血が真赤に染めて行く。見事O・Kであった。

二番槍は英美恵さん。若い彼女は、すっかり緊張してかたくなっているらしい。刺された刹那の瀕死の形相を繰り返している。表情は、極度の緊張からか、やや蒼褪めてひきつっているかにみえた。

本番テストで、貫通槍のスプリングの穂先が、引抜いた瞬間、抜け落ちる。慌てて応急修理。本番で抜け落ちたらどうしようかという危惧が、それを握る非人さんの顔に、困惑と憂慮がただよい、心細げに見えた。救いを求めるように他の非人役の一人一人を見廻している。出来得れば、この役を替ってほしかったのだろう。

その非人役のみ一人、十数度のテストが繰り返され、貫通した槍を、ゆっくりと下に抜くことで、どうやらうまくやれる様になったらしかった。

さて本番——。

私も他人事ながら、祈るような気持で、その槍をみつめ、カメラを構えていた。ぐさりと槍が乳下に入る。刹那、その辺りからサツと鮮血が飛び散る。必死の形相で、英美恵は苦悶し、やがて、ガクリと首を垂れる。うまくいった。

三番槍は白石奈緒美さん。狂女の咲笑が、鮮血の飛沫に、ぐえっとうめき、一入おびただしい血しぶきが、果てしもなく流れて、真赤に腹部から下を染めて行く。

処刑の終わった人から順序に、私は縄をといて廻る。返り血を浴びて、私の半袖のスポートシャツに点点と血のしぶきが飛ぶ、脚立でかかえ降して、慌しく脱いでもらって行く。血糊は彼女達の肌までも真赤に染め上げて、血の滴が、ヒタヒタと足許に垂れていた。鉄でポンプを繋ぐ紐を断ち切り、大急ぎで外した下半身は、今の凄惨さを物語るように真赤に染っていた。

「あらあら、大変、どうでしょう。私、換えのパンティもってこなかったよ。ショックだわ」

英美恵ちゃんの頓狂な声。成程、血糊は、べっとりと彼女のパンティを真赤に染めてい

たのである。

「困ったわね」

白石さんが沈痛な面持であった。肌襦袢に柔肌をくるんで、役済みの三人のスターは、それでもホッとした顔付で、心もち頬を染めて、急ぎ足でグラウンドを下っていった。

少々ぐらい洗っても落ちそうにない血糊の



下半身——。それを洗う場所は、このロケ先にはなかった。どこかにきつと、丸めて捨てたに違いない。血染のパンティを、私はほしと思った。ノーパンティの女優さんの、困惑の表情をひそかに心に浮かべ乍ら——。

既に賀川雪絵さんの処刑は始まろうとしていた。彼女のみゴムホースの尻尾はなく、二個のビニールの血袋が腹に隠されてある。死人を再び突くという設定なので、大量の流血は必要でなかったのだ。この血袋をうまく槍で突き破らねば流血はみないのである。手許のたしかな非人役の方が二人、数度槍をしごいて、袋の個所をピタリとねらい、その槍は正確に走った。

眼をつぶり、ぐったりと首を垂れて、身じろぎもしない賀川さんに、流血の槍が飛ぶ。見事適中して、胸下に血がしみ、それはやがて大きく拡大されて股を濡らして行く。冷静な賀川さんのパンティも、恐らく赤に染まっているに違いなかった。はりつけ柱より下ろすと、彼女はさっさと独り、松の大樹へ歩んでいった。ゴムホースの装填せぬ気軽さからであった。

一番槍の筈の小島さんが、一番最後に残ったのは、突かぬ先に、腹部に血がにじみ出し

あわてて、白い囚衣を着換えていたためであった。

既に晩夏の陽はかげり出し、光線は鈍くなりつつあった。陽の当る場所を求めて、はりつけ柱は移動された。一番最初に縛られて、一番最後まで残り、しかも度々縛り直された小島さんにとっては気の毒なことであった。野球をするためやってきた一チームが、ベイスボールを忘れて群がり、学校帰りの子供達が、この眼の毒な、ショッキングなシーンを、真剣な表情でみつめていた。

一本のはりつけ柱を、ぐるりと取囲む見物の輪は、この時と許り、近々と迫っていた。覚悟の上とはいえ、唯一人取残された彼女の表情に、やるせない羞恥がありありと流れていた。竹矢来や、幔幕は次々と撤去されてゆき、カメラやスタッフは、一本のはりつけ柱に集中している。

陽は更にかげり、森の彼方に今正に沈まんとしている。誰も心せく最後のひとときであった。

本番テストの声。さっと小島恵子さんの表情は緊張する。見せ槍について飛ぶ貫通槍、見事刺さって引き抜いた瞬間、槍の穂先はその姿を没していた。スプリングが故障して、

穂先が中身へ陥没してしまったのである。逆さに振っても出てこない。抜ければ又何ともなるが、一旦陥没した穂先は、如何とも仕方なかった。

「やめました、オープンでゆきましょう」

いさぎよいカントクさんの声——。槍一本の為に、公衆の面前で無惨にも曝されつづけた、小島恵子さんの長い間のはりつけの辛苦は、あえなくオジャンになった。

今一息という処で、再び処刑されねばならぬ、彼女の情なそうな顔——。

ヤリクリがつかぬとは、このことか——。

ああ、映画とはシンドイものである。

× × ×

(海老責め・弓ぞり責め)

セットに入った時は、第三話の刺青師彫丁が、娘花をかどわかしてきて、眠り薬をのませて、その隠しどころに刺青する、シーンであった。

バスト一〇三センチの偉容を誇る三笠れい子さんが、裸身で長々と横たわり、小池朝雄さんが役得で、彼女のかくしどころに度々針を運んでいた。部外者立入厳禁のきびしさもその筈、三笠れい子は全裸で仰向けに寝て、小さい布切れ一枚が、僅かにその個所を蔽っ

ているに過ぎない状態であった。カメラはレンジ窓の低いアングルから、彼女の全裸の側面をうつしていた。正面から厚かましく覗き込んでいる私の眼に、ボインのオッパイや、隠見する布切れの下は、眼に眩しかった。新人の三笠れい子は、全身でこの役になり切ろうと努力していた。このシーンの撮影がやると終る。いよいよ私の出番である。

午后から、本格的な詮索所セットの拷問が始まる。

薄鼠色の肉衣をつけた橘ますみさんがセット入りする。私と視線が合って会釈。覚悟の上とはいえ、本格的な拷問の縛りに、彼女は努めて平静を装おっていても、心の動揺は隠

しきれぬようであった。比較的柔かい緑縄を使うことにした。

11PMで、御一緒に登場していただく、阪大の大野助教授が、参考のためセットを覗きにこられ、私と初対面の挨拶を交す。

「本格的な海老責めをやるんでしょう」と大野先生。

「ええ、まあそのつもりなんですが」と私。

「何か痛々しい感じですね」

「彼女がそれだけ被虐的なタイプの女優さんだからでしょう。これがグラマラーのスターなら不似合いでしょうね」

準備の間、交々に言葉をかわし乍ら、話は刑罰と拷問のあり方に進んでゆく。

「縛り方をどこで研究されたんです？」

「研究というより我流です。実際には余りいたくないよう、それでいて見た眼には強烈にみえるといった、やはりプレイ本位の縛り方なんです」

「昨日、外人の拷問シーンのラッシュを一同と見ましたが、橘ますみ君失神したそうですよ。失神女優の看板をあげていい子





ですよ。それが、今日はひどい責め苦をうけるのだから、彼女の心情を思いやれば、何だか可哀想になるんですよね」

「まあ、なるべくお手柔らかにやるつもりですが、緊縛指導という面で、マニアの方が見ても、一応満足する縛り方をせねばならず、その点、氣を使いますね」

確かに橘さんは、今迄の女優さんにくらべて、ほっそりとしていて、小柄な体格で、所謂、直感的に感じる被虐タイプのスターであった。私は支度の出来た橘さんに近づく。「覚悟の上ですから、遠慮なさらないで、好きな様に縛っていただいて構いませんわ」

と、これは又、意外な言葉である。

海老責めの台を中央に持ち出して、その上にあぐらをかかせ、私はやや昂奮した手付きで縛りにかかる。

渡辺さんの与力南原一之進。同心二人。下働き四人、牢医一人のメンバーが、スタッフと一緒に、私の緊縛を見守っている。

ここでちょっと、拷問についてのべておくが、その順序は、答打、石抱、海老責、吊し責の順になっている。答打、石抱にて白状しないものが、次に海老責めを受けるのであって、答打ち、石抱の責めをした数日後、身体が大抵もとに回復した頃を見計らって行うのが本当らしい。古書によると。

「青細引にて手を背後にて縛り、体を曲げ、両足と顎を密着せしむるまでにくくるなり。かくして、およそ三、四時間もおく。かく縛られて、やがて半刻（約一時間）も立つ頃、総身真赤になり冷汗流れ出す。それより一刻（二時間）も過ぐれば、次第に紫色に交じ、

又暗蒼色になり、尚捨ておけば蒼白になる。既に蒼白に変わる時は、早や死に近づきたるなれば、縛をとく。しかれどもかくまで耐うる者はいとまれなり」

とある。だから正式に言えば、この第一話の、近親相姦と殺人容疑で責問を受ける、みつという娘役の橘ますみは、既に、答打、石抱きの拷問を受けて焦悴した事になっていなければいけない。

しかし所詮は映画である。派手に緊縛し、責めなければいけないのだから、そうした制約には一切とらわれず、辻村流の海老責めにとりかかったのであった。

首縄をかけて、胸の縄は輪違いの結びをつくり、両足を揃えさせて脛の辺りで縛り合わせ。別の縄で輪違い縄に通して、二の腕をしめ、後手を縛る。彼女は痛そうに眉をしかめたが、一言も文句をいわず、私にされるが尽になっていた。

両手を縛った縄を肩から前へ垂らし、これを両膝の辺りで縛り合わせて、ぐいと引き絞ると、柔軟な彼女の体は、ぐっと屈曲して、顎が足につく。しかしそれでは、彼女の顔はうつむいて、すっかり隠れてしまうのであった。そこで、新しい新案海老責めが即座に考

案された。

大きい鉄環を彼女の前に打ち込んで、これに二本の縄を通し、ぐいと引き絞る。前にのめらぬよう、下働きが、彼女の背後で腰を押え、一人が引き絞ると、幻変自在の海老責めが出来上った。史実にはない、ここらが、映画の面白いところである。

ゴテゴテ縄を使い過ぎると、よく御叱言を頂戴するが、このポーズになると、どうも腿から膝の辺りが淋しい。それで、折り曲げた太腿を袴と縛って体につながると、身動きも出来なくなってしまう。この拷問には普通答打ちはやらないが、これも便宜主義で、ささら竹でバシバシ打ち据えることになる。形式にとられず、責めの苦悶が出れば最高なのであるから、私は段々と愉しくなってくる。「本当は両手から最初に縛るのでしょう」大野先生が私の縛りを見ていて、疑問を出される。

「ええ、本当はその様ですね。しかし、撮影は長時間かかりますから、こうして縛ると、両手を縛った縄から手を抜いても、縛りはさしてゆるまず、都合いいんです」

私はそういって、彼女の後手をそっと抜いてやった。

「成程——考えてあるのですね。しかし見た眼には凄く痛そうだ。あなた痛いでしょう」優しい大野先生は、いたわるように橋ますみに声をかけられる。

「ええ、痛くないという嘘になりますけれど、これなら、かなりの時間、辛抱出来そうですわ」

彼女は弱々しく微笑んだ。

本番のクランクが廻り始めるまで、彼女は小一時間もこの縛られた姿で、かなり喘いでいた。

答打ち用にいろいろのものが考えられたが結局、ささら竹に落ち着いた。

恐ろしそうに見守る彼女のために、私は自

分の尻を犠牲に供して渡辺さんに五ツ、六ツ叩いてもらった。手加減しているのかさして痛くない。勿論、パンツ、ズボン下、ズボンの上からなら、さしてこたえない道理だが、もっと強く叩くよう頼んでも、彼は遠慮してか手加減している。一度思いきり叩いてもらって、その痛さを知りたいという尻込みしてしまった。

それじゃボクがやろうと、スタッフの一人が出てきて振り上げると、力任せに叩いた。ヒュッと飛び上るほどこたえた。三十分ぐらい尻がカッカツしている。しかし、さして痛そうな顔もみせず、無理をして我慢しながらますみちゃんに、

「ホラ、これだけ叩かれても大丈夫だろう」

という、やっと彼女は小さくうなずいて諒解した。私は、ささら竹をとって手加減しながら、大振りに振って、パンパンと二つ三つ、ますみちゃんの腰からお尻の当りを叩く。

「どう、我慢出来るでしょ」

「でも痛いすわ。やはり……役柄なら仕方ありませんもの、



辛抱することになりますわ」

傍らから、下働きの叩き役さんがなだめるように、

「ボクは、もっと手加減しますから、心配いりませんよ」

と、しきりにとりなしている。

いよいよ本番――。

一人が背後に廻って腰を押え、一人が思い切つてぐいと力をこめて環を通した二本の縄を引く。苦しげな海老責めのポーズになった彼女に、かなり激しい、さらさら竹の打撃がつづく。無事本番が終つて、それで終りかと思つたら、構図を変えて、冷酷なカメラは、二度にわたつて、この無惨な苛責なき拷問のシーンをとりつづける。



もう彼女の苦しげな表情には、演技の悲壮な絶叫以上の、リアルな真実の苦悶がありありと泛かんでいた。牢医の登場で海老責めはそこまで。

午後五時、やっと、残酷な拷問シーンは終つた。あわててかけより、直ちに縄をとく。

二時間近く縛られ続けた俣の彼女は、縄の解放と共に、バツタリと前のタタミに打ち伏してしまった。しくしくと泣いているのか、肩が震え、うつぶせの俣、そつと腕や腰をなでていた。

私は何か責任を感じて、優しい言葉をかけるか、その腕を撫でさすつてやりたい気持ちにかられたが、スタッフの眼もあるので、その心を押えて、唯黙って見守っているのみであつた。囚衣のおしりの辺りがウッスラと濡れている。

それは汗ではなかった。肉体の苦痛を、かよいい体で必死に受け止めた彼女の、それは忍耐の限界を何よりも如実に示していた、ひとつの証拠であつた。

「よかった、本当によかったよ、ますみちゃん。よく

我慢してくれたね」

石井監督さんは、しきりに彼女をなだめながら、体をさすつてやっていた。彼女のこの協力はカントクさんにしても非常に嬉しかったに違いなかった。傍らで見守る私に、つと近よると、声をひそめて、

「撮影が大分おくられていますので、女囚用の拷問シーンのかわりに、彼女で、夜もう一つ責場をつくりたいのですが、辻村さん何かいいのを考えて下さいよ」

「えッ、もう一つやるのですか。弱ったなあ急に仰有られて、何の案も持つてこなかったのですが……。本式でゆくなら、このあとの拷問は吊し責めなんです、この梁では、低くて効果ありませんね。でも、じゃあ早速、何かいい緊縛を考えてみます」

「お願いしますよ。ぐんと変つたのをね」

セットの灯は落ちた。近くのレストランで夕食を摂りつつ、必死に私は考える。カントクさんの熱意に負けて、急に引き受けてしまった私は、めまぐるしくあれこれと、夜の緊縛ポーズを頭に描いた。しきたり通りの形式にこだわらず、自由な観点で、強烈な緊縛を試みたい気持ちで一杯であつた。シナリオにはないシーンの、すべてを私に托されたチャ

ンスである。夜も又責めさいなまれるますみちゃん、可哀そうだなあと思い乍ら、もう一つのSの心は、思い掛けぬ成行で、任された緊縛を出来る喜びに、私の心は疼くように激しく揺れた。被虐タイプの橋ますみという一女優の全貌を臉に浮かべて、私の思索は続く。

夜のセットは七時より始まった。時間と共に何処からともなく、スタッフはセットに集まってくる。

これから始まるシーンは、カントクさんを始め、誰一人知らない責場であった。知っているのは、私が胸の中に描いて、やがてひとつの形になっていた緊縛の構図を知る心だけであった。



カントクさんが現われる。逸早く駆けよった私は、それを打ち明ける。

「面白そうですね、やりましょう。しかし、一体、何という名の責めなんです」

「さあ、名前なんて考えてもいませんが、強いて名付ければ、弓ぞり責めとでもいいいましょうか」

「そんな拷問方法は、あったのでしょうか」
「記録には全然ありません。しかし今も昔も責め方なんてものは自由自在、どんな方法でも責められたと思うのです。だから記録にはなくても、こんな責めをやらなかったとは誰も断言出来ません。むしろ、嗜虐性の人間の考えることは、或る程度、似たりよったりの傾向がありますから、あったとすればいいのじゃありませんか」

「うまいことを仰有る。じゃあ彼女がセット入りしたら、すぐ始めて下さい」

カントクさんは、易々として私の意見をその俤、採択してくれた。弓ぞり責めといっても、何も眼新しいものではなかった。過去カメラ・ハンドの女性などに、しばしば使

った方法で、両手を上体で縛り合わせて梁につなぎ、両足を縛って、ぐいぐい引き上げると、背が逆さに屈曲して、長時間つづけると肩の附根や、腰骨がすごく痛くなってくる。吊し責めの一種である。

折よく来合わせた竹田君に、私は細かく説明する。うなずいていた彼は、

「じゃあ、ボクが一度実験してみましよう。縛ってみて下さい」という。

スタッフの方々に意向を伝えて、身替りの竹ちゃんの、両手、両脚を縛ると、吊り上げてみる。

「大丈夫、しばらくなら持ちますよ」

そういった彼が、角度やカメラアングル位置、構図などの関係で、数度、吊り下げられて、遂々悲鳴をあげた。

「腰が痛くて、痛くて……。こりゃエライですよ」

竹ちゃん相手に夢中でやっていたが、フト何気なく振り向いたうしろに、橋ますみが憂いにみちた、かげりのある物悲しい表情で、じっとみつめていた。

「お願いしますよ」

声をかけると、

「ひどいの考えたのね。私の体もつかしら」

「本番だけ、吊り下げます。今試してみましたが大丈夫ですよ」

「恨みますわよ、辻村さん——」

キラキラ光る瞳で、じっとにらまれて、私の胸は、何故ともなくキュッとしめつけられた。

「じゃ、そろそろ始めましょう」

助監の荒井さんの声につられて、私は縄を振ると彼女に近づく。諦観の笑みを浮かべてますみちゃんは、もうあがらわなかった。

首縄をかけ、胸で菱形にして、腰から腿へと、ぎゅうぎゅうしめつけて行く。両手首の比重を考慮して、スポンジを巻いて、その上から何重にも両手首を縄でしめ上げてゆく。

更に、両足首を縄で縛り、弓ぞり責めの緊縛は完成した。囚衣を破り、乱して、美粧の通称ミゼットさんが、改めて、苦悶にやつれた女囚つゆの顔を手際よくつくる。

「辻村さん、この責めに手桶で水をブツかけたら、もっと効果ありませんか」

カントクさんは、恐ろしいことを仰有る。

「そりゃ、効果万点ですが、ますみちゃんが可哀そうですね」

「いいんです。何でもやるからと、納得させましたから……。いい映画にするためですよ」

こうして手桶に三杯の水が運び込まれる。水掛け役の下働きのスターさんと、その水の掛け方で一寸激しいやりとりがあったが、やがて支度は万端ととのう。テスト、テストで彼女の体は、宙に弧を描いて、幾度も引き上げられ、その都度、苦痛の表情がよぎった。



手桶で水をぶっかけ、更に南原一之進（渡辺文雄）が情容赦もなく、割れ竹で打ち据えるのである。

スタッフ一同固唾をのむうちに、万一を考慮して、二台のカメラが、ロングとアップをとらえる位置につく。

可憐な彼女の憂愁の顔が緊迫し、かげりは深まった。キッと唇を噛んだ覚悟の面持である。

シーンと鎮まるセット内に、カントクさんの本番の声が入高く響く。ジジジとカメラは廻り出す。

スルスルと吊られて、弓なりに宙にういた体に、南原一之進の加虐の割れ竹が容赦なく飛び交い、勢いづいた下働きの手桶の水が桶ますみの顔面めがけて、発止と飛沫をあげて炸裂した。グッと熱いかたまりがこみ上げ、思わず息をのむ凄絶さである。

吊り下げられて、絶叫するますみの頬を伝って、ポトポト垂れ落ちる水滴に、彼女のあつい涙のひとしずくがまじってはいなかったか——。

観念の眼を閉じて、尚も吊り下げられたまま、彼女は、くくっと声も立てず、むせび泣いていた。



(水礫)

進行の野口さんから電話があった。これから丹後半島の間人(たいざ)へロケに行きますから、お願いしますという。

時計をみると、午前八時十分前。出発は午前八時過ぎだとの話。いくら何でも、これでは到底間に合う筈がなかった。かねて期待していた、橘ますみの波

水桶の掛け工合に難点があつて、更にもう一度、三杯の水を顔面に浴び、やっと終つて縄を解いた時、彼女は失神寸前であつた。彼女をここまで追いやった責任の重大さを痛感して、ずぶ濡れの彼女をおぶって、私はセツトから俳優会館まで、数十米を、熱いものがこみ上げてくる思いで歩いた。

「御免ね、ますみちゃん——」

背の彼女にかけた声に、
「ウン、いいの。有難う、どうやら生き返ったわ」

首にかかった彼女の手に力がこもり、クスンと鼻をならして、橘ますみは小さくクシャミをすると、微かな乾いた笑い声を立てた。

× × ×

打際の逆さハリツケのシーンで、一度は連絡のない俣、スケジュール通りに、早朝七時前撮影所に走り、その時はロケ中止とかで、ガツカリして帰ったが、今度はこれである。このロケどうやら私に縁のなき衆生である。緊縛指導で、遂々このシーンだけ抜けてしまった。

この日、午後から撮影所で、よみうりテレビ制作の方々や阪大の大野助教授と会い、11PMの打ち合わせ。いずれにしても行かざるまい一日であつた。

× × ×

(刑罰その一——火あぶり)

国道八号線に沿った、滋賀県野州郡の、野

州公園の奥——。それが、この映画のタイトルを飾る、刑罰史のトップシーンのロケ地である。荒涼たる剥き出しの山肌。殺伐とした赤茶けた風景は、極刑の断罪を行なう刑場にふさわしい恰好の場所であつた。

午前九時から、ここで三種の刑罰が行なわれる。そのトップは火あぶりから始まった。

Kプロの三人のスタジオヌードさんが、白い囚衣で、髪に手拭をかぶせて到着する。

奥まったこの一劃——。幸いにロケを見物する人影もない。スタッフは関係者許りであつた。

火あぶりの刑にあう人はS嬢——。

何をされるのかと、顔を硬ばらせ乍ら、恐る恐る、火あぶり柱の前に立つ。

火罪の柱は、五寸角材で長さ二間、土中三尺ときめられているそうであるが、おおむねそれに準じてつくられてある。

刑罪詳説によれば、『台薪の上にのぼせて罪木にそわせ、輪竹の中に入れ、上肘を釣竹に縛りつけ、腰、腿両足首を柱に縛す。いずれも太縄をかけ、泥を塗込め、その上を小縄にて縛す。首縄を太縄二重にて柱に結びつける。これ又結び目に泥を塗る也。罪木に縛し終れば、茅薪をもって四面を覆う。これをか

まど造りという。しかして後、茅一把ずつ結びたるもので、二重三重につみ上げ、中程より上部に、茅を散らしかくる。その外観、殆んどみの虫に非ずんば茅屋の如し」とある。

検使立合にて、風上より火をつけ、むしろで煽り、人間バーベキューが出来上ったところで、鼻を焼き、更に男なら陰囊、女なら乳を焼くというところまで火をして終るのが、百ヶ条定書のルールであつたらしい。

火あぶりは放火犯専門で、必ず引き廻しの刑が伴つたものであつて、それには、諸人への見せしめの効果を大いに考慮した刑罰であつた。

定書はいざ知らず、映画形式の場合、これも見せ場の一つである。

縄は荒縄を使ったが、腰を蔽う破れ布一枚以外は全裸である。オッパイを隠蔽する目的で、しっかりと胸縄をかけ、かなり見応えのある緊縛にする。荒縄が肌にじかに触れて、シャコシャコするのか、彼女はしばしば眉をひそめた。縛り乍ら前に廻つて、

「モデルで縛られたことあるの？」

と、聞くと、

「ありませんわ、一度も。こんなのは今日が生れて始めて……」

「縛られたモデルになつてみない？」

「そんなのイヤだわ」

これではハントに全然、脈はない。

「よく、こんな火あぶりの役をやる氣になつたね」

「今朝、撮影所へくるまで、全然知らされなかつたの。びっくりしてるのよ」

罪木への縛りは完成した。非人が三、四人茅の束を次々運ぶ。すべては意外と史料に忠実であつて、ええ加減な点は、むしろ緊縛の方法ぐらいであつたかも知れない。

茅を山の様に積み上げ、彼女の姿が、すっかり茅の中に没し終るまでのシーン。数度テスト、リハーサルのアと本番。

これはあっさり終つた。アップも撮り終り彼女は解放される。

彼女を型どつてつくられた、弾力性のある模型人間を、そっくり同様に縛つて、罪木へ身替りに立てる。

火をつけるシーンだが、うまくやらないと茅のおかわりが無い。非人の位置、カメラアングルをきめて、本番——。ガソリンをぶっかけた茅に、非人の松明の火が点火、パツと黒煙を吹き上げて、見る見る火炎は激しくなつて行く。



身替り人形の燃えつきてゆくさまをS嬢は痛ましうに、可哀そうだと呟やき乍らこの自分の分身に憐れを注いでいた。

仮に人形とはいへ、彼女にとっては他人事ではなかつたに違いないのであつた。

(刑罰その二——三段斬り)

恰度正午から始まつたこの数分にもみたぬ

シーンが、延々夕方五時前までかかった。この役は、三人の中で、一番お俠な感じのハスキーボイスのM嬢である。

断崖の上の、巨木に吊り下げられ、斬罪役の役人が真剣一閃、返す刀で又一閃、首と胴との泣き別れ、鮮血飛散するという厄介な場面である。

首と胴は、断崖から転がり落ちて、測に落ち、水面を真赤に染めるという段取りで、仕掛けがあるだけに、撮り直しはきかない。

尾根伝いに、私達は荒々しい岩礫の丘に登る。M嬢は快活で協力的であった。いさぎよく私の縄を受ける。コントラストを考えて、緑の太縄を使用する、首縄を胸で数度ひねって二の腕をしめ、後手に縛して腰に結ぶことにした。

この吊り責めには、かなり長時間を要するようなので、吊りパンティを使用することになった。撮影所というところは、色々と便利な小道具が揃っているものだ。

一旦試みに縛った縄を解いて、M嬢に脱いでもらう。スタジオノードだけに、脱ぎっぷりは鮮やかなものであった。十数人の面前で憶する色もなく、囚衣をパツとぬぎ、ついでパンティも脱ぎかけようとした。慌てて布部



君が引き止める。若い連中が多いから、白日の太陽の下で、全裸を曝されては、頭にくるかも知れない。股に力がかかるので、その当る部分は、かなりふくらんで、厚く出来ている。堂々たる見事なオッパイの谷間で、吊りパンティの紐を交叉させ、紐をしっかりと結び合わせる。背に吊り環がついている。囚衣

を破り、汚して、再び着てもらう。改めて縛り直す。先刻から、仕掛け人形作成のオジサンが、M嬢そっくりの人形の、首、胴、脚部に、生々しい血痕の色をつけて、繋ぎ合わしの作業に余念がない。

非人、捕方役人が揃ったところで、山襲から、こずかれてよろめき乍ら、一同に引き立てられてくる女囚登場シーンのテストが、遙か下のカメラ位置との間に、携帯マイクを通して、再三再四行なわれる。

ついで、巨人が使いそうな、大扇風機がエンジンジンの響きも凄まじく砂塵を捲き起す。索漠とした無気味さが、次第に辺りに立ちこめ始める。

私は降って、下からしきりにカメラに、テストの光景を納め、その又私を、よみうりテレビのカメラマンが十六ミリカメラで、しきりに私を追っている。撮ったり、撮られたりややこしいことだ。いずれは二十四日の11PMに予告的に発表する腹づもりに違いなかった。

荒涼の原野に砂塵は舞い、木の葉は風に散った。鬼哭啾々たる殺戮の刑場に、女囚の体は大樹の枝の宙にスルスルと上る。断罪役人が、ギラリと真剣を抜き放つと、八双に構え



た。カット――。

断崖から私は招かれている。慌てて駆け上ってゆくと、既に身代りの人形に、M嬢の囚衣がきせられ、その傍らに、サンサンたる陽光を浴びて、囚衣をはがれた彼女が、こぼれそうな胸の隆起を抱えて佇立していた。余りにもM嬢生きうつしの身代り人形に、私の心は妖しい音を立てはじめる。この人形を、そっくりその儘、同じ縛り方をしなければならなかったのであった。

縛り終り、大樹に吊り下げると、ロングでは、最早見分けの到底つかぬ、女囚の断末魔の姿がそこにあった。

ぶっつけ本番である。最初は、胴を斬って返す刀で、首を落す予定を急変更して、首から胴へと刀を使うことになった。最初、胴を斬った場合、重さでガクンと下る首が奈辺になるか、それが見当つかないからであった。斬罪役が、真剣で十数度近く、型をテストしていた。

祈るような気持で、遥かに見上げる大樹の下に、今彼は刀をふりかざした。マイクが唸り、細々した打ち合わせが彼我に流れる。

本番――。カメラ持つ人々は一斉に構え、十六ミリカメラマンはファインダーを真剣に覗いていた。

合図と共に振りかぶる真剣。一閃したとみるや、首がコロリと落ち、血しぶきと共にそのコウベは、コロコロと水面に激しく落下していった。返す刀で胴をきると、見事に下半身がドサリと地上に落下した。首と下半身のない真赤に染まった胴体だけが、夕陽を浴びて、凄絶に揺れていた。

女囚のクローズアップ。恐怖の表情――そ

れはもう私にとっては、用済の蛇足として撮られていたのであった。

(刑罰その三――牛裂き)

陽は正に西山に没し去ろうとしていた。牛裂きの刑にあうA嬢は、およそこうしたプロの世界に似つかわしくない。純真無垢の乙女であった。午前九時から延々と、およそ八時間じっと待って、ようやく彼女の出番に到達したのである。ポツテリとした、この可愛い娘は、表情をこわばらせて、私に縛られていた。首から胸にかけての前手縛り。あわただしいスタッフの動きの中で、私の心も次第にあわただしく揺れていた。九月十九日の今日という日が、この映画の最後の日になるクランクアップの日であった。例え陽が沈んでも、どうしても撮り終らねばならぬ苦境が、カントクさんの表情を暗くしていた。

この刑の処刑者は、二頭の黒牛であった。果して思うように動いてくれるかどうか、それがスタッフの危惧でもあったのだ。縁あって一翼をになった私にとっても、それは他人事ではなかった。完成目前で、日暮れを迎えたことは、カントクさんにとって最もつらい天然現象であったことだろう。

引き立てられた女囚が立杭を股に挟んで押

し倒される。非人二人が、開かれた左右の脚に太縄を結び、それを牛の鞍に繋ぐ。

二、三度のテストで、そのシーンは慌しく本番を終った。股裂きの処刑される時、絶叫し、暴れてみよといわれても、演技の素養のない悲しさ、彼女の叫びは、声にならなかった。まるで良家の子女のようなタイプのA嬢に、それを希むことは酷であったかも知れなかった。

ついで、身替人形が、私の手によって、同様に縛られて転がされる。牛の角にタイマツがともり、火に狂う牛が東西に狂走するシーンが始まる。尻に一鞭くれると、牛は歩みを早める。スポンとかすかな音をたてて、片脚は余りにも飽気なく、腿の附根からもぎとられていった。そして血沫――。

誰の眼にも物足りなさは、あきらかであった。ライトを点じて、再び本番。今度は牛が仲々動かない。フィルムのみ無駄に廻っている。又ぞろやり直し、そして本番。三度本番を続けて、遂にもぎとられる残酷感は浮かび上ってこなかったのである。

(木馬責め)

溶暗の逢魔が刻の名神ハイウェイを、私一

人をのせた車は、走りつづける。刑場のロケ地から、夜の最終のセットの京都撮影所へ？ 昂奮と嗜虐のスリルを乗せて、私はひたすらに飛ばしていた。

残る木馬責めひとつを残して、一カ月に亘る、私の役目に幕は降りようとしていた。帰りたいという、彼女達をなだめすかして、やっと、火あぶりのS嬢と、牛裂きのA嬢が納得したのであった。

車での通勤なので、滅多にのまないビールであったが、撮影所近くのレストランの夕食のひととき、私はのまずにはいられない気持ちにかりたてられ、思わず一本のビールを注文した。激しいコーフンの渦が、一杯のビールによって鎮められてゆく思いであった。午後十時の、撮影が終る頃には醒めていることであらう。

仄赤い顔を夜風になぶらせて、私は静まり返った撮影所の第一号セットに歩を運んでゆく。いつの日か又、この所内をこうして歩くことがあるかも知れないが、或は最後になる



やも知れなかった。長かったようで短く、またたく間に経過した、緊縛に明け暮れた慌しい日々を、私はそぞろの感懐をこめて反芻していた。私の手に掛けて、縛られた十六人の女性の顔が、一人一人臉の裏に蘇がえってくる。

尾花ミキ、橘ますみ、賀川雪絵、白石奈緒美、英美恵、小島恵子、牧淳子のスターの人々――。六人の外人女性、三人のスタジオアイドルの娘、それらの顔の一人一人が私の脳裡に去来した。SMのカメラ・ハントに憂身をやつし、女を縛ることを最上の欲びとする私にとって、この果報は正に地上の樂園に等しかった。



緊縛の最後の仕上げの責めの時間が、やがて近づきつつある。木馬上で緊縛の苦しみに悶え、責めにのたうち喘ぐ、二人の若い女性の、その手段はすべて私に一任されていた。錦上華を添える、思いきった縛りをして、この幕切れを飾りたい。そんな意慾が沸々として湧き上ってくる思いであった。

午後八時撮影開始——。私の想念は既に煮詰まっていた。スタッフ一同、次はどんな縛り方が出るかと、私の動作に注目しているようであった。どの人々にも疲労の色が濃かった。

高々と吊り上げた女囚を木馬の上に徐々に引き降してくる、そんな手筈になっていた。いさぎよく協力してくれることになったA

嬢、S嬢が、セツトに入ってくると、私は躊躇せず、近寄っていった。

A嬢には、背で六尺棒を交叉させて、それに縛りつけるX字型はりつけスタイル。

S嬢には、両手を高々と吊り上げ股を開き気味に縛って、両膝を折り曲げて縛りつける強烈な縛り方を試みることにした。

布部のエーちゃんと、竹ちゃんは、最後まで快く協力してくれて、縛り方を説明すると早速諒解して、手伝ってくれたが、この二人には終始、お世話になった。

モデル嬢二人は、かなり強烈な縛りであるにもかかわらず、不満の顔も見せず体の力を抜いて、緊縛の体勢をとっていた。どちらも素直ないい娘で、機会があれば、一度ゆっくりとカメラ・ハントで相見えたい気持ちがしきりに走った。

ライトの当る場所へ、担ぐようにして二人を連れ出してくると、スタッフから軽いざわめきが起った。奇抜な緊縛アイデアが、人々の心を奪ったのかも知れない。

滑車によって吊り上げられ、木馬上に降下するテストが数回つづく、ミゼット君の手で二人の顔に血が流れ、凄惨を極める様相に変化する。カントクさんもうためらわなかった。到底長持ちする緊縛でないとさとしたのか、早々と本番の声をかけ、二人の木馬責めは無事完了した。

痺れて感覚がないというX字縛りのA嬢の腕や手首をもんでやり乍ら、私は衷心より、感謝の礼を二人に述べた。ラクなポーズも、苦しいポーズも、すべては私一人の考えとあれば、彼女を苦しめ、嗜虐の対象としたのは外ならぬこの私に責任のすべてがあつたからである。

完成の記念写真は午後十時——。男ばかりが疲れきった顔を並べて撮り終った。

石井組の部屋には、完成を祝つてのビールや酒が山と積まれている。この昼居坐れば、すすめられる酒かも知れないが、家路に車で向う私にとっては、飲んではならない酒であった。スタッフに別れの挨拶をし、石井監督と固い握手をすると、静かに部屋を出た。

華々しくこの映画が、大当りする事を希いながら、夜更けの京都の街を一路我が家へ、私の車はスピードをましていった。

理恵女献身について

沢 潟 し の

村上文敏様。股田刑一様。私のつたない作品を過分におほめ下さり、汗顔の至りに存じ上げております。

「理恵女献身」を書く動機になったのは一般の文学作品の中に、処刑や拷問場面が書かれる場合、ほとんど例外なく知覚マヒ、喪神、気絶状態ということにして、受刑者の心理を逃避して書いているようです。

しかし、実際にそれに近い経験をなされた方のお話しをうかがっても、又、私の乏しい体験から推察してみましても、人間というものは命の瀬戸際というような時には、案外平

静に事態を直視していられるものである、と考えられます。そういう事をテーマにして書いてみたかったです。

しかし、文筆に不馴れな私には、プレスコードにふれる核心を避け、周囲を書いて問題点を浮き彫りにするドーナツ式描写法が出来ませんので、発表された文章は、相当にカットされております。

その上、幕末（黒洲嬰一様によると、理恵女の処刑は慶応四年だそうです）に串刺しという廃絶した極刑を行なわせるためには普通の罪状の囚人では無理なので、御殿女中の中

でも特殊な存在であった別式女を、一藩の安泰を図るための人柱として、処刑することにしたわけでございます。

有名な加賀騒動の浅尾殿も、姫方の馬術指南役をつとめていた別式女で、彼女の場合は武道の心得のある女故にか、普通の拷問ではビクともせず、しかし何としても白状させなければならぬというわけで、女責めの極といわれる「蛇責め」にされたのですが遂に白状せず、そのまま責め殺されたのだそうです。

理恵女の場合は浅尾殿とはことなり、全くの身代りですので、股田様が物足りないといわれたようなところが、あちこちに出来てしまったのです。私としては出来るだけ非情で通すつもりで、男性的に書いたと思っておりましたが、読み返してみると、やはり私自身の弱さと申しますか、甘さが目立つように思われ、それに、クライマックス部分の描写がいけなかったものか、カットされていることが相乗的に作用して、文章全体が調子の弱いものになってしまったのでしょう。

理恵女に受けさせたお仕置の中では、実際に行なわれていたものを多く用いましたが、全くのフィクションの部分もありますので、主なものを書き出して見ます。

まず、理恵女が御殿に上った時以来、非人の身分にされ、人身の畜生とみなされていたということ。下屋敷まで網袋に入れられて送られたということ。この二つは全くのフィクションです。

又、囚衣として脇の下までの長湯文字を着用させた実例もないようで、地色や寸法はさまざまですが、どの藩でも一応は着物の形をしたものを着せていたようです。

士分以上の男及び貴婦人などが、罪人（切腹や謹慎等の濫刑ではなく、縄で縛られ、非人の手に渡されて、執行される死罪以上の重い公刑に処せられる人）になった時には、定席の座敷、又は縁側から白洲に引きずり下して、身分に従って着用している礼装を脱がせてから縄をかけます。

これを「御引落し」と呼んで、行刑上の手続きになっており、これによってその人の罪状が明白になったことを立合人一同に示し、本人には、今までの身分格式を改易、一切の人権を剥奪されたということを思い知らしめる儀式です。

御引落しになると、囚人、あるいは罪人と呼ばれるようになって人外になりますから、特に許された場合（八百屋お七の引廻しの時

のように）のほかは、礼装と名のつくものはもちろん、絹物も一切身に着けられなくなり人と言葉を交すことも許されません。又、錠の掛けていない場所では、必ず縄か枷で手足を拘束されていなければなりません。

実際には例外的な話も大分あるようですが、れども、それらは囚人が、藩の特別な人物だったり、あるいは金力によって掛りの者を買収した場合のようです。

追放、遠島などの軽い罪の時や、吟味中入牢申付などの時には、袴や打掛けだけをとって、縄を掛ける場合も多かったらしいです。

（江島殿は打掛けだけとって縛られました）しかし江戸の評定所では、死罪以上の重い死刑の時には、丸裸にしてから縛って曳き立てるのが通例になっていたようですので、理恵女もその通りにしました。

罪人の額に焼印を捺すことは、戦国時代には、ごく普通でしたが、江戸時代になってはだんだんに腕の入墨に変わってゆき、幕末まで焼印を用いていた藩は、珍しい方です。井上和夫著「諸藩の刑罰」には六例が出ていますが、その他にもあったようです。

焼印は「ぬ」の一字印などというのが普通だったようですが、遊女に焼印を捺す話しは

フィクションです。

唐丸籠には、役所に常備の床板に竹籠を伏せて錠を下す開閉式の物と、理恵女に使ったような囚人を編込んでしまう一回限りの物の二通りがあり、どちらでなければならぬという定めはなかったらしいです。網乗物と網駕籠は、人を乗せる物ですから何挺と数えますが、唐丸籠は、既に人ではない囚人が乗るものですから何箇と呼びます。

理恵女の晒された時の晒し台は私の創作でして、生晒しは、地面に土下座させて置くのが普通でした。

西欧では処刑前に女囚の髪を切りとってしまふというのが普通だそうですが、日本では特に髪を切ったということは聞きません。

しかし私は、長い髪を切られる恐怖と、女の誇りである黒髪を、無残に切り取られてしまう屈辱感を、理恵女に味あわせてやりたかったのだ、わざと断髪の場合をこしらえ上げました。今でもその名残りは強いと思いますが昔の日本女性が、とくに黒髪と鏡は命にたとえられるほどに大切にすることは、たいいていの方がご存知でしょう。でもこれは、男の方達にはご理解いただけない情念とでもいえるものかも知れません。



創作

朝の日の診検

花

影

叢

受付は午前九時まで。一分たりともおくれるわけにはいかない。といって、それほど時間が切迫しているわけではないが、刻々の時のすすみが苛だちをつみかさねる。あと三十分。瞬時にそれが消え、あと二十九分……。

徴用工場に勤めている父と姉を送りだす朝のいつ時が過ぎ、残された私とママンはお茶を飲んでゐる。お茶といっても白湯である。ずっと前から、茶葉などは、ありはしないのだ。私は意地が悪くなっている、終始無言でうろうろといつまでもおちつかないママンを見つめている。このところ見るかげもなくママンはきたならしくなった。ほったらかしに

された豚のように、変な匂いまでする。ベニヤ板に灰色の妙な色のペンキが塗られた壁に私の拗ねた陰気な感情がぶつかり、人気を失い無関心な視線のなかで無意味な演技をつづけなければならぬピエロ役者の影のように踊りつづける。

父や姉は、不気嫌な私にとりあわない。ジャガイモのスープを、それが義務であり年来の習慣でもあるように行儀よく音たてずにすり、確実な速度をもって終るとさっそくテーブルから離れてしまう。その時、父は私の頭へ重いやわらかなてのひらを置く。私の小さく硬く凍りついた胸がふいに溶ける。眼が

熱くなる。子供のころのように父に抱きついてひざに頬をこすりつけて泣きだしたい。胸に強くそんな想いがせまる。しかし、私の外面の装いは私を裏切り、かたくなに固い姿勢を崩そうとしない。出かかりそうになった涙もある一点でとまり、眼尻が逆にかわいてむず痒くなってくる。しかし眼をこすることもしばらく我慢しなければならぬ。今こそればまだ残っている涙の気が、私のひびわれかけて赤茶けているこぶしにみじめな糸をひくであろう。父が去る。ママが後を追って行く。不潔なママ。豚のように匂いのするママを、父は入口のドアの手前でたから物

のように大切に抱くのだ。

姉は怜悯だ。父の陰ですばやく身支度をすますと、一足さきにドアの隙間にすべりこむように入って消えてしまう。そうして二人はいなくなる。朝から退場する。さり気ないそぶりが身についたベテランの俳優の所作のよう。いや、肉親のふたりに私がかくのところとはいえない。なんといっても私と母はその壁の陰にあり、壁によって守られているのだから。父や姉は、やはり見事であり毅然としている。この街の人たちの打ちひしがれたような様子や、そのかげで鼠のように闇取引にうろろする姿とくらべて格段のちがいがある。——大げさというのはやめよう。この人たちの闇取引を非難することなどはだれにもできないことなのだ——父のしていることにさして言葉は要らない。ただここに私たちが家族の、同胞の、この街での事態があるだけなのだ。そして今の朝がある。

ママンが厨房から戻ってきて、首をおさず上げ、時計をことさら見つめ、いいにくそうに、「お前、はやくしないと……」というのだが。

それ以上言葉はつづかず、もじもじしてしまふ。それまで以上に私はママンに意地悪く

なっていて、後の言葉をいわせてしまいたい衝動にかられる。そうだ。いつてしまえばいいのだ。今日は検診日、ママンの日ではなく私のよ！それがどうしたのよ。

いいにくければはじめから何もいいたさなければいいではないか。わざわざ時計など見るふりして、愚かな臆病者のおしゃべり豚。けれども、ともすれば今にも自身のみじめさに崩れおちていきそうな心のささえとして、一筋残った緊張感による反動から、そうなっていることは私にもわかっていて。私の感情はヤツアタリしてママンにぶつかっているに過ぎない。所を変えれば父や姉にもむかつていくだろう。今までそういう争にならなかった。父や姉に対しては私は理性的になる（と私は自身に説明をころみるが、いったん感情の嵐がおとずれば、理性など埃りぐらいの重みもなく吹きとんでしまうだろう。その時を私は恐れている）焦燥はいい。泣くことも喚くこともまたよいであろう。それには、やはりそれなりの理由がある。理由によって私は一方的に赦される。それが真実だ。私は彼らの娘であり妹であるということの絶対性！が、何よりも二人は忙しい。私のヒステリーにかまっていられない。私とママンは檻のな

かにとり残された二匹の豚どうしだ。ママンも私のむきだした牙に正面切って向かわなければならぬ。たくみにそれを避ける賢さをママンはもたない。どうしてもぶつかりあってしまう。といって私に立ちむかう気力もない。先天的に闘う能力を欠いている。ママンの使える術は、こちらを向きながらどこまでも後ずさりするだけなのだ。うしろには壁がある。やがて壁の角までさがれば、後はひたすらに、からだをちぢこませるだけだ。

ママンの瞳は薄い澄んだ空の色だが、動きがとまると色が濃み時に灰色に見える。そうになると焦点がどこにあるのかわからない。ママンの世界は、距離感のない灰一色のぼんやりしたもの塗りつぶされてしまう。前にいるはずの私のおとす影も、灰色に吸われ無力になる。保護色ともいえるべき変色作用をママンはもっている。

お前とママンが私を呼ぶのはママンのなかに働いている習慣性であり、私の反応も、もしかするとそれ以外のものではない。ひとつの習性として、私は意識的に時間を無視するふりをつづけ、食後の茶ではない白湯を愉しんでいる。呪われてあれ！人はどんな処、どんな状態にあっても、何かしらの愉悦を見

いだす能力をもっている。ママンのおろおろ振りが度を高めつつあるのを、私は湯呑みのブリキの椀をまわしながら量る。そのうち、ママンは逆上して口走るかも知れない。灰色は灰色でも時に濃淡があるのだ。絶望は決定的に、断固としていなければならない。私はそれをなけば望んでいる。ママンの口からそれを聞きたい。

よくころろと肥り、少女のように底にばら色をひめたママンの肌だったが、それに今もほとんど変りはない。いったい昔と変りがないという事は、ここではひとつの奇蹟なのだ。ただ、それには奇蹟というロマンチックな言葉にふさわしい輝きが、充分に残されているとはいいい切れない。少しずつたまって来た埃りや脂の垢が、やがてはヴェールとなって表面をおおいつくすころは、ヴェールの下も朽ちてしまうだろう。

昔！ 六カ月前の昔。ある春の夕刻。私たちの家を襲った泥靴の音の重々しい一団の男たちに連れられて、これまで足を踏み入れたこともなかった下町のいっかくのこの街へやってきた。木造の古い朽ちかけた学校とも兵舎ともつかない陰気な建物の一室が、これからの私たちの守るべき家であると知らされ

た時の困惑とみじめさの胸をついてくるなかに、ちよっぴりと安堵感があったものだ。何かしらそれ以上のひどいことを私たちは直覚していた。しかしともかくも屋根があり、壁や床がある。くぎられた少ない時間のなかでまとめた手もちの荷物を、私たちはそこにひろげ、寒い夜を毛布にくるまって過ごした。翌朝になると、驚いたことに無人と思えた建物に、割れ返るほどの人と荷物がごった返している。二、三日は混乱のうちに暮れて、何が何だかよくわからなかった。手もちの食糧が尽き、父が場所をさがして役所へ出頭し、配給の券をもらってきた。配給をとろうとして、金をもたずに行き、あわてて引き返し、家族の所持金を調べると、あきれた事に百三十M。配給一日分が約三M必要だった。この分ではひと月と暮らせないと青くなった。当面の責任者であるママンは、呆然とするばかりで役に立たない。

「でも宝石があるわ。惜しいけれどこれ売ればいいんじゃない」

大発見でもしたように、そんな事をいいだす。

百三十マルクも姉がおこづかいとしてポケットに持っていたのだ。万事にすっかりして

いる父も、現金をもたない生活に慣れていたため、用意をいっした。ブーズンの街で実際に現金を必要とすることなどなかったのだから仕方がない。ところが同じブーズンでも、ここにはどうやら顔で幾らでも勝手に品物をもってこれる商店は一軒もないのだ。建物から歩いて半マイルも行かないうちに私たちは発見した。ザッサ街の場末の街並があり私たちはあつたが、その手前に急造の有刺鉄線のバリケードが張られているのだった。通りにむかってゲートがあり、兵舎のような鉄のハウスが手前にあつた。その前にSPと呼んでいる憲兵が武装して二人立ち、ゲートを守っていた。事情のわからない者が通ろうとすると大声をあげて制止し、銃剣を凝し、もと来た方へ追いはらった。何か通行証のようなものがあるらしく、それを見せて通るものには制止しない。それを見てバリケードに沿っていくと、やがて円をえがき逆方向からゲートへ戻ってしまった。つまり周は二マイルの陸の孤島を私たちは確認したのだ。

このようなところがブーズンの街にあったことを不覚だが私は知らなかった。母に聞いてもだめな事はわかっている。父に聞いて

みた。

「兵營だったな」

というのみで、それ以上しつこく聞いても父もどうやら答えられないようだった。

ゲートのほるかむこうに、ザッツ街の中心らしい賑やかな屋並が見える。ザッツそのものが下町の場末で馴染みのあるところではないが、魚河岸のあるブーズン河へ出るために通った、おぼえがある。そうだ、ゲートからの通りの突きあたり辺に市営電車の終点があるのだ。そのむこうにブーズン河の支流があり、島になった陸地が魚河岸になっている。

古いブーズンの街はその河岸に、沿革をもっていた。郷土史の授業でそれを習い、魚河岸を見学しレポートを書いた。それほど昔のことではないのに、まるで一世紀も前のことを、老人が懐古するように私は思いだす。

ブーズン。

ブーズン地方の中心都市。人口約五万五千——避暑地としてシーズンには多くの観光客を集める。名産はブーズン模様といわれるきらびやかな絹毛交織の織物。ブーズン焼き。美しきブーズン。なつかしきブーズン。

しかし、このもと兵舎の街もまぎれもなくブーズンであろう。パリケードの南側は河に

面するらしい。陰鬱な灰色の大きな倉庫がならんでいる。東は、街。西は広い空地があり廃跡のようだが、そのむこうにボーヘンの山なみが中空に、稜線をえがいている。山脈へつながる台地の中腹にブーズンの中心街があり、ホテルの並んだドーチェ通り、別荘街のヘルウェル丘街がある。家々の窓は季節の花が咲きこぼれ、夕昏れの驟雨にワインでの晚餐を囲んだ灯がほの青く滲む。

ブーズン地方は中世はボーヘン山脈のかなたのボーヘン王国に属した。ウェルモンク家のヘルト帝国の拡大にしたがって併合され、第一次世界大戦後ヘルト帝国の分裂に際し、共和国として旧ボーヘン地域が独立したが、大戦の敗戦国ジャークにメーク党政権が発足するとジャーク人の多いこの地方は係争地となった。ジャークの次に多いのはイスヤ人で約三〇パーセントを占める。共和国の多数派ボーヘンは二五パーセント。ここでは少数民族だ。民族自決を旗じるにしたジャークの運動に列国が動き、ついにジャークに併合された。併合前夜、ブーズン市を中心に経済面での実力を握るイスヤ人は政治的にイスヤ人排斥を叫ぶジャークを恐れて三つに分裂した。イスヤリヤの野々、と中東の歴史的故地への

復帰を叫ぶ団体。縁戚を求めて他国亡命へ旅立つ者たち。そして、

「イスヤリヤへの旅は新しい十字軍だ。たしかに私はイスヤ人だが、それ以上にブーズン人でもある」

と家に集った親戚一族を前にいった父のよきな人達。

私には政治はわからない。ブーズンがジャークに帰属する事が不当である、ともいえない。私達家族は父に従った。父が運命をきめたことを私がどうして恨めよう。私にとってもブーズンの街こそはすべてだったのだ。

美しきブーズン。

なつかしきブーズン。

パリケードに閉ざされてそれがどんなに遠いものになってしまったか、それからの日々私たちは確実に苛酷に思い知らされた。

春の夜泥靴でやってきて、ゲートの門に姿をあらわしたメーク党のSPたち。私たちの上をおうう陰險な権力を、彼らは体現している。彼らはいったいブーズンのジャークたちがまねいた復讐の使徒だろうか？ 単なる悪魔たちだろうか？

とにかく、百三十Mでは生きていけない。父はSPたちの事務所へ出かけ、交渉したが

資産のうちの現金はイスヤ人経営の銀行もろとも封鎖されたことを知らされただけであった。

一週間ほどでこの街の混乱は状態のひどさは変りなかったがひとまず收拾されたようだった。SPたちの他に行政機関ができ、当面の生活に指針を与えた。成年者の徴用制がしかれ、父はもと自分の経営していたズーズン織りの工場に技術者として徴用され、いくばくかの報酬を得る道がひらかれたので配給の食を確保する事はできた。姉は同じ工場の女工になった。

家に残った女子供のチェックのために、一週一度の検診日がもうけられた。衛生道德保持の目的はもっともらしく、医学に名を借りたSPたちの鞭撻のショウがはじまった。

ママンが月曜日。私が土曜日。検診日の朝がそうしてやってきた。

アパートマン三号と呼ばれている、この建物の一棟には約三百の家族がつまっている。その計算からいくと一平方マイルのこの街に押しこめられたイスヤ人の総数は約一万であろう。

はじめの頃、私は街に送りこまれた人たち

のなかに知人をさがして歩いた。驚いた事にひとりの親しい顔にも出会わない。この事はいったい何を意味しているのだろう。私は考えてしまった。私たちが逮捕されたのはイスヤ人という他に何か特別な理由でもあったのではないだろうか？あるいは偶然に私たちだけがピックアップされたのではないだろうか？私が在学していた聖P学院の高等部のイスヤ人生徒がいた。クラスは三五、四十人編成だったから、半数を越す。彼女らはどこへ行ってしまったのか。今でも彼女らは聖Pの鐘のもと、アカシヤの並木道を、肩を組んで歩いているのではないか、という幻想が私を悩ませた。外へ出る事のできるようになった姉に、ズーズンの街の様子を聞くと、街はジャク一色、それも強大な軍隊に占拠されていて、イスヤの残した住宅が彼らに使われているという。いろいろ考えて、私が得た結論はこうだ。私の知っている限りのイスヤ人はジャーク軍の進駐以前にズーズンから退去してしまっただけだ。私たちは見事にとり残されてしまったのだ、という事だ。

この街の一万の人たちをよく観察すると、イスヤのなかでも下層だった人たちだったという事がわかる。それでもズーズンの人た

ちだったことは訛りで明らかだ。市民より在地の人たちが多い。そのうち、ドーチェ通りの裏の靴屋の一家だとか、ホテルのポーターだったとか、市役所の売店のおかみさんだったとか、薄い記憶からはがれて来た見おぼえの顔が私にも見えて来た。そのほか市民では下町の小商人、市場の労働者など下づみの人たちがあらわれて見えてくる。それより多くの、ズーズン郊外の農民。

イスヤ人である前にズーズン人である。立派な言葉だ。

私は学校の教科でも好きだった歴史を思いだす。王家の興亡。ロマンチズム。胸のときめく流亡のセンチメント。何という浅墓な歴史を私たちは習っていたのだろう。

犠牲者は常に無名の庶民でしかないのだ。逃げ損ったおかげで、私たち家族も庶民になったに過ぎない。

動物園の猿の檻に追いこまれた新参の猿の気もち。イスヤの名はむなし。孤立した、とり残された、異和感の方が胸にせまる。

耐えがたく長かった夏。夏は暑い。私はそれを観念として知っていただけだった。避暑客のくつろぐホテルのプールサイド、上流のズーズン河の澄んだ青い水、木立深いポーヘ

ン山系のところどころにある濃紺の湖。人氣がなくなり静まりかえった聖P学院の校舎。白い陽の照っているテニスコート、厚い緑をかぶり老人のように尊大になったアカシヤ、夏はそれらにあった。暑い夏！ 容赦のない熱気。建物は人の温気にうなり、戸外は灼けつくフライパン。唯一の慰めは共同浴場のシヤワーだ。水の出が悪く時には流れる汗の方が早いくらいのものだが、使用を赦された時間内、一瞬の快をむさぼろうと蟻のように私たちはそれに群る。一応板仕切りで男女が分けられているが、どうしたわけかところどころ隙間があり更衣のところなどたやすく男たちの目についてしまう。男の視線が突きとおるように痛く、最後のものを足をくぐらせてぬぐ時、うずくまってそのまま石になってしまいたいくらいみじめだ。

人はいかにかなることに慣れることができる。ということは安易だ。恥ずかしく、消え入りたい感情にもし慣れることができるならば、それははじめから私に受け入れられるものであったことを私は認める。慣れる、という言葉ですべて説明はつきはしない。暑いということとは単純で偉大だ。人間の感情などはその前では芥子粒の変化ぐらいのものなのであろう。

洗しの水道の蛇口で満足せず、私もどうしても混浴に等しい見世物になりたにわざわざ行くのだろうか。けっきょく裸になることなどはどうということはないのだ。暑さが単純であるなら恥じいる気持ちは影をもっている。ふてくされたつもりになってマゾヒスティックな感情を少しごまかしている。

それらを私は自分にも他人にも赦しているわけではない。やはり赦しがたい。狭量、単にそれかも知れないが、それが私の最後の拠りどころである。

私のみじめな青いはだかを盗み見る男たちの目の多くは卑しい、炎を奥によどませて、チラリと見る。見るならば堂々と見るがいいのだ。どうしてわざわざ変な目つきをしなければならぬのだろうか。わけは私にもわかっていて。私たち人種の名を冠した特別法がジャークの議会を通過した時から、男たちはそうなるべく運命づけられたのだ。結婚した男女以外の交渉は禁じられた。その前提と見られるすべての行為も罰せられる。時代錯誤な姦通罪が復活した。官憲は、密告者を重用し、法の権威はすこぶる高い。独身の男は正式に結婚すればよいのだが、この施設内では事実上不可能になっている。届出を受理する公式の機関が欠落しているのだ。しかし法は法として憲兵に守られている。出口を失った若者たちの情欲は屈折し、一瞬の視線にほむらと燃える。燃えるなら燃えよ。赤き炎をもて、変にゆがんだ目つきは、情欲に目がくらんで頭に来ているからだ。自分のセックスのみにとらわれている男。その卑しさを私は赦しがたい。

しかし、愛！ あこがれの言葉。愛はどうやら形式を存在のなかに必要とするらしい。伝統、生活慣習、そのなかでの愛であるらしい。若きウェルテルがいう。わが知識、わが抱いて立つ階層、わが本能、それらを誇りとせず。わが誇りとするところはただ一つ、わが心情である。ウェルテルの心情は残念なことに文芸作品のなかにある。文芸、それは私たちに形式を与えてくれる。ウェルテルの心情すらも活字になったあとでは形式である。

私は娘らしくないことをいっている。愛も美しき心情も雲の彼方であこがれであってよい年ごろであろう。年ごろが年ごろでなくなったのはこの半年のせいだ。いっぺんに余り多くのことを私は見すぎた。それらから学んだなどとは、私はいいたくない。人間がどん

なものであらうと、私はよいのだ。形式のなかで未熟な幼児のままで私は生きていて、一生そのままで終わっても、後悔しなかったであらう。美しく装った、あの幸福な時のママンのごとくに。

○

ズーンに春の訪れはおそい。五月のなかばごろから、ようやく肌を刺してくる寒さが気にならないほどのものになる。

その建物の暗い廊下には、しかしまだ冬がいのこっていて、並んでいる人たちの多さにもかかわらず、ぬくもりといえるものは何も伝わってこない。アパルトマンにいと、騒々しさに頭が痛くなってくる女たちのお喋りも、ここにはない。何かよくないことがおこる予感が皆の口を封じているのだらう。黙りこくっている人間の列は無気味だ。私はのつてくる寒気に、いつか歯を口のなかで鳴らしはじめた。まわりの人の顔色もわずかな光のなかで、青黒くにこって見える。私の顔もたぶんそんな色をしていたであらう。たえられないほどの寒さであらうはずはない、と思う。しかし震えはとまらない。

三十分に一度ぐらい、腕章をつけたSPが部屋から出て来て名前を呼びあげる。事務的

だが、妙に装っているような陰気な声。ほぼ受付の順にならんだ列は前の通りだが、時折順どろりにいかなひ十人ほどが、そうして部屋のなかへ入って行く。

私の順番はなかなかやってこない。しかしやがて番が来て、私は部屋にくみ入れられる列にいれられる。このことは確実だ。逃れようはない。それまでの時間は、長いようでありかい。やがて滝をむかえようとして、ゆるゆると流れる河のかじを失った船に乗りあわせたようだ。考えることがあるような気がするが、何ひとつまとまった考えは浮かんてこない。部屋のなかでは何がおこなわれているのだらうか。私たちははじめての経験だが、直感的に知っている。それが検診、だ。

順番はじよじよにつまって来た。私たちの前のグループと考える十人がやがて離れていった。前は、もうない。検診、とはしかし何だろう。はじめて考えたように、なかなかめざす項目のページがやってこない百科辞典のぶあついページにいら立ってくるように、必要もなく急いで、私はさまざまな雑念を飛びこえて、そこへ到着しようとする。冷汗が、からだのくぼみを濡らす。

重い木の戸がひらいた。白い光が目を射、私は思わず目を伏せた。黒い頭が光のなかに浮かびあがり、ゆるゆると動いた。私も、怖気づいた足を床から引きはがすように前へ進め、ついに部屋のなかへ入った。白い光が満ちたと思うとすぐ薄灰色に汚れた。それほど陽光ではなかったのだ。暗いところにいた私たちの目が、おどろかさされただけのことだった。窓の曇りガラスからくる光は無愛想に冷く、貧しかった。おまけに窓には金網が張られてある。机が窓を背にあり、SPのひとりがかまえこんですわっていた。私たちの列を誘導して来たSPと二人で、私たちの前へ立った。机にいたSPはふいに手をふった。びしっと皮の鳴る音がひびき渡った。手に鞭をもって、それを振り床を打ったのだ。音が私たちをおびやかした。

「これを見ろ」

どうやら、たんに私たちをおどすためにだけではなく、方向と場所を示して鞭はふるわれたらしいことに気づくまで、私たちは少し時間がかかった。気づくと同時にだれかが気味の悪い化物にでもあったように奇妙にひしやげた悲鳴をあげた。いやだれかではない。悲鳴は私があげたのかもしれない。机だと思

っていたが箱のようになっていて、その一部にもくもくと肉のかたまりのようなものがある。よく見ると誘導役のSPが、そこからのびている鎖を引いて、その力につれてしだいにかたまりは全貌をあらわした。

鎖や黒光りする鉄の環で、ソーセージのようにくびれて丸くなった肉のかたまり——それは女のからだだった。SPの手にとらえられたイスヤの女の姿を、いまはじめて具体的に私は目前にした。

たくましいほどに肥えた背と腰をもった中年の女だった。それがふくらんだ臀部の重さをもてあますように、ぐらぐらとゆらめかせて鎖にひかれるまま這い動く。手は逆手に背に廻され、まとめて固定されていた。足のひざ頭の間に顔が地をなめるように、わずかな動きの可能を与えられ、連結されている。首や二の腕、胴のくびれなどに喰い入るように環がはまり、その全体が虫のようにうごめく姿を強制していた。

「いいか。これから検診を行うが、その時のお前らの姿は全裸となる。いっておくが、われわれの指示にしたがわない事も、お前らの自由だ。しかし自由は少し高くつく。後でつくなくてもらう事になっている。今日も、さ

っきこの者が、検診のさいの姿勢のひとつをとることを、自由意志でこぼんだ。よって当方も自由をこの恰好で充分にあがなくてもらうこととした」

SPの手がふいに動いた。鞭が曲線をえがき空をとび、あるところを襲った。肉が鳴るびしりつと重い音が部屋の空気を裂いた。うごめいていた腰がびくんっと大きくふるえ、肉体のどこからかくぐもったけものの声のような声のはみでた。SPの皮のよく磨きこまれた長靴が近づくと、ぐっと腰を踏みつけ、片手に、乱れて散っている頭髮をつかむとぐいともちあげた。女の顔があらわれた。変にふくらんだ口、と見えた頬からくびってつづいた紐が、口中のつめものを押さえこんでいるのだった。声のくぐもったわけはそれであった。栗色の毛が乱れかかったひたいはややひろく、女ざかりの頬は充分に美しかった、はずだが、くびれが上下を分断し、無惨なものになっている。まつ毛の長い瞳は、眼窩の奥でかたくとざされていた。

「豚め！ イスヤの雌豚め」

口調が変わった。口ぎたなくののしった。

「お前らは豚だ。いいか、こんなところでのうのうと喰わしてやっているのもお情だぞ。

豚は豚らしくしねえと、遠慮なくこっちで豚にしあげてやらあ。覚えとけ」

鞭をつづけざまにふるった。つかまれている頭の毛をひきちぎるように、首につれて胴体が、わずかの振幅の間をせいっぱいにのけぞりふるえ、もだえ、うごめいた。

鞭をおさめると、うずくまった肢態を今度は鎖をひいて這わせ、腰を靴先でけり、もとの机になっている箱のなかに追いこんだ。

「よし。裸になれ」

私たちは、いちように呆然としていた。と鞭が私たちの前の床をたたいた。

「ぬいじまえ。豚ども」

SPは暗くいら立った声で喚いた。私たちはびくつとふるえて、呪縛をとかれた者のようにふいに動きはじめた。機械的に衣服をぬいで行く。ぬいだ衣服の置き場所をさがしたが、よいところが見つからないまま、ひとりが足もとの床におくと皆がならった。最後のものにかかってためらいが手をとめた。思わず、仁王立ちになってまだ鞭をかまえているSPの方を見る。暗い兇暴な力に射られて、腰の薄い物を取るほかはなかった。そうして薄灰色の光のなかにあらわれた十個の原始の姿態は、たしかに人間の姿をしているように

も見えなかった。豚。やがて私たちは豚なみになるのであろうか？ むき出しにされ、おびえた裸のさまざまな形は、人でも豚でもない、異様に醜悪な、巨大な虫に近い姿であった。

「一列に横にならべ」

暗い声が命ずる。意志のない人形のように私たちは動きだし、全体にぎくしゃくと無器用に横列を作った。

「よし。うしろを向け」

「足をひらけ」

「アホ。もっとひらけ。2フィート間隔だ。

遠慮することはない」

「ようし。そのまま上体を前へ倒す。手を床につく。ぐずぐずすんな、すべたメ」

二人のSPは、四ツ這いの私たちのうしろをゆっくりと、ひとつひとつ覗きこむように歩いた。

「足のひざを横に張る。アホ。それで張れるか、爪先きを外にするんだ。思い切り、ぐっと。こら、このスベタ、お上品ぶりやがってもっと、ぐっと張るんだ。そら。爪先きを外へむけて」

ひとりのうしろから鞭の柄を使い、ひざ裏をこじったり腰へ軽く皮をまきつけたりして

直した。

「それで顔を床につける。手を曲げて」

ひとりがバランスを崩して床に崩れた。年ごろの若い娘だ。そのままうずくまって泣きはじめた。SPがすばやく寄った。どうするかと思うとすばやく逆手をとって首の前から鞭の柄をこじりあおむかせた。もうひとりのSPが、これはわざとゆっくりと腰から手錠をはずして、娘の眼前にぶらぶらさせる。

「豚にされてえかい。赤毛のお嬢さん」

泣き声がかすれて、恐怖に凍った。どうやら足をひろげかねてうしろからこづかれていたのもその娘らしい。私に見覚えはないが、いかにもズーズンの下町娘らしい華やいだ顔だちの娘だった。それがいまは恐怖にうちふるえ、顔にみにくい老婆のような皺を作っている。

泣きたいのは私だ。私は彼女に同情するより、むしろ憎んでいる事に気づいて唾を飲んだ。——そうだ、たしかに憎んでいる。あの娘っぽい泣き声を聞いた時から、その声をとめてSPの兇暴な手が声の主をひつつかみ、容赦なく豚にしてしまえばよい。一瞬のことだが、そのもの荒れた光景の展開を、期待しさえしたようだ。そう感じたことに気づいた

時、私は自分のとらされている姿も忘れ、激しくみじめな気持ちに襲われて、身悶えしかかった。がしかかっただけである。それから自分の姿に気づいたのである。無惨というより、滑稽でもあろう。床をなめている顔から上体、高く突ン出した臀は、未熟な青さをまだ残してとがっているはずだ。げすなSPののしりの表現がびったりの、みじめでおかしいガニ股の虫ケラ。

泣くより、私の感覚は逆にかわいた。セメントのように固まって、どこかがモロくひびわれた。

「奥の方へ行くと軍医殿がおられる。その前でお前たちはこの姿勢をとる。いいな。それじゃそのまま、しばらく順番を待つ」

それが、つまり序の口だった。検診は週に一度と定められて避けるわけにはいかない。家では私が月曜日、ママンが土曜、父と姉はここで行う義務はないが、勤務先で行われているという話だ。ふたりから聞きはしないが、ゲート外に出て行く者の話しは、噂として耳に入ってくる。かつて辞退はしたが市長候補にも擬され、聖P学院の維持会の理事、ズーズン織物工業会の代表でもあった、すで

に初老の父が、一技術徴用工として機械油にまみれて働くことは、時勢としてしかたのないことだともいえる。しかし、あの肉屋の店員か、そこいらの若者にきつと過ぎなかったであろうSPたちに、嘲弄されながら四ツ這う姿を思うと、目をつぶりイメージを払いのける前に、身もころも凍りつく。

しかしママンのこととなると、私の心理は少しおかしい。どうやら特別にSPたちに目をつけられ、鞭でなぶられ、ついには豚にされてくられて、例の箱に押し入れられ、皆の検診の終わったあとに帰されず、なぶり者にされるのはタイプがきまっているらしく、月曜日といえば、豚のサンプルとして見せつけられた中年女のイレエヌ、それから下町娘の赤毛のアンナ、別棟の住人なので素姓は知らないが、そのふたりだった。

あの日はイレエヌがのこされたが、次の週は、とうとうアンナが医者の前で失神してしまい、倒れるはずみに何か器具をこわしたとかで箱いり。次の週は、ごていねいにイレエヌ、アンナのふたりはつながれ、検診のはじめから、更衣室の見世物。足首と首をつなぐれ、転がされて喰ったり、せまい箱に無理に二人詰められて、はみ出たところを針で突か

れたりしていた。それから他の者もひっかかってお相伴されたが、ふたりのどちらかは必ずといった形。ところが土曜日のママンがそれなのだった。

恐らくママンの、普通なら可愛げのある上品さ。万事におっとりしたところからくる要領の悪さ。環境の激変についていけず、徒らにおびえ無能になり、間が抜けてしまったところがSPたちを刺戟するのだろう。ママンの検診日の帰りは度々おそい。つまり豚にされて可愛がられているわけだ。ママンは、そうしてSPになぶられ、おそくなったらなつたで、多分私の目を恐れているのだろう。家にも、ひっそりといつの間にかいるように、ようすをうかがってドアを入ってくるようだった。私のママンを見る目も、実際ママンをよりおびえさすような光りをうかべていたに違いない。時折何かきたならしいものを見る目つきでママンを見ていることに、自分でも気づくことがある。それに気づく事はうとましい。しかし否定しようはない。私はママンの、女としてのからだを憎んでいる。できることなら、SPたちがアンナやイレエヌを処遇する手段——これも噂として、共同浴場で耳にしたことだが——をもってママンが呻吟

し、SPに踏みこたれられているところをこの目で見て、見ているということとその行為に加わってみたい。

箱から最後にひきずり出された女たちは、あらためて縄や紐などできびしくいましめられ、海老責めという形にくぐられたり、例の四ツ這いの姿に固定されたまま浣腸され、鞭うたれながら排泄を強要されるそうである。あげく本当に豚の姿に似せてくぐられ、尻尾をつけられて鞭で追い廻され、自分の排泄物やSPのそれまでなめさせられ、口に含まされてブーブー鳴き声を立てさせられる。最後には、SPたちの快楽の仕あげに奉仕させられる……という。

ママンのそうした姿。打ちのめされ完全に卑屈な豚となった結果を想像すると、妙なことに私は快感にうずく。悪魔的な心理のいたずら。しかし、私は全的にそれらを否定するつもりはないのだ。私とSPたちには同じ血が流れている。このことは恐ろしい。が、これを抜きにしては、このような世界の現実をついに理解することは不可能であろう。悪魔はやはり実在する。私の半年の経験の重さはそれを見、みずからのなかに確かめてみたことだ。それを知ったことで、私はもはや少女

ではない。老婆のように精神は疲れ果てた。豚のママン！ ママンはただおびえていることとて、年をとることをまぬがれている。ママンの、これは魔法だ。ママンはいつでも一方的な被害者で、いじめられる貴婦人で、どんな事にも夫の胸で泣くことのできる可愛い女で、つまり無垢で無傷なのだ。私はそのことに焦だち疲れ果てる。馬鹿な、ひとりでいるうぶっている。青い尻をした、老婆の意地悪さをもった、魅力のない少女だ。検診の医者、私の青い体に何かを想像しているに違いない。しかし私の体は彼の意識を裏切る。死ぬほど恥ずかしい思いで、せいぜいそのくらいのところなのだ。笑うべきは私の姿であろうか。いまの現実であろうか。

○

九時十分前。

私はテーブルを離れなければならない時間に気づく。考えこんでいたので、ママンと今朝は張りあわずにすんだ。おかげで、こころは山のなかの湖面のように平静だ。しかし、その影をおとすべき緑はない。ママンは席にいない。厨になっっている廊下にも出たのであろう。私はママンの存在には気づいても感情にまでは思いたらない。漠然とママンの

悲哀感に単純なものであるかと思っている。一糸まとわず四ツ這いになって、SPたちからかわれるママンのところは一体どうなっているのだろうか。私はやはり娘らしくなく薄情だ。仕方がない。ほんとうに仕方がない。精神も老婆なら、からだの方もすでに老残のもののようにもの憂い。検診のことを考えても、今はどうでもよい気さえする。どうにでもなれとふてくさっているわけではなく、そんな脂切った劇的な意欲はなく、現実感が高い山の上の空気のように薄いのだ。

とにかく椅子から立たなければならぬ。歩きださなければならぬ。それだけで大仕事だ。ジャガイモばかりつづいている食事のせいかもしれない。もともと肉がつかず痩せていた私のからだで、聖P学院ではそれがスマートだということになっていたが、ここでは少しでも自分のエネルギーが蓄えられているからだつきの方がむいている。SPたちは好んで裸にするが、私の瘦身は鳥のガラだ。見映えもなくお気の毒だ。

廊下へ出た。薄暗いなかにゴタゴタと、雑多な木箱やガラクタの荷物がならんでいるので、足もとがあぶない。百メートルほど見通しのきく、愛想もない素っ通しの廊下であ

る。人影は見えない。夕刻になると、ゲートの外にでている男たちが帰ってきて、するとどこから湧いて出たように子供たちが廊下を走り始めるのだ。それがうるさく建物の壁に反響し、神経を鋭く逆なでする。今はまるっきり静かである。留守を守っている女たちの数は少ないが、気配がまったくないというのも異様だ。ただ荒廃した建物のみがつづく。ママンはどこへ行ったのであろう。

白い光の世界へ出た。砂地の道は、陽を映していない。鈍色の薄曇りの空だ。少し風が吹いている。風に冷気がある。襟首にしのんでくる空気は、そっけなく荒れてかわき、うすら寒い。もうすぐ冬がやってくるのである。今は乳色にぼけている山脈に雪のかかるのは早い。稜線がすっかり白くなり、中空にきびしくそば立つと、ドーチェ通りのホテルにはスキー客がやって来て、やがて冬の暖炉をかこんだ社交が始まる。このゲートのなかでむかえる冬を想像すると背筋が凍る。恐らく容赦なく入りこんで来るであろう氷を吹きつける風。考えて見れば、春からの衣服しか用意して来ていないのだ。それもわずか半年で、すでに着古した感じになり、冬をむかえるにはあまりにも心細い。織物工場に行っ

ている父に、何か算段が、あるかも知れないが、SPたちのやり方を見ていると、とてもこちらの冬の衣服の心配をしてくれるところか、ゲートの出入りに意地の悪い点検で、こゝとさら支度を妨害しそうな感じである。襟首で寒がっている分には風もいいが、先行き恐ろしいきばを秘めた風である。

右へ行けばゲート。そのかなたには、はるかに星のように遠くブーズンの街。私は建物をうしろに左へ行く。映画で見たアメリカの西部の街を、もうひとつ荒らぶれさせた建物のならびがつづく。かなたにセンターと呼んでいるSPたちの本拠の建物。その前に少し人だかりがしている。検診を待つ人たちは建物に入っているはずだから、人だかりの意味はわからない。見渡して、うしろゲートのわきの詰め所に、SPの姿がちりり見えるほかは、無人の廃跡としか見えない周囲に一箇処の人だかり、不吉な予感をさそう眺めだ。

近づく人々の個々の姿が識別されてくる。

衣服というよりボロをまとった黒っぽい人影だ。それほどひどいと思わなかったが、こうして距離を置いて見ると乞食の群れである。群れより一段高くSPの姿が見える。センターの入口の石段にSPが二人威丈高にかまえて

て立っている。群れの頭上ですばやく黒い線が動いた。何か、とたしかめようとするが、動きがすばやくとらえられない。やがてその動くものが姿を分明にした。鞭であった。ひとりのSPが鞭を激しくふるっているのだ。群れの間に隙間ができた。そのなかのでき事が、やがて私の眼の奥にとびこんできた。

肉塊が二つ。地上に引き据えられている。

男と女。若い背筋から腰へかけて赤黒い鞭のあとがすでに幾条も走っている。気がつくとい見物の輪のなかにママンがいる。胸を抱きかかえている。近づくともふるえているのがわかる。それでも視線は張りつけられたように、二人の犠牲者にむかっている。センターの入口前に木の柵があり、そこには老若とりどりの、これは衣服のまま後ろ手錠をかけられた者たちがくくりつけられている。裸の二人は例の鉄鑲がからだの要処をくびって喰いこんでいる。女の方の横顔が見えた。乱れた赤毛の影の、その顔は「アンナ」だった。若者の方の人相は見えない。

どうやらふたり並べられたところは、私通をSPに摘発され逮捕されたようだ。うしろの十人ほどは両名の家族であろう。イスヤがひとり法に触れると、一等親族は同罪として

連帯される。イスヤ法に明記されたところである。

SPは違法者を逮捕すると、一日はこうしてホール前にさらしものにし、鞭でたたき、長靴で踏みこむ。それから取り調べ、拘留処送りとなると、豚箱と呼んでいる方三フィートほどの木箱へひとりを詰め、トラックへ積みこみゲートを出るのだが、その先の木箱の囚人の運命は、私たちには知らされていない。噂によると女は軍隊の慰安所へ送られ、他は苛酷な強制労働キャンプへ送られるのだという。また地方農場などへ、値のついた奴隷として売られることもあるという。風聞に過ぎないが有り得ない事とも思えない。

アンナが少し顔を上げた。頭をふり、赤毛がそよぐようになびいた。動作の意味が私にはわかった。隣りの男のようすを、そうしてうがかったのだ。あからさまにようすを見ることは、SPの鞭の下では不可能だ。少し見えたアンナの瞳は、黒くぬめり光って、思ひなしか生命の炎を燃やしたかのようにだった。そのきらめいた一瞬の光芒は、私の小さくかさかさにかわいた胸を刺し貫いて走った。私はしばらく呆然と自失の時を送った。

どこかで意識が九時を告げた。私の足は動

きを忘れていた。ぼんやりと鈍くなった感覚のなかで突っ立っていた。アンナがまた動いた。今度はあきらかに方向を見せ、男の方へにじり寄った。男の方は材木のように動いていない。気配をさっしたSPの手が、すばやく正確に動いた。スルスルの空中をはしった皮のしなやかな線は、白い横腹からアンナを抱くようにまきつき走った。音があとからやって来た。バシッ！むしろ鈍い重たるい撥音だった。アンナの上体がびくんとおのけざると、横ざまに地に転った。足の先が大地をさがして無器用に宙をうろついた。

「おや！色男の旦那、妙な顔して気分出してやがるぜ」

うしろのSPがその時、とんきような蚤声をあびせかけた。

「なるほど。こちらのおにいちちゃんも、可愛がられてえらいいな」

「おっりゃあ」

奇声をあげて鞭係りが調子をとった。背から臀部へかけて走った蛇体は、若物の背をぐらっとゆらめかせた。二発。からだは横倒しにころがった。強くしめられているため、血の逆行が止ったのだらう、奇怪な様相を呈して変色していた。

偶然、転げ寄った二つの肉塊が鈍い音を立ててぶっかった。

「ほ！」

SPがまた奇声で、この新しい展開に色をそえた。アンナは懸命に首を動かし、顔をもつていこうとした。口は頬をくびる紐がきついふたを押さえているので、鞭をあてられても低く呻くのみで声もでない。頬をおしあてたアンナのとざれたマツ毛の奥から、涙がホロホロ湧いて流れている。

「ほほ、やるじゃねえか、ご兩人。じゃねえ両匹か。なるほど、豚のお別れキッスってえわけか」

アンナの瞳がひらいた。燃えた炎が飛び散るようにSPを射た。私の立っている足がふるえだし、ふるえはとまらない。

「眼つきが気に入らねえな。豚らしくねえ目つきだぜ」

SPは兇暴な動きをすかさず取り戻し、充分にしなわせた鞭を走らせて、ふたりの間を裂いた。スローモーション映画のようにゆるい動きで弧をえがき、アンナのからだはまた地に転った。それから興がさめたという顔つきになったSPたちは、二人の鎖をそれぞれ引いて、別個の肉塊にもどったものを引きず

り、柵のところへくくりつけると、ひとりのSPを残して、建物のなかへ引きあげていった。

私は、ふるえはとまったものの、棒のように突っ張った足が動かず、しばらく立ち尽した。ほかの見物の者、女たちも同じらしくざわつきもなく、世界全体が虚脱したような放心のいつ時が流れた。

呪縛がやがてとけた。だれかが何かささやいた。顔をこする者。襟をかきあわす者。普通の人の群れにかえって、近くに私はママンの声をきいた。

「あ！お前。九時、九！」

そうだ。九時は、とつくに過ぎたはずだ。私に驚きはない。ママんにこたえずに、私は歩きだした。センターのわきにある建物のおぐらい口へむかって。何かもの憂く面倒でいながら、やはり行かなければならないという意識にしたがって……。

○

「検診の受付けだ、と。ほう。いい度胸のオトボケだ。ヨシヨシ、カワイコちゃん、受けつけますよ。はい、お手々を出して。そうそう。可愛い豚の子になりそうだな。サア、このボロはもう捨てような」

(了)



十一月号の緊急ルポ「徳川女刑罰史」のスターを縛るVはよかったですね。素晴らしい写真が沢山のついていたので、もう胸をワクワクさせて読んでゆきました。頁をめくるのも惜しいような、それでいて一刻も早く読んでしまいたいという気持が、思わず指をわななかせてしまいました。

私は八責めVの中でも、殊に江戸時代の女囚に対する拷問とか刑罰について異常なまでの関心を持っていました。いや関心というよりも熱中とか執着とか言った方がよい程の打ち込みようでした。古本屋という古本屋を探しまわってそれに關した文献を探し求めましたが、私の心を満してくるような書籍にめぐり逢うことは出来ませんでした。それだけに、この十一月号の記事は私にとっては胸をうずかせるに十分でした。

第一話、第二話、第三話と読ん

でゆく中に私の胸内のふつふつと沸きかえった憧憬の念は頂点に達した感がありました。五社の一つである東映の作品であるばかりでなく、本誌でお馴染の辻村隆氏が緊縛指導に当られたということがいやが上にも私に大きな期待感を持たせるのでした。

記事の末尾に九月二十四日のイレブンPMに辻村隆氏が出場されるということが書いてあったのでどんなにその日が待ち遠しかったことでしょう。二十一日に十一月号を受取ってから、指折り数えて待ったその日の朝、テレビの番組でイレブンPMの出場者の中に、辻村隆の名前を発見したとき、僕は必ずこの番組を見るのだと堅く心にきめて家を出ました。

パリの題名も私の氣にいったものです。ブラウン管にうつる辻村隆氏の姿を想像し、ああ、これで愈々「責め」も日陰から陽の当る場所へ進出し、到頭本格的なSM時代が到来したのだとの感を深くしたので。その日は、会社においても仕事を手につかない、そぞろな気持で、時間が経つのももどかしい位でした。

テレビに映った三人の女優さんに、辻村氏、東映の天尾さんなどの姿を喰い入るように私は見つめました。十一月号誌上で記事を読んでいたので彼等の交す会話が私には一語一語うなずけるものでしたが、場面の転換が目まぐるしくて、終わったあとで私は何だか物足りなさにも思わず溜息をついてしまいました。美味しい料理をたっぶり食べさせて貰えると思っていたのに、その匂いだけを駆歩で嗅がされたような味気なさでした。

それでも尾花ミキという尼さん

になった女優さんは、見事なクリクリ坊主の頭のままで出場している勇敢さには感心しました。このような若々しい女優さんが、責め

全篇これ縛りと責め、拷問と刑罰の連続で、流石の私も第一話、第二話、第三話と見終ったときは溜息とも吐息ともつかぬ堪能した気持をほっと洩らしていました。

徳川女刑罰史を見る 町田 一郎

今まで、これほど迄私に満足感を与えてくれた映画があったでしょう。私は呆然とした有様で雑踏の中を一人で歩いていました。



(第五十四回)

辻村 隆

11PMに出場してくれ、といわれた時には、正直なところ困惑した。アングラ的な存在の私が、テレビを通じてベールを脱がねばならないからであった。私にだって本職があつて、その方では辻村隆という人間の、気振れも見せてはいない。それだけに私という人間の、蔭の正体を知って、吃驚する人も相当いる筈である。妙なことでマスコミにのってしまつと、アレヨアレヨといううちに、半ば強引にかり出される羽目になつてしまった。ええい尽よ、天下の公器よみうりテレビさん、まさかSMプレイの片棒も担ぐまいと、遂々腹をきめてしまふ。

最初の案では、阪大の大野先生に、拷問刑罰の方の専門的なお話をしていただいて、その学術的な糖衣でくるんで、私が二、三人の女優さんを実験的に緊縛してみせ

る段取になつていた。尾花ミキ、橋ますみ、賀川雪絵の三人の女優さんである。凡そテレビ始まつて以来の珍事が、至極真面目に論議されたのであるが、そうなることはプレイになつて、テレビボードに引掛り、世のうるさいオバサン連から、ゴウゴウたる非難をうけはしないかということになった。とどのつまり、オーソドックスな刑罰式のものを用意篇のようになつて、その中で辻村隆が緊縛指導しているということをやつとケリがつく。

午後七時頃よみうりテレビへ入り、十一時十五分の本番までに、リハーサル、テスト二、三回くり返して、いよいよ本番。私の喋べるのは結局六分ぐらゐに縮められてしまった上、大野先生が助言して下さるので、殆んど喋べる時間はなかった。私が伊藤晴雨氏の逝

去された丁度一年前に、ご無理をいって描いていた二本の絵巻物が、はからずも、お役に立った。この絵巻物は、私の期待に反して、七十七才の晴雨氏の作だけに、既に枯淡の域に達した、ごく平凡なもので、当時はガツカリしたものだが、テレビ向きには、これくらいの程度がかえってよく、皮肉な結果になつたが、陽の目をみて泉下の晴雨氏も喜こんでおられることと思う。

司会の藤本義一さんが、私という人間に非常に興味を持たれて、色々SM談義がはずみ、いつか機会があつたら私宅を訪問したい口吻であつたが、彼が話の中で、兼々伊藤晴雨氏には、興味をもっていたが、責めの大家として、明治、大正、昭和を反骨精神で生き抜いてこられた彼が、昭和三十六年一月、没して以来、その跡をつぐ、民間の責めの研究家として有名なのは、誰でしょうかと訊ねられた。そういわれると空前絶後、彼の跡に続くような人は寡聞にして私も知らない。この自由な時代になつて、そうした人が出ないのはおかしい。今こそ名乗り出てしめるべきだと藤本氏は仰有る。挙句の果てが、延々二十年近く、S

Mに興味を抱いて、この道一筋に生きて来た辻村さんこそ後継者ですよとおだてられた。

伊藤氏程の気骨と才智、画歴はなくても、今こうして、人前にあらさまに名乗り出た以上、自称後継者をめざして、テレビ制作室がいみじくも名づけてくれた「風俗評論家」として頑張ってもみたい気持ちしきりである。

九月二十四日の11PM無事終つて東映関西支社のご招待で、女優さん等スタッフ一同と、キタのクラブで歓談したが、各女優さんから踊りましよう誘われて閉口。ソシヤルダンスなら幾分心得ている私も、あのゴーゴーや、激しい動きの一連の踊りには、到底ついてゆけない。世代の違いを沁々と感じた。

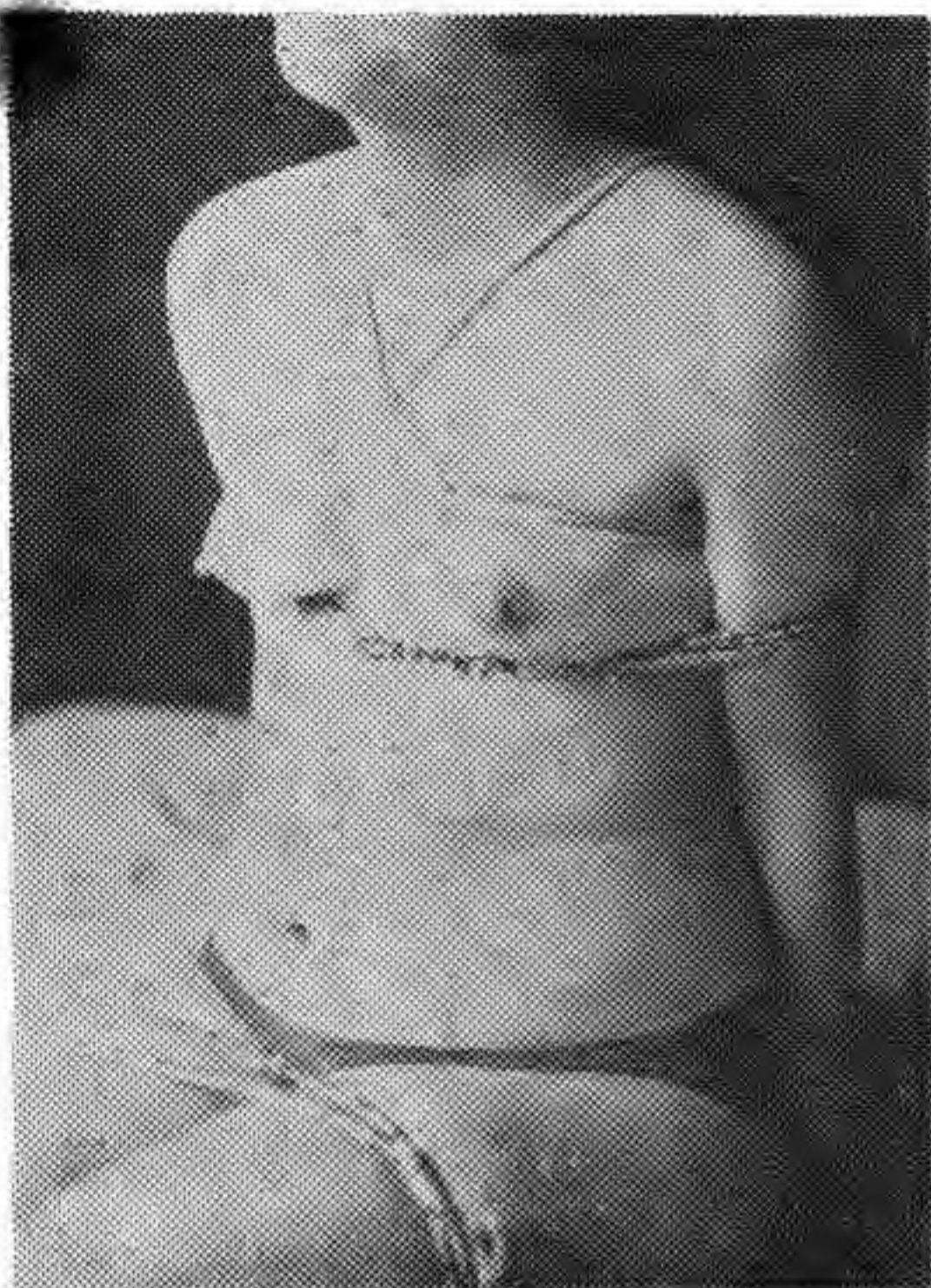
× × ×
九月二十八日の、よみうりテレビ、夜の11時45分より十五分間、ある女優の勇気」と題して、丸刈り女優尾花ミキさんの、女優への根性を示したパンチレポートでカラーテレビに私がチャリとうつる。自分の姿を自分で見るのはテレビ臭いものであつた。

テレビが終つた頃、同好者の方より電話あり、神戸三宮の東映で

私の夫婦プレイ

愛妻ゆり子

山口 登



『徳川女刑罰史』の初日を早速みたが、超満員の大盛況で、通路から扉の出入口まで立錐の余地もなかったという話。私好みの緊縛が随所に散見出来て、同好者としてこんな愉しい映画は始めてという話。東映さんが儲けても儲からなくても、もう今の私としては関係もないが、やはり他人事乍ら嬉しい。SMを自覚しなくても、刺激を求める人が多いことを如実に物語っていた。

次回作『元禄女刑罰史』も第三話のオムニバスからなり、大体の原案も出来ているらしいカントクさんの口吻であった。私が十数年前、緑猛比古のペンネームで書いた『殺人淫楽症の女』という、サジストの女が、次々と男を虐めるという話とよく似たテーマ。関白秀次に似た暴君の殿様が、臨月の妊み女の、胎児を切裂いて掴み出す話。元禄の浮世風呂にテーマをとった残酷ものが大体の骨子らしいが、この映画、第一作を上廻るものを狙うというので、なかなかむづかしい。今の処、協力するしないは未定であるが、私の本職の方も山積であるから或いは見送る結果になるかも知れない。大映さんもこれに刺激されて、続女牢

をカラーで、うんとどぎついものにするらしいが、この処、マニアにとってはわが世の春の嬉しいニュースばかりである。

× × ×

カメラ・ハントの方が、お留守になっっていたが、この方も嬉しい悲鳴をあげるほど、希望やら、かつてのハントした女性からの、今ひとつたびの電話が多い。順次消化してゆくつもりであるが、今の処川口有里子さん、谷山久美子さんの二人は日時をきめた。私に是非縛られたいというMの女性も、東京から賀山氏を通じて便りをよこされ、いずれ近日上京しなくてはならない状況である。

11PMで一番うれしかったことはここ数年音沙汰のなかった梨花悠起子から、ひょっこりテレビを見たという電話があつて、連絡がついたことである。一度会いたいたいと言ってきたが、緊縛モデルはもういやと知っている彼女も、会えば又会ったで、昔とった杵づか、果してどうなるやらも知れず、これは彼女を飼育して来た私にとって、一番の収穫であつた。今更乍ら、この番組の視聴率の広さと、テレビという伝播機関の偉大さを痛感した。

変態は常道 風流極道軒

鶴の一声——群鳥いずくに行くべき。

まさしく、東映の「徳川女刑罰史」はSに徹し、貴誌創刊二十五周年を祝うにふさわしき快事と存じます。

辻村隆先生のタイトルに載りし事まことに嬉しく、小生、この日を待望せしもの。団鬼六先生につき、お喜び申し上げます。

由来、出版に二種あり、大手筋出版と私費出版と、映画・演劇に二種あり、いわゆる映画五社と成人映画各プロダクションと。それぞれの領域あって今日に至れるところ、五社のうち東映株式会社、ピンク映画（私費製作）に屈服しそのテーマをピンク映画の領域に求め、興業不振を挽回せんとしたもの。十一月号、辻村隆先生のルポ、時宜を得たものにて、「徳川女刑罰史」、おそらくは、史上空前のヒット作品となることでしよう。そして、柳の下に二匹のドジョウを求めて大映（この会社には「秘録おんな蔵」以下の実績すでにあり）以下これにならうでし

う。かくして、変態は、変態でなく、常道となり、奇クの存在価値いやが上にも高まっていくことでしょう。

そこで小生の提案ですが、「徳川女刑罰史」でも小森白氏の「日本拷問刑罰史」でもその他、緊縛映画のすべてが、すでに縛りあげられた女性の美をうつすことに重点をおき、それに至る過程を描いておりません。僅かに最近では、「赤い拷問」に、一部みられたのみでした。映画五社が緊縛女体そのものをとりあげた以上、ピンク映画の対抗策は、この辺にしかないのでは、ありますまいか。女体が、一番、敏感に反応を示すのは最初、縄を左手首にからませたときと、高手に二廻りさせたあと、ぐいっ！と乳房の下を廻したときなのです。この瞬間を、描ききることこそ、甲斐あることなので、すでに縛りあげられたとき、女体は、もはや、カメラの前でぬけがらにすぎないのではないでしうか。貴誌も又、六、七年前、梨花悠紀子嬢の裸体を縦横につか

イメージ画「切れるか？」 野江三郎



て、緊縛に至る過程を、ときには投げ出された縄があるだけで、手首などの縄痕だけで緊縛女体よりも、一層強烈な印象を与える佳品を載せられました。夢をもう一度「女体緊縛作法。女体緊縛入門」とでも名付けるべきものを、どしどし発表して頂けないものでしうか。モデルは、安井喜久子夫人を筆頭に、佳女が多い貴誌のことです。（註・安井女史のものは、必ず緊縛しつつある男性を二人以上、同一画面に入れて下さい）辻村隆先生が、テレビ11PMに出席なされることにより、変態はすでに変態でなく、日常茶飯事となりました。縄のかけかたひとつに、クレイジー・ロープなどという遊戯さえ流行しているこの頃、是非とも、「女体緊縛作法」を貴誌連載ものとして頂きたく、かくは一筆。……では。

「へんたい」雑感 牧 十郎

さる9月24日の11PM「責め地獄」を見ていたところ、どこかで見た顔が出て来たと思ったら、辻村隆の名が出て来たので少なからず驚いた。なるほど、遂に出ましたか、という感想でありました。辻村氏、このテレビで見たところは、なかなかのダンディぶりでありました。かつてオニロク先生が「春日八郎を、ウンとシブくしたような佳い男」と書いておられました。さすがにうまい形容ですな。お声もなかなかシブい。ところで小生いささかヘソまがりなので、辻村氏が全面協力したとかいう東映のSM路線はあまり見に行く気がしない。

古くて常識的な考え方だと思いが、大資本をもつ安定した映画会社の使命というのは決してこのような傾向の映画を作ることではないと思う。

また話は変わるが、最近の傾向としてハレンチ、ハレハレの名を冠してSMが一般常識として浸透しつつあるかのように見える。たとえば、近く渋谷童彦氏等に

よって「血とバラ」という特異な雑誌が発行されようとしている。いわゆる異常心理における人間の性の追求、美の発見等が目的なのだろう。

しかし、このような傾向に対していずれ多かれ少なかれ反動がくるだろうということは目に見えている。もっともそれでも、異常心理に対する認識は相対的に高まるだろうし、よりシリアスな面において、いまままでわざとかえり見られなかった、人間精神の「恥部」への探求がなされるだろう。

そうする事によって、心理学の分野はいまままでの一まわりも、二まわりも広く、また深くなり、やがて、哲学から臨床精神医学までを包含した、精神科学という科学のきわめて巨大な分野として、独立するまでに成長することになる。その時こそ、いまままで異常心理の一言でかたづけられていた心理状態に対する、より広い意味での解明の努力が実を結ぶことになり、わが奇譚クラブも正当な社会的評価を得られることと思う。

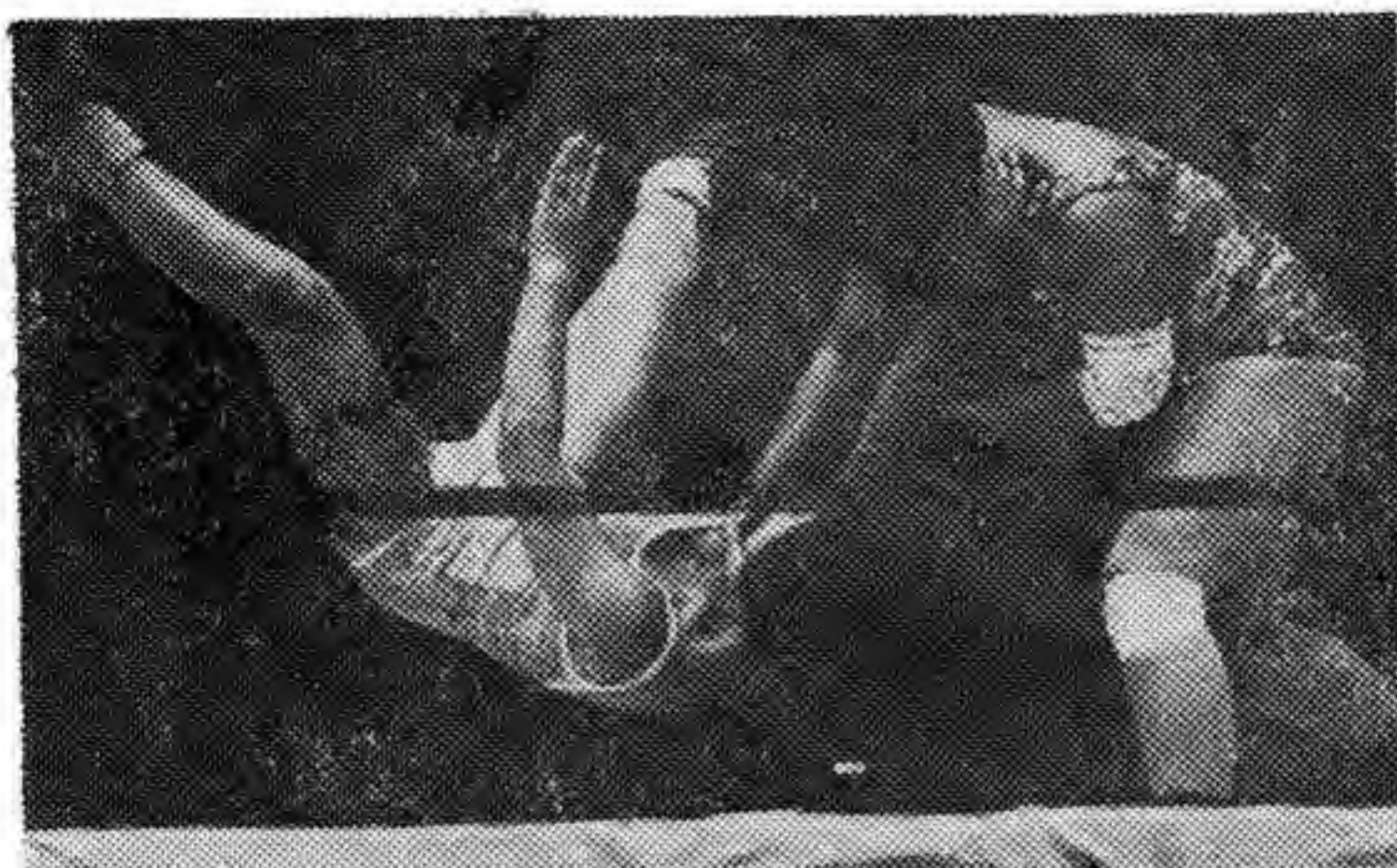
とはいえ、それはまだまだはるか先のことであって、現在は暗模索、まだ糸口さえつかない状態である。辻村氏や団氏のような特殊な場合を除き、異常心理による行為を曝露される時は、個人にとって社会的な死を意味する。今の段階ではしよせん我々は「へんたい」であることを、心に銘記すべきだろう。いかに理屈を並べ

て正当化しようとも、現在の社会においては「へんたい」は声を大にして通るものではないのだ。さて最後にもう一つ。辻村氏のような個人はともかく、奇譚クラブはまかりまちがってもマスコミの俎上に乗せられぬように、くれぐれもご注意あれ。やはり細く長く、ある時は深く静かに潜航することです。



『ハプニング遊び』

スギ・タダシ



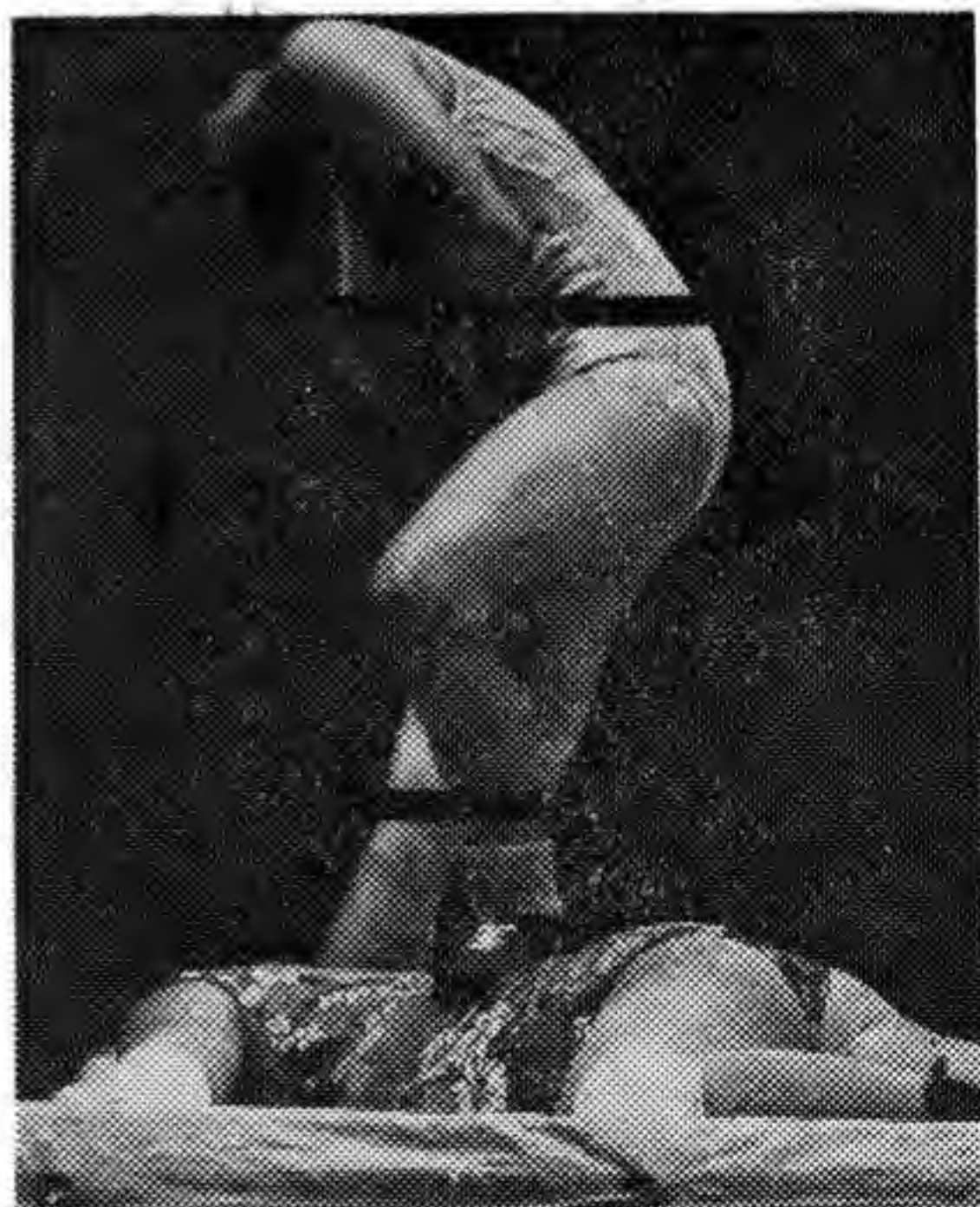
女斗美スポーツ に寄せて

一ノ瀬英雄

最近、新らしいスポーツとして登場した「ローラー・ゲーム」なるものが注目を浴びている。ローラー・スケートの持つスピードと、プロレスの乱暴さを、ミックスしたようなものであるが、女子の場合でも、エキサイトしてとっ組合う場面が、このスポーツの最大の魅力ではないかと思っている。

女子のエキサイトするものは、つい先達で「11PM」でも紹介されたように、女子のみのプロレスも盛んになってきた。

先日、小生は、早速に観てきたのだが、適度なエロチシズムとダイナミックな技は素晴らしいものであり、女斗美ファンならずとも、スポーツとして



もショーとしても楽しく観戦出来るのではないかと思った。

別に不思議はないはずだが、小生の行ったときには、女性の客が男性ファンに混ってかなり多くいたことに驚いたものだ。

困ったことに小生は、こういう雰囲気の中で、じっとリングを見詰めている女性を見ると、すぐSMに結びつけていろいろ想像してしまうクセがあるのだ。

同封の写真は実験的にASA6400で撮ったもの。不手際ながらお送りする次第。

『い　じ　わ　る』

池　津　勇　太　郎

九月号所載「拝啓編集部殿」の
 頂田一徹氏の御説とは私は全然反
 対で「グラビア写真並に口絵の全
 廃、文中の挿絵の削減」には大賛
 成である。

手持の「奇譚クラブ」の古い号
 を二冊引出して見る。一冊は三十
 四年十一月号でサド特集号。四馬
 孝集画と絹川文代、浜本喜美、三
 れもが中途半端なものだからであ

る。昔、美術展覧会で初めて洋画
 の裸体画が出品された時に、当時
 の官権はこれに腰巻をかけて一般
 に公開させたという珍談が残って
 いる。私は「奇ク」の口絵や写真
 を見るといつもこの珍談を思い浮
 かべるのである。

被虐モデルが、パンティや猿又
 をはいて見る馬鹿らしさである。
 これでは見るものにグツと訴える
 ものがない。私なら、被虐モデル
 の女性は赤裸々に、男性は荒縄で
 作ったバタフライ様のものをしめ

さす。

そんな写真を掲載すれば、直ち
 に発禁をくうと編集者はいわれる
 にきまっている。正にその通りで
 ある。といって中途半端な口絵や
 写真を掲載されるぐらいなら、む
 しろ全廃してもらった方がズット
 結構である。その上、図版や写真
 の印刷代が節約出来て、それだけ
 ページ数を増してもらったら、正
 に一石二鳥というものである。又
 文中の挿絵にしても、載せるなら
 ビアズリーの「サロメ」の様なす
 ばらしいのを出して欲しいもの。

△

△

辻村隆氏のカメラハントは、毎
 号の庄巻である。氏の達筆と挿入
 写真がピッタリと合って、興味津
 々たるものである。こんな写真こ
 そはドシドシ出して載きたい。

また芳野眉美氏の「濡れにぞ濡
 れし」も面白く読まして貰った。
 創作より、こうした読物（前述の
 辻村氏のもの）の方が、余計に迫力
 がある。諺にいわく「過ぎたるは
 及ばざるが如し」

高村初子氏の短歌「生花」は非
 常に結構でした。春川氏の「女の
 城」は、近頃流行の週刊マンガを
 見ているようで、私はいただけな
 いと思う。



もし花もて女人を打たんとせば
 薔薇の花こそ望ま欲し、

その茎、荆棘を持つゆえに

アシリンドレニエ

僕のイメージ画集

ジャン・ド・ベルヌ「肉体の映像」より

—『美しき花ありて』—

—室井亜砂路—

S M エ ッ セ イ

加藤真佐夫

地に落ちたか「花と蛇」

最近、奇クの旧号（と、言っても今年の七月号からだ）を、まとめて入手した。

このところ都内の方に出る機会なく、我が町にはこの種の異端の雑誌（？）は皆目見当たらないためである。

さて、現在奇クのS・Mファンに随喜の涙を流させる「花と蛇」を駄文のペンに走らせるのは、いささか気もひけるが、私も又愛読者の一人として一言、述べさせて戴きたい。

九月号に於て、私は嫌悪すら感じた。

何故に近親相姦的描写まで必要とするや？

作者の筆の疲れか？ 作者の読者へのサービスか？ はたまた作者は読者のあくなき欲求、拡大される刺激への欲求に敗けたのか？ 団先生は、どう思いか知らないが、ここまでくれば次にくるのは何なのか？

まさかとは思うが、猥姦シーン

の描写ではありますまい。現に十月号ではヒロイン静子夫人は女体責め（羞恥責めというらしいが）というよりも、男性でも通用しそうなアヌス責めの方に移されつつある。

もはや、エロチシズムは消えるのか？

いかに責められる少年や令嬢が美しかろうと、そこに姉弟という設定がある時、私は九月号における間接的、近親相姦のシーンをエロチシズムとは言えない。

いかに大家の、美貌の令夫人のなれの果てと言う設定でも、好みの違いかも知れないが、アヌス責めをエロチシズムとは言えない。

「花と蛇」はグロ小説ではなかった筈である。奇ク読者の中に存在するS・M、フェチ、浣腸等々の好みを持つ人の声も容れて（？）巧みにその筆は、大家の令夫人、令嬢、そして純情な女学生を秘密シヨアのスターに落すべく、その過程に於て愛読者をうならすエロチシズムを発散した。

しかし、九月号に於ける姉弟の

間接的姦通（？）の描写に目をそむけたくなったのは、私一人だろうか？ 最近とみに伏字の多くなつたのも、何か私に不安の念を抱かせる。

当局の介入は今の所あるまいがそれ以前に、奇ク読者の良識（私は別にそういうものはないが）は果してそこまでをも期待しているのであろうか？

女をなぐるということ

自分を善人だとは思わない。良識ある青年だとも、思っちゃいない。

法律があるから悪い事をしないだけである。絶海の孤島に見知らぬ女性と二人放っておかれたら、私は「帝王」となるであろう。

しかし、私のS感度（？）などどの程度のものか……

街中でアベックの男性が、連れの女性とおぼしき人をなぐるのを目撃した。

大体、アベックの喧嘩に第三者が、このこ出て行く必要はないので知らぬ振りしてたが、男性もああまで暴君になれば、立派なものだと思ふ。それに比べたら自称フェミニストの私など、とても街中では勿論、二人きりになつて

も、そういうことはできないだろう。

女とは弱いが故に美しいものではないか？ 花の命は短くて……儚なきが故に美しいものではないか？

我田引水かも知れないが、私の様な只単に女性の縛りぐらいにしか興味のないのは奇クの本流？の又、支流と云つて。

只、単に女体を縛る……私は、それで十分である。二、三年前、宝塚二三夫氏（逝去されたというが）が奇クに提供していた「僕の責め方」あの程度でいいと思う。めったやたらに縄をかけてみた所で、どうという事はない。それとも、私の性格は、淡泊すぎるのか？ 相手の女性が、より以上の責めを求めているならばとも角、否応なしに責めることはできそうもない。

「奇譚クラブ」の存在

大変生意気なようだが又、私のような青二才の一介の一読者が社会的地位を持つ諸先輩に対して言えることではないのだが……

諸先輩の奇クに載せられた文章を拝読すると、やたらに「飲む」「食べる」というのが最近多くな

イメージ画 『面白いお遊びね』 山田 毅



った。女性の体内から出たものかも知れないが、あれを、あの汚ないの本当に飲めるのだろうか？
自分自身が進んで、こういう雑誌(?)を読んでいて目糞鼻糞を

笑うの類いではないが、異常だとも言いたくなる。
読者欄など見てみると、実に皆さん善良で気の弱そうな人々ばかりだが、悩みを解決する筈の奇ク

によって、より深い新たな悩みを与えられることも、あり得るような気がする。

改めて問おう。

奇譚クラブとは何なのか……？
この珍奇なる雑誌は何なのか？

奇譚という言葉は何もサドやマゾの代名詞ではないのだが、読者の大半は、そう言った傾向の人々であろう。

女を縛りたい……そういうポーズが、女性の最も女らしい美しさだ、芸術だ、美だと言っても所詮は自分の女房さえ縛れないではないか。(特定の人を除いて)

神酒だ何だと言っても、一体それは何なのか？ 所詮、女の出した小便でしかない。

自からマゾと思っても、実際にムチで打たれたら悲鳴をあげて逃げ出すのではないのか？ 数ある中には、実際に神酒(?)を飲み女を逆吊りにし、女に(男に)ムチ打たれ歓喜する人もいようが、そういう人々に、特にお聞きしたい。奇譚クラブとは何なのか……と。私自身は、それらを非難するつもりは毛頭ない。これからも奇クを読んで行くつもりである。しかし、やり切れないのだ。

過去二回程奇クを焼いた。「オ

レはアブノーマルじゃないんだ。違うんだ！」。その時の真実の叫びであった。しかし、それも束の間、古本屋の店先で失なわれた奇クを探す……それが私の奇クに対する過去の仕打ちだった。

数年前、交際中の女性を無理に口説き落した時、私は当時の奇クのグラビア写真を無理に見せた。目を反けた彼女の頭髮をつかみ、「見ろ！」と叫んだ。後手に縛られたまま、彼女は言った。「貴方はそういう人だったのネ」と。すでに最後の線を越えていた私達だったが、彼女の表情は冷やかだった。

「好きよ。今でも……でも、私には許せない。貴方の趣味が。初めて逢った時、貴方はきれいな瞳をしていた。でも、もう汚れた」

別れの時の言葉である。

私のSの要求を受けたのも最後の奉仕(?)だったのだろう。十九才の時だった。

女は本質的にマゾであるなどと誰が言ったのか？

あれから五年。私は今だに独身である。Sの傾向は消えないが、奇譚クラブの存在が何か私の心に重くのしかかる。

結婚の夢も破れて……。

『花と蛇』に寄せて

佐藤五郎

「花と蛇」が多くの読者を魅了している一つの理由は、言語に絶する羞恥責めの連続にも拘らず、極悪無道の悪役達と、清楚白百合の如き佳人達がからみあって織り成す、奇妙にもユーモラスな雰囲気、酔わされるからではないでしょうか。

美しい生贄に目を細めて、淫虐の魔の手をうごめかす森田組の面々。可憐な麗人達の演ずるハレンチ極まる珍芸に悦楽の嬌声をあげる意地悪なズベ公のお姉さん達。赤禪一つに張り切った麗人の調教に精魂かたむける鬼源。思わぬ役得にうつつを抜かして夢心地のチンピラ達……。

純情無垢の美女に配する悪役の顔ぶれに至っては正に至れりつきせり。鬼六先生のサービス満点。さし絵がないことは貧弱な想像力をフル回転させる結果となり、艶麗極りない悦虐場面が次から次へとくりひろげられて来ます。そこで僕は、思わずニヤリとするわけです。

所詮、僕等にとっては想像の世界でしか、かいま見ることの許されないことであっても、次から次へと披露されるプレイは正に珍芸中の珍芸。しかも演ずるのが、花はずかしき深窓の佳人達であるとなれば、これこそ実にSMの醍醐味。鬼六先生が苦心して綴る羞恥地獄、屈辱、落花無残の修羅場等々のハレンチ活字から連想させられる被虐の世界とはうらはらに、玉の汗をながして熱演する麗人達の競艶舞台からは、さわやかな明るいムードにつつまれたユーモラスな雰囲気、そこはかとなく、ただよってくるのです。そこで、つい僕の口元は嬉しくゆがんでしまふのです。

人間性さえかなぐり捨てて、熱演する静子夫人以下のスター達は、大変申し訳けない次第です。僕等の心の片隅でいつも燃えていながら、どうしても消すことが出来なくてイライラしているこのSMの消火作業を健気にも買って出て、鬼六大先生からは淫虐飽くな

き悪魔、悪女の汚名をきせられながらも、そんなことを一向に気にかけないで、ひたすら脂汗かきかき、大奮闘をつづける一座の悪役達には心から感謝しております。彼等も僕達の出来ないことを代りに引き受けたばかりに、悪者扱いされている、気の毒な犠牲者であり、その一人一人にいたっては、きつと正直で小心、SMだけは大好きという善良な小市民であるに違いありません。

僕の愛するこれらの友人達は、僕が仕事の余暇を利用して何喰わぬ顔をしながら研究しているあの手この手の羞恥責めを、いち早くかぎつけては、いつも極めて効果的な実験をしてくれました。又、自からモデルとなって実験台にのぼり、如何に珍妙で甘美な秘戯であっても、苦悶と涕泣の伴奏のうちにはじめ乍ら、いつしか、あかるくて楽しいユーモラスなムードのうち、ものの美事にやってのける麗人たちの演技はまことにお見事で、その体当りの献身ぶりは激賞に価するでしょうし、SMに對する僕の考えを、ますます明確なものにしてくれますし、それによって毎日の生活を張りのあるものにしてくれます。

編集部だより

○最近日本全国の県庁所在地などの主要都市を回る機会を持ったのだが、殆どの書店で本誌の姿を見ることが出来なかった。地方の読者の方から廃刊になったのでは、という問合せがあったり、入手が困難だという訴えがあったりするもの、これでは当然だと思ふ。

○「憎まれっ子世にはばかる」と言われるが、この調子では全くの貴重品扱いで中々人の目にもつかないのではないかと危ぶまれる。売れ残りが出ない程度にという最少限度の発行部数がファンに迷惑をかけているのではなからうか。

○東映にて映画化決定の「伊藤晴雨物語」は今月号で一回読切として掲載予定だったが、二百枚以上の力作となったため、来月号と二回に亘って分載することにした。

○団先生が「伊藤晴雨物語」執筆に当り精力を使われたため、好評連載中の「花と蛇」が、今月号に限り残念ながら休載となった。

○期待されていたファンの方々は、まことに申し訳ない次第だが、団先生からの便りによれば次号か

奇クに望む 岩田浩二郎

奇クを手にすると、読者の熱心な提案や、それに対する反論が、二つや三つは必ず目に入る。それは取りも直さず、奇クの読者がいかにまじめであるかを物語っているのである。

従って、単なるひやかしだけで奇クを読む人は、きわめて少ないものと思われる。初めは単なる好奇

心で読み始めた人を、グイグイひっぱって行く不思議な魅力が、奇クは持っている。

しかし、結構ずくめの奇クにも少しばかり注文をつけたいことがある。

自肅の徹底によって煽情的な写真や挿絵をなくしたことは仕方ないとしても、文章ばかりでは余り



S・コレクション

「ガラスの廃液」

— 豪城二 —

にも殺伐としすぎてはいないか。何もそのものズバリを描く必要はない。潤いをもたす意味で、風景でも人物でも一般月刊誌のような描き方で良いと思う。

また、煽情的な写真を排除するという悪い文句とはうらはらに、十月号には妊娠九カ月の女の全裸写真が載っていたが、私はどうしてもあれにはついて行けない気がした。

次に各作品の内容だが、毎号同じ人が同じようなことばかり書いているような感がある。作者、作品共に例を挙げることは差し控えるが、マンネリ化した作者には少し遠慮いただいて、編集者は常に新風を吹込み、斬新さを追及すべきである。

小説のジャンルにショート・ショートというのがあるが、それとか本格的なSF物なども取り入れてはどうか。SF風の作品は十月号にも載っていたが、なんとなく物足りない気がする。

奇クに足りないのは、ピリツとした風刺とシャレである。本誌の趣旨を尊重した内容で、しかもユーモアと皮肉とシャレとをうまく取り入れた読物を期待するのは、少しぜいたくか。

らは更に一層のスタミナを蓄えて濃厚な名場面を展開させて下さる由なので今月号だけは何卒御容赦をお願いしておく次第。

○勇敢に妊婦モデルを志願して十月月号誌上に、その見事な麗姿を飾った木戸悦子夫人は、予定日より若干遅れて九月五日に女兒を無事安産された由、便りを貰った。

○最近編集部長宛や編集長宛の通信を多数頂戴するので厚く感謝している。つとめて御返事を出すようにしているのだが、なにしろ毎月遅滞なく雑誌を発行するということに専念するだけで精一杯のため全部の方々にというわけにいかないのが残念である。乞御諒承。

○九月号で懸賞応募して入選したHMモデルとその妻Vは編集部同人の作ではないかという便りがあったが、これは間違いもなく絹川文代さんの下敷きになっているMモデルその人の作品である。

○従来、Mモデルに使ってくれたら体験記を書くとか、M女性を紹介してくれたら原稿を書くとか言ってくる読者が多かったが、殆ど約束は果されなかった。このMモデル氏は告白を約束通り書いてきた数少ない人の例である。紹介した多くの女性は誌上に載る機会もなく姿を消してしまっている。

刺青女性の

フォトに思う

小 谷 和 勝



拙作「青と赤の蝶」が、はからずも十月号に採り上げられていたのだが、先般の「蛇性の女」及び「京子抄」につづいて、三度目の栄誉に喜んでゐる。

しかし、私のつたない文が採り上げられると、いうことは、作品

自体に価値があるというわけではなく、「刺青」という素材のおかげであることに違いないと思う。

我国の現状に於て、異端視され猟奇的にみられている「刺青」に読物といわず、映画といわず、特異な興味として扱われているよう



である。
たしかに、現在では刺青を施している人は少いであろう。稀少は特異とするなら、事実上の特異であるといえよう。
しかし数の上で少ないから、刺青は「悪」であるという見方はどうであらうか。九月号に於て、堀田彩次郎氏も書いていられるが、不健康かも知れないが、装身術の一つとみれば、やたらに偏見のみで異端視すべきではないと思うのである。
同封したフォトは、最近、アメリカから入手した百枚近くの資料フォトの内の一部である。製版され、印刷された場合の鮮明度がいささか心配であるが、いずれも見事な「芸術作品」ともいえるのではなからうか。

〃 奇ク読者賞〃

かず・とやま

読者の人気投票により、本誌寄稿家からえらぶ、第一回奇ク読者賞受賞作家は、カメラハントの辻村隆氏と決定。賞金として三十万円。副賞にヨーロッパ一周カメラハントの経費として百万円が贈られることになった。

本年一月読者賞の設定が決定。かねて上半期もっとも活躍した作家を、全読者より人気投票で募集中のところ、S派からもM派からも同作家の作品に圧倒的な投票が集中、審査員による最終審査にも全員一致、辻村氏への支持が多数を制し文句なく受賞と決定した。

審査のオブザーバー、かず・とやま氏談。

まったく辻村さんの活躍は、すばらしいの一言につきる。

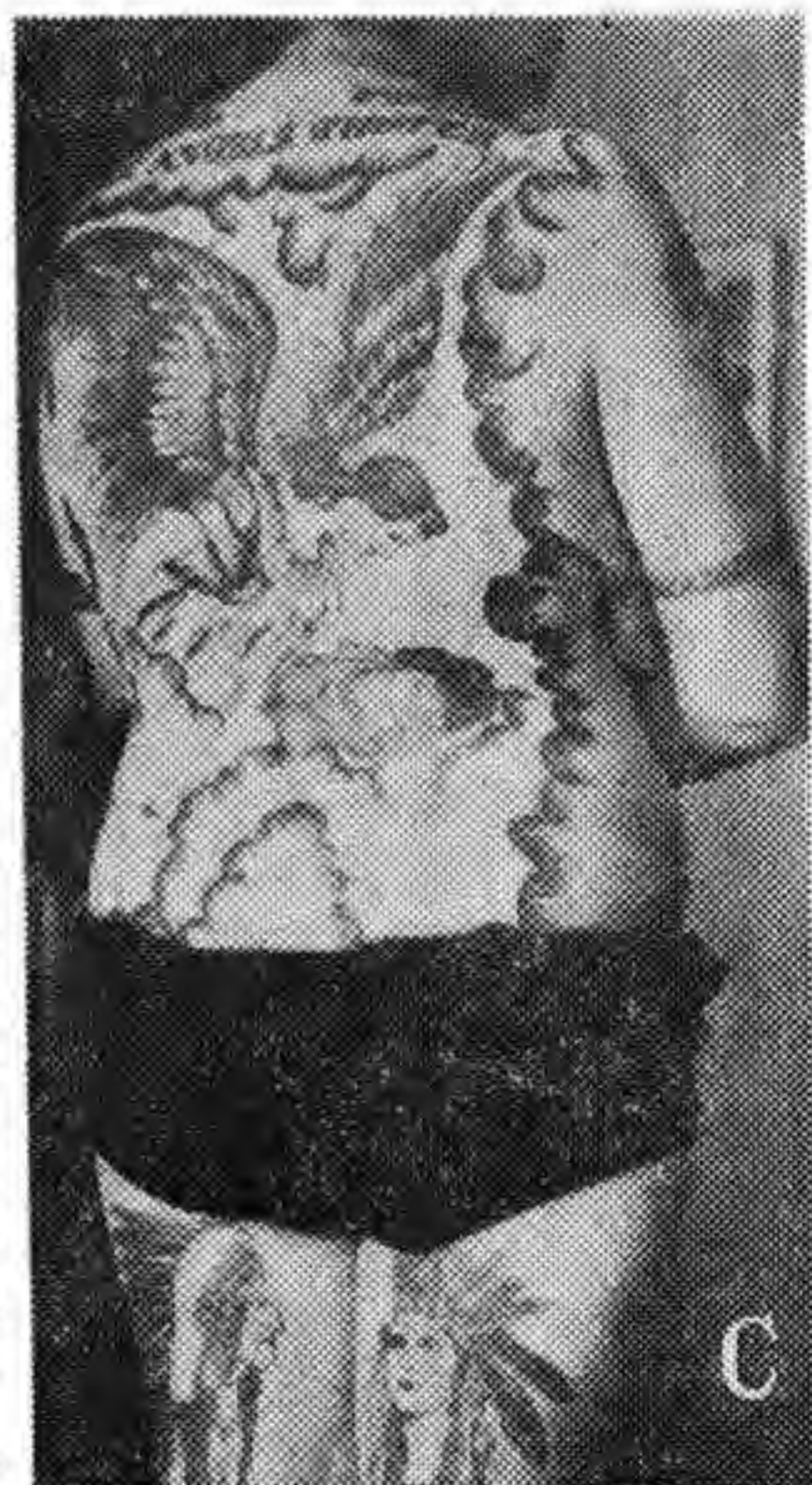
8月号カメハンの、『魔子の味つけしたもの』をしゃぶりたいんだって……』というくだりや、また10月号カメハン、木戸悦子氏とのデートでは、妊婦特有の

(A) 首筋から肩、腕、背中、尻、乳房、掌に至るまで、大輪の花模様を彫り上げたフランス女性の刺青。

(B) 前身のほとんどを、花柄のデザインで飾ったドイツ女性の見事な刺青。

(C) 背中には天女の像を、両の太腿にはインディアンの肖像をという珍しい取り合わせをほこるアメリカ女性。

(D) 胸部から腹部にかけて、小鳥、孔雀、カーネーション、魚類、蛇等を、所狭しとばかりにちらし彫りにした女性である。首か



ら胸に垂れているロザリオの首飾りも彫りものである。更にこの女性

性の両乳房をご注意願いたい。ぶら下っているイヤリングは実物である。驚いたことに、乳頭に穴があけられていて、リングが通されているのである。我国でも一時喧伝された時

があり、耳朵を穿孔をしている女性には相当に居るらしいが、乳首という場所だけに、眼をこらして眺め入ったものであった。
この他にも多くの刺青女性の存在を、この度の入手資料は物語っている。マニアの一人として、これらの見事な刺青フォトを眺めるにつけ、その不思議な魅力に引きつけられていたのである。
今回、辻村氏の協力された映画「徳川女刑罰史」にも、美女の刺青場面があるそうである。スクリーンでは見事なものだが、やはり映画では描いただけのこと。いくらマニアといえども、ただの描絵とわかっていけば、それなりの観念で魅力は少い。

頻尿生理をとらえて、一条の水をほとばせたり、目の前に立たせて、観察するあたりの描写は、このみちのキャリヤをひそかに誇る私でさえ、思わずうなった。

ここで、ヨーロッパに飛び、異国人とのカメハンにちがった味を発揮してほしい。

なお、辻村氏のヨーロッパ旅行には、芳野眉美氏が同道。通訳兼渉外係として、三原寛氏も同行の予定。

また読者の回答中には、いままです辻村氏はSを強調して来られたが、これを機会にMの境地を開拓してほしいとの要望が多かった。

受賞の辻村隆氏談。

すぐれた寄稿家の中から、はからずも、受賞の光栄を得て感謝している。

ヨーロッパへ行かせてもらえるというのでカメハンも、いよいよ国際的になったと感慨無量です。パスポートおりしだい出発しますが、芳野君や、三原さんがついてきてくれるので心づよい。とにかく、よいしごとをして、Mの読者のみなさんの要望にもこたえたい、と思います。

(かず・とやま戯記)

＜短歌＞

「悦虐の刑」

高村初子

四つ這いになりしお尻を叩かれ
て浣腸すると嘲りの声

○ 髪の毛を剃るとおどされ犬のご
と四つ這いになり便器つかいぬ

○ 跨ぎたる鏡にうつす我が肌を恐
ろしく見る四つ這いのまま

○ 克明のスケッチの図を指でさし
名前言わせる悪どき仕草

○ 開かれし肢の間に置かれゆく小
道具にぶく光を放つ

○ 木馬の背垢に汚れてテカテカと
黒光りして目の前にあり

○ 乙女らの汗と脂のしみこみし木
馬の背なほあえかに匂う

○ 許しての哀願空し次々と検診道
具並べられゆく

○ 目の前につきつけられし浣腸の
ガラスの嘴管液に濡れいつ

最近の体験 沢田 広

久しぶりに、ピンク映画を観に行った。「凄艶四所切り」という題で、九つの急所なぶり責め、という惹句にしびれて、出かけたのである。

映画は期待に反して縛りシーンは一カ所だけ。胸へ二すじの縄がかかるだけという頼りないもので羊頭を掲げて、狗肉を売るの類であったのだが、私の横に中年の紳士が坐っていた。新聞をもっている。いやに椅子が、ギシギシと鳴る。顔をみてやったが知らぬ顔である。そのうち、あるリズムをもった衣ずれに気づいた。画面はベツドシーンである。思わず私は席を立てしまった。

週刊誌で、ストリップや映画をみながら、あやしげなことにふける客のいる記事は読んだ事があるが、まさか実際にぶつかるとは思わなかった。汚ない男である。

次は、若い女性の話。さる所で集りがあり、散会後私は一人残ってノートの整理をしていた。よく顔を合わす、二十才前後の女性が何書いてるのと私の右側へ坐りこ

んで、のぞき込んで来た。

「あまりみるなよ」といいながらノートしていたが、女の子の胸許が私の肘に当るのだ。自分から押しつけて来て、押し返してやっても一向平気なのである。「押すなよ」といいながら右肘でわざとコネてやったが、逃げもしないで「エッチ」とだけいって、ジイッとしている。

これはこれは、と改めてさぐってみると、ゴムの入っていない、ブラジャーをキチツとしているらしい。ブラウスの上からだだが、彼女、ますます押しつけてくる。若いだけに、弾力がある。お望みならば、とばかりにアタック。何しろ私の体は前向きで右手にペンを持ち、左手だけの作業なので思うように出来ない。その間、彼女は終始無言。石のように動かない。恐らく処女だと思う。経験者なら何か反応があるだろう。ジイッとしてるのは未経験のせいだなどと思ったが、とにかくこの果報は良いものだ。「めし喰いに行こうか」ターミナ

ルで夕食を喰って別れた。これ以上積極的になっても、OKがとれるとは限らない。こちらがその気になると、とたんにふられる時はママあることを私は知っている。それにしても現代の若い女性は、その時のなり行きしだいですい分大胆な冒険を楽しむ風俗が身についたようだ。

奇ク10月号に鶴藤恵氏が「ふおと・あんど・むーびー」と題して一文を寄せられているが、文中の通信販売の案内は、私にも来た。カラーが53枚で二・三〇〇円とは安すぎる。キット宣伝程ではないと思ったが、SM趣味の方にも云々、とあったので申込んでみた。K文庫である。現品が届いてみると、何とトランプである。

王朝風の衣装を肩にひっかけたヌード・トランプで、なる程、タイツなんぞは着用していない。あやしげなポーズの女性がうつっている。宣伝文句に偽りはないが何ともかつがれた感じ。文句をいふとしたら、「皆な私が、悪るいのよ。そしてアナタが馬鹿なのよ」と返事がくるだろうと思う。夢、こんな案内には応じない事だ。二度と案内をさし上げません、とあるのに、然も断りもしたのに以後三回も案内が来たよ。


~~~~~TV 拝見~~~~~

## 真昼の女王 保藤久人

東西、東西！ ここもと手前勝手ながらご紹介いたしますのは、いささか旧聞に属しますが、NE Tテレビが毎日お昼に放送しているアフタヌーン・ショウのそのなかで、題しまして「夢のお見合」お粗末ながらまずはひとふで……

日時 九月十二日（木）0時20分ごろ。

お見合をする女性 現代派的行動派で、個性味豊かなカッコいい美女、松岡きつこ嬢。

お見合の相手 全国の数多の志望者のなかから選出された三人の男性のうち、スタジオでの電話問答で、松岡嬢がさらに選んだひとりの若者。東京の浪人君。19才。（松岡嬢がこの青年を選んだ理由は、彼のずうずうしさが現代人らしくて気に入った、のだという）電話で、おたがいの声の探知が終わったあと、ふたりは並んでソファに座り、まず、始めまして、と握手！



イメージ画『失意』 妖マリ

松岡嬢 あらッ。電話の感じではずうずうしそうだったのに、意外とまじめそうね。

浪人君（照れる。落ちつかない様子）

中略——そのあとふたりの会話

松岡嬢 あのね、もしもわたしがレスビアンだとしたら、あなたどうします？

浪人君 なおしてあげます。ぼくの愛情で。

松岡嬢 じゃ、ホモってご存じでしょう。ホモのこと、あなたは どう思います。

浪人君 なんにも好きこのんでそんなことをしなくてもいい。美しい女のかたがたくさんおられるのだから。

松岡嬢 わたしと結婚したとしてわたしがあれもしろ、これもしろって、いろんなことを言ったら、あなた、して下さる。そしてね、そのときの心構えは？

浪人君 なんでもしてあげます。

心構えとしては、どんなことにも、いくらでも耐えられるだけの体力を養っておきます。

松岡嬢 まあ、頼もしいわ。あのね、わたしね。映画なんかでもサドチックな……横から、飲み物のはいったカツ

プが出てきて中断！カップにストローが二本ついている。「あら、手がふるえているわ」などと松岡嬢が言って、ふたりは顔を寄せ合ってストローを吸う。

松岡嬢（まだ少しむせながら）

映画なんかでもね、わたしはサドチックなものが割と好きなのよ。そしてね、一度でいいから男性を足もとへかがませたいのだけ……あなた、もし、いまここで、わたしがここへ（自分の足を指差して）キッスしろって言ったら……どう？ おできになる？

浪人君（いくらか戸惑った様子で一呼吸の後）もちろん、できます（はつきり言う）

浪人君つと身をかがめて、幾分照れながらも堂々と、松岡嬢の膝のあたりへ、チュッ！

松岡嬢 ウワッ、すてき！

——爆笑！ 幕——

※感想 興味深い一場面でした。※お断わり 二つさのことでメモする気もなく、夜、床にはいつから急に思いついたので、会話中の言葉に、多少差異があるかも知れません。しかし、主意は伝え得たと思います。



## ひとり思うこと 齊東野人

十月号のカメラハント「胎児の喘ぐとき」には衝撃を受けた。過去一年間私にこれほどの衝撃を与えてくれた作品は他になかった。

私は今から二年ほど前に、初めて妊娠した女性のヌード写真を見た。ある写真雑誌のカラーグラビヤであった。細い手足に比べて、異様なまでに突き出した腹部。異様、そう確かに異様としかいいようがなかった。しかし、決して醜悪な感じはしなかった。そこには言葉では表現できない、なにか不思議な美しさを感じられた。それ以来妊娠した女性を見る私の目が変わってきた。私は妊娠した女性を見ると、裸にしてその大きく脹んだ腹部に手を当てる胎児の動きを感じとり、口を当て、耳を当てて胎児と話をしてみたいような衝動にかられるようになった。我ながら幼児趣味の感はしたが、これが私の偽りのない気持であった。自分がこの世に生まれてくる前にいた世界、自分の意識の領域外の世界に対して限らない憧れを抱くこと、これこそ本来的な意味における

るエロスの本質ではあるまいか。そしてこの度のハントである。

妊娠九カ月の女性に非情なまでの責めを加える男。その責めを自ら望み、歓喜の叫びをあげる女。

もともと私の考えていたこと、すなわちサディズム・マゾヒズムこそが、人間の本質的な要素であり、サディズム・マゾヒズムを媒介とした男女関係こそが本来あるべき姿ではなからうか、と思っていたことが裏づけられたようだった。特に放尿や階段の手摺からの吊り責めのくだりは読みながら嬉しくてゾクゾクしてきたほどであった。(おかしな表現だが、他に適当な表現が見当たらないので仕方がない)

ドキュメンタリー形式の作品は小説などに比べるとやはり一段と迫力があり、読む者の心をとらえずにはおかぬ。辻村氏は、多少のフィクションも交えており、実際は側でみるほど、楽しい仕事ではない、とおっしゃっていらしたが、毎回ちがった女性を縛り、責め、そしてカメラにおさめていら

っしゃる辻村氏はやはり私にとっては羨ましく限りである。

しかし、毎月奇クを読んでいて気になることは、辻村氏・団氏をはじめとする常連諸氏によって独占(失礼)されておられ、新人、それも二十代の若い新人の作品が、殆んど見当たらないということである。奇クの誌面に登場する二十代はといえば女性ばかり。しかもその大部分はモデルとしてである。

こうした状況は、決してよい結果を、生みはしないであろうと思う。何故なら常連諸氏の作品はどのうしても同一化の傾向に陥りやすく、それが長期的視野に立って見た場合、内容を固定化させてしまいい、奇クが老化現象をおこす危険性が存在すると思える。

それにしても二十代の投稿が目立たないのは、どうしたわけであろうか。サディズム・マゾヒズムを素材にしたものは、長年の経験がなければ書けないのか。それとも、戦後日本の国語教育の弊害のあらわれと見るべきか。恐らくはその両者であろうと思うが……奮起を望みたい。

映画「初恋・地獄変」(羽仁進 寺山修二共同脚本。羽仁進監督)はアートシアター系の劇場で封切

られ、かなりの興業成績をあげた映画である。

しかし私には、例の女斗美の場面は、この映画にとって絶対に必要なものであったとは思えない。恐らく寺山氏あたりが、客寄せのために入れたものであろうと推測する。このあたり、先に公開された「徳川女系図」と大差ないと思うが、前者は話題作、問題作として世間の注目を浴び、後者は愚かしい見世物として徹底的に非難された。これは一体どうしたことであろうか。有名な監督の手になる作品は問題作、余り有名でない監督の作品は単なるエロ映画。このように決めつけてしまっただけで果してよいのであろうか。これでは余りにも主体性がなさすぎると思う。批評の対象となるのはあくまでも作品そのものであって、監督ではない筈だ。因みに、「初恋・地獄変」はドイツでは不評であったという。上映中止を要求して、観客が騒いだとも伝えられた。「壁の中の秘事」の場合といい、今度の「初恋・地獄変」の場合といい、ドイツの観客の態度には、一本筋が通っているように思うが、どうであろうか。



## 〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

竹棒開股苦打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

後手吊りにもがく女体

大手札四枚一組 略号「くて」 五〇〇円

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

愛知葉子

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つめ」 五〇〇円

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」 五〇〇円

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

両手万歳吊りにもがく

大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」 五〇〇円

川越美佐子

大手札四枚一組 略号「へね」 五〇〇円

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

増田みゆき

大手札四枚一組 略号「へわ」 五〇〇円

激痛に耐える鞭打ち表情

関谷富在子



印画紙焼付極鮮明写真  
〔美人モデル緊縛フォト〕

|                                              |                                              |                                             |                                              |                                              |                                              |                                             |                                             |                                             |                                             |                                             |
|----------------------------------------------|----------------------------------------------|---------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 鞭打ちによる感溺の表情<br>大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 股裂縛りで痛打する<br>大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円<br>関谷富佐子   | 海老縛りの鞭打地獄<br>大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円<br>関谷富佐子  | 尻立縛りで強打に泣く<br>大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円<br>関谷富佐子  | ムチは臀部の双丘に炸裂<br>大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 鞭に悶える鉄砲責め女体<br>大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 逆手吊りで晒す臀部<br>大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円<br>関谷富佐子  | 鞭の縛りに夢心地表情<br>大手札四枚一組 略号 (めむ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 鞭は美体にからみつく<br>大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 狂う鞭に狂い泣く女体<br>大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 両手吊りの女体に強打<br>大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 |
| 鞭打ちに示す感泣の極致<br>大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 逆海老開股縛りに鞭打ち<br>大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | ムチに悶絶した美夫人<br>大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | のけぞる悦慮表情の露呈<br>大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 責めによる美的法悦表情<br>大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 妊婦開股縛り哀歎<br>大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円<br>関谷富佐子    | 八カ月の妊婦開股責め<br>大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円<br>関谷富佐子 | 妊婦太鼓腹開股縛り<br>大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円<br>中河 恵子  | 妊孕美人媚態の立像<br>大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円<br>中河 恵子  | 妊孕美人媚態坐像<br>大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 両手吊り片足挙げ妊婦<br>大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円<br>中河 恵子 |
| 突き出した腹部の妊孕美<br>大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円<br>中河 恵子 | 両手吊りの妊婦正面<br>大手札四枚一組 略号 (わく) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 縛られた妊婦の艶姿<br>大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円<br>中河 恵子  | 両手一本吊りの妊婦<br>大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 恵子の妊孕美緊縛<br>大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円<br>中河 恵子    | 初妊娠の太鼓腹の美<br>大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 裸身縛りの妊孕美<br>大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 身籠った裸身責め<br>大手札四枚一組 略号 (おに) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 麗わしの妊婦縛り<br>大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 膨満の腹部緊縛美<br>大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円<br>中河 恵子   | 立縛り髪責め引回し<br>大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円<br>中河 恵子  |
| 後手縛りで引回す<br>大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円<br>安井喜久子    | 片足吊り上げ責め<br>大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円<br>安井喜久子    | 憂愁夫人の菱縄縛り<br>大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円<br>安井喜久子  | 柱対向立ち縛りの夫人<br>大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円<br>安井喜久子  | 片足吊り股裂き責め<br>大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円<br>安井喜久子   | 逆エビ責めに泣く女<br>大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円<br>安井喜久子   | 柱正面立ち縛り媚態<br>大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円<br>安井喜久子  | 股間縛りにもかく女体<br>大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円<br>安井喜久子 | 豊満の女体をくびる<br>大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円<br>安井喜久子  | 開股前屈愛撫責め<br>大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円<br>安井喜久子   | 逆エビ縛りの愛撫<br>大手札三枚一組 略号 (おれ) 四〇〇円<br>愛知 葉子   |
| 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円                | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円                | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円                | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円                | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円                | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               | 愛知 葉子<br>大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円               |



印画紙焼付極鮮明写真

## 〔新しいモデル強烈縛り〕

## Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV  
左近麻里子

## 開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV  
左近麻里子

## 強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV  
左近麻里子

## 豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV  
左近麻里子

## 猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV  
左近麻里子

## 悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV  
左近麻里子

## 股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV  
左近麻里子

## 全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV  
左近麻里子

## 豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちにV  
左近麻里子

## 緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちこV  
左近麻里子

## 投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号八ちくV  
左近麻里子

## 輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV  
左近麻里子

## 美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV  
左近麻里子

## 美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV  
左近麻里子

## 開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV  
左近麻里子

## 開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八ちあV  
中河 恵子

## 甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八ちあV  
中河 恵子

## のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八ちあV  
関谷富佐子

## 臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号八ちあV  
関谷富佐子

## 痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八ちあV  
関谷富佐子

## 絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八ちあV  
左近麻里子

## 強烈猿ぐつわ哀飲

大手札四枚一組 略号八ちあV  
左近麻里子

## 息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号八ちあV  
左近麻里子

## 左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八ちみV  
左近麻里子

## ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八ちなV  
左近麻里子

## 羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八ちけV  
左近麻里子

## 黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八ちけV  
左近麻里子

## 甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八ちまV  
木村 洋子

## 開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八ちまV  
木村 洋子

## 菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八ちまV  
木村 洋子

## 私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八ちまV  
中河 恵子

## 豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八ちまV  
中河 恵子

## 悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八ちまV  
中河 恵子

## 麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八ちまV  
中河 恵子

## 竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号八ちまV  
中河 恵子

## 豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八ちめV  
左近麻里子

## 陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八ちめV  
左近麻里子

## 縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八ちめV  
大島 照代

## 後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八ちめV  
大島 照代

## 逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号八ちめV  
大島 照代

## 強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八ちめV  
大島 照代

## 大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子

## 絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子

## 鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子

## 狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子

## 大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子

## 蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号八ちめV  
関谷富佐子





○ 十月号のカメラ・ハントは、頃の私の願いを一举にかなえてくれる快打でありました。私は奇クを書店で買うとき、決して開いて見ません。きまりが悪いからではありません。ごちそうは後からゆっくり食べる式で、今月号は果してどんな記事やフォトがあるかという期待が、書店での立ち読みなど許さないので。子供のようにわくわくしながら頁をくった私の目に、木戸悦子さんの文字通り膨大な妊婦腹が強烈に映りました。

九カ月という腹部は、厳しい縄によって極限にまで膨らみ、日頃女性の豊かな腹部にあこがれていた私にとって、全くすばらしいという以外に形容のしがたい、見事さでありました。猿ぐつわをかまされ、後手にしめあげられた妊婦はいやでもその膨大な腹を突きださなくてはなりません。しかも陶然たる妊婦のその眼差しは、羞恥を越えたマゾ女性最高の美ではないでしようか。初めは単なる腹部の開陳から次第に厳しい縛りとなり、遂には両手を頭上に縛られ猿ぐつわから胸にX字型の竹の棒で責められるという一連のプレイの模様は、まさにSMプレイの圧巻というべきです。特に臨月型の腹部に喰い込んだ縦縄は、いいしれぬ魅力があります。妊婦腹のふくらみ具合を示すからでしようか。最近になって私は念願の夫婦プレイの仲間入りをしました。そのきっかけは、偶然的なものでしたがやはり妻にも素質があったからでしょう。毎号、待ちかねるようにして購入した奇クは数十冊となり、初めはどうやら妻の目にふれずにいられたましたが、しまいは場所がなくなり、又かくすのも面倒になったので、正々堂々と本棚

に陳列しておきました。ですから私の留守中、妻は奇クを読んでいるに違いありませんし、フォトも見ているはず。そしてそれが突然、姿を消すこともなく安泰でいるのは、妻がSMを嫌悪してない証拠だと勝手に解釈して、プレイに協力を要請したところ、余り痛くしなければという条件で縛ることを承知したので。意外な妻の反応に、私は驚き、かつ喜んだものです。そして初めの中は約束通り、すぐほどけそうに縛っておりましたが、今では、腕にはくつきりと縄の跡が残り、胴はくびれるほどしめあげて、その上、縄尻で臀部に激しい音を与えています。女心は不思議なもの、約束が違うなんてことは一言も言わず、悲鳴をあげています。幸い妻は豊かな体格をしているので、いつの日にか、その妊婦腹をカメラ・ハントのように、私の目を堪能させてくれることを、今から期待しているのです。辻村隆先生やモデルになった木戸悦子さんに、心からお礼を申し上げるとともに、勇気ある女性の数多い登場を「マニア」として、お願いする次第です。

○ (葛西六郎)

城山ほずみ様、六月号および十月号のお便り、うれしく拝見いたしました。私は三十一才で、五年ぐらい奇クを愛読しています。費用、その他の条件については承知いたしました。プレイの場所については、ホテルだけでなく山、海岸と人目のない場所が多くありますので、こまりませんし、プレイも開股縛り、逆海老責め、鞭打ち乳房責、逆吊りから、竹、筆、ローソク、バイブレータ、その他小道具を使って、貴女を満足さしてあげます。私は、どこに出向いてもよろしいので、場所、日時については、貴女におまかせいたします。野外でもプレイするのでしたら岡山にきて下さると幸いです。勿論、条件はもとより秘密は固く守ります。ご返事下さるようお願いいたします。(岡山・近藤次郎)

○ 八年ほど前、書店で貴誌を見かけてから、ずっと愛読しておりました。当時は貴誌を買うのも大変な勇気がいり、胸をドキドキさせて下を向きながら買い求めたものです。今では堂々と目次を調べ、中身を拾い読みしてから買えるほどに成長？ しました。私はSMには、あまり関心がありませんが、



エネマに興味を持っていますのでそれらについての記事が載っているときは、無理しても手に入れたくなります。以前は一人で、いろいろと実験してみましたが、最近あまり行っていないです。というのも、一人プレイではやはり面白くありません。現在、ゴム製の浣腸器を持っています。以前、ガラスのエネマシリンジを持っていたのですが、わってしまいました。私の経験ではグリセリンより石けん液の方が良いと思います。グリセリンは強すぎるし、石けん液の方は臭いを消すという大変な利点があります。エネマについての読者の方々の意見や経験をお知らせ下されば幸いです。特に女性の方からのお手紙をお待ちしております。年齢は問いません。私は二十八才の会社員で体格は小柄な方です。よろしく願います。

(川崎市・中西勇)

私は二年前から奇クを愛読しているS男性です。SMに興味を持ちはじめから今日まで女性を責めることのみ夢みております。私の好みとして、体にキズをつけるようなヒドイ責めは嫌いで、浣腸などの羞恥責めが好きです。でも

プレイの経験がないので、いざ本番となった時、どうなることやらわかりませんが……。プレイ中は私は「花と蛇」の野獣のような男達であり、あなたは静子夫人になるのです。全裸での開股縛りや海老責め、そしてクライマックスは浣腸による排便です。ただその時あなたは、目の前の鏡に写った自分の最も美しい姿を見ることができるとしよう。私の嫌いな言葉は「異常」「孤独」です。プレイを通じて、お互いに人生をエンジョイしましょう。愛媛、又は近隣のM女性の方からの、お便りをお待ちしています。(松山・岡本)

小生はK誌を手にして今年で八年になる。正直なところ、こうして便りなど出す気持は、かつてなかったが、余りに感情的な便りが多くてバカけているように思えたからだ。MもSもない。人間は両面を持っているんだ。これは真実である。小生もかつて二、三度、女性を責めた経験があるが、本人はMだなんていいながら、では、小生を責めて見ろ、と言うと、やはり一応はSにもなった。いずれ小生も、K誌にMS小説を書きたいと思っているが、MS小説とは

一体どのようなものを指すのか、お教えねがいたいものだ。まさか「花と蛇」のようなものを言うのではないであろう。団先生には申しわけないが、あれは小説ではない。真実性のないものは、小説ではなく物語りにすぎん。一種の童話である。勝手なことを書いてしまったが十月号の小竹氏「SM日記」は、よくできていた。これだけ読ませていただいたので満足としなければならぬ。さて、自らのM的と言われる、横浜の片野初枝

様、本当に貴女がMだと思っていたら、本当のならば一度お会いしたいものだ。まだ一度もM的女性に会っていない小生だが、よければ貴女の調教を引き受けよう。ただし、次の点について貴女が確かな回答をくださればの話である。それほど小生の相手は、M的自信のない人は、お断りである。一、お互いの生活、及び身上について関知しない。二、小生に対する貴女は絶対的ドレイであり全て小生の意に従う。三、経済的な要求、助けを求

### 木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」へ妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフォトを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のま」

羞らう妊婦の裸身前向立像 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のめ」

九カ月の妊婦腹を晒す 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のや」

九カ月の妊婦腹を縛る 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のこ」

木戸悦子

便々たる太鼓腹に縄掛け 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のし」

膨満腹も露わな両手挙げ縛り 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のろ」

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のは」

十文字縛りの妊婦腹 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のに」

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のほ」

開股責めと椅子縛りの妊婦 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号「のへ」

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子



めないこと。四、社会的良識と感情的M意識をすて、全て、小生と対峙している間は、命令に従うこと。それさえ守る自信がおりなら、貴女を立派に調教して見せよう。三については、二人の必要費は全て小生が負担する。調教を希望するのなら返事を待つ。小生は三流文士なり。三十才。

(東京・無田口一郎)

城山ほずみ君。私は本年四十四才になる一介のサラリーマンで、勤務先にも女性が多勢おりますがどうも知っている女性には私のプライドのためか、SM的な話はできません。しかし四十四才の今日まで女性を縛ったことはないかと言いますと、そうでもなく何人かおります。もし貴女と緊縛プレイをすると思います。今日一日は私の奴隷となった貴女は、部屋へ入ると早速、着衣は全部脱ぎ、両手は肩先近く、ひしひしと縛りあげられる。食事、便所、入浴などもすべて緊縛された状態で行われる。先ず乳房責めを行うため一旦、縄をとき、奴隷を腰を浮かした状態で下向きにし、乳房を充分下へ垂らす。持参の太い軟銅線を二重にし、中へリングを三カ所入れて、

乳房の根元でしめ上げる。しめつける前にリングを上下横と三つつけ、横のリング、すなわち左右の乳房をリングにより固定し、両乳房の両はしでしめつけた銅線のはしを背中であえねると、銅線による強烈なロープブラジャーとなる。もちろん乳房の銅線は食い込んで入って、その中へ沈んでしまう。次に後で重ねていた両手首を銅線の束目の所まであげて、引つづきそのまま首縄にもってゆく。この状態は、うまく取り扱わねば手首はなかなか上へあがらないから、奴隷も極力、主人が作業をしやういように努力せねばならぬ。この方法に乳房は色が変わってくるが、乳房から上の方も赤味をおびてくるので、時々銅線を乳房の際の所でゆるめる必要があり、それが又絶えず奴隷を責めることになる。次は一旦、乳房の際の所で少しゆるめてから、逆海老にかかる。ゆるんでいても逆海老にかけると、乳房にはってき、しめつけることになる。逆海老の状態です、乳房責めを行う。次に海老責めにかけるため、初めのような高手小手に縛りあげる。両足首は別々に縄をかけ、リングをはめる。両手首

安井・中河・金原緊縛写真

|                |            |                       |                                  |                                 |                                |                                 |                                |                                |                                 |                                 |                                 |                       |
|----------------|------------|-----------------------|----------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-----------------------|
| 大手札印画紙極鮮明焼付フォト | 開股羞恥責めの姿態  | 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 髪吊りで強烈ムチ打ち 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 片足首引きつけ縛り 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 尻立て鞭打ち艶姿 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 柔肌に炸裂するムチ 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | エビ縛りの鞭打ち 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 貞操帯着用鞭打ち 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 痛打にもかく美女体 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | あぐら縛りの羞恥責 安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 | 片脚挙げで晒す裸身 安井喜久子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 | 中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 |
| 強烈エビ縛りで苦悶      | 膝頭縛り開股竹棒責め | 竹棒開股足首縛り              | 股間縛りの裸身表情                        | 菱縄縛り猿ぐつわの表情                     | 乱痴戯騒ぎの結末                       | 菱縄縛りで床に喘ぐ                       | 浣腸責めの甘い恐怖                      | 浣腸液の注入直後                       | 強制浣腸の各姿態                        | 浣腸責めの美態開陳                       | 浣腸を待つポーズ                        | 中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 |



を縛った縄を両手首から二本出し  
両手首から右肩を越した足首のリ  
ングの中へ縄をくぐらし、背中の  
手首までもって行き、同様、左肩  
を越した縄は、右足首のリングの  
中をくぐらして、又背中の手首で  
とめる。それがおわると左右少し  
ずつ縄をしめてゆき、両足首を首  
のところまでしめてゆく。身体の  
軟い女性は、最初から首まで足首  
があがるが、中々ここまであがら  
ない。これも乳房責め同様、何度  
もゆるめなければならぬ。奴隷は  
最初からさるぐつわをはめられて  
いるから、声を出すことはできな  
い。海老責めの途中で休憩し、昼  
食をとることとす。縛られた奴隷  
には食べやすいようカレーライス  
を注文し、飲物も底の深い皿に入  
れてもらう。顔中、米つぶだらけ  
にした奴隷は、シャワーで洗われ  
主人により化粧される。午後もし  
続き海老責めを行ない、ローソク  
責めも併用する。海老責めのあと  
吊し責め、鼻責めを行って仕上げ  
乳房責めに用いた太い軟銅線で軟  
くむち打ちをし責めを終る。まず  
い文章を長々つづりましたが、若  
しよろしければお返事下さい。

(西宮・和田 一)

毎月、困難な中で、奇クの発行  
を続けておられることに心から感  
謝いたします。社会から全く白眼  
視されて、しかも今の経済的状態  
の中での発行は、おそらく何か率  
仕的な仕事となっているのではな  
いかと思われまします。しかし、それ  
が私どものような者をはげますも  
のになつてゐることを、どうかく  
みとり、がんばって下さい。又、  
今サイケデリックなどというもの  
が流行して、それがSとかMを、  
かなり一般的に大っぴらにふりま  
わすために、社会的には多くの人  
が、別にS・Mを特にめずらしい  
と思わなくなつた点もあるかもしれ  
ませんが、それまで社会の片隅  
でおとなしくしていた私どもには  
決してありがたいことではないと  
思うのです。今回、思いきつて投  
稿しました。とにかく自分のこと  
ばかり、かなり勝手に書いてしま  
いました。昔のように手紙の転送  
を許されないもので、やむなくこ  
うにしてしまいました。では、  
お元気で健闘下さい。

(東京都・打田有二)

十一月号に緊急ルポとして発表  
された「徳川女刑罰史」を拝見し  
たしました。外人女優まで使用し

|                                               |                                              |                                              |                                              |                                              |                                               |                                               |                                               |                                              |                                              |                                               |                                              |
|-----------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------|----------------------------------------------|
| 可憐表情の全裸縛り<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆめV | 立縛り正面裸晒し<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆえV | 両手吊り全裸晒し<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆひV | 雁字搦目後手縛り<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆあV | 股間縛り柔肌責め<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆもV | 猿ぐつわ開股責め<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆにV  | 豊満な臀部強烈責め<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆほV | 強制全裸開股責め<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆみV  | 股間縛りで悶える<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆるV | 全裸縛りに羞らう<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>金原奈加子 略号 八ゆへV | 私の妊娠腹を見てね<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>中河恵子 略号 八ゆわV  | 縛られた妊婦横臥す<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>中河恵子 略号 八ゆよV |
| 被虐に燃える全裸妊婦<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>中河恵子 略号 八ゆぬV | 尚も見せたい妊婦腹<br>大手札四枚一組 略号 五〇〇円<br>中河恵子 略号 八ゆるV | 股間縛り首縄正面<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よれV | 両手吊り正面晒し<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よそV | 全裸高小手の麗身<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よのV | 全裸股間縛りの媚態<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よやV | 強烈な変型エビ縛り<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よいV | 正座猿ぐつわの仕置<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よふV | 凄絶海老責め地獄<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よえV | 女体二つ折り縛り<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よぬV | あぐら縛り全裸晒し<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よあV | イルリの浣腸責め<br>大手札三枚一組 略号 四〇〇円<br>長井葉津子 略号 八よたV |



た大作は、群小プロには望めぬ豪華なもので、久方ぶりにゆっくり楽しませていただきました。例によって見物記を書くところですけども、緊縛及び拷問指導は、我が辻村先生ですので、今回は何も書かないことにいたしました。

(東京・沢瀉しの)

○ 六月号にてカメラ・ルポを出された谷山久美子さん、愛読者、または同県人の一人として貴女の勇気と英断を、私は心よりほめたたえさせて頂きます。永年、奇くを愛読いたしておりますが、同県人でなかなか同好者がいず、残念に思っております。私は、女性を責め縛ることに非常に趣味がありSM関係映画はできる限り見に参りますが、何分にも田舎のこととて、なかなか思うような映画も参りません。又、夫婦プレイも妻の理解がなく、一人空想にふけております次第で、今後とも発表をお待ちいたします。できれば一度お会いいたしたく思いますが、厚かましいと思ひますので、貴女のお便りをお待ちいたします。当方四十三才、サラリーマン。

(岡山・弓生)

旭川市大町の芳村一郎、木村一郎さん。お便りお待ちしております。す。ぜひ、身近かにおられるお二人と話し合ってみたくなり、初めてペンをとりました。お互いの秘密は固く守ります。又、今後とも良き友として交際して行きたいと思ひます。(北海道・宮脇則夫)

○ この岡山のどこかにも、奇くを胸に見果てぬ夢を追ひ求めながら満たされぬままぶ然としている女性がいるかも知れぬ……と思ひ、筆をとった次第。今年の春であったか、谷山久美子と名のられる女性、山本氏のカメラ・ルポに登場されていたように思う。氏のカメラさばきの美事さもあることながら、その美しい容姿に、ああ、こんな女性が鳥城そびえる岡山の市中に住みたもうなのかと、何やら現実とは思えぬほどに驚いたものだが、そのくだんの谷山嬢も、今こうして私が筆を走らせている現在、ひょっとしてひょっととせぬものでもない、求めておられるかもしれぬ……。それは悲しい、ひとりよがりかも知れないが、しかしある意味で、世間一般の常識の中では異端者の私達、それぞれに何か淋しいものが胸中にあるのでは

### 大手札印画紙焼付

### 〔緊縛女体美のシリーズ〕

#### 両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

#### 強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

#### ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

#### 半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

#### 逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

#### ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

#### 関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

#### 尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

#### 片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

#### 私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

### 脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

### 鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

### 滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

### 両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

### 狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

### 浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

### 投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

### 待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

### 二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

### 柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

### 神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽



ないか。その淋しさの中で、悶々と満たされぬ日々を送っておられる女性がいたら、ここにその淋しさを満たす可能性を有する男がいるのです。ということはこの誌上を借りてお伝えしたい。むろん、かく申す私も、その淋しさの中でシンギンしておるのです。現在の社会通念の中からハミ出した男と女が、お互いの傷をなめ合うがごとくに、ささやかながらもホッと互いに息をつきあえる。そうかお前もかという安どの中に二人の小さな仕合わせをきずいていく、そんな可能性がこの筆の中宿っていると思っているのだが。何の理くつもいらぬ。いじめたい男といじめられた女が、この文をキツカケにめぐり合って、広い岡山の片隅で充実した生活を送る——やはり見果てぬ夢なのでしょう。誌面での連絡を待つ次第です。(岡山市・井上洋一)

十一月号の東区の女王様、ぜひ奴隷にして下さい。前から私を奴隷として下さる女王様を求めています。いまだに実現しませんので、一度でいいからプレイを経験したいのです。私は顔に跨がられ女王様のネクターの洗礼を受

け舌で奉仕をいたします。そして命令のままに奉仕いたします。ほかの女王様でも結構です。私を奴隷にして下さる方、おたより下さい。お互に秘密は厳守し、有形無形の迷惑は絶対におかけしません。私は身長一メートル六三。二十四才です。

(大阪・山本正一)

東北は、すっかりすずしくなり朝夕は寒いぐらになりました。私は食欲の秋とともに、ますますふとってきております。現在七十キロにもなっております。やはり七十キロをオーバーすると、歩くのも苦しいぐらいです。私の自慢の蛙腹、太鼓腹は一段と肉と脂肪がつき、去年のスカートは全部チャックがしまらず、うれしい悲鳴をあげております。私は今、特大のニットのスーツを買って着ております。これを着ますと、毛糸の細いのできてますので、お腹の線がハッキリ見えます。そして自分の蛙腹が美しく突きでて、人目にすぐくつきましますよ。お腹の一番でている下腹のあたりは、毛糸がのびきって薄くなり、今にも裂けそうにつっぱって、お腹の偉大さがハッキリわかりますので愛

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はわ

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はふ

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はほ

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はあ

変縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はう

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はさ

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はめ

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はし

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はも

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はむ

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はめ

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はも

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はさ

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はし

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はす

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はせ

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はゆ

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はた

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はち

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はつ

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はて

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はと



用しています。お店に出る時、バスに乗ると前の人の視線が私のお腹に感じるような気がします。私は、あと数日でメンスがまいります。今日が月の中で一番苦しいときです。お乳は固くはって、強く押すと痛いぐらいに重くはりきっており、お腹はパンパンにはって少々痛みます。私は今夜はお店を休み、ゆっくり自分のことを想像して楽しい休みにしたいと思っております。夕方、お風呂に行っておりまして。十人ほど女湯におりました。私が一番ふとって肉のたるみもなく大きくはっている自分のお腹を、誇らしげにみんなの前につきだして、堂々と他の客に見せてきました。私はアパートの部屋に帰り、姿見の前に全裸になって湯上りのお腹にタルカムポーターをふりかけ、充分マッサージをしました。メンス前はりきった蛙腹は、全く妊娠七カ月ぐらいの大きさと確信しています。どなたか、私のこの蛙腹をいじめてくれる人はおられますか？この不細工な蛙腹め。大きな太鼓腹つきだして、この太っちゃ。腹ぼて女。タヌキ腹め。とののしつてこのお腹をいじめてくれる若いやさ男にめぐりあいたいのです。

その人のためなら、このお腹を裂かれても、蹴られてもかまいません。これから益々私のお腹は大きくなるでしょう。こういう太鼓腹の中年女を好む男性の方、現われて下さい。(仙台・美川美子)

愛川悦子様。昨夜、古い写真を出してみると、貴女のすばらしい緊縛ポーズが顔を出してくるではありませんか。奇ク十一月号の佐々木真弓嬢のバックスタイルも見事です。貴女には到底かないません。バックスタイルは私がよく縛った雪子には、さすがの貴女もかないませんが、これは奇クにも責任がありそうです。総じてグラマーな女性身体は柔軟ではあります。貴女のような柔軟なグラマーを、あのような縛りですましているのは、奇クが貴女を使いこなせなかったか、又は訓練不充分というより外にありません。最近モデルもすべて変わってしまいい恐らく貴女も、よき男性を見つけて今頃は子供の一人位にはあり良きママになっておられると思います。私も最近SMプレイとは縁もなくなつて参りましたが、今まではただ夢中でやってきたため今から考えると、もっとしたかつ

### 最新撮影総天然色 カラー・プリント写真

|             |                 |
|-------------|-----------------|
| 両手吊りに悶える女   | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 後手裸身柱縛り     | 大手札四枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 縄目にあえぐ裸女    | 大手札四枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 豊麗な裸身をくびる縄目 | 大手札四枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 後手高手小手縛り    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 長襦袢の緊縛色模様   | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 緋の腰巻緊縛色模様   | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 猿ぐつわに呻く女    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 柱宙吊り強烈縛り    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| ポリウムを縛りあげる  | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 縄に苦悶する裸女を狙う | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 東浦ひかる       | 略号一〇〇〇円         |
| 真紅の腰巻着用品姿   | 大手札二枚一組 略号八〇〇円  |
| 縄に悶える緊縛色模様  | 大手札二枚一組 略号八〇〇円  |
| 東浦・大塚       | 略号八〇〇円          |
| 真紅の腰巻着用品縛り  | 大手札四枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 華麗なる緊縛裸身    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| みだらな開股縛り    | 一宮百合子 略号一〇〇〇円   |
| 責めに疲れた諦観    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 真紅の腰巻姿で緊縛   | 一宮百合子 略号一〇〇〇円   |
| 羞らいの真正面縛り   | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 若肌に喰い込む縄目   | 一宮百合子 略号一〇〇〇円   |
| 高手小手後手縛り    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 股間縛りの開股姿    | 一宮百合子 略号一〇〇〇円   |
| 羞らいの股間縛り    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 中河恵子        | 略号一〇〇〇円         |
| 中河恵子        | 略号一〇〇〇円         |
| 羞らいの股間縛り    | 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 |
| 中河恵子        | 略号一〇〇〇円         |



たことも一杯ありました。ただ残念なのは、今まで相当きつい緊縛にしても、本当のMはいなかったようです。貴女の写真を見てMか又は大分、Mになっていられたようですが、一度Mの気持を知りたいと思うのです。もし、ぶしつけでなかったら、話合いの機会をつくってもらえませんか。

(神戸市生田区・大塚幸男)

TVの11PMで辻村隆先生が出演されることを知り、期待して拝見しました。徳川女刑罰史の予告篇や出演女優の紹介、映画での文身風景、刑罰絵巻の紹介、解説、映画撮影前の準備と、助手が女優をしぼるスナップなどと、なかなかの盛り沢山で、肝心の辻村先生登場は後半になり、ようやく先生が現われたと思ったら、野末陳平的、黒めがねなので素顔が拝見できず残念でした。陳平といい、野坂昭如といい、これ又、辻村先生といい、ものを書く人はどうしてよる夜中までサングラスをかけるのか? と、疑問を感じました。当夜の状況の一部、ハミリ映画に撮影してみました。結構おもしろいフィルムができました。映画予告篇で牛裂きの刑執行場面をみ

て、安藤孝子が顔を覆うところなど、なかなか生々しい画面になりました。(東京・小山蒙堂)

編集部の皆様、お変わりありませんか。この前、注文した分譲フォトZ組十枚、確かに受け取りました。17、60、94がよかった。これに17の左近麻里子が抜群です。十一月号、拝見。今月号は全般的にみて低調ですね。低調な中でも光っているのは、SMカメラハン ト「悦痴な季節」連載小説の「緋縮緬地獄」、ピンク映画シナリオ「肉体手形」緊急ルポ「徳川女刑罰史」のスターを縛る。「続・妻を縛らせるの記」等です。佐々木真弓は左近麻里子と並んで、奇ク現在のモデルの中で双壁をなしています。五十五頁のフォトのオッパイの見事さ。思わず嘆息を發しました。「肉体手形」のヒロインに又も、私の好きな谷ナオミが登場、期待を大いに封切りを楽しみに待ちます。「徳川女刑罰史」は東映系の映画館ですでに上映中ですが、まだ私は忙しくてみておりません。先日11PMでは少しラッシュをみました。二、三日中に見に行きます。東山映史さんの映画通信にある大映々画「秘録おん

|                                               |                                               |                                           |                                          |                                           |                                           |                                            |                                            |                                            |                                            |                                             |                                            |
|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------------|-------------------------------------------|-------------------------------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------|---------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 双胎臨月蛙腹鮮烈写真<br>大手札六枚一組 略号二〇〇〇円<br>増田みゆき 略号八れやV | 双胎臨月腹強烈縛り<br>大手札六枚一組 二〇〇〇円<br>増田みゆき 略号八れゆV    | 臨月腹裸身の媚態<br>大手札六枚一組 二〇〇〇円<br>増田みゆき 略号八れえV | 黒縄縦縛りの媚態<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>中河恵子 略号八れぬV | 立縛りにあうの裸女<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>木村洋子 略号八れねV | 開股された股間縛り<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>木村洋子 略号八れのV | 豆絞りの猿くつわ縛り<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>木村洋子 略号八れむV | 柱宙縛りに喘ぐ刺青女<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やかV | 高手小手に悶える全裸<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やきV | 緊縛に映える入墨の肌<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やくV | 脱がされた緊縛刺青女体<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やもV | 縄にのたうつ入墨裸身<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やしV |
| 腰巻一つで縛られる刺青女<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>山原清子 略号八やみV  | 女相撲迫力投業連続動作<br>大手札十二枚一組 五〇〇〇円<br>大塚・東浦 略号八なるV | 恵子の妊孕美観賞<br>大手札四枚一組 二〇〇〇円<br>中河恵子 略号八ぬめV  | 孕み若妻の羞らい<br>大手札四枚一組 二〇〇〇円<br>中河恵子 略号八ぬねV | 八の字の開股責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しいV  | 足枷強制開股責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しみV  | 全裸強烈逆エビ責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しけV  | 両手吊り足枷責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しこV   | 両腕逆手吊り責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しらV   | 豊満なる臀部責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しれV   | 大の字縛りと足挙げ責め<br>大手札三枚一組 一〇〇〇円<br>愛知葉子 略号八しわV | お申込みは大阪阿倍野局私書箱<br>第14号箕田京二宛へ願います。          |



な蔵」を先日見ました。私もスチール通りのシーンが出てこなかった。香川泳三さんの提案「本誌読物のアンコール」には、双手を上げて賛成です。特に復刊以前の評判作をと、おっしゃってますが、復刊後の傑作もお願いしたいものです。現在、古い奇クは大変な高値で、なかなか手が出ない状態なので、かつての奇ク黄金時代の名作をリバイバルして再登場させれば、新しい読者のためにも大変、有意義なことだと思います。私も早速、アンコールします。それは告白小説の傑作で、昭和三十五、六年に連載になった「アクロバット残酷記」「ハイキング残酷記」です。女が女を貴める美しい残酷の世界が、まだ脳裡に強烈な印象を残しております。香川さんの提案が、実現した暁には、私のこのアンコールをぜひ、おねがいしたいものです。九月二十四日のイレブンPMで、初めて辻村先生の雄姿？にお目にかかりました。写真の通り黒メガネはトレードマークというところでしょうか。声は中音？でソフトでした。スタイルは、がっちりしていって頼もしい感じで、なかなか、いかしてましたよ。「徳川女刑罰

史」に出演している五人の女優が出演していて、にぎやかなムードで、ところどころでフィルムを見せてくれました。その中では辻村先生が女優を緊縛しているシーンも見られました。映画のタイトルや広告に、緊縛指導などという文字がでるのは、恐らく映画史上、初めてのことではないでしょうか。奇クは大いに威張るべきです。

(東京・岩渕繁雄)

KK永年の読者、通信は久しぶりです。横浜の片野初枝様、お呼びかけします。小生、勿論Sでドレイを求めています。貴嬢を希望通り、又主人として思う通り調教したいと思えます。

(東京・千馬生)

奇ク愛読の女性の皆様、いかがお過ごしですか。私は奇クを愛読するようになってから、わずか五カ月になりますが、日ごとにS Mの感情がつのるばかりの、苦しい毎日を過ごしております。私は目下、独身、二十四才、平凡な会社員。やせ型でS性、M性半々の男です。したがって人並みの恋愛の楽しさも、結婚も、この性向故に自から否定しつづけてきました。

|             |         |      |
|-------------|---------|------|
| 全裸後手柔肌縛り    | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こよ▽  |      |
| 乳房強烈膨隆責め    | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こわ▽  |      |
| 海老責めに苦悶する   | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こお▽  |      |
| 全裸の緊縛全身晒し   | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こる▽  |      |
| 煙草責めに喘ぐ女    | 大手札二枚一組 | 三〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こぬ▽  |      |
| 緊縛麗姿に映えるライト | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こほ▽  |      |
| 臀部強調後手縛り    | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△ころ▽  |      |
| 羞恥に悶える全裸緊縛  | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こに▽  |      |
| ホステスの緊縛姿態   | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こち▽  |      |
| 二つ折りで責める女体  | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓       | 略号△こへ▽  |      |

しかし人生は短い。ましてや若い世代は一日とて無意味に過ごされるべきものではないと考え、勇気を出して同好の女性に呼びかける次第です。SM両刀の方、又はM

|            |         |      |
|------------|---------|------|
| 脈打つ全裸の臨月腹  | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河 恵子      | 略号△こふ▽  |      |
| 臨月腹の革紐股間縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河 恵子      | 略号△こや▽  |      |
| 猿轡の臨月妊婦腹縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河 恵子      | 略号△この▽  |      |
| 卓上の股間縛り狂態  | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子      | 略号△こそ▽  |      |
| 羞恥の足挙げ責め   | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子      | 略号△これ▽  |      |
| 悦虐責めの女体終着駅 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子      | 略号△こた▽  |      |
| 片足挙げる鞭打ち責め | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子      | 略号△こら▽  |      |
| 柔肌に弾ける惨酷な答 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子      | 略号△こな▽  |      |
| あぐら縛りの女体鑑賞 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐近麻里子      | 略号△こえ▽  |      |
| 対談用に縛られた女  | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 左近麻里子      | 略号△こて▽  |      |

性の方でSもやってみたいと思われ女性の方、自分だけのカラに閉じこもって一人悩まないで、類は類同士、お互いの人生を後悔のないように楽しもうではありません



んか。といっても私自身、SMプレイに関しての経験は全くなく、かえって怖い感じですが、そんなことは奇クを読んだりしておれば何とかなることです。私は何故か鞭打ちに非常に興味を抱くものです。(ただし本当の鞭では肌にひどく傷つけるような気がするので革バンドのようなもの)特に女性の尻を思いきり責めてみたいのです。女性の肉づきのよい尻なら、かなりの痛みでも耐えることができるように思います。そして今度は、そのお返しに私にも同じように鞭を加えて欲しい。これは私の願いである。その他にも色々研究すれば興味あるSMプレイは数多くできると思う。又、お望みとあれば浣腸にも、いささか興味をもっています。さあ、迷える女性よ迷うなかれ。そう、崖からとび降りる気持、私はそんな気持で、まだ見ぬ貴女に語りかけたのです。私に思いきり責められた方、そして私を思いきりムチ打ちたい方、どうかお便り下さい。お待ちしております。(埼玉・神山健司)

○ 大阪市東区の女王様、十一月号のお呼びかけを拝見し、早速投稿いたしました。小生は南区のMフ

アンでございます。自分から申すのもおかしいのですが、あらゆる条件において、貴方様の征服感を満足させられる資格のある者と思っております。唯、大柄な女性に接すると、ある種の戦慄におののくのでございます。それを抑えるのに精一杯です。どうぞ切に切におねがい申し上げます。

(大阪市南区の犬より)

○ わたしは、あわれなゴムドレイです。ですから、今日もゴムのオシメカバーをして、その上から黒いゴムの雨合羽を着せられます。そして更に、胸まですっぱりはいるゴム長靴をはき、顔には防毒マスクをつけたまま、の恰好で後手に縛られ、正座させられます。また時には、お仕置のため、いやがるわたしの口にゴム長靴をくわえさせ、頭にはハイヒールをのせて鏡に向うのです。女の人で、こんな風にわたしをゴムドレイにした方、また、されたりしたい方は、ぜひお便り下さい。

(東京・合羽井ゴム吉)

○ 十月号は、久しぶりのヒットだと思ふ。最近のマンネリ化は、うち破れなかったが、一つ二つ、心

に喰いこんでくるものが、目につく。まず特に気に入ったのは、私のSM日記である。文章は告白文だけに真実味が強く、すなおに流れている。それよりも、ぐっと心を引きつけるのは、小竹氏提供によるフォート四枚であろう。その中で圧力のあるのは最初の一枚である。今まで、ヌード写真も縛り写真も数多くみてきたが、これほど乳房をいじめ乳房を強調していながら、そこに女というものを忘れなかったフォートはなかったように思う。自分の手で乳房をもんでいるのか支えているのかかわらないが、別の男の手でなされていたら、もうこれ以上のものは望めないものができていたろう。それにしても、ぜひ四つ切りぐらいに伸したのがほしい、フォートである。次の乳房を引っぱった碍子もすごい。これほど乳房を道具とした小竹氏の、次のフォートが楽しみである。四枚目の、口を一杯に開けられたフォートも、今までになく、女体のめっちゃくちゃ、乳房のめっちゃくちゃと、すばらしいフォートをかせていただき、感謝している。二番目に印象に残ったものは、辻村氏の例のカメラハントで

ある。今回は文章も特異なものが目につくし、フォートも迫力が増している。数あるハント集の中でも今回はトップクラスに入るだろう。放尿場面の描写もすぐれているし、文章に流れと調子がある。それに加えて、ベンベンたる腹のすばらしいフォート。今まで妊婦フォートというとグロテスクなものが多かったが、木戸悦子のものは、きれいだ。ヘソ、乳房と、正に女体である。まったく気に入ってしまった。木戸悦子の無秩序な態度、股間を這う縄を見ても、容易に想像がつく。この腹下の写っているものが、不可能と知りながら、自分の手にほしくてしようがない。又、この美しい女体を辻村氏が写した一枚、ほしい。いや、この一枚だけでなく、木戸悦子の写真すべてがほしい。それだけの価値がある、女体だし、美のある体だ。「花と蛇」毎号たのしみだが、近ごろマンネリだ。がんばってほしい。そして今月号で趣味をもったのは「ふおと・あんど・むーびー」であろう。

(御木本三郎)

○ 奇クを初めて手にした大学生。今は四畳半のアパートに一人暮し



# 次号(新年号)は十一月二十五日に発売いたします

(当り前だって……? その気がこれから述べる私の意見に反するのです) 学問の研究に明け暮れる毎日に空しさを感じ、時間の浪費を悔んでいる者です。人間だれしも平和で幸福な家庭を望みます。しかし、それは平凡で何の変化もなく、機械の歯車の一片のようなものです。この世の生を受けたならば、その恩に報いると共に、世のため人のため、果ては自分のため何か非凡なことに自分を打ち込み、人間性をとり戻すのが、現在の人間の、真の美しい姿ではないでしょうか。しかし現在では、そのような思いのままに決してならぬご時勢です。そこで我々奇く愛読者連では、前途に希望を失う危険を含んだこのような暗夜の中で、ただ一点の灯、それは何万、いや何億もの金、銀に値する——を求め、努力を確実に、かつ十分にしようではありませんか。理性を常備した責任ある、行動ができる我々、いや私を除いた奇く愛読者連(私は未熟すぎる)が何をしようかと、また何を言おうと、いいではないか。機械の一片にすぎない他

の男、女どもが、これに口出しする権利を、保有しているであろうか。今こそ、これらの男、女どもに愛読者連の勇姿を見せつける時だと強く感じます。同意見の先輩諸氏、真の人間性を求めるべきS Mの本来の味を、お教え下さい。一点の灯に前途の希望を託し未熟の域を脱出し一步一步、人間性を求めるこの私に、本来の味を……

(東京・近本和美)

私は強度のフェチ・M男です。女王様、一匹の犬として、忠実な奴隷として、貴女様にお仕え致しとうございます。犬は小柄ですが絶対的に身を投げうって、お仕えいたします。貴女様から恥かしめられ折檻され、耐えがたい凌辱を与えて、一層誠実に奉仕いたしますことを誓います。女王様、どうか、この犬に声をおかけ下さいませ。ご迷惑をかけることなく犬としてすべての義務を果します。女王様の前にひれ伏し、礼拝し、ひざまずくこの奴隷を、思いきり責めて泣かして下さい。この犬は又、女王様の便器にもなり後始末

もさせていただきます。貴女様のおそばに長く飼育して下さいようておねがい申し上げます。

(横浜・マゾ男)

小生は自称「実行M派」を志す三十一才の男です。社会的にも経済的にも、かなりめぐまれた毎日を通じております。生来、M性故に常々徹底した奴隷教育を受けたいという欲望にかられ、日夜、頭を痛めてまいりました。過去において何度かMプレイらしきことを実行していただいた女性(セミプロ的S女性)もおりましたが、ほとんど興味本位か代償交換による単なるプレイにすぎません。真から奴隷教育をして下さる方を探し求め、常々努力し、忠実なる奴隷男として認められることが私の夢であります。なにとぞ女王様より真の奴隷教育を受け、忠実なる犬にしたいだけば最高の喜びであります。全裸で女王様の足下に土下座し、奴隷の誓いをさせられ、顔中が赤くはれあがるほどピシタされ、足げにされ、ふんずけられ、汚れたおみ足を舌できれいにし、ごほうびに香り高き女王様のお唾やお痰を顔中にひっかけていただき、口の中にも同様、吐き

こんでいただき、人間タンツボとして御奉仕したいのです。汚れたパンティを口にくわえ、首輪をはめられ、女王様の前で犬の芸をしこまれたり、人間馬、いす、座ぶとんがわりに、女王様のお腰を顔一ぱいにお乗せし、涙を流して喜びたいのです。最後には、全裸の上、手足を拘束され、木の箱にでも無理矢理、押しこんでいただきたいのです。こんな想像の一部なりともお聞きいただければ幸いです。女王様のご寛大なるご批判なり、ご命令をお待ち申し上げます。次第です。(東京・加藤康行)

城山ほずみ様、生贄に対して、様というのも変かも知れませんが、ぼくはSやMについても、ロマンや、ムードを求めます。なぜならそれらも愛に外なりませんから。貴女に逢ったばかりは、先ず皮ひもで貴女の両手首だけを縛りました。う。それから、ゆっくり下半身を裸にします。スカートをとり、パントリーをとり、まくり上げたスリッパが、やわらかな目かくしになるでしょう。ガーター・ベルトとストッキングを残して無防備になった下半身を、指や爪や羽根で、やさしく責めてからゴム・パタフ



既刊雜誌在庫案內

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（の御負担をお願いします。多数一括してお求めの際は、△小包▽にて発送申し上げます。

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
和和和和和和和和和和  
404040404040404039  
年年年年年年年年年年  
109876543211  
月月月月月月月月月月  
号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送  
共共共共共共共共共共  
三三三三三三三三三三

○○○○○○○○  
卅卅卅卅卅卅卅卅

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
和和和和和和和和和和和和和和和和  
424242424141414141414141414040  
年年年年年年年年年年年年年年年年  
7 6 5 4 1 1 0 8 7 6 5 4 3 2 1 1 2 1 1  
月月月月月月月月月月月月月月月月  
号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送  
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共  
三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

○○○○○○○○○○○○○○○○  
 卅卅卅卅卅卅卅卅卅卅卅卅

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和  
43434343434343434343424242424242  
年年年年年年年年年年年年年年年年年年  
111098765432112111098  
月月月月月月月月月月月月月月月月月月  
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送  
共共共共共共共共共共共共共共共共

ティをつけてあげます。足には、黒皮のロング・ブーツをはかせ、その上から皮ヒモが巻きつきます。さあ、上半身。目には睡眠用の眼帯を、口の中には貴女自身のビキニ・パンティをつめこんでから、手ぬぐいで猿ぐつわを……。いったん手首の皮ヒモをといてから、ブラウスもスリッパも、それからブラジャーもとるのです。首には犬の首輪を、両手に黒皮の手袋をはめ、その上から再び皮ヒモで縛り、首輪とつながしましょう。ヒザ太モモ、腰、乳房の上下には皮ベルトや皮ヒモがギッチリ巻きつくでしょう。そして、その姿のまま貴女はお風呂に入らねばなら

ない。めいた皮が、貴女をしめつける。……ぬれねずみの貴女をタイルに横たえ首から下の全部をビニール布でおおい、その上から更に綿ロープで縛りましょう。これが貴女の奴隷化の第一歩、プロローグ。貴女の全身に綿ロープが巻きつき、頭を白ビニールの全頭マスクがおおい、乳首を洗濯バサミが噛み、大の字なりにベッドに縛りつけてムチ打ち。素肌の腰や乳房に鎖を喰い入らせたまま、ピタリしたセーターやタイト・スカートを着て、ぼくと二人で街を歩くのです。むろん、それらすべてのプロセスを写真にとるのです。貴女との出逢いを、こんな風に想

像します。貴女さえ、その氣になれば、直ぐにでも実現できるので。貴女を、たとえば「〇嬢の物語」のヒロインのように仕立てあげたいものです。（丹波三郎）

私は仙台に住む一読者です。最近、辻村氏が緊縛指導した映画ができ上り、彼はまた11PMで風俗研究家として堂々とした姿を私達に見せてくれたりして、彼のためにも、このグループのためにも大変うれしく思っています。こうした発展の一方、仙台など地方の都市ですから、この本を手に入れることのできなくなってきたのは、どうしたものでしょう。頭でっか

ちだった貴誌が、これ以上エスカレートして、一部半クロウトのためめのものとなることを心配しまた残念に思うものです。

小生は二十七才になるマゾの男です。日夜女性に責められる夢を見ます。身長一六〇、体重五〇というからだですので、肉体的な責めには、耐えられないと思います。が、その他の特に恥かしい責めには、それがどんなに人間性を無視した責めでも応じます。女王様のお声のかかることを一日千秋の思いにて、お待ち申し上げます。

(大阪・加藤好夫)

(大阪・加藤好夫)



○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されており、いよう充分に注意して編集したており、すが、本来成人向として発行を企図しており、ますが、関係上、十八才未満の方には絶対販売さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されており、いよう充分に注意して編集したており、すが、本来成人向として発行を企図しており、ますが、関係上、十八才未満の方には絶対販売さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。